

SERVAMP —知られざる九番目—

カランコエ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰も知らない九番目の真祖と、その真祖と契約を交わした少女。

九番目の真祖に手を貸した人間と、九番目の真祖の唯一の下位吸血鬼。

これは、そんな真祖と少女と人間と下位吸血鬼だけの、少し歪な家族のお話。

兄弟たちの誰とも関わらず知られず存在していた彼女たちが、一つの偶然を境に戦争に巻き込まれていくお話。

身勝手に、貪欲に、気紛れに、興味本位で、紡がれていくお話。

※序盤は原作より前の時間軸で展開します。そのため激動もないスローライフのようなお話が続く予定ですが、生暖かい目でご覧いただければ幸いです。

※脈絡なく始まり視点も各回で右往左往します。作者の趣味により主に憂鬱組と絡むことになると思います。

※熱しやすく冷めやすいので更新にムラが出るとは思いますが、気長にお付き合いいただけると嬉しい限りです。

目次

1.	狐の散歩道	1
2.	偶然というもの	4
3.	目も眩むような	9
4.	気付かぬうちに	13
5.	揺れる花々	20
6.	見据えるものは	26
舞台裏	画面の向こう側にて、青年はかく語りき	30
7.	好転か暗転か	33
8.	駆け引きのすゝめ	38
幕間1	『異口同音に口を揃えて』	47
9.	耳を傾ける	54
舞台裏	誘拐から十五分後、家族会議勃発につき	62
10.	曖昧なままで	68
11.	裏腹に巡る	75
12.	一面を知る	82
幕間2	『埋もれ木の花は独りでは咲けない』	90
13.	届かないなら（前編）	96
14.	届かないなら（後編）	102
舞台裏	暗転直後、悩み憂いて狐が一匹右往左往	111
15.	幕と闇へ落ちる	115
舞台裏	暗躍の種明かし、あるエキストラの奮闘	123
幕間3	『友を呼ぶのも嫌悪するもの』	131
16.	始まりの一日	137
17.	歪みと矛盾	145

18.	記憶を手繰（たぐ）る	156
19.	その罪の名は	163
20.	怖いながらも	171
幕間4	『沈黙考して溺れゆく』	178
21.	乗り越え方は	183
舞台裏	〃主人の預かり知らぬ下僕の受難について〃	192
22.	迷うことなく	197
23.	何も語らない	205
舞台裏	〃鎖と糸と剣が舞う、もう一つの戦地にて〃	212
24.	重なる過去	218
25.	忘れ得ぬ（前編）	226
26.	忘れ得ぬ（後編）	237
幕間5	『箱庭世界の青い薔薇』	247
27.	言動の裏側に	279
28.	消えない灯火	290
29.	交差点は遙か過去	299
30.	綻びを抱いて	310
31.	解（わか）らないだけ	322
32.	月夜に語る星二つ	330
幕間6	『千里を覆う霧の中、その一步を』	340
33.	舞台に満ちるは	348

1. 狐の散歩道

お昼間の気持ちの良い日差しがふと陰り、買い物帰りの少女は空を見上げた。

「……天気雨？」

雲の薄い空から細かい雨粒が降り注ぎ始めて、慌てて少女はシャツターの降りた店先の屋根に駆け込む。天気予報では朝から晩まで快晴だと言っていたのに、と大きなエコバッグを抱えて独りごち、少女は雨が通りすぎるのを待つ。

からころ、とコンクリートの地面を打つ下駄の音が響いたのは、そんな時だった。

「……………」

妙に耳に付くその音に、黒髪の少女は自然と振り向いた。閑散とした商店街の奥から、紅い番傘をさした誰かが歩いてくるのが見える。

からころ。軽やかな音を響かせながら、誰かは少しずつ少女の佇む軒先へと近付いてくる。

番傘の下からは黒い着物に白の羽織が覗き、今時なかなか見ない和装に少女の視線は更に惹き付けられた。

からころ。人通りの無い道の真ん中を、その誰かはゆつくりと歩き続ける。

近付くにつれ分かりやすくなる姿の中で、明らかに通常よりも高い下駄が目につく。あれほど高くては歩きにくいのでは、と他人事ながらに少女は眉を潜めた。

からころ。距離が縮まり、いつそう下駄の音色が耳を突く。番傘の誰かはもう間近だった。

流石にこの近さで凝視しては失礼だろうと、少女は顔を正面へ、視線を向かいの雑貨屋の看板へ移した。心なしか、雨足が強くなっているような気がした。

からん。

(……………、あれ?)

一定のリズムで、心地よく響いていた音が、止まっていた。もう少

れない。既視感を伴う行動は警戒心を下げる一助となるものである。

「でもまあ、オトギリは喜びそうだ。教えてくれてありがとうね」

「……どういたしまして」

からころ、と再び下駄の音が響く。

歩いて来た時と同じようにゆったりとした足取りで、番傘の男は歩いて行く。その背を見つめ、ふと少女は違和感を覚えた。

からころ。白い羽織が遠ざかる。

無意識に視線を下げて、少女は違和感の正体を探った。何か、解せない部分があるはずなのだ。

からん。

(……………あ、傘だ)

天気予報では、確かに今日は一日晴れだと言っていた。だからこそ少女は突然の雨に立ち往生する羽目になったのだ。

だと言うのに先程の男は、決してコンパクトとは言えない番傘を持ち歩いてきた。晴れの日には邪魔になるはずの物を、当たり前のように。

(そんなの、まるで最初から雨が降るって分かってたようなものじゃない……………)

違和感が晴れて視線を上げた少女は、そこで驚きに目を見張った。道の先には、もう紅い番傘も白い羽織も見えなかった。あれほど耳をついていた下駄の音色も聞こえない。一本道の途中で、番傘の誰かは忽然と姿を消していた。

白昼夢を見ていたような感覚に襲われ、少女は自分の立っている場所を確認するようにぐるりと辺りを見渡す。

雨は、いつの間にか止んでいた。

2. 偶然というもの

その部屋は、ドアの部分以外の壁を隠すように隙間なく背の高い本棚が並べられていた。そして、小さな図書館のようなその空間の中央に置かれたオフホワイトのソファに座り、読書に耽る少女が一人。

胸元辺りまで真っ直ぐに下ろされた黒髪に、作り物のように整った顔立ち。病的なほど白い首にはベロア地の赤いリボンチョーカーが結ばれている。

「……………」

少女は、一時間ほど前に買い物に行った家族の帰りを待っていた。今日の夕食当番は彼女自身なのだが、真祖サーヴァントと呼ばれる吸血鬼である少女は日の光がある時間帯に買い物に出ることが出来ない。そのため彼女の主人イザに代役を頼んだのだ。

背表紙に傷みのある分厚い本に書かれた文字の羅列を、青い瞳が追う。

本棚のせいで窓からの日射しもほとんど入らないその部屋で、少女は黙々と傍らに積まれた本を読破していた。

「電気くらい点けなさいよ」

ぱちん、と電灯のスイッチを切り換える音が響き、一気に明るくなった視界に目を細めながら少女は本から顔を上げた。開かれたドアと、長い黒髪をハーフアップにした少女の姿が目映る。件の主人だ。

「…………おかえりなさい」

「ただいま。妙に静かだけど、あの子は？」

「血を貰う代わりに、あの人に付き合わされて外出しているわ。日が沈む頃には帰ると言っていたけど」

「そう」

固有名詞の無い会話をしながら、青の瞳を持つ少女は本に視線を落とす。

「そういえば、帰る途中に変な人に会ったの」

「変な人？」

ソファに山積みになっている本を勝手に本棚に戻しながら主人が言った言葉に、少女は本を読み進めながら続きを促した。

「和装なのにサングラス掛けてて、お蕎麦屋さんがどこにあるか聞かれたから答えたら、爆笑された後に「面白くない」って言われたわ」
「……………」

変な人とやらの詳細を耳にした少女は、少しの沈黙の後で静かに本を閉じ傍らに置いた。

次の瞬間、ソファに少女の姿はなく、クリーム色の毛並みにサファリアのような美しい瞳をした猫が居た。

猫はソファを下りると、本棚の段を足場に素早く少女の肩に降り立つ。
「どうしたの?」

背を向けていたため猫の行動に気付くのが遅れた少女の声を無視して、クリーム色の猫は少女の黒髪を分けて首筋に鼻を押し付ける。そして実に不機嫌そうな声で呟いた。

「……………『香りの無い花』の香りがする。不愉快だわ」
「香りの無い花の香り?!それ矛盾してな、痛っ!!」

がぶっ、と効果音が付きそうな具合に猫が少女の首に牙を立てた。薄い皮膚を傷付けられて溢れた血をざらりとした舌が舐めとる。

黒い瞳の少女は最初こそ声を上げたものの、振り払うこともなく大人しくその行為を受け入れる。代わりに呆れたような声で。

「吸いたいなら先に言いなさいよ……………。それに首は痕が隠しにくいからやめてって言ってるじゃない」

猫は取り合わず、少女の肩から跳ぶとくるりと一回転して少女の姿に戻った。真っ白なワンピースの裾がふわりと揺れる。

「頼んだものは全て揃ったの?」
「ええ、買ってきたわ。……………って、」

主人の返答を聞き終わるまでもなく、少女は部屋を出ていった。
「……………お礼の一つくらい言いなさいよね」

猫の気まぐれさに眉根を寄せつつも、主人たる少女は本の回収を再開した。

夕食後。

数時間前と変わらない体勢で読書をしていた少女は、ドアが開く音を耳にして顔を上げた。

「……かぜたに風谷」

ぼつり、と少女が名を呟く。部屋に入って来たのは、ゆるくウエーブの掛かった長い黒髪に白衣の女性。

「やあ、今日はずっとこの部屋に居たと聞いたけど。面白い本でも見つけたのかい？」

女性にしては低く、男性にしては高い中性的な声。話し方も相まって電話越しでは性別を勘違いされることも多いらしいが、本人に改めるつもりはないようだ。

少女は問い掛けには答えず本に視線を戻す。元より挨拶代わりに質問なので答える義務はない。

風谷と呼ばれた女性もまた気にした様子はなく本棚の一つへ向かい、数冊の本を選び抜くと少女の隣に座った。

沈黙がおりる。

しかしそれは長くは続かず、本から顔を上げないまま少女が口を開いた。

「あの子が、変な人に会ったと言っていたわ」

「へえ……それで？」

全く脈絡も前振りもない状態での言葉にも特に動じず、風谷の方も本から顔を上げずに続きを促す。

「あの子から、香りの無い花の香りがした」

「……………」

少女が口にした言葉に、白衣の彼女は項ペリをめぐろうとしていた指をぴたりと止めた。

そしてゆっくりと少女へ顔を向ける。

「それ、確かかい？」

「ええ」

「……嫌だな。これだから『偶然』というものは嫌いなんだ」

「『偶然』、なの?」

「偶然だろうね。今のところ、彼が私たちに接触する動きも理由もない」

「そもそも君は存在すら知られていないわけだし、と風谷は愚痴をこぼすように呟いた。

対して、相変わらず本を読みながら少女は更に質問を重ねる。

「『中立機関』の方は?」

「一応備えはしているようだけど目立った動きはない。先に動くとするればその『変な人』の方だと思うよ」

「目的は?」

「それは分からない。ただ、『戦争』をするそうだし」

「『戦争』?」

「ああ。自分よりも先に生まれ、あの『会議』に参加した兄妹たちに喧嘩を売るそうだし」

「……………」

少女がそこで口を噤んだのは、この風谷という人間が何故それほど詳しい情報を掴んでいるのか疑問に思ったとか、戦争や会議などの言葉に含まれた意味が理解できなかつたとか、そういうことが理由ではない。

ただ純粹に、そこでこの話題に対する彼女の興味が潰えたからだ。

「君は参戦しないのかい?」

新しい本を膝に乗せる少女に、風谷は銀縁眼鏡の奥の瞳を細めつつ尋ねる。

「会ったこともない兄たちの為に戦えと?」

「別に末の兄の側に付いたっていい。この機会を逃せば君の存在はずっと、兄妹たちの誰にも知られることがなくなるかもしれないよ?」

「知られなくていいわ。そもそも、私は兄妹とは呼べないほどに彼らと『似ていない』」

冷たく、平淡な声だった。

悲しむわけでも拒絶するわけでもなく、ただ事実を事実として述べている、酷く無機質な声色。

「だから、存在ゴと隠し通せるのなら、その方がいいわ」

「まあ確かに。君が真祖らしいのなんて、主従契約で血を飲むところと日の下で動物化するところくらいだしね」

そう。本来真祖が共通して持っている特徴の幾つかを、少女は欠いている。それはつまり、吸血鬼であると看破される可能性が格段に低いということ。それこそ、黙っていれば分からないだろう。

そして勿論、彼女が真祖であると知られなければ、彼女に紐づく主人イと下位吸血鬼サの存在も知られることはない。

「存在を認知されなければ、敵にも味方にも振り分けられることはない。それが一番の『安全策』よ」

「成る程。それが君のスタンスなら尊重しよう」

そこで議論は終結した。

風谷は先ほど選んだ数冊の本を抱えて立ち上がる。見送る気はないのか、少女は本に視線を落としたままだ。

そしてドアノブに手を掛けた風谷は、ふと何かを思い出したように小さく声を上げ、首を捻って少女の方を振り返った。

「そういうえば、あの子が首に噛み痕を付けられたことを愚痴っていたけど」

「……………」

「まあそれも仕方のないことだよね??猫というのは存外、しっかり縄張り意識を持つ動物なのだから」

からかいを含んだ口調でそう言い残し、白衣の彼女は部屋を出ていった。

残された少女は、数時間前の彼女の主人と同じような表情で暫くの間、扉を睨んでいたとか。

3. 目も眩むような

キンコンカンコン、と終業の鐘が鳴り響く。

放課後の解放感に浮き足立つ生徒たちの波を抜けて、その少女は昇降口を出た。

通りすがりに気が付いて声を掛けてくる友人たちに笑顔で手を振り、その内の数人によるカラオケやショッピングへの誘いを器用に断り、結局誰とも並んで歩くことなく彼女は校門を潜る。校則に則って黒いヘアゴムを使いハーフアップにされた黒髪が春風に靡いた。

(随分暖かくなってきたけど、ここからまたすぐ梅雨に入るのよねー…)

洗濯物が乾かない季節がやってくる、と学生らしくない悩みを浮かべつつ少女は帰路を進む。

大通りに差し掛かったところで、同じく学校帰りの生徒たちから少し離れ彼女は細い裏道に足を踏み入れた。人気がないのがネックだが、地理的にはこちらの方がかなり近道になるのだ。

そして、そんな危機管理意識の低い少女の姿を見掛け足を止めた人物が一人いた。

黒衣着流しに白の羽織を纏った、赤い瞳の男。線の細い身体がゆらりと、今しがた少女が入っていった裏路地の方へ向けられる。

(……今の子、前に道を教えてくれた子だよね)

ハーフアップにされた長い黒髪と、女子にしては長身で細身な体躯。服装は前と違い制服だったが、その顔には確かに見覚えがあった。

そして、既視感はもう一つ。

少女の着ていた制服だ。明るいオレンジ色のブレザーにベージュのスカート、それに胸元の赤いリボンタイ。

(桜哉が最近着てる制服に似てるね)

配色から予想するに同じ高校だろう。しかも制服に着古された様子が全くなかった辺り、一年生である可能性が高い。

さてどうするか。

彼の「家族」である桜哉という名の少年は現在、記憶操作を使つてとある高校に潜り込んでいる。普段の学校生活でも、人ではないことがバレないようにかなり気を遣つてのことだろう。ならば、彼と交流があるかもしれない生徒に接触するのは控えた方がいいかもしれない。珍しく「家族」が楽しそうに続けている『暇潰し』に水を差すことはできない。

そう思いながらも、彼の足は既に少女の後を追つて路地に踏み込んでいた。一つだけ、気掛かりなことがあったのだ。

少女の首元。制服のブラウスからちらりと見えた、真つ白なガ―ゼ。まるでぎりぎり制服から見えない位置に付けられたような、怪我の印。

（「そういう子」には見えなかつたんだけどねえ…）

しかしもしあの少女が、それこそ桜哉と似たような環境に閉じ込められた子だったなら。彼にはそれを見過ぐすという選択肢はない。

裏道に入ると、丁度少し離れた曲がり角を曲がったオレンジ色の影が目に入る。その背を追つて角を曲がると、からころと響く下駄の音に気付いたのか、数歩先で少女が立ち止まって振り向いていた。

「やあ、また会ったね」

コン、と足を止めて声を掛ける。少女が、黒檀のように黒い瞳を瞬かせ軽く首を傾げた。

「……………えっと、」

「三日前だよ。君が雨宿りをしていた時に僕と会つたでしょ？」

戸惑う少女にヒントを与えれば、癖なのか少し視線を下げて記憶を掘り出そうとしているのが分かる。そしてその視線が男の着物に留まった瞬間、少女ははつと目を見開いて顔を上げた。

「右手だけ萌え袖の人！」

「ちよつと、僕のアイデンティティをそこに集約するような言い方は止めてくれる？」

非常に不本意な覚え方をされていたことが発覚した。

「全く……僕には「椿」って名前があるんだから。変な特徴で覚えな
いでよ」

「椿、さんですか。綺麗なお名前ですね！」

そう言つて、少女は笑つた。

一点の曇りもない、眩しいほどの笑顔だつた。

(……ああ、これは、)

杞憂きゆうだつたかな、と声に出さず椿は呟いた。

それならば、もうこの少女とこれ以上関わる理由はない。そう結論付け、彼は適当にあしらつて少女と別れようと思つた。

だから。

「……君の名前は、教えてくれないの？」

だから、他でもない自らの口からそんな台詞が滑り出ていたことに、椿は内心で驚愕した。

一方で少女は、椿の動揺に気付かないまま笑顔で答えた。

「私は『ユリネ』といいます。花の『百合』に『音』と書いて、『百合音』です」

答えが名字ではなく名前だけなのは、椿がそうだったからだろうか。

見詰めていると吸い込まれそうな黒い瞳から無意識に視線を外し、椿は一度だけ心の中でその名前を反芻はんすうさせた。

「そういうえは椿さんつて、お散歩が趣味なんですか？」

このまま立ち話を続ける気なのか、百合音と名乗つた少女が他愛ない質問を投げ掛けてくる。

「そうだね。暇なときにぶらぶらするのは、好きだよ」

「てことは、ここら辺に来られたのは最近ですか？」

話題が飛躍したように感じて椿は少女に視線を戻した。一拍おいて、質問に疑問で返す。

「……どうしてそう思うの？」

「だって、『散歩が趣味』でこの辺りに長く住んでる人なら、『美味しい蕎麦屋さん』の場所くらい知つてると思いませんか？」

につこりと、話の内容を問わずに思わず頷いてしまふような笑顔とともにそんな風に返されて、椿は赤い瞳を細めた。無邪気で無垢なだけの子供かと思えば、意外と洞察力の高い人間のようだ。

「そう。正解だよ。最近まで海外を転々としていてね」

「わあ、凄いですね!?どんな国に行っただんですか?」

「そうだね、例えば『……』」

椿が外国の話を始めれば、少女は大きく頷いて聞き入りながら、話のネタが尽きない自然なタイミングで話題を切り替えていく。最近ニュースで取り上げられていた外国の時事的な話から、各国の料理の話、経済成長や少子高齢化の問題を挟んで、いつの間にか日本の話に戻っていたり、最終的には近くに新しくできたショッピングモールの話題になって、椿は随分と長い間少女と話し込んでいた。

ふと、酷く眩しい夕日が目を焼くように射し込んできて漸く、椿は時間の経過に気付く。

同時に、全くそんな気はなかったにも関わらず目の前の少女と会話を続けていたという事実には驚いていた。

「一緒にいると楽しい、もっと一緒にいたい」。

きつと、無意識に相手にそう思わせるような魅力を、彼女は持っているのだろう。

「『……』椿さん?」

急に口を閉ざした椿に、心配そうな声が掛かる。何の不信感もなく知り合ったばかりの誰かを心配できるその心には、きつと汚れ一つないのだろう。だからこそ椿は少女に無言のまま背を向けていた。

「椿さん?」

「『……』少し用事を思い出して、ね。残念だけでもう行かなきゃ」

そうですか…、と本心から残念そうな声が後ろから聞こえる。ありふれた去り際の常套句の一つだというのに、少女が疑うことはなかったようだ。

「ではまた、お散歩中に会えたらお話ししましょうね、椿さん!」

「『……』うん。また、ね」

椿自身は、次に少女を見かけたときには声を掛けるつもりはないと、そう思っている。

けれどたった今口にした「また」という言葉は、彼の心の中に確かな波紋を浮かべて、沈み込んでいくのだった。

4. 気付かぬうちに

突然ですがここでクエスチョン。

登校中に、目の前を歩いていた人が落とし物をしたらどうしますか？

(「……まあ、拾うわよね。目の前だし」)

そんな訳で百合音は、恐らくは外人だろう大柄な赤毛の男が落としライターを拾い、その背を追いかけた。

足のリーチの差なのか、拾っている間にも男の背中はどうん離れていた。作業着のような、いかにも「汚れてもいい」という服装が遠ざかっていく。

「っあの、すいませんその人！」

「ん？」

このままいけば走らないと追い付けなくなると判断した百合音は先に声で男を呼び止めた。流石に朝の住宅街は静かなもので、少し離れた位置の男にも声は届いたようだ。赤毛の男が足を止めて振り返る。百合音の姿を見留めると、へらりと柔らかな笑みが浮かんだ。

「オジサンに何か用かな??お嬢ちゃん」

「これ、落としましたよ」

拾ったライターを差し出せば、男は一瞬目を丸くして、慌てたように服を探った後で眉尻を下げて笑う。

「たはは……まーたやっちゃったか。ありがとうねお嬢ちゃん」

百合音としては目の前で落とされたのでライターがこの人物のものであることは疑う余地がなかったのだが、どうやら男の方は本当に自分が落とした物か確認していたらしい。色くらいしか特徴のない使い捨てライターなので、無理もないが。

男がライターを受け取ってズボンのポケットに収めたのを見届けて、百合音は一言付け加える。

「気を付けてくださいね??火種が残っていたりしたら火事の原因にもなるんですから」

「そうだねえ気を付けるよ」

しみじみとした声色の返答を聞いて彼女は思う。これは改善しな

いタイプだ、と。

表情に出さずそんな感想を抱きながら、百合音は男の特徴を記憶に刻んでおく。人の顔と名前を覚えるのは彼女の得意とすることだが、名前というレッテル付けが出来ない以上その他の特徴を出来る限り多く集めて印象を固めておかなければならない。……〃右手だけ萌え袖の人〃という命名はこのプロセスを踏んだ結果生まれたものだったりするが、今は関係のない話である。

「それでは、私学校があるので行きますね」

「ああ、それじゃ行つてらっしゃい」

「行つてきまーす!」

長話に纏れ込んで遅刻する訳にもいかなかったため、百合音は早々に踵を返した。軽く手を振る男に笑顔で手を振り返し、通学路に戻る。

今しがた出会った男が吸血鬼であることを、彼女は知らない。

それは、午前の授業が終わり皆が昼食を取り始めたお昼休みのことだった。

「……ねえ、あの噂知ってる?」

適当な女子グループに混ざつてお弁当を食べていた百合音は、女子の一人が放った一言に箸を止めた。

「どんな噂?」

「なんかね、隣のクラスの男子が噂してたんだけど……最近駅前に、吸血鬼が出るんだって!」

それから暫く女子特有の高い声が飛び交っている間、百合音は相槌だけ打ちながら心の中で首を捻っていた。

(吸血鬼って、あの子たちのことではない、わよね……)

彼女の家には冗談抜きで二人ほど吸血鬼が居るわけだが、彼女たちは昼間は勿論夜間も外出することは極めて稀だ。駅前で人を襲っているなど考えられない。

(つまり、あの子以外の真祖サトヴァンフがこの近くに來てるってこと……?)

騒ぎを起こしているの自体は下位吸血鬼の仕業か真祖の仕業か断定できないが、気になるのは時期だ。噂が流行りだしたのは、最近“。下位吸血鬼単体がこの地域に移住して来たと考えerよりは、真祖に付いて移動して来たと考えer方がしっくりくる。

無論、噂そのものがただの噂だという可能性もある。だが、火の無いところに煙は立たないものである。

(とりあえず、帰ったら要相談ね)

噂の出本である隣のクラスに吸血鬼が紛れていることを、彼女は知らない。

帰り道。

白い羽織の和装が見当たらないか周囲に気を配りながら歩いていた百合音は、道路脇で自転車と共に立ち往生している一人の少年を見付けた。

「どうしたの?」

「……ひっ」

百合音が声を掛けた瞬間、引き攣った声を上げて少年が距離を取った。驚いた、を通り越して最早怯えられている。

片腕に巻かれた包帯と色素の薄い髪が印象的な少年だった。痩せていてとても成長期の男子には見えないが、何となく同じ年くらいではないかと百合音は思う。

そんな少年が飛び退いたことで、彼の物であろう自転車の全貌が明らかになった。そのチェーンがだらりと垂れ下がっているのを見て、百合音は合点がいったように頷く。

「ああ、チェーンが外れちゃったのね。ちよつと待ってて」「え……」

癖なのか、心臓を庇うように両腕を胸の前上げて身を縮こまらせている少年の返事を待たず、彼女はスクールバッグの中からビニール袋に入った軍手を取り出した。昨日園芸部による校舎周りの花壇の

整備を手伝った時に使ったものだ。土臭いがチェーンの油で真っ黒に手を汚すよりはましだろう。

「えっと、ギアは付いてないのね。チェーンカバーもない、と。これなら掛け直すだけで済むはず……」

外れてしまったチェーンを先ずは後輪に、次に前輪にはめてから慎重にペダルを逆向きに回していく。大した苦もなく作業を終えた百合音は軍手を裏返しに脱いでビニールに放り込んだ。

「はい、これで大丈夫よ」

「あ……ありが、とう……」

「どういたしまして。チェーンは上下に揺れるときに外れやすいから、あんまり段差とかに乗り上げない方がいいわよ」

「う、うん、わかった……」

「じゃあね、今度は気を付けて」

終始おどおどとした様子の少年を特に気にする風もなく百合音は軍手の入ったビニール袋をスクールバッグに収め、最後に笑顔で手を振って別れた。

偶然に助けた少年が吸血鬼であることを、彼女は知らない。

「ただいまー」

青いイルカのキーホルダーが付いた鍵でドアを開け、百合音は帰宅を告げる。すると直ぐに廊下の奥から誰かがぱたと駆けてくる音が聞こえた。

「百合音、おかえりなさいー!」

「ただいま、有紗」

非常に女の子らしい、ソプラノの声が百合音を出迎えた。声の主は中学生くらいの見た目で、明るい茶色の髪を肩口で切り揃えた華奢な少女だ。紫紺色の瞳を持つ彼女は、百合音と契約している真祖サトゥアンの唯一の下位吸血鬼……つまりは吸血鬼でもある。

「あのね、冷優レイユが、話があるんだって」

「話？」

「うん、緊急みたい。リビングに居るよ」

「分かったわ。とりあえず鞆を置いてくるわね」

軽く頷いた有紗がリビングへ行くのと反対に百合音は洗面所で手を洗い、自室にスクールバッグを置きに行く。ついでに制服のブレザーも脱いでハンガーに掛けた後、二人が待つリビングへ戻った。

「おまたせ」

「遅い。帰宅中どこで油を売っていたの」

「別に普通に帰ってきたわよ。大体、第一声がそれなのはどうかと思うけど？」

「貴女の普通は当てにならない。せつかく淹れた紅茶がもう少しで不味くなるどころだったわ」

「はいはい。で、話って何？」

「……………」

瀟灑なデザインのティーセットが並べられたローテーブルを、コの字に囲む形で置かれた三つのソファにそれぞれが座る。同じソファで隣同士に座らないあたりが彼女たちの関係をよく表していた。百合音が腰を落ち着けたのを確認したところで、青い瞳の真祖は口火を切る。

「……………八番目のお兄様が、動くわ」

しん、と一瞬リビングが静まる。

次いで、何とも言えない顔をした百合音が口を開く。

「〃お兄様〃 って……貴女ほんと、育ちだけは生粋のお嬢様よね」

「それは今この場では関係ないから黙りなさい」

殺気が滲むほど鋭い視線で冷優が発言者を睨んだ。百合音も負けじと睨み返すのを余所に、有紗が口許に手を当てて呟く。

「八番目って、確か冷優みたいに昔C3にいたって……？」

「その知識は正確ではないけれど、今はその認識で構わないわ」

「動くって、具体的には？」

「八番目のお兄様と、その他の真祖との殺し合いが始まる」

さらりと告げられた内容に百合音は分かりやすく顔を顰めた。

「何よそれ……何か意味でもあるの?」

「それは今、風谷が探っているはずよ」

そこで一度口を閉じ、冷優は照明の光を受けて黄金色に輝く紅茶を口にした。先ほど百合音が言った通り、ただ紅茶を飲むという動作一つとっても彼女の所作には一切の無駄がなく、良家の令嬢というに相応しいものだった。

冷優が紅茶を飲むのを待ってから、不安げに紫紺の瞳を揺らした有紗が口を挟む。

「でも、単純に考えたら一対七だよね??八番目……憂鬱の真祖に勝ち目はないんじゃない?」

「それが、そうでもないわ」

一拍おいて、冷優は淡々と語り出す。

「“過去の事”を鑑みれば、七人のお兄様たちが直ぐに団結できるとは考えにくい。一対一を七回繰り返すだけなら、憂鬱のお兄様にも充分勝機はある。……いや、寧ろ確実にそれを狙ってくるはずよ」

再び、三人ともが沈黙した。

そして数十秒後、おもむろ徐に百合音が顔を上げる。

「まあ、とりあえずは……」

「……ええ、そうね」

百合音と冷優が、顔を見合わせた後で同時に有紗へ顔を向けた。そして同時に口を開く。

「有紗は当分一人で外出しないこと」

びくうつ、と有紗の肩が跳ねた。

「え、で、でも……」

「買い物とかは私か風谷の担当になるわね」

「そ、そうじゃなくて、」

「夜なら私も出歩けるわ。どうしても外出したいなら私に言いなさい」

「そうでもなくて!?!ゆ、百合音は?!!」

「私は一人でもどうとでもなるし大丈夫よ。貴女は一人だったら確実にやられるじゃない」

「主人には対吸血鬼用と言ってもいい武器が与えられているけど、貴女は特に何もありませんでしょう」
「うっ」

二人とも酷い……と涙目になる有紗を特に気にせず、真祖と主人は今後の方針についての話し合いを進めていく。一方で完全に戦力外通告を出された有紗は拗ねた表情のまま紅茶を口に含み、淹れ方を計算され尽くしたその美味しさに一瞬で破顔した。

結局、真祖たる冷優の強い主張により、他の吸血鬼には極力関わらないことで方針が固まった。

主人たる少女が今日一日だけでも手遅れなほどに吸血鬼と関わってしまっていることを、彼女たちは知らない。

5. 揺れる花々

麗らかな春の午後。

心地好い陽射しと新緑の芽吹きに心癒される、そんな日曜日。

椿は、改めて自分の現状を俯瞰ふかんし思う。どうしてこうなったのか、と。

彼の目の前では相変わらず黒髪の少女が楽しげに喋り続けている。先ほどから椿の方は相槌を打つくらいしかしていないにも関わらず、よく話題が尽きないものだ。

椿は、彼は確かに夕暮れの路地裏で会話をした別れ際にはこう思っていた。もう彼女と関わる理由は一つもないのだと。

……それがいつの間にかこんな、カフェでお茶するレベルまで纏もつれ込んでいたのだろうか。

ここ最近の椿は、ふらりと散歩に出た日にはほぼ確実にこの少女に見付かっていた。立ち話で終わる時もあれば公園のベンチで世間話をしたことも、一緒にコンビニで買い食いしたこともあれば軽くシヨッピングモールを回ったこともあった。

どうやら彼女は期間限定と名の付くものに弱いらしく、今は旬のフルーツを使った限定パフェを幸せそうに頬張ほ張ちっている。

二回目の邂逅かいこうのきっかけとなった首筋の傷のことを尋ねたこともあったが、飼い猫に噛まれたと笑って答えられただけだった。何日か後にはガーゼはなくなっていて、それ以来彼女が怪我をしている様子はない。あの件については本当に椿の杞憂きゆうだったらしい。

「……それでその日は結局解散になったんですけどね、」

「ねえ、左側のアイス、溶けて落ちそうだよ？」

「えっ?」

椿の一言に慌あわてて少女は自分のパフェに視線を落とし、ガラス容器の縁から垂れそうになっていたアイスを救出し始める。しかしそのアイスを崩そうとすると反対側に乗っているブラウニーが飛び出しそうになったりと、なかなか苦戦を強いられていた。

そんな少女を見物しながら椿はゆっくりと抹茶あんみつの白玉を

口に入れる。現役女子高生かつ情報通な彼女がオススメするだけあってこのカフェのスイーツは美味しい。今度ベルキアあたりを連れてまた来ようかな、と思うほどに。

「椿さんって、ほんとに抹茶味のものが好きですよ。普段も洋食より和食派ですか？」

何とか一命を取り留めたアイスをスプーンで掬いながら、少女が再び話を振ってきた。どうやらさつき中断した話題に戻る気はないようだ。

「そうだね。朝はお味噌汁が定番かな」

言いながら椿は、忠誠心の高すぎる「家族」が最近更に和食のレパートリーを増やしているのを思い出す。そのうち和菓子作りにも目覚めないかなと思つてから、割烹着姿の彼が浮かんだため椿はそこで思考を強制終了した。

それからまた一時間ほど他愛ない話をした後で、二人は店を出た。からころと鳴る下駄の音が道行く人間の視線を集めているが、椿は勿論少女も気にする様子はない。観察力のある割に案外図太いのかもしれないと、公園への道を辿りながら椿は思う。この少女と会った日には、彼女の高校の近くにある公園を解散地点にするという暗黙の了解が出来ていた。そんなものが成立してしまうほどの時間を、既に椿と少女は過ごしていた。

公園に着いた後、いつも通り「また」という言葉を残して背を向けた少女を見送りながら、ふと椿は考える。

あの少女も、もう少ししたら死ぬかもしれない。

事故や事件はまだ仕方がない。けれど、椿が本格的に動き出すことよつて触発された吸血鬼に襲われたり、或いは椿の下位吸血鬼の誰かの手に掛かるかもしれない。この辺りに住んでいるのなら、そのような可能性は高いだろう。

そんな想像をして、椿は率直にこう思った。

(それは……………ちよつと、嫌だなあ)

別に、少女が死ぬこと自体はどうでもいい。少なくとも椿にとつては、人間が一人や十人死んだところで大したことではない。そもそも

機械的に進められる作業の途中、滑らかにキーボードを叩いていた彼女の手が、家の扉が開閉される音を聞いて止まる。続いて聞き慣れた声が帰宅の挨拶を告げるのを耳にして、風谷は素早くいくつかのウインドウを閉じた。

階段を上る音、そしてドアが開かれる音。

「……だから電気ぐらい点けなさいっての」

バチンと少々乱暴に照明のスイッチが入る音。

序でに予想通りの第一声が聞けたところで、満足げに風谷は口許を弛めた。

「おかえり、百合音」

くるりとキャスター付きの椅子を回して振り返り、Tシャツとジャケットにジーンズというラフな普段着姿の彼女を視界に収める。

「ただいま。頼まれてた花、買ってきたわよ」

「ああ、ありがとう。ついでにその花瓶に生けておいてくれると嬉しいな」

「はいはい」

風谷がそう頼むことは予想していたのか、百合音は既にハサミを使って茎の長さを揃え始めていた。コップに入れてある水道水を花瓶に移し、一本ずつ丁寧に花が挿されていく。それを眺めながら、風谷は『本題』に入るために口を開いた。

「それにしても随分帰って来るのが遅かったね。寄り道は全く構わないが、不審者には気を付けなよ?」

「してるわよ」

「なら、今日君が会っていた人はどんな人なのか教えてくれるかい?」

ぴたりと、白い花を花瓶に挿し入れていた百合音の手が止まる。風谷がそれを知っていることに驚いているのではなく、ただ何と答えるべきか迷っている様子だ。

百合音は頭の回転は速い方であるし、同時に風谷がどういう人間かということもよく理解している。だから気付いたはずだ。風谷が全て分かった上で聞いているのだということも、そしてそれをわざわざ尋ねて掘り下げようとするこの意味も。

少しの逡巡の後、彼女は花を生けるのを再開しながら答える。

「……別に、悪い人ではないわ」

「それなら尚更だ。『ただの良い人』を連日連れ回すほど君は暇じゃないだろう」

実際には人ではないわけだが、敢えて風谷はそれには言及せず問い掛けを続ける。

「百合音、君はどうしてそこまで『彼』に構い続けているんだい？」

問いに、彼女はふと表情を消した。

その視線は手元の花でもまして風谷でもなく、どこか遠くを見詰めている。それはまるで、過去の記憶を目に映しているようだった。

やがて手の中で揺れるナナカマドの花に視線を戻した百合音は、咳くような声でこう答えた。

「寂しそうに見えたから、かしら」

どこか物憂げな声色で紡がれた言葉を聞いて、風谷は確信した。あの程度の予想はしていたがこれは、完全に彼女のお人好しが発動した案件だ、と。

……彼女は、酷く優しい子なのだ。

困っている人、辛そうな人、寂しそうな人、苦しんでる人、助けを求めている人。そんな人々を一度見掛ければ、どうしても放っておけない。どんな人でも笑っていてほしいと、心からそう思える人間だ。

だからきつと、風谷が忠告したところでその人物との関わりを絶つことはしないだろう。

「……やっぱりその花、君の部屋に飾っておいてくれないかな」

「何でそうなるのよ」

「君の部屋の方が風通しも陽当たりも良いだろう？」

「それはそうだけど……そもそもこれ、貴女が買ってきてって言った花じゃない」

納得がいかない、という顔をしつつも生け終えた花瓶を抱えるあたり素直である。

「大丈夫だよ。見たくなったら君の部屋にお邪魔させてもらうから」

「どこが大丈夫なのよ。全く……」

結局呆れ顔になった百合音が部屋を出ていき、階段を降りる音を確認して風谷は、パソコンへと向き直る。

画面に表示されている様々な『情報』を呂色ろいろの瞳に映しながら、彼女は唄うように呟いた。

「……大丈夫だよ。君は君の在り方で、私は私のやり方で。それでも必ず私は、君たちを守ってみせるから」

6. 見据えるものは

『では、それで契約は締結ということだ』

机上のパソコンから生真面目そうな声が響く。

今の今までその相手と会話をしながら別の書類を捲っていた風谷は、そこで漸くパソコンに視線を戻した。画面に唯一開かれているウインドウはテレビ電話のアプリのものだ。

「ああ、確かに承ったよ。ところで君、相変わらず私と通信するときはいっそう真面目で不機嫌だな。もう少し雑談を挟んでもいいだろうに」

形式こそビデオチャットではあるが、お互いのパソコン画面に映っているのは“No Image”という文字だけだ。実際に回線の向こう側にいるのは中立機関C3の開発班所属の、露木修平という青年である。

本題よりこちらの話がメインであるかのように、楽しそうな声色で風谷は続ける。

「不機嫌の理由は、未だに私がC3きみたちと度々取り引きをしているのが気に食わないのかな??それとも私に依頼しなくてはならないこと、そのものが不満なのかい?」

くすくすと可笑しそうに彼女は笑う。嘲りの類いではなくただ愉しげに。

問い掛けられた露木は少しの沈黙をおいた後、低い声で押し殺したような台詞を返す。

『……あなたが、“あんな事”さえしなければ』

怒りと苛立ちがはつきりと滲んだその一言を聞いた風谷は、半ば呆れたような顔をして腕を組んだ。

「本当に君は、吸血鬼絡みになると感情のセーブが出来ないな。戦闘班に入れなかったのはまさに不幸中の幸いだね。下手したら初陣で突っ走って死んでいたんじゃないか?」

『……………』

画面越しでは見えないが、風谷には彼が今どんな表情をしているか

が容易に想像できた。言ったそばから感情を制御できていないあたり、やはり戦闘には向かないタイプなのだろうと再認識する。

「何より、あの事」に関してには既に副支部長との話し合いで決着している。今更君にどうこう言われる筋合いはないわけだが」

『たとえそうだとしても、今もC3の人間の殆どはあなたを許してはいませんよ』

「許す」??なぜ私が君たちの許しを請う必要がある??それとも、その理念もまた組織から教えられた模範解答なのかな、優等生君?」

『っ、……!』

ぎり、と強く歯を噛み合わせる音が聞こえてきそうなほどだった。煽り耐性も成長無し、と風谷は脳内でメモに書き加える。

必要な事項は聞き出せた。切り上げ時だと判断して彼女は適当に別れの文句を口にする。

「さて、楽しい歓談の途中で残念だが、そろそろ夕食の時間なのでね。これで失礼するよ」

キーを一つタップしてチャットを終了させる。あの様子なら彼は暫くは不機嫌だろうなと想像しながら、風谷はパソコンを閉じた。

ワークスチエアのリクライニングに稼働域いっぱい凭れ掛かって身体を伸ばしつつ、彼女は目を閉じた。深く息を吐いて、頭の中を整理する。

……風谷は、情報屋だ。

依頼主の求める情報を仕入れ、売る。言うだけなら単純だが、場合によっては彼女の売った情報でどこかの組織一つが壊滅することも有り得るような仕事である。

加えて彼女はどの組織の傘下にも与くみしない、いわゆるフリーでの活動をしている。彼女が『依頼』を受けるかどうかは、完全に彼女の気分次第だ。

誰の後ろ楯も必要とせず、誰の下にもつくことはない。

そんな『自由』が許されていることは、偏ひとへに風谷の実力がそれに見合ったレベルであることの証明とも言える。

少なくとも情報というものの扱いにおいて彼女の右に出るものが

現状居ないからこそ、彼女の仕事は成り立っているのだ。

そして彼女は、仕事に私事は挟まないが私事に仕事でのスキルを導入することは惜しまないという人間でもある。

だから、ここ最近百合音が積極的に椿を構い倒していることも、彼が八番目の真祖だという事実には気付いていないことも、早い段階から知っていた。勿論、椿も椿で百合音を吸血鬼云々とは無関係の人間だと認識していることも確認済みだ。

(冷優の意思を尊重するなら、今のうちにそれとなく引き離しておくべきなんだろうが……)

二人の接点を絶つのは簡単だ。やろうと思えば直ぐにでも出来るという自信を風谷は持っている。

ただ、それを実行することを躊躇う理由が、一つあった。

それは、兄弟戦争に関わらなかつた場合の冷優の行く末に関することだ。

もし今回の機会を逃せば、九番目の真祖である冷優の存在は永遠に兄たちに知られないかもしれない。

本人はそれでいいと言っているが、彼女の保護者としては一様に首を縦に振ることは出来ない。いずれそう遠くない未来で、彼女は必ず独りになるときがくるのだから。そうなった時にせめて、兄弟の繋がりがあればと思うのだ。

有紗、百合音、そして冷優。

この三人は、血の繋がりなど一滴もないが風谷の大事な娘であり“家族”である。

彼女たちを守るためならば風谷は何をも惜しまず、彼女たちを害するならば何処の誰であろうと許すつもりはない。

だからこそ、彼女たちの親として、いつか訪れる未来を見詰めた御膳立てくらいはするべきだと。そう思うのである。

(しかし、“それが君のスタンスなら尊重しよう”と言ってしまったからなあ……。私が直接的にあの子を兄弟戦争に放り込むわけにはいかない)

風谷が百合音と椿の関係を絶とうとしない理由はこれだ。先にそ

う宣言してしまっている以上、風谷はこの件を直接主導する訳にはいかない。いかなる場面であろうと「嘘は吐かない」という彼女の「制約」に反するからである。

他方、このまま行けば百合音は椿が起こそうとしている兄弟戦争に首を突っ込むことになるだろう。察しが良い上に行動力もある彼女なのだから、それは最早避けようもない事態だ。

そして、主人^{イッ}である彼女が関われば必然的に冷優も巻き込まれる。これもまた避けようがない、極めて「自然」な流れだろう。これならば、風谷の誘導によるものではないということに出来る。

(冷優が納得するかは微妙だが。まあ、百合音のお人好し加減が異常なのはあの子も理解しているだろうし大丈夫かな)

そんな風に考えながら風谷は、普通の「親」の思考回路ではないなと溜め息を吐き出した。職業柄なのか彼女個人の性質のためか、一つの筋書きの上で他者を転がすことに慣れすぎている。単純に子供を守るという行為の具体的な形が通常のそれからは明らかにずれていた。

(……まあ、私が守らなくなつたつてあの子たちは元から「強い」けどね。私なんかより、ずっと)

それまで神妙な顔をしていた風谷は、そこでふと相好^{そうごう}を崩した。風谷の娘たちをただ風谷に守られているだけの少女たちであると思っ
ている者かもしいるなら、きつと後で痛い目に遭うだろう。黒い狐とか和装サングラスとか椿とかがそうなれば面白いなど、風谷は一人ほ
くそ笑んだ。

ところで全くの余談だが、風谷は椿が嫌いだ。

最近嫌いになった。

理由は一つ、というか一言。

曰く、

「百合音^{うちの娘}に近づく男なんざ滅びればいい」

とのことである。

舞台裏 “画面の向こう側にて、青年はかく語りき”

中立機関C3東京支部、通信室にて。

ぶつりと途切れたチャット画面を前に、露木修平はデスクに拳を落とした。鈍い音を立てて机を揺らした彼の手は、握る力が強すぎるのか白く染まって震えている。

彼が風谷と仕事上の契約の通信を交わした時は、こんな終わり方をするのが常だった。

毎度のようにあの手この手で無駄な世間話を挟み込み、最終的に煽るだけ煽ってほぼ一方的に彼女は通信を切る。おかげで露木は毎回、暫くの時間は不機嫌が抜けない。C3の同僚たちの間では露木がこの通信を終えた直後には出来る限り話し掛けるなという暗黙の了解めいたものが出来上がっている始末である。

用済みのパソコンの電源を落とし、露木は頭痛に耐えるときのように額を手で覆う。勝手に脳内再生されるのは、風谷からのからかい混じりの問い掛けだった。

？―― 『不機嫌の理由は、未だに私がC3と度々取り引ききみたちをしているのが気に食わないのかな??それとも私に依頼しなくてはならないこと、そのものが不満なのかい?』

自覚している限りなら前者だと、露木は額に手を当てたまま呟いた。

風谷は決してC3の味方ではない。彼女はあくまで “誰の味方にもならない” というスタンスで情報屋としての仕事をしている。つまり椿などの吸血鬼側にも “別け隔てなく” 情報を売る可能性がある。彼女は、本来なら危惧すべき存在なのだ。C3以外でも、危険性に重きを置いて排除に乗り出す組織があってもおかしくないほどに。

それでも現状で風谷があらゆる組織から野放しにされているのは、彼女の有能さともう一つ、その力量が測りきれないという “恐れが原因だ”。

彼女は決して、自分の実力の底を見せない。

どれだけ入手困難な情報でも涼しい顔で仕事をこなしてみせるだ

けで、その苦勞を語つて実力をひけらかしたりはしないのだ。いつでも飄々とした態度を崩さず、弱味があることを匂わせない。全く弱点がないかのような振る舞いをする。

そのため、依頼人の側は彼女の「値踏み」が出来ない。

特に、彼女が自分たちに関する情報をどこまで握っているかが判断できない。

自分の組織の情報がどこまで掌握されているのか、分からないからこそ恐ろしいのだ。下手に彼女に手を出せば自分たちの足場が崩れ落ちるかもしれないのだから。

実際に風谷がどの程度まで組織に浸透しているのかは関係ない。ただ、その不安要素こそが一番の抑止力となる。だからこそ敵に回るかもしれない厄介な不確定要員であると認識していても、誰も手が出せないのである。

そして、彼女の一番恐ろしいところは。

その絶妙な均衡を、意図して作り出しているということだ。元から、彼女はそういう人間だった。

人の思考を深く読み解き、人の行動をよく観察する。どんな思考からどんな行動が導きだされるのか、逆に周囲からのどんな働き掛けがあれば人間はどんな考えに至るのか。それがつまりは彼女の興味を惹き付けるものの原点であり、興味さえあれば彼女はその探求のために時間も労力も惜しまなかった。その積み重ねによって彼女は人間という生き物の思考回路や行動原理を非常によく理解しているし、それを利用する方法も熟知している。そういう意味では『情報屋』は彼女の性^{しょう}に合った職なのかもしれない。

そして、もう一つだけ理由があった。

決して認めてはならない、しかし露木修平の本音に一番近いところにある理由が。

風谷に、これ以上C3に関わって欲しくないのだ。

要するに、彼女の存在がC3の害になるからではなく、C3が彼女に害を与えるかもしれないから、という理由だ。

“あれだけの事”をしたのだから、本来なら風谷はC3の目の届か

ない場所で息を潜めているべきなのだ。副支部長と話をつけたと言っても、その協定がいつ壊れるかなど分からないのだから。わざわざ何度も依頼を受けてこちらと接触を取り続けるような真似は、しなくてもいいはずだ。

(……………いや、してほしくないと言うべき、でしようか…………)

それは優等生なら、きつと口に出してはいけない回答なのだろう。過去にC3という組織そのものを欺き、吸血鬼に負の感情を抱いている者たち全てから憎悪を買うような行いをした人物の平穩を、願うなど。

それでも。

画面の向こうの彼女がいつも通りに世間話を持ち掛けてくることにどこか安堵している自分があることを、露木は知っている。

知っていて、だからこそ知らない振りをするしかない。彼は既に我が儘の言える子供ではなく、社会に帰属する大人なのだから。

ただ、一つだけ言えることがある。

風谷が「あんな事」をしたのは、間違いなく九番目の真祖が原因だということだ。

「…………やはり、吸血鬼は人間に害をもたらすことしかしない存在だ」

そう、言葉にすることで露木は膨れ上がりそうになる気持ちを落ち着けた。机上に放置されてすっかり冷めていたブラックコーヒーをあお呷る。

真つ暗なパソコンの画面に映った青年は、酷く苦々しい表情をしていた。

7. 好転か暗転か

物事に変化が起これるとすれば、そこには必ず予兆が伴うものだ。

それはほんの些細なものかもしれないし、当事者からは見えないところでも起こっているものかもしれない。

それでも必ず、変化には予兆が付き纏うのだ。

……いつだったか、そんな事を風谷が語っていたのを思い出しながら、百合音は放課後の校門を抜けた。

膨大な情報の中から息をするようにそんな予兆を読み取って先手の行動を取る彼女ならではの主張だろう。実際はほとんど目に見えないそれを認識して変化に備えることができるケースなど稀だ。だからこそ、いざ予期せぬ変化を目の前にした時の臨機応変さというのは非常に重要で有益な能力の一つである。

さて、では一方で、その予兆らしきものを見付けてしまった場合にはどう行動すべきだろうか。

百合音の思考回路に引つ掛かっているのは、二日前の風谷との会話だった。

放任主義かつ過保護というある意味極端なスタンスを持つ風谷は、もし椿が明確に百合音に危害を加えるつもりで近付いている人物だったなら何も言わずに即刻排除していただろう。逆にただの散歩と純和風趣味の人間だったとして、この場合も特に口を出すことはないだろう。

しかし今回、風谷はわざわざ百合音との会話で椿のことを追及した。その中途半端な対応には必ず意味があるはずだ。

(要は、今すぐ私から引き離す必要があるほどの悪人ではないけど、人畜無害な一般市民でもないってことかしらね)

風谷はそれを百合音に伝えて、何を予見させたかったのだろうか。
或いはこの思考も既に、彼女の筋書きの上に乗せられているものなのだろうか。

そこまで考えて百合音は、意図的に考えることを止めた。

理詰めで先を読んで行動するのも回りくどい真似も得意ではない。

答えの見えない問題より、とりあえず今日の夕飯は何にしようかと思考をシフトする。

そして冷蔵庫の中身を思い出しながらいつも学校帰りに利用する近道の路地に入った百合音は、進行方向に見慣れた和服姿を見付けて足を止めた。

彼女に気付いたその人物が、柔らかな笑顔を浮かべて振り向く。

「やあ、百合音」

「椿さん……」

いつものように下駄を鳴らしながらゆつくりと歩み寄ってくる椿に、百合音は違和感を覚えた。

一つは、椿から声を掛けてきたこと。大抵は百合音が彼を見付けるのだ。……というより今、椿は明らかに百合音を“待ち伏せ”していた。

(それに、名前……)

そう。初めて、名前を呼ばれた。

変化には、予兆が伴う。或いは、この変化こそが次に来る変化の予兆そのものなのかもしれない。

二日前に会った時の椿と、今日の前に立っている椿とは、何かが変わ化している。具体的に言うならそれはきつと『関係』の変化だ。今までは、偶然に顔を合わせたときに雑談をする仲。しかし今、椿はわざわざ百合音の帰路で彼女を待っていた。その接見はもはや“偶然”ではなく“必然”。それは決定的すぎるほどの『変化』である。

じり、とコンクリートの地面を革靴の裏が擦る音を耳にして、百合音は自分が無意識に後ずさろうとしていたことを知る。

同時に、僅かな思考の間に椿が異常な程に接近してきていることに気付いた。

「あ……の、椿さん……？」

パーソナルスペースにがつつりと踏み込まれ、流石に百合音もたじろぐ。流れでもう一步後ろに下がりそうになった足を、しかし彼女は無理矢理止めた。

(……落ち着け、慎重にならないと)

元々、この椿という男には初対面の時点でかなりペースを崩され、そこから会話のテンポを掴むのには苦労した覚えがある。更には風谷から有害とも無害とも言えないどっちつかずの評価をされているような人物だ。

詰まるところ、百合音にとって椿はまだ「よく分からない」人なのである。

そして分からないということは即ち、変化のあった彼がどんな行動を取るつもりかという予測が出来ない。そこに加えて前述した諸々の違和感が、彼女の中の警戒心を悪戯に引き上げていた。

だからか、次に放たれた椿の言葉に彼女は別の意味で意表を突かれてしまうこととなった。

「百合音、アイス食べに行かない？」

「……え？」

「ダッツの期間限定ココナッツミルク味、昨日から発売されたみたいだから。……もしかしてもう試しちゃった？」

こてん、と軽く首を傾げて尋ねてくる椿に、一気に脱力してしまうのを感じながら百合音は首を横に振った。続けて了承の意を示せば、椿の表情がぱつと明るくなる。その顔を見て百合音は、先程までの警戒は杞憂きゆうだったかと思ひ直した。

(よく考えたら、変化つて別に悪い方向ばかりじゃないわよね)

今までは百合音がほぼ一方的に椿に接していたが、椿の方からも声を掛けてくれるようになっただけのこと。それならばただの「良い変化だ。関係が良好になっただけで警戒する必要などない。

……はずだった。

ちよつと待っててね、と言う椿の手にはいつの間にかスマホが握られていた。そのままどこかへ電話を掛け始める。

「……あ、オトギリかい??今から帰るから、ちよつといつもの部屋の窓を開けておいてくれるかな?」

何だか聞き覚えのある名前が出ていた気がする上に、帰るのに部屋の窓を開ける必要があるのか、そもそもアイスを食べに行くのではなかったのか、と次々に疑問が百合音の頭に浮かぶ。が、そのどれを尋

ねる暇もなく、椿が振り返って口を開いた。

「よし。じゃあ行くか」

「え」

ひよいつ、という表現が適切だろうか。

急に百合音の視界は高くなり映る景色も角度を変えていた。肩に掛けていたスクールバッグを取り落とさなかったのが不思議なくらいの素早さで、百合音は椿の両腕に横向きに抱えられていた。

一言で述べれば、お姫様抱っこ状態である。

そして見た目には細腕にも関わらず、椿の腕はしっかりと百合音を支えていた。細身とはいえ女子としては長身な方である彼女を抱えてなお、その腕は全く揺らがない。だが残念なことに百合音はギャツプ要素を孕んだその力強さにときめいたりすることはなく、口許を引き攀らせて椿を見やる。

「……………」
何してるんですか椿さん」

「あはははははは!? 酷いなあ、そんな顔をしないでよ」

「下ろしてください」

「まだ駄目。寧ろちゃんと掴まってないと落ちるよ?」

「え、」

直後。

ぶわっ、と風の抵抗を身に受けて漸く、百合音は自分の身体が宙にあることを理解した。

「……………!!??」

声にならなかつた悲鳴を飲み込んで、咄嗟に百合音は椿の着物の襟を掴んだ。直後にタンツと一度ビルの屋上に着地し、間を置かず再び椿の下駄が高い音を奏でながらコンクリートを蹴って跳躍する。

抱えられたまま建物の屋上から屋上へ移動しているのだと、状況を理解した瞬間、彼女の思考は一気に冴えた。

地上からビルの屋上まで跳ぶ異常な身体能力。

そんなものを身に付けているのは最早人間ではない。ならば、必然的にこの椿という男は人の外にある存在ということになる。

そして、彼女の身近には、同じように人の理ことわりを外れた存在がいる。勿論違うという可能性もあるが、最も安易で安直な回答を選ぶなら、それは。

(トローロー吸血、鬼)

答えを出した瞬間、体勢的に間近にある椿の赤い瞳と目が合った。

ぞくりと百合音の背筋が粟立つ。

(そうだ、あの子が青だから忘れてたトローロー吸血鬼の特徴で一番分かりやすいのは、赤い目……！)

喉の奥が干上がるような感覚に襲われ、百合音は息を詰めた。シチュエーションだけ見ればお姫様抱っこで空中散歩という素敵な感じだが、その内情は吸血鬼に連れ拐られる人間である。

(でもどうして??真祖サイヴァンブでも下位吸血鬼サブクラスでも、日の下では人の姿を保ってられないはずなのに。それに私を拐う意味は??まさか誰かと間違われてる??冷優の主人イヴだってバレた??そもそも椿さんの目的は何?)

疑問が思考を埋め尽くす。冷静に状況を分析しようとしているように見えて、それはある種の現実逃避に近いものだった。現時点で答えの出るはずもない問いばかりがぐるぐると頭の中を巡っている。

カンツ、と鋭い音が耳を貫いて、百合音は自分の状況に思考を戻した。

見れば、ホテルの一室の開いた窓枠に、椿が器用に下駄の歯を引っ掛けて着地している。

「さあ、着いたよ」

楽しそうな、いや愉しそうな声だった。

そのまま部屋に足を踏み入れ、いつそ芝居がかったような丁寧な所作で椿は百合音を下ろした。

室内に居た数人の人影が、此方を向く。

人種も年齢も異なって見える彼らの瞳は、当たり前のように総じて、赤かった。

8. 駆け引きのすゝめ

フランスでは、不意に会話が途切れて誰も言葉を発しなくなる一瞬のことを「天使が通る」と言うらしい。

今の状況もそんな可愛らしい表現で纏めてしまえばいいのに、と百合音は心の中で呟いた。

勿論そんな場面ではないので、軽い現実逃避を止めて百合音は視線だけでぐるりと室内を見渡す。連れてこられる時に辛うじて外観が見えたのでここが有名な東京ワールドツリーホテルの高層階の一部屋であることは分かっているが、そこがまさか吸血鬼の溜まり場になっているとは。

室内の見える限りの全員が赤い瞳を向けているのを確認して百合音は、ゆっくりと詰めていた息を吐き出した。

不本意だが、過去に風谷に色々と連れ回されたおかげで、彼女はこういう理不尽な状況には慣れていたりする。

具体的に何があったかは割愛^{かつあい}するが、とにかく吸血鬼だらけの場所に放り込まれることくらいは経験済みだ。

こんな状況でも柔軟な対応をするには、まず落ち着くことである。一手間違えれば死ぬ程度の心持ちで、とにかく自分に都合の悪い展開は避ける。よって百合音は、椿とこの場の面子^{めんつ}が吸血鬼であることは全力で気付かない振りをすることにした。

そして落ち着くと人間、見える景色が変わるものである。もう一度視線を巡らせた百合音は、見覚えのある顔に気付く。

「……ライターのおじさん？」

彼女の視線の先には確かに、いつかの登校中に見た赤い髪の男の姿があった。

「おや、お嬢ちゃんは確か……」

あの日と同じく作業着のような服装にサンダルというスタイルで壁際に立っていた男が、少し首を傾げた後にぽんと手を叩いた。

「ああそうそう、あの時の子だ」

「なあにヒガン、知り合いだったの？」

「いやあ、前にライターを落としたときに拾って届けてくれた子でね。椿が連れてくると言うからどんな子かと思えば、不思議な縁もあったものだなあ」

二人の口調が柔らかいせいか、部屋の空気が少しだけ緩んだのを百合音は感じ取った。その隙にもう一人見覚えのある人物に顔を向ける。

ヒガンと呼ばれた男とは反対側の壁際に立つその少年は、目を見開いていて少し顔色が悪い。そして百合音と目が合った瞬間に、はつとしたように部屋を出て行こうとした。

そんな彼を、容赦なく呼び止める。

「綿貫桜哉、くん？」

「っ！」

びくりと、百合音と同じオレンジ色のブレザーを羽織った肩が揺れる。正直な話、彼がここにいることには百合音の方も驚いているのだが、なにぶん今は僅かでも知っている人物の確保が先決である。

名を呼ばれて反射的に振り返った彼に対し、百合音は大袈裟にぱんと両手を合わせて笑顔を作る。

「やっぱり!? 確か隣の六組の子よね？」

意識して高い声を上げながら綿貫桜哉に近付き、自然な動作で百合音は彼の手を取った。

「なっ、」

「ああ、直接自己紹介したことはなかったわね。私は鈴白^{すずしろ}百合音、クラスは1—5ね。あ、そうそう綿貫くんのクラスは文化祭の出し物は決まった?? うち是有りがちにお化け屋敷になったんだけどー」

「は?? ちよ、」

この取っ掛かりを逃すものかと、百合音は強引に綿貫桜哉との会話を成立させようとする。

それに対して桜哉が引きぎみに後ずさるが、彼女は自分の分すかさず踏み込んで距離を詰め、遂には軽く壁ドン状態になったりしたが構わず話を続ける。

が、唐突に制服の背中部分をくいと引っ張られ、振り返れば真顔

の椿がいた。

「アイス、食べるんでしょ？」

「……え、待つてくださいますかそのためだけに連れてきたんですか!?」

そういえばそんな話をしていた気がする、というレベルに頭の片隅に追いやられていた話題が戻ってきた。本当にそのためだけなら寧ろ僥倖ぎようこうなのだが、それならコンビニと公園で済む話である。

「シャムロック、お願い」

「は、かしこまりました」

椿が、スーツ姿に奇抜な眼帯をした男に声を掛ける。何を畏まったのかは知らないが、きつちりとしたオールバックの男はすたすたとどこかへ行つた。

「君はこっち」

「え」

背中を引つ張られたまま誘導に乗れば、ソファに導かれる。

「座つて」

謎にずつと真顔な椿に促され、圧を感じた百合音は素直に従つた。一気に居心地が悪くなりスクールバッグを抱き締める。

当たり前のように彼女の隣に座つた椿が、そこで漸く表情を緩めてナース服姿の女性の方を向いた。

「ああ、オトギリ。窓、ありがとうね」

「はい」

窓、という単語を耳にした百合音の頭に、一つの疑問が浮かぶ。

(普通、こういう高層ホテルの客室の窓つて全開には出来ない仕様なんじゃ……)

ふと窓の方を振り返つた百合音はそこで、オトギリと呼ばれた女性が『清掃用』とタグのついた鍵で窓を閉め直しているのを目撃した。明らかに業務用のもので一般客が持つべきものではないが、どこから入手したのかは最早訊きくまいと密かに誓う。

数分後。

よく見ればスーツの方も奇抜だった男が持つてきてくれたダツツ

の期間限定ココナッツミルク味にスプーンを突き立てながら、百合音は少ない情報を繋ぎ合わせて今の状況を分析していた。

先程のヒガンという男の台詞やその他の吸血鬼たちの反応を見ていれば、恐らく椿は百合音が九番目の真祖サーヴァントの主人イヴだという理由で拐ってきたのではないと見当がつく。もし違うならこんな風にソファで並んでアイスを食べるような状況にはならないからだ。

そこまでは良い。だが。

(どうして普通に招待するんじゃなくて拉致なの……！)

連れてくる方法が、何と云うか雑すぎる。どうして人外であることを全く隠そうとしないのか。というより、何故急に椿が自らの正体を明かしたのかが非常に疑問である。

百合音が心の中で色々な考察をしていると、隣の椿が食べ終わったダッツの容器を傍らに置いて振り向いた。

「ねえ百合音」

「何ですか？」

「びっくりした？」

「……………」

酷く唐突で分かりづらい尋ね方だったが、それが椿の明らかに人間離れた身体能力のことについて言っているのだと、一拍遅れて彼女は理解する。

流星にそんな切り出し方をされるとは予想しておらず、百合音は沈黙した。不気味な空気が肌を撫でる。彼女が触れなくなかった核心に、言葉遊びでもするように軽い口調で触れられたのだ。もう、気付かない振りは続けられない。

椿の方を振り向くことも出来ず、百合音は視線だけをさ迷わせる。

固まってしまった彼女をいたわるように仕草だけは優しく、その肩に左手を添えて。椿は囁いた。

「僕はね……吸血鬼、なんだ」

ゆっくりと囁かれた言葉が鼓膜を震わせる。

先程から椿が纏う不気味な雰囲気の中でそれを聞いた瞬間、知っていたはずのことにも関わらず百合音の背筋にはおぞけ怖気が走った。

不意を、意表を突かれたことで百合音は、完全に椿の雰囲気呑まれていた。

ひたひたと、足元から這い上がる狂気に侵食されるような、或いは手の内に落とされて支配されていくような。生物的本能が動くのと、しかし逃げろと矛盾した警告を響かせる。

くらりと目眩がするような感覚と、浅くなっていく呼吸に苛まれながら。

少女は、

「そうですか」

たった五文字の言葉だけを告げて、溶け始めていたアイスを口に運んだ。

その声は震えていたり掠れていたりするものではなく、ただ普段通りの相槌のような感覚で発せられたものだった。

「……………え、それだけ？」

ほかん、と。若干間の抜けた調子で椿がそう溢した。数秒前までの妖しげな雰囲気は既にどこかへ捨ててきたらしい。

「いや、あんなアクロバティックなことされた後に人間ですって言い張られた方が対処に困りますけど」

椿の雰囲気が正常に戻ったのを横目で確認して百合音は、そつと息を吐いた。どうにか彼の流れを乱せたらしい。

はつきり言って、相手のペースを崩したり自分のペースに巻き込んだりすることは百合音の十八番おはこのようなものである。勿論、相手のペースに合わせたり自分のペースを柔軟に変化させたりも得意だ。今まで彼女はそうやって生きてきたのだから。精神的な駆け引きで易々と押し負けるつもりは、ない。

対して、百合音の返答を聞いた椿の口角がゆっくりと吊り上がった。

「ふ、あは、あははははははははははははははははははははははは、あはははははははは!!」

もう噎むせてしまえば面白いのに、などと再び現実逃避を凶った百合音の隣で椿は笑い続ける。

「あはははは!? あは、はあ……面白くない、けど、確かにそうかもね?」

椿の、この発作のような大爆笑に関しては既に慣れていている。百合音は特に気にせずこのまま流れを変えていくことにした。

「ところで質問があるんですけど、椿さん」

「何かな?」

一先ずは、気になっていることを聞き出す。

「吸血鬼って、昼間でも活動できるんですか?」

「んー、君と会っていたのはほとんど夕方だったでしょ?」

「そういう意味じゃなくてですね」

「晴れの日でも全部の道が照らされてるわけじゃないからねえ。都心だし、建物の陰なんていくらでもあるよ?」

「そういう意味でもないですって」

「ふふふ、それより早く食べちゃいなよ。溶けてるでしょ?」

どこか機嫌の良さそうな椿は、意味深に笑いながらそう促した。

(はぐらかされた、わね……)

流星に椿と会ったときの天気を全て覚えているわけもなく、また晴れだった日に椿が上手く日陰に入っていたかなど思い出せるはずもない。

そしてこの件に関して百合音が、実は椿より気になっているのは綿貫桜哉の方だ。彼は学生で平日は基本的に毎日登校しているはずである。隣のクラスに天気の良い日にしか現れないレア生徒がいるなどという噂も聞かない。まさか、このホテルに住まう吸血鬼は全員日光に耐性があるともいうのだろうか。

限りなく答えに近い仮説を浮かべながら、百合音は食べ終えたアイスの空^{から}に蓋をする。

と、どこかへ行っていた眼帯の男が部屋に入ってきた。

「若、申し訳ありませんが、先日仰られていた『計画』について少しご相談があります」

「そう、分かった」

どうやら、ここでは出来ない話らしく、椿がさっと立ち上がる。

「あ、百合音はここで待っててね？」

「善処します」

百合音が即答で遠回しな断り文句を言うと、椿はまた一頻り笑ってから眼帯の男と共に出て行った。

その背を見送ってからドアが閉まって二人分の足音が遠ざかるのにじっと耳を澄ませて、百合音はちらりと窓際に腰掛けている少年へ視線を向ける。

(……………やてと、)

ここからが、正念場である。

数時間後。

相変わらず椿の隣に座らせられながら、百合音はソファでシャムロツクと呼ばれていた男に出された紅茶を啜すすっていた。

椿に拉致されてきてから既に三時間ほどが経過し、壁掛け時計の短針は七時を指している。最近は随分日も長くなってきたが、流石にも窓の外は暗い。

(そろそろ、有紗がおろおろしだす頃かしらね)

百合音は部活動には入っていないし、今日は特に遅くなる用事はないと伝えてある。この時間になって何の連絡もなしに帰宅していないというのは不自然だ。何かあったのではと慌てる有紗の姿が目には浮かぶ。そして百合音としても慌ててもらわなければ困る。

因みに椿が席を外していた間の時間はひたすら綿貫桜哉と友好を深めることに費やしていたのだが、椿が戻ってきた途端にソファに引き戻された次第である。

口に含んだ紅茶をゆっくり飲み下して喉を潤してから、百合音は椿の方を向いた。

「椿さん」

「なあに？」

「何がしたいんですか？」

回りくどい聞き方ではまともな答えが返ってこないと先刻の会話で分かったので、漠然としているが直球な質問で彼女は問い掛けた。結局椿は、百合音を拉致してきて何がしたかったのか。何をしようと思っていたのか。返答によって、彼女の今後の行動が大きく左右されることになるだろう。

数度サングラスの奥の瞳を瞬かせた後、椿は彼女の考えを正しく読み取った上で一番面倒な返答を放った。

『何』だと思う？』

と。

簡単に教えてくれる気はないようだ。
「私に聞かれても困ります。ストックホルムとか嫌なので可及的速やかに帰りたいですけど」

「うーん……じゃあさ、君の血を飲ませてくれるなら、帰してあげてもいいよ？」

嫌です、と反射的に口から出そうになった言葉を百合音は呑み込んだ。呑み込んで、わざと全く違う話を持ち出す。

「……吸血鬼が狙うのは美女の血ですよ？」

「あははっ、それはその吸血鬼の趣味嗜好の問題だよ。だから、」

ぐっ、と肩を押されて百合音の身体がソファの背もたれに押し付けられる。横から身体を捻った椿が覆い被さるようにして彼女の瞳を覗き込んだ。

「僕は君の血でも全然構わないわけだけど」

妖しく微笑む椿の雰囲気は今度は呑まれないよう気を張りながら、百合音はわざと椿から顔を逸らして定位置に座っている桜哉に声を掛ける。

「桜哉くーん。吸血鬼に血を吸われたら吸血鬼になるって定番があるけど、これ椿さんに血を吸われたら私もアウトだったりする？」

「……いや、逆。死にかけのときに椿さんの血を飲まされたらアウト」
「ねえ二人ともアウトって言い方やめて？」

思わずといった様子でツツコミを入れた椿に、百合音は心の中でガッツポーズをした。彼女の思惑通りに数秒前までの濃い空気は霧

散し、椿は不満げな表情のまま身体を離した。

(よし、これで椿さんの興も削げたし、吸血鬼になる条件”も聞き出せたし、一石二鳥ね)

先に情報を引き出しておくことで、後々でボロが出る可能性を下げ

る。
現状として椿は、百合音が吸血鬼に関わりのある人間だと知らない。つまりただの一般人の振りをするには、吸血鬼に関しての知識があることを悟られてはならない。

序でに言えば、“帰れること”と“血を与えること”を同じ天秤に乗せてしまうことは避けたかった。相手に与えられた選択肢だけが全てだと思い込んで相手は相手の思うつぼなのだから。

……それにしても椿は、一貫して百合音に危害を加えるつもりがないらしい。

今のやり取りにしても、血が飲みたいだけなら百合音本人を領させる必要などないのだ。この部屋には椿の味方をする者はいても百合音の味方をする者は存在し得ないのだから。わざわざ交換条件を提示したり、適当に茶々を入れただけで身を引いたり、本気でやっている感じがしない。

百合音を誘拐して帰す気もないが、無理に血を吸ったりすることもしない。一体、椿は何がしたいのだろうか。回答の得られなかった質問が、ぐるぐると彼女の頭の中を巡る。

そんな時だった。

鞆の中に入れっぱなしだった百合音のスマホが初期設定の単調な着信音を、奏で始めたのは。

幕間1 『異口同音に口を揃えて』

「お友達になりましょう、桜哉くん」

「……………は？」

長い長い思考停止の後に漸く桜哉の口から出たのは、その一音のみだった。

『 異口同音に口を揃えて 』

客人が来るらしいという話は、聞いていた。

シャムロックは来客用の紅茶を買い足していたし、いつも麻雀や雑談をしている共用リビングは心なしか綺麗に清掃されていた。誰がやったのか桜哉は知らないが恐らくはこれもシャムロックだろう。何故なら、客人を連れて来たいと言ったのが椿だからだ。

そして数十分前に椿に抱えられて窓から連れて来られた少女は、現在ソファで期間限定味だというダッツを食べている。

先程椿から吸血鬼だというカミングアウトがあったばかりのはずだが、彼女は怯えるでも騒ぐでもなくその事実を「受け入れて」いた。窓際に腰掛けている桜哉からは彼女の表情がよく見えるのだが、特に強がっている様子も見られない。

（ほんと何なんだ、アイツ……）

彼女を椿が連れてきた時、桜哉はその見覚えのありすぎる制服を見て驚いた。そして彼女と目が会った瞬間、咄嗟に逃げなければと思った。桜哉が椿と「同種」だと、同じ学校の生徒に知られるのは避けなければならない事態だからだ。

しかし彼女は、既に桜哉の名前を知っていた上に笑顔で自己紹介までしてみせた。あの場に居た他の面子など視界に入っていないかのような、極めて自然体で。

そして訊きもしないのに名乗った少女の名前を聞いた瞬間、桜哉の記憶で僅かに引つ掛かる部分があった。

（確か、クラスリレーのアンカーやってたよな…）

思い当たるのは五月に開催されたクラス対抗男女混合リレー。その時に桜哉の隣のクラスである五組のアンカーを務め、同じく桜哉のクラスのアンカーだった真昼とデッドヒートを繰り広げた女子である。因みに彼女は四位から二人抜いて二位に上がった後に真昼と競争し合ったが、最終的にリードの差が響き真昼が逃げ切るという結果に終わった。

そこで新たに桜哉の記憶の回路が繋がる。

(ああ、そういや女子人気が凄かったな)

隣のクラスの陣地からは女子からの声援が響いていた記憶が強く残っている。確かに足は速かったがそれ以前に、あの手慣れた自己紹介から察するに交遊関係の広いタイプなのだろう。

他にも彼女に関する記憶がないかと思いついてみるが、桜哉の脳内にそれ以上の情報は見付からなかった。

とすると問題になるのが、何故彼女は桜哉のことを知っていたのかという点だ。

クラスが隣なのだから、廊下ですれ違ったりすることくらいはあつただろう。しかし声を掛けられた覚えなどない。実際、彼女の方も直接自己紹介したことはなかった”と言っていた。

(じゃあ、なんで……)

桜哉の思考が回転を鈍らせたときだった。

「ねえ、隣いいかしら？」

それはもう極々自然に、件の彼女が笑顔でそう言いながら桜哉の隣に腰掛けてきた。

「わあ……流石に高いし景色も良いわね。あ、それと桜哉くんって呼んでもいい？」

「いや待ってってお前。ていうか椿さんは……」

小さい子のように両手を窓に付けて眼下に広がる街並みを楽しげに見ながらどきどきに紛れて名前呼びを許可させようとしてくる彼女に、桜哉は軽く突っ込みながらさっきまで椿と彼女が居たはずのソファを確認した。しかしそこに椿の姿はない。彼が考え事をする間に席を外してしまつたようだ。

「椿さんなら、さつき眼帯の人に呼ばれて行ったわ。ねえ、それより私、一つ桜哉くんに質問があるんだけど」

「……………なんだよ」

「桜哉くんも、吸血鬼なの？」

は、と半開きになった桜哉の口から細く息が漏れていった。剩りにあまもあつさりとした問い掛け方に唾然としたのが半分、聞く必要のないことを聞く馬鹿さに呆れたのが半分である。

桜哉が、この部屋に居る他の面々が吸血鬼かどうかなど、椿が吸血鬼であると明かした時点で薄々予想できることだろうに。

真つ直ぐに桜哉の目を見て回答を待つ少女を、桜哉は半ば自棄やけのような気分で見返した。

「だったら、なんだよ」

「そう。じゃあ……………」

そして冒頭に戻る。

「お友達になりましたよう、桜哉くん」

「……………は？」

一瞬、〃じゃあ〃というのは日本語における逆接表現だったかと錯覚した。

しかしそんな訳はないと直ぐに桜哉は心の中で首を振る。おかしいのは桜哉の日本語能力ではなく周りが吸血鬼だらけだと知っているにも関わらず友達作りに励もうとする彼女の方である。

「お前、状況分かってないのか？」

「椿さんのこと??あれは帰してくれそうにないわよね。私、今日夕食当番なのに」

困ったわ、と全く困ってなさそうに彼女は呟いた。本当にこの少女の思考回路と危機意識はどうなっているのかと他人事ながら桜哉は不安になる。

そして桜哉ははっとした。この緩すぎる会話に乗じれば彼女がどうして桜哉のことを知っていたのかを聞き出すことも容易なのではないかと。

何故か桜哉の方が緊張しつつ意を決して口を開く。

「なあ、それより……なんでオレの名前、知ってたんだよ」

「理由は二つね」

まるで、桜哉がそう尋ねてくることを予見していたように淀みなく彼女は話を始めた。窓の外へ向けていた身体をくるりと部屋側へ戻し、桜哉の目の前に人差し指を立ててみせる。

「まず一つ目。これは個人的な目標なんだけど、私、今学期中に同じ学年の子の顔と名前は制覇しようと思ってるの」

「……………」

さらっと聞かされた目標とやらに桜哉は軽くフリーズした。まさか、友達百人出来るかな♪をリアルでやろうとしている人間がいるとは。

元々ネガティブな性格で人間関係の構築など鬱陶しいとすら思うことのある桜哉からすれば、正気の沙汰とは思えなかった。

「それで、まあ流石に一人一人にアタックしていくのは効率が悪いから、喋る機会のあった子にその子の『友達の話』を聞くことにしているの。そこで二つ目ね」

人差し指の隣に中指を立てて、桜哉には理解できない目標を掲げる少女は続ける。

「桜哉くんって、虎雪くんとお友達なんでしょう??美術部の展示会のセッティングのお手伝いをしたときに彼と話す機会があったの。そこで桜哉くんのごとも聞いていたのよ」

にこにここと、相変わらず何が楽しいのか笑顔で彼女は説明を終えた。

「話聞いてただけで、見たときオレだって特定できるのかよ」

「うちの高校って確かに校則はゆるい方だけど、校内にまでヘッドフォン着けてくる子なんて貴方くらいだと思わよ?」

「……………」

即答でそう告げられて、桜哉は沈黙した。意識していなかったが、確かに常にヘッドフォンを首に掛けていれば覚えられていても不思議ではない。

「まあ、その話はおいという。文化祭の出し物、桜哉くんのクラスは何

になったの?」

「……喫茶店」

「桜哉くんは裏方??接客?」

「たぶん、接客」

そう言うのと彼女は少し驚いたような顔をして。

「桜哉くんって裏方でも活躍できそうなのに、接客もこなせるなんて凄いわね!」

一瞬だけ嫌みでも混ざっているかと桜哉は身構えたが、彼女の表情を見るに純粹に凄いと思っただけなのだろう。普段の学校での桜哉の様子を知らない彼女からすれば、今のやや冷めた口調の桜哉を見て裏方向きだと思うのは道理だ。それで接客をできるのかどうか疑わないあたり、随分と素直な思考回路の持ち主である。

「……そっちは」

「お化け屋敷ね。私は宣伝と受付とお客さんの誘導担当」

「多いだろ」

「ほとんど同じような役割だもの、重複するのは仕方ないわ」

どうやら本命のお化け屋敷の中に割かなければならない人員が多いらしく、外は最小限の人数になってしまったらしい。

それから文化祭の話題を暫く話して、それでも会話は途切れなかった。少女の方が上手く桜哉に質問を投げ掛けて、それに答える形で新しい話題へと移っていく。

あの教科の先生は宿題が多いだの、この前の授業で抜き打ちテストがあっただの、購買のどのパンが美味しいだのと。学校の休み時間にするような雑談が続き、知らぬ間に饒舌じょうぜつになって己に桜哉は内心で驚いていた。そして同時に、心の中に浮かんだぼんやりとした感情を見付ける。

こういうの、なんか、いいな、と。

はつきりとした理由を付けることは出来ないが、気付いた途端にその思いは鮮明に桜哉の中に染み渡った。感情自体に名前を付けられなくとも、それを新鮮に感じる理由は簡単だった。

彼が人間だった頃は言うまでもなく、椿に救われて吸血鬼になった

今でも。

桜哉が友達の家に行くことはあっても、その逆は絶対に有り得なかったのだから。

何だかんだ桜哉が「家」だと思っているこの場所で、同じ学校の話が出来る人物と一緒に駄弁つていられることが、彼には想像以上に心地良かったのだ。

そして桜哉がそのことを自覚したとき、ふと二人の傍に影が落ちた。

「もう、ソファで待っててって言ったでしょ？」

耳に届いた声に桜哉が顔を上げれば、いつの間にかそこには椿が立っていた。無駄に高い下駄を履いているというのに近付く足音すらしないとはどういうことなのか。

一方で椿は少女のみに視線を注いでいて、いつものごとく黒い袖に包まれた右手を口許に宛がっている。彼女の方を見れば、やはり突然間近に立たれていたことに驚いたのか、ぽかんとしたまま椿を見上げていた。

「シヤムが紅茶を淹れなおしてくれてるから、こつちにおいで？」

「……………はい」

いつもと同じく柔らかな口調だったが、椿の声にはどこか有無を言わせない響きを感じられた。彼女もそう感じたのだろうか、僅かに引き攣った表情で従っている。

別に桜哉の位置からソファがそう離れているわけでもないのだが、去り際にちらりと彼女が桜哉に視線を超越したのが見えた。そして、それを遮るように彼女の背後に身を置いた椿の、彼女へ向けられたその赤い瞳に渦巻くものが見えてしまつて、桜哉は。

(……………ああ、)

可哀想だな、と思つた。

椿が少女に向ける視線が、桜哉が偽物の記憶を植え付けた親友に向けるものと、同じものだと感じたからだ。

桜哉は彼女と椿の馴れ初めを知っているわけではないが、想像は出来る。恐らくは彼女の方が椿に、あの明るい笑顔でもって接したのだ

ろう。

美女と野獣の方がよっぽど救い様のある組み合わせだったろうに。見ず知らずの誰かにまで、吸血鬼こんな化け物なんかにもで笑顔を向けたりするから、付け入れられて関わることを強要される。桜哉が城田真昼の親友に偽なったのも、椿が彼女を拐なつてきたのも、本質は変わらない。ただ何となく、気に入ってしまったものを手の届く場所に置いておきたいだけだ。実に身勝手に一方的で、悪意がない代わりに善意も含まない、どうしようもない所業である。

極めつけに、彼女は椿が吸血鬼だと明かされたときに拒絶を示さなかった。

当たり前前に人間だと思って接していた誰かが実は、百人中百人が化け物だと呼ぶ存在だと知らされてなお、今まで通りに会話が出来るなど。そんな人間は普通、いない。このことによつて椿の彼女に対する執着は確実に強まっただろう。

連れ戻されたソファの、椿の隣でそれなりに寛くつろいでいる彼女を曇った瞳で眺めながら、桜哉はもう一度だけ、声に出さず可哀想にと呟つぶやいた。

今桜哉の考えたことを少女の「家族」に聞かせれば、哀れみの目を向けられるのは彼の方であることなど、この時の綿貫桜哉は知るよしもない。

9. 耳を傾ける

鳴り響く音に、室内はしんと静まっていた。

椿は勿論、桜哉やオトギリやシャムロックなどの視線が集まる中で、百合音は。

「もしもし、あ」

さつとスマホを取り出して相手も見ずにスピーカー通話のボタンを押した。スピーディーすぎて隣に座っている椿が何の反応も出していない。

しかし平然と通話を開始しようとした彼女の手から、シャムロックが素早くスマホを抜き取った。

わざわざ誘拐してきた人間に外との連絡手段を使わせるなど愚行なので彼の判断は賢明である。特に取り返そうとはせず百合音は彼を見上げる。

（直ぐに切らないってことは、適当な理由をでっち上げて私が誘拐されていること自体を誤魔化すつもりかしらね）

そんな風に彼女が思っていると、予想通りにシャムロックは社交用の穏やかな声色で滑らかに言葉を紡ぎ出した。

「もしもし、百合音さんのご家族の方でしょうか??私は一ー」

だが、彼の台詞を遮って、スピーカーからは冷めた声が響く。

『そういう前口上はどうでもいいからさっさと君の主人の狐に代わりたまえ』

場に居た全員が固まった。

このタイミングで電話を掛けてくるなら有紗あたりだろうと踏んでいた百合音もまた絶句していた。数秒の空白の後に椿が笑いだすまでは、誰も彼もが完全にフリーズ状態だった。

「あはは、あは、はあ……面白くない。シャム、貸して?」

恒例のくだりが終わった後で、椿が手を差し出す。シャムロックは未だに動揺しながらも椿に従い、スマホが椿の手に渡った。

「やあ、その声は風谷 巽たづみだね??久しぶりなのに随分と機嫌が悪そうじゃないか」

えっ、と思わず声が出そうになって百合音はぎゅつと唇を嚙んだ。風谷が椿のことを知っているのは不思議ではないが、椿もまた風谷の知り合いだとは思っていなかったのだ。

『確かに久々だな、椿。白昼堂々私の大事な娘を拐うとはいい度胸だ』
「むすめ？」

完全に予想外だったのだろう。切れ長の目を丸くして椿が百合音を振り返る。血は繋がってませんけどね、と答える彼女の隣から身を乗り出して、シヤムロックがやや狼狽うろたえた調子で声を上げた。

「馬鹿な。事前の調査でそのような情報はどこにも……！」

『おやおや、もしかすると君が調べ出したのはその子とは別の人間の情報だったのかもね??まあ気にするなよ、間違いは誰にでもあることだ』

電話の向こうで風谷が愉快そうに嗤わらっているのが、百合音には簡単に想像できた。こればかりはシヤムロックに同情を禁じ得ない。知らずに挑むには相手が悪すぎたのだ。

悔しげに白手に包まれた拳を握る彼に心の中でご愁傷さまでしたと唱える百合音の隣で、椿は不敵に笑う。

「それで、用件は何かな？」

『そうだな。とりあえず私の娘を連れ去ったことと理由と弁明を聞こうか』

「あはっ、僕が素直に答えると思ってるの?」

『思わないね。それに君の答えなど期待していない。吐き気がするほど不本意だが、理由の方は私には見当がついているのでね』

まあそんなことはどうでもいいか、と本当にどうでも良さそうな冷めた声色で呟つぶきが聞こえて、百合音は首を傾げた。少しばかり風谷らしくないと思った故である。

彼女がその違和感の理由について考えている間に、風谷は本題へと話を進めていく。

『そこで君に一つ提案がある』

スピーカーから流れたその声に不穏な気配を感じて、百合音は反射的に身構えた。そして案の定、どこか愉しげに風谷は『提案』を口に

する。

『しばらくの間、その子を預かっててくれないか?』

「は?」

室内に居る全員の心境を一字で代弁した椿は、呆けた後で真顔になった。

「僕が言うのもなんだけど君、頭大丈夫なの?」

『実は私、明日イギリスへ行く予定があつてね。最近はどこかの誰かのせいで物騒だし、娘を残していくのは不安だろうか?』

白々しい、という表現が一番合うだろうか。

風谷の突飛な発言と無茶振りは今に始まったことではないので百合音は最早抗議する気にもならず、半目でスマホを見詰めた。

(……でもこれ、私の真祖サレヴァンフが冷優じゃなかったら24時間で死んでるわよね)

冷優の真祖としての特異性の一つに、主人イヅとの限界距離が無制限であることが挙げられる。

決して制約自体が無いのではなく、距離設定が“無限”なのだ。これにより真祖サレヴァンフと主人イヅは必ず一定距離内に居るという常識が覆っている。

因みに物理的な縛りが実質無いも同然である代わりなのか、精神面での結び付きが他の主従よりも強いらしい。百合音は他の真祖イヅの主人になったことがないので比べようもないのだが。

(まあ、心の声がかだ漏れとかいうレベルじゃないから別にいいんだけど)

百合音がそんなことを思っていると。

『まあただし、一つ条件がある』

「お決まりすぎて面白くないなあ」

『面白さを求めてはいないし、どうせ君はいつも憂鬱だろう。何より私には関係のない話だ』

会話に混ぜ込まれた単語に、百合音はびくりと反応した。それを顔に出さないようにゆっくりとスマホから視線を逸らす。

(今“憂鬱”って言った??しかも、“椿さん”は“憂鬱”だつて言っ

たわよね?)

少し前に冷優や有紗と話し合った時のことが百合音の記憶に蘇よみがえる。憂鬱といえ八番目の真祖、そして兄妹たちに戦争を仕掛けようとしている張本人ではなかったか。

(……これ、私が主人イヅだつて絶対にバレちゃいけないパターンじゃない)

現状、椿たちは九番目の真祖である冷優の存在を全く知らないはずだ。その状態で百合音が主人イヅだと思われた場合、上の七人の兄弟たちの誰かの主人だと断定されるのは避けられない事態だろう。そしてそうなれば、待っているのは笑えない展開である。

内心で戦々恐々としているのを悟られないように、百合音はそつと紅茶のカップを手を取った。温くなつてしまっているそれにゆつくりと口を付ける。

(風谷が私の携帯に掛けてきて「娘」だつて宣言したのって、もしかしてこれが理由……?)

「風谷の娘」だという前提があれば、多少吸血鬼の知識があつてもそれが「主人イヅだから」だとは思われない。そして風谷翼は良くも悪くも中立な人間だ。中立な人物の関係者なら、鈴白百合音もまた中立だと扱われるだろう。少なくとも即座に敵方と見なされて殺される危険性は減る。

考えていたより数段危険な場所に連れ込まれていたことが判明して、渴きを訴え始める喉に百合音は紅茶を流し込んだ。

「で、その条件は？」

『学生の本分は勉強だ。明日は適当に公欠にしておくが、明後日からはきちんと登校させること』

適当に公欠、にツツコンではならない。風谷のやることに一々口を挟んでいたらキリがないからだ。なのでそれは置いておいて、条件の分析に入ろう。

この条件を呑めば、椿には百合音を外に出さなければならぬ、そして彼女がそのまま逃走するかもしれないというリスクが生じる。風谷が百合音を「預ける」と言っているのだからそれを信じれば問

題にはならないはずが、敢えて条件とする理由に裏があるようにも思えてしまう。

「……断れば?」

『少なくとも今日中にはその子を返してもらおうことになる』

決定事項として告げられた言葉は寸分の迷いもなく、直ぐにでも百合音の奪還を完遂させられるという自信が感じられた。

ふと切れ長の目を伏せて、椿は思案するように間を置いた。その隣で百合音は、考えてもあまり意味はないのにと心の中で呟く。

「……いいよ、その条件で。百合音がちゃんと僕の所に帰って来てくれるなら、僕はそれで構わない」

『……そうだな。せいぜい期間限定でその子の帰る場所になれることを喜んでおけよ』

「期限の曖昧な期間限定なんて、無期限と同じだけどねえ?」

『期日は設けるさ。そう遠くない内に必ずな』

二人の会話を隣で聞いていて百合音は思った。両者ともに口調がキツイ訳でもないのに寒気がする、と。

『……ああ、それと最後に百合音に代わってくれないかな? スピーカーのまま構わないから』

ふと雰囲気の柔らかくなった風谷の言葉に、嫌な予感が百合音の脳裏を掠めた。

代わりたくなかったが椿が素直にスマホを差し出してくるため仕方なく黒いカバーのそれを受け取る。

「……もしもし」

『やあ百合音、元気そうだなによりだ。ところでもうそろそろ着く頃だと思っただが』

何が?と尋ねるより先に、部屋にノックの音が響いた。

「すいません椿さん、さっきこれが届いてたんですけど…」

恐らく椿の下位吸血鬼サブククラスの一人だろう。百合音と同年代くらいの少年が、青い大型のスーツケースを運んできた。

その声が聞こえたのか、スマホから風谷が。

『ああ、届いたみたいだね。大体の生活用品は詰めておいたから』

「私の荷物？」

『そう。ついでに言っておくが椿、危険物が入ってないから女子高生の鞆を漁るなんて野暮なことはするなよ?』

「しないよ。僕を何だと思ってるの」

『それは失礼。……ああそれと、これは条件に挙げるまでもないことだが、確認のために言っておこうか』

不意に風谷の声色が切り替わる。

『私はその子を、お前たちの玩具おもちゃや餌として差し出しているわけではない。帰ってきたときにその子に傷の一つでも付いていたら、覚悟しておけよ?』

大声で恫喝されているわけでもないのにぞつとするような威圧感だった。一つ前の台詞との温度差でお湯が氷に変わりそうなほどである。百合音は慣れているし椿も平然としていたが、それ以外の面々は無意識に身構えてしまっていた。

再びしんとした状態から一拍開けて、スピーカーからはもう重くも鋭くもない声が響いた。

『さて、じゃあそういうことだから頑張つてね百合n』

語尾に音符でも付きそうなノリの台詞だったので百合音は最後まで聞かずにスマホをシャットダウンした。

深く深く長い溜め息を吐き出して、彼女は抑揚のない声で告げる。

「……そういうことだそうなので、よろしくお願いします」

「うん、よろしくね」

条件は付けられたものの合法的に(?)百合音を側に置いておけることに上機嫌な椿と、風谷の無茶振りにげんなり感が隠せない百合音。もう一度出そうになった溜め息を、彼女は残り少ない紅茶と共に流し込む。そしてそんな二人の前に立ち、声を張り上げる男が一人。

「しかし危険です若、あの男が何を企んでいるか……!」

「っ!?げほ、ごぼっ」

シャムロックの発言を聞いた百合音は思わず飲んでいた紅茶を嘔むせた。

「あれ、大丈夫??百合音」

「けほっ……だ、大丈夫です。んんっ、紅茶が、気管支に入りかけた、だけなので……」

本当は「あの男」発言に動揺した結果噎せたのだが、適当に笑って百合音は取り繕う。椿の視線が外れたところで再びカップに口を付けて、口許を隠した。

（ま、まさかここにも風谷のことを男だと思い込んでる人たちがいるなんて……）

あの話し方と女性にしては低い声のせいで、風谷は依頼人に男だと言われていることが多い。加えて性質が悪いことに彼女は、自分から男だと名乗るようなことはしないが、相手が勝手に男だと思いつむ分には訂正をしないのだ。何でもその方が都合が良いことも多いのだとか。そして当の本人がそんなスタンスなので、百合音も特に間違いを正そうとはしないことにしている。

喉の調子を整えながら、小道具として使いすぎたせいで空っぽになった紅茶カップを百合音がソーサーに戻した。それとほぼ同時だった。

バンツツ!!と部屋の扉が派手な音を立てて開かれたのは。

「たっだいまア〜!☆☆☆☆」

飛び込んできたのは、シルクハットが印象的な長身の男だった。着ているものは普段着というより「衣装」と言った方が良いでしょう。演出目的を感じるスーツ。

「ああ、おかえりベルキア」

「ただいまつばきゆん! ☆? お仕事完了だよ……つて、ええええエエエ!?!」

椿がベルキアと呼んだ男の視線が百合音に止まり、大袈裟に驚きの声が上がった。

「なんで人間がいるのオ!?!☆☆☆☆」

「ベルキア貴様、また若のお話を聞いていなかったのか!?!? 客人を連れられてこられると仰っていただろう!」

「こんな時間まで居座つてるとか思わないじゃん!!」

「あ、すいません色々あつてこれからしばらく居座らせてもらいます

鈴白百合音です。どうぞよろしく」

何だか疲れてきたので半分投げやりに、しかし表情は努めてにこやかに百合音はそう挨拶をした。人間がいる、という言葉から察するに彼も吸血鬼なのだろう。彼女の発言を聞いてまた大袈裟に驚いてみせる男の、大きなシルクハットが大振りな動作に合わせて揺れるのを彼女は黒い瞳でぼんやりと眺める。

「食べちゃダメだよベル??この子は『預かりもの』だからねえ」

「えー、でも人間なんてエサでしょ? ★☆☆★」

素直な人、いや素直な吸血鬼だなあと思いながら百合音は、ベルキアの脅しのような台詞せりふに特にリアクションを返さなかった。推測通りに椿が憂鬱の真祖でベルキアがその下位吸血鬼サブククラスならば、主が「食べるな」と言った餌を食べることはしないだろう。無論、百合音としても易々と血を吸われるつもりはない。

一方、反応の薄い彼女に早くも飽きたのかベルキアが「ボクお腹すいちちゃった〜! ★」と叫んで椿が「そうだね。夕飯にしようか」と言い、シヤムロツクが「おまかせください若!? 本日は私が腕によりをかけて」などと主張し始めた。賑やかなものである。

(……明日は、少し忙しくなるわね)

皆の注目が外れている状況で一人、百合音はぼうっとしたような表情でこれからの身の振り方を頭に浮かべていた。

文字通りに一挙一動がこの環境に馴染むようなものになるように、思考を書き換えていく。

それが徐々に収斂しゅうれんして纏まった頃、目の前に差し出された手に彼女は顔を上げた。

「ほら、百合音も行こう?」

いつの間にか立ち上がっていた椿が、そう言つて左手を向けていた。騒いでいたシヤムロツクやベルキアは勿論、他の面々も既に行つてしまったらしい。

「……………はい、椿さん」

笑顔で頷いて、当たり前のような仕草で。

『彼女』はその手を取った。

舞台裏 〃誘拐から十五分後、家族会議勃発につき〃

「百合音を八番目の真祖のところに預ける!!」

つい先程リビングに集められて風谷から聞かされた話に、有紗は思わず悲鳴に近い音域で叫んでいた。

わなわなと震える彼女と相変わらず本に視線を落としている冷優を交互に見て、風谷は「まあ落ち着いて」と一言添えてから、更なる爆弾を投下する。

「実はさっき百合音が椿に拐われたようでね」

何でもないことのように告げられ、有紗は絶句した。前々から頭の構造が可笑しい人間だと知ってはいたが、それにしても衝撃的なことをさらりと言いきすぎである。

一方で、未だに膝の上に本を開いたままの冷優が静かに顔を上げて風谷を正面から見据えた。

「お兄様があの子を連れ去った理由は、分かっているの?」

「大体は見当がつく。そもそもここ数週間、百合音はよく椿と会っていたんだ。勿論、彼が真祖だとは知らずにね。経緯は省くけど、仲良く世間話するような関係だったみたいだね」

「貴女は、それを知っていて放置した、と?」

冷優からの鋭い視線を向けられた風谷はわざとらしく肩をすくめ、困ったように眉尻を下げた。

「あの子のお人好しスイッチが入るとどうしようもないってことくらい、君も知ってるだろう?」

「……………」

ずっと青い瞳を細めたものの、冷優はそのまま口を噤んだ。

沈黙を肯定と受け取ったのか、風谷は再び口を開く。

「それでつい先日、憂鬱の動向を探っていたら少しおかしな動きがあった」

「どんな?」

「一人の女子高生に関する情報を集めていた……まあ、一言で言えば百合音の身辺調査だね」

にこりと冗談のように笑う風谷とは対照的に、冷優の表情が不快そうに歪む。

「まあ、それに関しては適当に攪乱して別の情報に差し換えておいたから、彼らに君たちのことが知られる心配はないよ」

風谷のことだ、本当に「適当に」攪乱したのだろうか。憂鬱の誰かさんがどんな情報を掴まされたのか、想像するのも気の毒である。

「さて、もう分かると思うけど、どうやら椿はあの子を気に入ってしまったみたいだね。わざわざ下調べまでしてから拐っていったわけだ」

実に用意周到でご苦労なことだね、と調子だけは愉しげなもののまま一切の感情が削ぎ落とされた声で風谷は締めくくった。目が笑っていない笑顔と似たようなものである。

「……それでどうして、百合音を預けるなんて話になるの？」

そう。本当なら今すぐにでも助けに行くべきはずだろうに、風谷に動く気配はない。風谷の話から八番目の真祖が敵意を持って百合音を拐ったのではないと分かるものの、人間である彼女が吸血鬼の巣窟に閉じ込められていることには変わりないというのに。

僅かながら怒りを滲ませた視線を向ける有紗にもう一度軽くたしなめる言葉を掛け、風谷はそこで真面目な顔をした。

「これは私の私見だが、今あの子を連れ戻すのは、他でもないあの子自体が納得しないと思うんだよ」

相変わらず、冷優は膝の上に乗せた本を読み進めている。それは、今のところ彼女としては口を挟むべき事柄がないと判断しているからであり、つまるところ現在行われているのは有紗と風谷の一对一の話し合いなのだ。

「前に、私がどうして椿に構うのかと聞いたとき、あの子は椿が「寂しそうに見えたから」と答えた。そしてもし今、椿の元からあの子を奪い返すような真似をすれば、あの子と椿はどうあがいたってそこで決別することになる。……さて問題、あの百合音が「寂しそうに見えた」人との関わりを絶つてまで今、この家に戻ってくることを望むと思うかい？」

「……………」

その問題の答えは、有紗も「No」だと思う。百合音は、助けたいと思った誰かから途中で逃げたりなど、絶対にしない人間なのだから。

しかし、有紗が訴えたいのはそういう事ではないのだ。そもそも風谷が、全体的に愉快犯な彼女が、そんな殊勝な理由で決断するだろうか。

「……………で、本音は？」

有紗がジト目で尋ねると。

「面白そうだったから、つい」

一瞬前までの真剣な顔はどこへやら。俗に言うイイ笑顔で風谷はそう宣った。予想通りすぎる回答に有紗はがっくりと項垂れる。

「冷優う……………」

「私は異存ないわ。好きにしなさい」

曲なりにも百合音の真祖バートナーである冷優に助けを求めるが、あっさりと振り払われた。主人イザの誘拐にもどこ吹く風で読書に没頭している彼女の頭の中には、最初から百合音を助けに行くなどという選択肢は存在しないのだろう。百合音がどれだけ危険な状況に陥っているとしても「だから何？」と冷めた声を返されるのがオチである。根本的に、百合音と冷優の性格的な相性は悪いどころか最悪の一言に尽きるのだから。

味方の居ない状況だが、有紗は挫けそうになるのをぐっと堪えて食い下がる。

「…………敵意がなくても吸血鬼でしょ??百合音が危ないってことには、変わらないよ」

「だから、預ける」んだよ」

腹の底を読ませないいつも通りの笑みを浮かべて、風谷は白衣のポケットから二つ折りの携帯を取り出して軽く振って見せる。

「私は椿を知っている、そして椿も私を知っている」。迂闊に手元に引き寄せたあの子がこの私の娘だと、知っただけであの化け狐は手が出せなくなる。あの男は、狐らしく狡猾だからな」

「……………」

その言葉で、風谷が敷こうとしているロジックはおおよそ理解できた。

あくまでも彼女は、椿を信頼しているわけではないのだ。ただ、八番目の真祖は百合音が風谷の娘だと知らされた状態で下手に手を出すほど馬鹿ではないと、そのしたたかさを信用しているだけだ。

はあ、と溜め息が出る。

結局のところ、最初から有紗にはどうしようもなかったのだ。

じゃあそういうことだから、と上機嫌に言う風谷を目の前に、有紗は心の中で百合音に手を合わせた。

主の居ない部屋で長らく使われていなかった青いスーツケースを広げ、冷優と有紗は、百合音の荷造りをしていた。

あの話し合いの後、風谷からそうするように頼まれたのだ。そして風谷は風谷で別に確認しておきたいことがあると言い自室へ戻って行ってしまった。

衣類やタオルや洗面具など通常のお泊まりセットの他に、エプロンやトランプなど百合音が使いそうな物も詰めておく。彼女は特に愛用品やこだわりの品がないので、必需品だけだと何となくスペースが余るのだ。そこに冷優と有紗の独断で色々と余計な物が詰め込まれていく。

淡々と進められていく作業の折、ふと顔を上げた冷優の瞳に、窓際の花瓶に生けられている白い花が留まった。形の整った柳眉が訝しげに潜められる。

(……無趣味なあの子が、自分から花なんて飾るわけがない)

鈴白百合音は素で人助けが趣味という部類の人間だ。そして暇だと言ってはボランティアに参加したり部活の助っ人をしている。大抵のことはこなせる要領の良さで大抵の人間とは仲良くなれる愛想の良さを、十二分に活用しているわけである。

冷優が作業の手を止めているのに気付いた有紗が、その視線の先を追って。

「あ、あの時のお花だ」

「あの時？」

「このあいだの日曜日だね、外から帰ってきた百合音が持ってたんだよ。綺麗にラッピングされてたからお店で買ってきたやつだと思うけど」

「花を??あの子が？」

「うん。なんか、風谷に頼まれたって言ってたよ。……あれ、でも何で百合音の部屋に飾ってあるんだろうね？」

不思議そうに首を傾げる有紗を一瞥し、冷優は再び白い花を見つめる。

そして不機嫌そうな声で呟いた。

「……何が『見守る』だか」

「え??何か言った？」

「いいえ、何でもな……有紗、それは……」

スーツケースに視線を戻した瞬間に有紗の手によってさりげなく放り込まれた物を見て、冷優は思わず口を挟んだ。

「“これ”??いるかなあ、と違って」

「要らないでしょう」

「でも、八番目の真祖サーヴァントって狐さんなんだよね??だったら使えるかもしれないし……」

「使用可能かどうかではなく、“それ”を使うような状況にはならないと思うけれど」

「百合音だったらなる気がする」

「……………」

迷いのない有紗の切り返しに冷優は沈黙した。

理由は単純。冷優もまた、確かになる気がすると思ってしまうたから、である。

冷優たちに頼んで詰めてもらったスーツケースを東京ワールドツリーホテルへ送り、百合音のスマホに電話を掛けて椿と交渉し、そして今。

ツイッターと悲しげに通話終了音を発する携帯をオフにして、風谷は愉しげに口許を歪めた。

(さて、これでこちらから出来る御膳立ては完了した。あとはあの子の立ち回り次第だ)

吸血鬼に囚われた娘に思いを馳せながらも、彼女の表情には一欠片の憂いもない。

それは、全て自分の掌の上だと思っっているからなどではない。

寧ろ逆だ。風谷は彼女のための「舞台」をセッティングしただけに過ぎないのだから。

これから始まるのは『彼女』の舞台。

全ての観客を騙し、欺き、魅力する。『鈴白百合音』の一人舞台。

(「……さあ百合音、存分に演じて魅せてくれ。この舞台のスポットライトは君だけのものだ」)

10. 曖昧なままで

憂鬱の真祖・椿の朝は、遅い。

吸血鬼だからというわけではなく、単純に彼の睡眠時間が長いだけである。予定がなければ昼近くまで寝ていることも珍しくない。

だが本日は、そんな彼にしては早めの起床だった。

「あ、おはようございます椿さん」

「……うん、おはよう。ほんとに君は僕の思いつかないことをしてくれるよね」

「？」

共用で使っているリビング代わりの部屋に足を踏み入れた椿は、そこに広がる光景に何とも言えない表情をした。

一番に気付いて挨拶をした百合音と、続いて挨拶を掛けてくる家族たちが、トランプを手に仲良くテーブルを囲んでいる。もう何年も前から共に居るかのような違和感のなさだった。

「お早うございます若!?!すぐに朝食のご用意をいたしますので、少々お待ち下さい」

テーブルを囲む四人の内の一であるシヤムロックがさつと手札を置いて立ち上がった。

「いや、そのトランプが終わってからでも別に」

「ご心配には及びません!?!本日は、百合音女史に味噌汁の作り方を伝授いただきましたので!」

「あ、うん、そう……」

全く会話のキャッチボールが成り立っていないが、椿の反応は目に入らないらしく意気揚々と彼はキッチンへ向かって行った。その背を見送った後で椿は、何食わぬ顔でシヤムロックの手札を山札に混ぜてゲームを続行しようとしている少女に目を向ける。

(シヤムが警戒を解いてるあたり、相当だね……)

元から他人の懐に入るのが上手いとは思っていたが、ここまでとは。

「随分仲良くなったんだね。何をやってるの?」

「ダウトです」

「ねエ聞いてよつばきゅん!? さつきからコイツばつか勝ってるんだよオ!!」

ぶんぷんと不満げに叫ぶベルキアの手札はまだまだ枚数があるのに対し、百合音の手札に視線を移せば明らかに少ない。

「5」

「6…」

「なあ〜な! ☆」

「ベルキアさんダウト」

「なんでエ!?!」

何から判断したのか、ベルキアのコールに即ダウトを宣言する百合音。冷静にベルキアの出したカードを裏返して数字を確認したオトギリが、眉根を寄せて呟く。

「百合音が強い…困ります」

どうやらダウト成功のようだ。

ただでさえ少くないベルキアの手札に更に山札が追加される。

「8です」

「9…」

「10! ☆」

「ベルキアさんダウト」

「だからなんでエ!?! ☆☆☆」

あれだけ枚数があるのに嘘のカードを出す必要があるのかと思うが、ひっくり返せば確かにベルキアの出したカードは10ではない。そしてまたも手札が増えて撃沈する彼を尻目に百合音はJジャックを出して上がってしまった。

「…ベルキア、続けますか…?」

「絶対負けるじゃん!?! もうヤメ〜!! ☆☆☆」

確かに既に数枚のオトギリと東のベルキアでは余程のことがない限りベルキアの負けになるだろう。目立ちたがり屋の彼に負けがほぼ確定したゲームを肅々と続けるという選択肢などないのは、言うまでもない。

ベルキアが放り出した手札と山札とを合わせ、オトギリから回収した手札を重ねてケースに片付けて、百合音は徐に立ち上がった。

「では私、シャムロックさんのお手伝いしてきますね」

椿へにこりと笑顔を向けた後で、彼女は勝手知ったるようにシャムロックの後を追って行った。

「そオいえばつばきゆん、今日起きてくるの早かったねエ☆なんか予定あったっけ？」

「…あったけど、もう終わっちゃってたみたい」
「??？」

ベルキアの問いに曖昧な回答を投げつつ、椿はふうつと溜め息を吐いて口許を袖で隠した。もう姿のない彼女が座っていた椅子に視線を落とす。

そもそも椿がいつもより（若干）早めに起きてきたのは、百合音を孤立させないためだった。

一部例外を除いて全く知り合いの居ない環境に連れ込んだ事実を考慮し、彼女が皆と馴染むまではなるべく一人にしないでおこうと思っていたのだ。

しかし次の日の朝にはこれである。あの少女のコミュニケーション能力というものは一体どうなっているのだろうか、小さく呟いた声は当然ながら少女に届くことはなく消えていった。

普段は食事のときしか使われていないリビングの机に、百合音は昨日出されたのだという数学の課題プリントと教科書を広げていた。

椿が朝食をとった後。ちよつとお話しよう、と誘った椿に彼女が「宿題しながらでもいいですか？」と答えたのでこうなった次第である。黄色い小花の柄があらわれたシャーペンでプリントの一番上に名前を書く百合音の隣の椅子に腰掛けて、椿は尋ねる。

「荷物の整理はできた？」

「はい。入ってる物を確認して、服とかを引っ張り出しただけですけ

どね」

「部屋で何か不便なことはない？」

「ありませんよ。アメニティが充実しすぎててもて余しちゃうくらいです」

「君は僕が吸血鬼だってこと、初めから知ってたの？」

「いいえ」

何気ない質問に混ぜ込んだその問いを、彼女は考える間もなくきっぱりと否定した。同時に、内容が内容だからか手を止めて椿の方に顔を向けてくる。

「……情報屋の娘、なのにな？」

「娘だからって何でもかんでも教えてくれるほど仕事を軽んじてる人じゃありませんから」

苦笑しながらそう答えた彼女に嘘を吐いている様子はない。

「……じゃあ、君は吸血鬼についてどこまで知っているの？」

「吸血鬼について、ですか？」

問いを繰り返した後で、彼女は困ったように眉尻を下げて。

「吸血鬼は、吸血鬼ですよね??牙があつて、人の血を吸う……。あ、そういう日は桜哉くんが、死にかけの時に椿さんの血を飲まされると吸血鬼になる」って教えてくれましたよね。正直その発想はなかったのでびつくりしましたけど」

「……………」

躲かわされた、と椿はそう感じた。

椿はもし彼女が今の質問に対して「何も知らない」と答えたならそれは、嘘である可能性が高いと考えていた。その回答は、世間一般に語られている吸血鬼と実際の吸血鬼という存在とに色々と乖離かいりがあることを知った上でしか出てくるはずのないものだからである。

しかし百合音は、真っ先に一般認識の「吸血鬼」に関する口にした。何も知らない人間の回答としては正解で、酷く退屈な答えを。

(これで本当は吸血鬼サーヴァントのことをよく知っているっていうなら、大した役者だね)

いつの間にやら課題を再開して、解き方のコツを掴んだのかさらさらと類題を解いていく百合音に――椿は瞬きと共にすうつと目を細めた。さながら、獲物に狙いを定める狐のように。

シヤムロックに言われるまでもなく、風谷巽から電話があつた時から、椿はしつかりこの少女を警戒していた。

どこまでも中立的な情報屋である風谷巽が、娘と呼ぶ少女。それだけで充分に彼女は特異な存在だ。充分に、注視するに値する。

しかし先程のやり取りもそうだが、中々どうして彼女の“中身”は把握できない。娘らしく、風谷巽の“相手に底を見せない”という厄介な性質をきっちり受け継いでいるらしかった。

策もなく探つても決して尻尾は出ないと分かったところで椿は、探るための質問は一先ずそこで切り上げることにした。代わりの話題を探すために改めて彼女を上から下まで見て、ぽつりと一言。

「前々から思つてはいたけど、君つてそういう私服しか持つてないの？」

「…それ、椿さんには言われたくありませんね」

「あはははははははっ！」

わざわざプリントから顔を上げて目を合わせ、真顔でばつさりとそう言った百合音に椿は腹の底から笑つた。勿論最後には面白くないと付け加えたのだが。

だが実際、椿は彼女の服装に関して制服以外ではTシャツにジーンズという組み合わせしか見たことがない。ラフな感じと言えばそうだが、そのまま気軽にアスレチック競技に参加できそうなくらいのラフさなのである。

「君も女の子なんだから、もっと可愛らしい服も似合うと思うけど」

「似合う似合わない以前に、性に合わないんですよ」

ふいつと目を逸らしてプリントに視線を戻す彼女は、一見どこにでもいる子供だ。可愛らしい服など性に合わないと、拗ねたような仕事をやる辺りが特に。

そう、まだ僅かに幼さを残した顔立ちに黒ゴムでハーフアップにされた髪、そして課題プリントを前にシャーペンを握る姿は、どこにで

もいる女子高生そのものである。昨日のことがあるまでは、椿もそのことには何の疑いも持たなかったほどに。

……今更だが、椿はまだ、どうしてこの少女にここまで執着してしまうのか、その理由を分からずにいる。

ただ、執着というものを純粹な感情と呼べるのかは疑問だが、少なくともそこに打算や計略などの不純物が混ざっていないことは断言できた。風谷巽の娘だと聞かされた今でも、それは変わらない。

変な感じだな、と椿は思う。

疑うことなくただ彼女を傍そばにおいておきたいと思う自分と、風谷巽の娘であることに冷静な警戒心を抱いている自分がいて。二つを天秤に掛けてみても、ゆらゆらと交互に上下し続けていつまでも順位が定まらない、というような感覚だった。

彼女を生かしたいのか、殺したいのか。

それすらも、今の椿には分からない。

しかしもやもやとしたその感情がはつきりと姿を現したとき、きつと椿と彼女の「関係」は大きく変わることになるのだろう。その時までは、今のまま揺れる天秤を眺め続けるのもいいかもしれないと、椿は思った。

(……でも、それなら、逆に)

彼女の瞳には、椿はどんな風に映っているのだろうか。

吸血鬼特有の血のような赤色とは違う、黒檀のような黒い瞳。日本人にはありふれた色のはずだが、椿には彼女のそれはどうしてか、他の人間と異なって見えるのだ。烏の濡れ羽色の髪と合わせて、綺麗な黒だと思えた。

ふと思いついて、椿は右手で百合音の髪を一房掬すくう。己の着物の色と比べてみれば、同じ黒でもやはりどこか違うように映った。

「……どうしたんですか？」

「綺麗な髪だなと思って」

椿が素直に思っていたことを吐き出せば、彼女は眉間にシワを寄せ、て振り返った。

「なに言ってるんですか。椿さんの方がさらっさらじゃないですか。」

それで特に手入れに力入れてないとか言ったら癖っ毛に悩む全国の女子に背中刺されますよ?」

「色の話だよ」

「色?」

眉間のシワは一瞬で消えて、今度はきよとんとした顔に変わる。

「……ただの黒ですよ?」

「綺麗な黒だよ」

言い募るように即答する椿に、よく分からないという顔をする百合音。彼女の表情から、謙虚なわけではなく本当に意味が分からないのだと椿は理解して、こういう所は抜けているのだと一つ知る。

そうかと思えば彼女は直ぐに椿の髪を褒める台詞をつらつらと並べ始め、最終的にまた「女子に背中刺されますよ」と言われた椿はいつものごとく爆笑した。

それから、プリントに集中を戻して終盤の数問に苦戦している百合音を眺め、椿は思案する。

実は八番目の真祖でこれから一暴れするつもりな吸血鬼である椿と、実は情報屋の娘だが見た目はごく平凡な高校生である百合音。あの日の偶然がなければ接点など生まれようがない組み合わせの二人だ。

二人を分かつ線引きなど、挙げようと思えばいくつも挙げられるだろう。その関係が絶たれる要因など、いくらでもあるだろう。二人の立つべき場所が途方もなく離れていると知れる日が来るかもしれない。いつか、二人の間にどんな線が引かれているのかをはつきりさせなくてはならない日が来るかもしれない。

けれど、今は。

今はまだ、分からないままで良いと思った。

その境界線が曖昧だからこそ、椿は彼女と、互いに手の届く場所に立っていられるのだから。

11. 裏腹に巡る

カツ、シユツ、カツ、カツ、カツ、シユツ。
カツ、カツ、シユツ、カツ、シユツ、カツ。

(……………ねむ……………)

朝日が射し込む教室。

教卓の前の列、そして前から二番目の席で。教科書を読む振りをして俯いた状態で桜哉は、教師の持つチョークが文字通りに身を削る音をぼんやりと聞いていた。

一時間目から苦手な現代文の授業で始まるこの曜日は、桜哉にとって最も憂鬱な日だ。

そもそも、灰塵^{ジン}にならないとはいえやはり吸血鬼の身に朝日の光は辛いものがある。窓際でないことは幸いだが、朝日に満たされた教室で意味が分からない上に眠くなる現代文の授業を聞かされるというシチュエーションは、桜哉にはかなりの地獄だった。高校生としての生活は純粹に楽しいものの、楽しみだけで構成されている物事などないのだということを感じ知らされるようである。

チョークの音が止まり、教師が内容説明の方に入ったのを見計らって、桜哉は黒板の文字を機械的にノートに写し始めた。催眠術かと思われるような教師の声も、ひたすら手を動かしていればまだ抵抗できる。一通りを写し終えたところで桜哉はまた、もう何度目か分からない欠伸を噛み殺した。

憂鬱な事といえれば桜哉には、もう一つ懸念事項がある。

一昨日に椿が連れてきた、鈴白百合音という少女のことだ。今日は彼女も登校している。もっとも、朝早くからさっさと出て行ってしまったとシャムロックに聞いただけで、桜哉もまだ彼女の姿を確認できていないのだが。

なにせ隣のクラスである。今日一日の中で関わる機会が無いとは言いい切れない。彼女は桜哉と友達になりたいと言っていたが、あれは学校内でも有効なのだろうか。それすらはつきりしないままに今日を迎えたせいで、彼女がどう振る舞うつもりかも分からない。

校内で声を掛けられたとしたら、どう反応すれば違和感なく切り抜けるだろう。

元来のネガティブな思考回路は桜哉の“いつも通り”が崩れる瞬間ばかりを再生し始め、憂鬱な気分が増していく。押し潰されそうになって吐き出した溜め息は、教師の声に掻き消されて溶けた。

しかしその日、拍子抜けするほどに桜哉の学校生活は“いつも通り”に巡った。

そして結局、桜哉が一度も彼女と顔を合わせることなく放課後がやってきた。

いつも通りに真昼たちと帰路の途中で別れ、後はあまり人目につかない道を選んでホテルまで帰るのみとなる。桜哉は、心中で一息ついて、

「さーくーやーくんっ！」

「!？」

後ろから聞こえてきたその声に思い切り肩を跳ねさせた。

ぱつと振り返れば、黒水晶のような瞳と視線がかち合った。

「一緒に帰りましょう？」

「……………」

にこりと微笑みかけてくる彼女に無言を返して桜哉は、ゆっくりと前を向いて驚きで止まっていた足を動かした。半分無視したようなものだが、彼女は気にした風もなく隣に並んでくる。

当たり前のように桜哉と共にホテルへ帰ろうとする姿に、思わず桜哉は問うた。

「……お前、逃げようとか思わないのかよ」

「思わないわね」

前を向いたまま、彼女は迷わずにそう答えた。

「だって、考えてみればこんな機会ってそうはないでしょう?? あんなに性格も趣味も特技も出身国までばらばらな人たちと一度に知り合える機会なんて！」

ポジティブシンキング過ぎる発言に軽く目眩を覚える桜哉。対して、彼女は本当に楽しそうに笑っている。

「椿さんは、最近ここら辺に来たって言っていたけど……もう少し早く知り合えていたら、もっと早く椿さんの『家族』の人たちとも知り合えたのかしらね」

(最近……?)

百合音の言葉が、桜哉の頭に引つ掛かった。しかし直ぐに合点する。

いつからそうなのかは桜哉も知らないが、憂鬱組が拠点としているのはずつとあのホテルだ。桜哉は勿論、大した能力を持たない下位吸血鬼^{サブクラス}たちは何年も前からあの拠点に滞在している。ただし真祖である椿は『色々』情報を入れたり人脈を築くために、単身もしくはシャムロックなどを引き連れて、度々海外に足を運んでいた。そしてたまに新しい下位吸血鬼^{サブクラス}を迎えてはホテルに連れて帰ってくるのである。

そんな椿自身に限って言えば確かに、あの拠点に腰を落ち着け始めたのは比較的最近のことだ。そういう意味ならば椿が『最近』と言ったのも頷ける。

そうして桜哉は、一人納得した。

考え事で歩みが遅くなっていたのか少し前に行く少女は、昨日の時点で仲良くなつた椿の『家族』について喋り続けている。

そこでまた一つ、桜哉の心に疑問が湧く。

普通、血の繋がっていない者たちを『家族』と纏めて呼ぶことに、違和感がないものなのだろうか、と。

(……ああ、でも、そういうえば、)

彼女もまた、血の繋がらない『家族』を持つ人間だったか、と桜哉は思い出した。彼女が連れて来られた日に電話を掛けてきた『風谷』という人物について、血は繋がってませんけどね、と彼女が呟いていたのを桜哉は確かに聞いた。

ご機嫌に隣を歩く少女を方を向けば、桜哉と視線が合ったことに驚いたのか言葉が止まる。

「……『風谷』ってというのは、親、なのか?」

桜哉の方から問いを投げられたことが予想外だったのか、彼女は珍

しくも動揺したような表情で曖昧な笑みを浮かべた。

「ええ、まあ……そう、保護者ね」

「……具体的には、どんな？」

桜哉自身も、何故こんな質問をしているのかはよく分かっていなかった。しかし口から滑り出てしまったものは仕方がないので、少女の返答を待つ。

うーん、と彼女は悩む素振りを見せた後で。

「……遊び人。快樂主義者。自分が面白ければ何でもいい人間。興味本位と悪戯心で場を引つ掻き回す確信犯。全体的に大人げない大人。誰かが描いた壮大な計画を完遂間際で台無しにすることとかが愉しくて仕方がない愉快犯」

「待って。なんだその紹介文」

滔々とうとうと流れるように語られる人物像を桜哉は途中で制止した。だが少女は数分前までの上機嫌とはうって変わって不満顔になる。

「だって本当にそうなんだもの。しかも私を巻き込むし無茶振りはするし……」

それを聞いて桜哉は思った。思ってしまった。

「……………」

なんか、椿さんみたいだな」と。

その瞬間、ぴたり、と二人は同時に歩みを止めて顔を見合わせた。

そして悟る。目の前にいるのは同士だ、と。

「……私、この前の日曜日に突然お花買ってきてって言われて、しかも買ってきたら気が変わったとかで、何故か私の部屋に飾つといてって言われたわ。買ってこいって言ったのは誰よってはなし」

「パシつといて気が変わるとかしょっちゅうだよな。……オレはこの前、腕が何本もある……千手観音？みたいな自撮り写真作んに付き合わされて……写真撮るのはやってやるから腕役はオトギリでいいだろうって言ったたら、一対だけ女性の腕じゃおかしいでしょって……なんでそんなとここだわるんだよ」

「そうそう、本当にどうでもいいところに変なこだわり持つのよね!？」

付き合わされてる方のことも考えて欲しいわ！」

「分かる。スゲエ分かる」

そこから桜哉と百合音はお互いの苦労談で異常なほどの盛り上がりを見せ、ホテルに帰り着く頃には『脱・振り回され同盟』を組むまてになっていたとか。

そして夢中で語り合う二人は、気付かない。

苦労談と称しながらも、語るその表情は決して暗いものではないということに。

つまりは、それだけ苦労も文句も溜まっているのに一緒に居たいと思う人物だと公言しているのと、大して変わらないということに。

窓の外に夜の帳とぼりが下りた頃。

『小さな図書館』で冷優は一人、終わりになき読書に耽ふけっていた。

ぱたぱたと、足音が部屋に近づくのを耳にして冷優はちらりとドアを見遣る。風谷はまだイギリスから帰っていないので、足音の主は一人しか考えられない。

レバー型のドアノブが静かに下がり、案の定ひよっこりと有紗が顔を出した。いつももならば彼女は寝ているはずの時間だが、と冷優が心の中で疑問符を浮かべていると。

「……ねえ、百合音、大丈夫かなあ」

積まれた本の隣にちよこんと腰掛け、彼女は冷優に聞かせるようにそう呟いた。

青い瞳を紙面に戻してから、真祖たる少女は事務的な口調でそれに答える。

「あの子の精神が過度の恐慌状態に陥ったり負の感情に呑まれたりすれば、私の方にも影響が来るはず。それが無いということは現状問題はないということよ」

これ以上ないほど淡白な返答に、有紗が更に顔を曇らせたのが見ずとも分かった。

流石に配慮が足りないかと思ひ直し、冷優は顔を上げて闇色に程近い紫紺色の瞳と視線を合わせてから付け加える。

「……憂鬱のお兄様は、従える下位吸血鬼サブクラスが多いらしいわ」
「？」

「だから、どうせ今頃、嬉々として人間関係の拡張に励んでいるでしょう。人ではない、なんて理由はあの子には通用しないもの」

冷優のその台詞を聞いて漸く、隣に座る彼女は苦笑いではあるが表情を緩めた。小さく「百合音だもんねえ…」という呟きを漏らしている。

しかし、それだけでは彼女の不安は拭いきれなかったらしい。冷優は少し思案し、彼女の頭の中で予測できている未来を一つ告げることにした。

「……長くても、一週間よ」
「？」

「あの子がどれだけ手の掛かる人間かは、貴女も分かっているでしょう？」

敢えて具体的な指摘をせずあ暈ぼかした言い方をしたが、心配性な彼女は意味を察したようで、軽く頷いた。

「そうだね。でも百合音のことを『手の掛かる』なんて言えるのは冷優くらいだと思うよ」

どこか羨ましそうに有紗は微笑む。それに心外だと呟きながら冷優は、彼女にとっては本当に頭痛がするほど手の掛かる主人のことを頭に浮かべた。

冷優が百合音を『手の掛かる』と表現する事由は、大きく分けて二つある。

まず、食事の問題。はつきり言つて、百合音には三食きちんと食べようという気がない。一日くらい食べなくても死なないから、と平気で宣うような人間だ。人助けで動き回って空腹を感じても、面倒なので食べない。そんな感じなので、放っておくと本当に何も食べないということが多々ある。

もう一つは睡眠の問題。彼女は昔から、他人の気配というものに非

常に敏感な性質^{タチ}である。恐らく椿からホテルの一室を貸してもらっているのだろうが、それでも知らない気配に満ち溢れた環境で彼女が満足に寝付けるとは思えない。

そして何より、これらの点を風谷が考慮していないはずがないのだ。

だからこそ「期日」は、そう遠くない。

「……………まあ、早く帰ってこないとその分、私が肩代わりした食事当番が溜まるだけなのだけど」

「あ、それってやっぱり滞納ってことになってるんだ……………」

頑張れ百合音……………と遠い目をする有紗（料理下手）から本へと意識を戻して、冷優は読書を再開した。

音もなく更けていく夜が明けるまで、もう、大した時間は残されていない。

12. 一面を知る

桜哉は激怒していた。

「あんのアホギツネっ……！」

焦げ茶色の靴を踏み鳴らしながら、彼は怒りの矛先を向けるべき人物を探してホテルの廊下を闊歩する。

先ほど学校から帰ってきた彼は、自室に着いた瞬間に嫌な予感を感じ取った。そして案の定、出掛ける前に仕掛けておいた侵入者対策の罠が発動しているのを目撃した。侵入者は罠からは逃れたようだが、形跡が残っているだけで充分である。このホテルには下位吸血鬼こそ大量に住んでいるが、その中でこんなことをする犯人候補など二人くらいしか居ないのだから。そして内一人は昨日の夜から「仕事」へ行つてまだ帰っていないはずだ。となるともう一人しかいない。

と、完全に目が据わった状態で椿を探す桜哉の前方から、百合音が歩いてきた。

丁度良いので桜哉は、彼とは違い既に制服から私服に着替えている彼女に椿の居場所を尋ねた。今日は桜哉の方に用事があり共に帰ることはしなかったため、彼女の方が先に帰宅していたのだ。

「椿さんならさつきリビングに居たけど……どうかしたの？」

「オレの部屋に入ろうとして失敗した形跡があった」

「あー……」

桜哉の一言で大体の事を察したらしく、百合音は苦笑いで応じた。椿が度々悪戯で桜哉の部屋に侵入しようとすることは、彼女も知っている。ついでに桜哉が椿対策で諸々のトラップを仕掛けていることも。

そのままの成り行きで、二人はリビングへ連れ立った。しかしドアを開けても室内に椿の姿はない。

「あら??さつきまで居たのに……。私が出た後、すぐにどっか行っちゃったのかしら」

百合音は、彼女が見たときには椿が座っていたのだろうソファの辺りまで歩を進め、不思議そうに室内を見回す。一方の桜哉は軽く室内

に視線を巡らせて和装サングラスが居ないことを確かめると、別の場所を探そうとUターンしかけた。

しかけた、ところで桜哉が足を止めたのは、微かに百合音が何かを呟いた気がしたからだ。

振り返って見れば、百合音がソファの裏を凝視したまま固まっている。

何かあるのかと桜哉が尋ねると、「か、」と一文字だけ返ってきた。意味が分からないと眉を潜める。

「か?」

「可愛いつつ!!」

……意味が分かった。

ソファの裏にしゃがみこんで、何かを腕に抱き締めて立ち上がった彼女は、一匹の黒い狐を抱えていた。椿である。恐らく桜哉がリビングに入ってくると分かって、咄嗟に変化し隠れたのだろう。

「なにこの子もふもふでかわいくてもふもふ……!」

「コッ、コンッ……!?!」

彼女の腕の中では、状況を掴めていないらしい椿が狐姿であたふたしているのが分かる。その間に百合音はしっかりと椿を抱え直していた。

そして、むぎゆうつ、と思いつき抱き締められて、椿が苦しそうな声を上げたがお構いなしに彼女はもふもふを堪能している。多分漫画だったら小さなハートが大量に飛んでいるだろうな、と桜哉は思った。

「んー、ああもうほんとにもふもふ……!」

短い付き合いなので当たり前かもしれないが、彼女のここまで緩んだ表情は見たことがない。察するに、偶々狐が大好きだったのではなくもふもふの動物全般が好きなのだろう。

「コンッ、コンッ……!」

どうやら結構な力で抱き締められているらしく苦しげに椿は尻尾をばたばたさせて脱出を試みているが、もふもふに夢中な百合音は気付かない。

「コンツ……コ………キユウ……」

「(あ、落ちた)」

ぱた、と尻尾が垂れて抵抗が止むと、流石に百合音も違和感を感じたらしい。はっと腕の中に視線を落とし、ぐったりしている狐を見て慌てて力を緩める。

「わっ、ごめんなさいっ!?!どうしよう、桜哉くんこの子の飼い主さんとかって分かる?」

幸せそうな表情から一転して困り顔で、それでも椿を撫でる手は止まっていない。今腕に抱えているのが椿本人だなどと、彼女は考えもしていないのだろう。

正直、意図せず百合音に締め落とされたあたりで、桜哉の溜飲りゆういんはそれなりに下がっていた。今回は特に狐の正体を暴露したりせずこのまま見逃してもいいかと思う程度には。

だがこの先、かなりの動物好きであると判明した彼女に椿が狐姿でちよっかいを出し始めないとも限らない。これは早々に化けの皮を剥いでおいた方が良くだろうと判断し、桜哉は椿が自分から正体を明かすよう仕向けることにした。

「椿さん、さっさと人型に戻ってオレの部屋に入ろうとしたことの弁解でもしてくださいよ」

「え?!桜哉くん?」

「シラを切るつもりならその姿のままでもオレは構いませんよ??狐のままの方が吊し上げやす」

「コンツツツ!!!!」

桜哉の脅しに耐えられなかったのか、百合音の腕から無理に飛び出した椿は勢いのままに人間姿に戻ってフローリングに着地した。

高く響いた下駄の音が消える頃、椿は恐る恐るといった様子で振り返って。

「さ、桜哉……君の部屋どうなってるの!?!不死だけど僕、命の危険を感じたよ!!」

「別に勝手に入ろうとしなければ無害ですけど。てかやっぱりアンタか」

「ぎくっ」

桜哉と椿の言い合いの傍ら、百合音は心なしか俯かたわいて、しよんぼりとしながら。

「そっか、椿さんだったんですね……そっか……可愛い狐さんじゃないか、椿さんだったんだ……そっか……」

「やめて百合音その反応は地味に心に刺さる！」

「自業自得じゃないですか」

「桜哉酷い!!」

反抗期だと喚き出す椿に、桜哉の中で収まりかけていたはずの苛立ちが再燃した。

閑話休題。

「……遅いわね、ライラック」

喧騒の数分後、いつの間にかショックから立ち直った百合音が、ふと壁掛けの時計を見上げて呟いた。椿が反応して首を傾げる。

「何か約束でもしてるのかい？」

「学校から帰ってきたときにロビーですれ違ったんですよ。ちよつとコンビニに行くだけって言ったので、とつくに帰ってきていいはずなんですけど……」

日の落ち始めている窓の外を心配そうに見詰める彼女の隣で桜哉は、そう言えばライラックとも以前に偶然の面識があったのだと彼女が話していたのを思い出していた。何でも、道端で立ち往生していたライラックの自転車を直したのだとか。困っている人間とはいえ通りすがりの他人の世話まで焼くあたり、本当にお人好しが過ぎる。

回想を終えて何気なく顔を上げた桜哉は、そこで部屋の中に少女の姿が無いことに気付く。

「……椿さん、アイツは？」

「ライラを迎えに行くって、言いながら出てっちゃったよ……」
「はっ」

桜哉は思わずもう一度窓の外へ視線を向ける。

朝から曇り空だったせいかわ、そこにはいつものこの時間帯より格段に暗い景色が広がっていた。

縛れそうになる足を叱咤しながら、ライラックは脇目も振らずに薄暗い路地を駆けていた。腕に提げたビニール袋が耳障りな音を立てる。

「はっ、はっ、はあっ、はっ……！」

乱れる息を整える暇などない。今も後ろからは、吸血鬼——別の真祖の低位吸血鬼が追って来ているのだから。

椿には敵が多い。

と言うより、家族以外は基本的に全て敵だ。

そしてほぼ無差別に他の真祖の低位吸血鬼を襲ったりしているため、その認識は「向こう側」からも同じである。ライラックが弱い低位吸血鬼であるとか、襲った張本人ではないとかいう事実は関係がない。八番目の低位吸血鬼である、というだけで敵視されるには充分なのである。

戦闘力の低い彼には、戦って追い払うという手段はない。先ほどから何度か隠れてやり過ぎそうと試みたものの、その度に見付かって全力で逃げることの繰り返しだった。

元々少ない体力も限界が近付いてきており、焦りが更に選択肢を狭めていく。

夢中で曲がった路地の先は、行き止まり。

振り返れば、追手の黒い影。

「ひっ……！」

やられる、と咄嗟にライラックが腕で顔を庇い目をつぶった瞬間だった。

ダンッ!!!!?と鈍い音が路地に響いたのは。

次いで男の呻き声と、スニーカーがアスファルトの地面を擦る音がライラックの耳に届く。目を開ければ、路地の右側に男が蹲っていた。

そして彼の目の前には、ハーフアップにされた長い黒髪を夜風に靡

かせている、少女の背中。

華奢なその手に握られているのは、輪郭から淡く白い光を放つ、真つ黒な刀身の大鎌だった。振り抜かれた状態で静止しているその背の部分で追手の吸血鬼を風ぎ払い、路地の壁へ叩き付けたようだ。

「失せなさい。次は首を落とすわよ」

「っ、ー！」

吸血鬼に鎌を突き付け直してそう言い放つ彼女は、普段とは違う、肌がひりつくような雰囲気纏ってそこに立っていた。

しかし庇われている側のライラックは、彼女の雰囲気とは別の理由――百合音の持つ物を凝視して、息が止まりそうなほどの混乱に陥っていた。

（――な、んで……どうしてっ……?!）

受け入れ難い現実を疑問符で塗り潰そうとしても、彼の目に映るものは変わらない。

黒髪の少女の持つそれは、紛れもなく、真祖の主人イブにだけ与えられる――武器リドだった。

衝撃に固まるライラックを置いて事態は動く。百合音の威嚇に気圧されたのか、吸血鬼の男は打たれた右腕を押さえながら逃げていった。

足音が去ったことが確認できると、百合音の手にあった鎌は螢火のように白い光の粒子となって消えた。直後に彼女は踵を返してはライラックに駆け寄る。

「ライラ、大丈夫だった?！」

「……あつ、……」

怪我はないかと確かめる百合音に返事をする余裕もなく、目を見開いて青ざめた顔色のまま、ライラックは口を開く。

「百合、音……きみは……きみはっ……」

呼吸の仕方さえ忘れたような状態で、それでも問う。

「きみはっ……主人イヴ、なの……?」

「……………」

ライラックの口から発せられたその言葉に、百合音はぴたりと動きを止めた。

少し驚いたような表情をして、一步、ライラックから離れる。

「……………あー……………と、その……………」

彼女にしては珍しく歯切れの悪い言葉が並べられるのを、ライラックは身を強張らせながら聞いていた。

「ほら、ただの暴漢なら素手でも大丈夫だけど、吸血鬼相手じゃ、やっぱりそれなりの武器を出さないと……………でしょ？」

誰に対する釈明なのか、ばつが悪そうな顔をしてそう言った後、彼女は。

「……………お願いっ!?!このこと、椿さんたちには黙っててくれない?」

「え、……………ええっ!?!」

ぱんっ、と両手を合わせて頼み込まれ、ライラックは困惑した。

「私が椿さんと関わりだしたのは本当に偶然だし、主人の能力も使うつもりなかったし……………でも椿さんには吸血鬼のことなんて知らないっていうので通しちやつてるから、今更バレちゃうのもまたややこしくなるしっ……………」

はぐらかすか否定されるか、無理に隠蔽しようと試みるか、そのどれかだと思っていた。

正面から隠し事を頼まれるなど、完全にライラックの予想の範囲外だった。

(ど、どうしようっ……………!?!)

椿が他の真祖を嫌っていること、なおかつ潰そうと目論んでいることは、彼の下位吸血鬼なら誰でも知っている事実だ。だからいつか、百合音と契約している真祖とも戦いになるだろう。そうなれば目の前の彼女は敵だ。

(でも……………でもっ……………!)

それでも、さっき彼女は、主人であることを露呈させてでもライラックを助けてくれた。

見ず知らずの通りすがりだったときも、困っていたライラックに声を掛けてくれた。

椿を裏切ることなど考えられないが、百合音が向けてくれた善意を切り捨てることも、ライラックには出来ない。

どうにかして領いてあげたいと、彼は必死に思考を回す。

そして彼は、一つの言い訳を思い付いた。彼自身を納得させるための、言い訳を。

(……………椿さんがやつつきたいのは、他の真祖^{サーヴァント}であって、主人は本命じゃない、はず…………)

そう。主人^{イザ}になら誰だつてなる可能性がある。椿も、不特定な主人^{イザ}にまで真祖と同じくらい^{サーヴァント}の憎しみを向けている訳ではないはずだ。あくまでも目的は真祖^{イザ}。主人は二の次の、はずだ。

「……………分かつ、た…………」

苦し紛れに心の中で言い訳を重ねて、漸くライラックはそう頷くことが出来た。

「ありがとうライラッ！」

ぱつと表情を明るくした彼女は、ライラックの手を握ってお礼を言ってくる。

そして彼女は笑顔のまま、

「あ、でも、もし黙っているのが辛くなったり椿さんに勘付かれたりしたら、無理せずバラしてくれて構わないから」

「えっ…………？」

あっけらかんとそう言い放った。

「で、でもっ、それじゃ、きみは…………！」

「その時はその時で、何とかするから」

あくまで真剣に冷静に、過度の自信や傲り^{おご}を含まず百合音は言い切る。そして直ぐに、まるでライラックを安心させるように、ふわりと口許を緩めて綺麗に微笑んだ。

「大丈夫よ、ライラ。貴方は何も心配しなくていいから、ねっ？」

穏やかなその笑顔に、つられるようにライラックも少しだけ表情を柔らかくした。

……………そして、その時にはもう、ライラックの頭の中からは、吸血鬼に鎌を向けていた時の百合音のことは、抜け落ちていたのである。

幕間2 『埋もれ木の花は独りでは咲けない』

自分にとって必要な誰かが常に傍にいてくれるとしたら、それは幸福なことだろう。

……その「誰か」が幸福であるかどうかを、気にしなければの話だが。

『 埋もれ木の花は独りでは咲けない 』

真夜中のことだった。

椿からの指示をこなしてホテルへ戻ってきていたオトギリは、自室へ戻る途中、ふらりとした足取りで廊下を歩いている少女を見付けた。

(……………?)

彼女は、数日前に椿の手で連れて来られた鈴白百合音という名前の“人間”である。

一方の彼女も、ぺたぺたと廊下に響くオトギリの足音に気付いたのか、くるりと振り返った。

「あ……………こんばんは、オトギリさん」

ふわりと笑顔を見せる百合音に、オトギリはほんの僅かに眉を潜めた。表情こそ昼間の明るい笑顔と同じだが、顔色だけが酷く悪い。

「……………何か、ありましたか??百合音……………」

「…………………………」

いつもの彼女なら、「何もありませんよ?」とでも返しそうなのに、返ってきたのは沈黙だった。

そして、器用に編まれていた糸が綻ぶように、その表情が分かりやすくぎこちない笑みへと変わる。

「……………ちよつと、怖い夢を見ちゃって。眠れないので、お水でももらいに行こうかなと思ってたんです」

直ぐ部屋に戻りますから、大丈夫ですよ。

おやすみなさい、オトギリさん。

そう言っって背を向けようとする彼女の手を、オトギリは咄嗟に掴ん

だ。

「オトギリさん……？」

瞳を瞬かせる百合音に、暫し間をおいてからオトギリは真っ直ぐに視線を合わせて口を開いた。

「お茶に、しましょう。……私の部屋で」

何となく、今の彼女を一人にするのは憚はばかられたのだ。人間である彼女は見た目通りの年月しか生きていない訳で、更には思春期で不安定な子供である。何より、普段と様子の違う彼女を放っておくことは出来なかった。

手を引くオトギリに、無言で従う百合音。

いつもなら、きつと間が出来ないよう上手に会話を繋げようとしてくる彼女がこうも口を開かないのは、やはり異常だった。ベルキアが桜哉並みに冷めているとか、シヤムロックが一度も若という単語を口にしないのと同じレベルでおかしい。

部屋に着き、丁度二人が向かい合える小さなテーブルセットの片方に彼女を座らせて、オトギリは色がお気に入りの電気ケトル片手に紅茶を選ぶ。もう夜中なので、茶葉はストレートで飲むのが美味しいものをチョイスした。

丸いテーブルに紅茶を差し出せば、今度は自然な笑顔で百合音が微笑んだ。

「ありがとうございます。いただきます」

ゆっくりと紅茶に口をつける彼女を赤い瞳で眺めながら、オトギリは普段の少女を脳裏に浮かべて、改めてその落差を痛感した。元気がない、と表現すればそれまでだが、どこか、弱々しいという印象すら感じるのだ。

椿が彼女を連れてきたのはたったの数日前だが、彼女は既に、誰にでも優しく笑顔で接するその性格で「皆」と仲良くなっている。それこそずっと前からそこに居たかのように。

未だにどうして椿がこの少女を連れて来たのかは分かっていないが、一つ言えるとすれば、彼女には周りの人を惹き付ける魅力が備わっているということ。経緯は不明だが、椿が彼女と関わり始めた

切っ掛けもそれではないかとオトギリは思っている。

微かな金属音を立てて、ティーカップがソーサーに戻された。百合音は俯いて、三分の一ほど残った紅茶の水面を見つめながら、ぼつりと。

「……別に、悪夢っていうようなものじゃないんです」

独白のように溢れた眩きを、オトギリは静かに見守る。

「怪物に追い回されるわけでも、自分や誰かが死ぬようなものでもなくて……雰囲気と言うなら……知らない場所で迷子になってる夢、とかと同じような感じで……別に目に見えて怖いわけではないけど、少し、不安になるような、そんな夢を見て……」

その台詞を聞いて。

不安、という単語が少女の口から発せられたことに、オトギリは内心で強い衝撃を受けた。

(……困ります……。どうして……。今更、当たり前前にことに気付くなんて……)

しかし分かっていたはずだ。どれだけ周囲と打ち解けているように見えても、彼女が本意なく拐われてきてこのホテルに半ば軟禁されているということとは、変わらない。椿と風谷という人物との間でやり取りが成立したのだと言えど、そこに彼女の意思は含まれていない。そもそも、全く知らない環境に立たされて不安なく過ごせと言う方が無茶だ。無意識に溜め込まれたそれが夢となって現れても不思議ではない。

オトギリは、彼女に何か声を掛けようとして、けれどそのまま口を噤んだ。大きくもないテーブル一つを挟んでいるだけなのに、目の前の少女との間に明確な隔たりが見えてしまったからだ。

……この少女は、“家族”ではない。

初日に椿がベルキアに言った“預かりもの”という表現が一番適切なのだろう。何よりもまず彼女は人間で、本来ならオトギリたち吸血鬼とは相容れない存在だ。

吸血鬼は人間の血でなければ本能的な喉の乾きは癒せない。

人間は吸血鬼なんて化け物に血を吸われることは望まない。

当たり前のことだ。オトギリも人間だった頃ならば、吸血鬼に飲ませる血があるなら患者の輸血にでも使いたいと思っただろうと、容易に想像できるのだから。

「……そういえば、ちよつと気になっていたんですけど、椿さんってここに連れてくるまで私のこと、皆さんに全く話してなかったんですか？」

口を開くべきタイミングで黙り込んでしまったオトギリを氣遣ったのか、幾分顔色のましになった百合音が話題を逸らした。

「……はい。散歩に行かれる回数が増えた、くらいでした。……いつも気まぐれで、困ります……」

椿がふらふらと散歩へ出ることは珍しくないのだが、思い返せばこひつぎ一月くらいはその回数と時間が増えていた。かといって、椿がオトギリたちに向けて彼女のことらしき話題を持ち出したことは、恐らくはない。あつたとしたら、(特にベルキアあたりが騒いで)もっと広まっているはずである。

「そうですか……。会う人会う人に初日のベルキアさんみたいな反応されるから、何でだろうって思ってたんですけど。まあ、話にも上つてなかった人をいきなり紹介されたら驚きますよね」

「……………」

どちらかと言うと、人間を好まないはずの椿が家族候補でも何でもない人間を連れてきた、ということに驚いているのだが、オトギリは敢えてノーコメントを貫くことにした。これ以上、彼女との壁を厚くしたくない。

「でも椿さんって、最初はわりと、一人が好きタイプなのかなと思っ
てましたけど……こんなに沢山の人に、家族に、慕われてる人なん
ですね」

沁々しみしみとした声色でそう宣った百合音に、オトギリは言葉を出さずこくりと頷いた。彼女がそう感じてくれていることは純粹に嬉しかったが、そのせいでまた、少しだけ少女との境界が深くなったようにも感じた。自分と少女では生きてきた境遇が全く違うのだろうと想像できてしまったから。

憂鬱の^{サブクラス}下位吸血鬼は、生前に悩み、傷付き、苦しみ、そして絶望していた者たちだ。

椿はそんな、咲くことなく埋もれてしまった花たちを見付けて、家族として迎え入れてくれた。紅い紅い彼の花の隣で咲くことを許してくれた。どんな色もどんな香りもどんな姿も、等しく愛でてくれた。

だから、オトギリたちにとって、間違いなく椿は必要な「誰か」だ。彼の家族として、彼の傍にいられることは、幸福なことなのだ。

そして椿は、^{サブクラス}下位吸血鬼のことをとても大事にしてくれている。元々鋭いが、こと「家族」に関することには本当によく気が付くのだ、彼は。気が付いて、言葉や行動を起こすことを惜しまない。オトギリたちが「必要だ」と言えば、椿はずっと傍にいてくれる。今までも、そうだったのだから。

けれど、オトギリは考えたことがある。

逆に椿にとって、必要な「誰か」とは、誰なのだろうか。

その「誰か」は、まずオトギリたちではない。

椿は「家族」を大切にしているけれど、時に必要だと言葉を掛けてくれることもあるけれど、それでも違うのだ。オトギリたちは椿との繋がりが切れるなど考えられないが、椿はオトギリたちと繋がっていなくともきつと立っていられる。オトギリたちの思いはどう足掻いても一方的なものであって、椿はそれを受け入れてくれているに過ぎない。

……では、彼女はどうかだろうか。

目の前に座る少女は、他でもない椿が連れてきたのだ。何度も偶然の時間を重ねて、最終的に家族と住まうこのホテルにまで拐^{さら}つてきた。それは決して意味の無いことではないはずだ。

一つ懸念があるとすれば、今の二人の曖昧な関係性そのものだろうか。

彼女と居るときの椿は、酷く不安定だ。

少なくともオトギリはそう感じている。穏やかに笑い合っている、次の瞬間には殺してしまいたいような、そんな危うさを常に秘めている

る。

きっと椿自身にも、彼女の存在に関してはおもて余しているところがあるのだろう。彼女は、鈴白百合音は、どこにでもいる人間とは違うから。

少女は。

紛れもなくそこに引かれているはずの境界線を、恐れることなく踏み越えることの出来る人間だ。

彼女にとっては、椿やオトギリが人間ではないとか吸血鬼であるとかいうことは、大した問題ではない。椿は椿、オトギリはオトギリだと、そう言って受け入れるだけだ。彼女が焦点を当てるのはいつも、目の前にいる本人に対してだけなのだから。

誰にもなくそのことを証明したくなって、オトギリは少女の黒い瞳と視線を合わせた。

「……百合音、手を、貸してください」

「？」

疑いもなく素直に差し出された少女の右手。

僅かに息を吸って、吐き出して、オトギリはその手を両手で包み込んだ。彼女との間に見えていた透明な隔たりは、たったそれだけで容易に霧散していった。まるでそんなものは最初からなかったかのよう。

伝わる温もりに、オトギリは祈るように目を閉じる。

「……もしこの少女が、椿が己に必要な『誰か』だと思って連れてきた人間なのだとしたら。

「……誰よりも底の見えない暗闇に埋もれていこうとする椿を、見付けてくれたのだとしたら。

(それなら………どうか、)

どうか、この手が彼の救いとなりますように。

己の手より少しだけ幼い手に、オトギリは願う。願わずにはいられない。

……たとえば、その願いの先に少女の幸福が含まれていなかったとしても。

13. 届かないなら（前編）

昨日から厚く空を覆っていた雲が、とうとう雨を降らせ始めた今日の頃。

リビングで暇をもて余していた椿は、休日にも関わらず朝から部屋に籠っていた百合音の登場と開口一番に言われた次の台詞に素で戸惑った。

「ブラッシングしましょう、椿さん！」

「……………えっ」

ふわっふわにしますから!!?と目を輝かせて意気込みを語る百合音の手には、薄茶色のブラシが握られている。随分と言葉が足りていないが、要は狐姿の椿をブラッシングしたいと言っているのだろう。そういえば猫を飼っているような発言をしていたことがあったなと思い出しつつ、椿は一つの疑問を口にする。

「まずそのブラシはどこから持ってきたの？」

「スーツケースに入っていました」

「何で?!」

「……………さあ?」

小首を傾げる彼女の手にあるブラシは、果たして何の目的で荷物に加えられたのか。謎過ぎて椿は若干の寒気を覚えた。

そして、膝に乗っててくれるだけで大丈夫ですから、と流されてぐいぐいと引つ張られるままに百合音の部屋まで来たところでやっと椿ははたと気付く。

「ねえ君って女の子だよねだから流石に僕が部屋に入るのは色々と駄目な気がするんだけど、ってちよつと?!」

「聞いてません聞こえません。そしてそこを気にするなら早く狐になつてください」

ばたん、と無情にもドアが閉まる。

勿論既に椿と百合音が入室した状態で、だ。

「あのねえ君……………もうちよつと危機感を持ちなよ」

前々から思ってはいたが、彼女は他人との距離感において無防備過

ぎるところがある。年頃の少女だという自覚がないのだろうかと思うほどに。大事な娘と豪語するならそこら辺もしつかりと教育しておくべきだろう、と椿は心の中で保護者風谷へと文句をぶつけた。

「大丈夫です。人を見る目には自信があるので」
明るい調子でそう返されても全く説得力がない。

駄目だこの子早く何とかしないと、と思っている椿に構わず彼女はてきぱきと準備を進めていく。掛け布団を脇へ押しやったベッドの上に腰掛け、膝にタオルを敷いてブラシを構える。

さあどうぞ!?と笑顔で椿が狐に変身するのを待ち構える百合音。

もうここまでセッティングされては仕方がないと、椿は溜め息と共に狐姿になり彼女の膝に飛び乗った。

「ふふふ……気位の高いうちの猫に鍛えられたブラッシング技術、とくと体感してください!」

ころりと寝転んだ椿の頭上から、自信に満ち溢れた台詞が降ってくる。普段の彼女はここまでテンションの高い性格ではなかったような気がするが、これは恐らく気にした方が負けというものなのだろう。

背中をブラシで撫でられる、その慣れない感覚から気を逸らすように、椿は俯せのまま適当な話題を振る。

「君の飼ってる猫ってどんな猫なの??色は?」

「ぱっと見は白猫ですね。よく見ると薄いクリーム色なんですけど」

ふうん、と椿は相槌を打って、それから彼女のお人好し加減を憂慮して釘を刺す。

「白ならいいけど、黒猫なんか見掛けても拾っちゃ駄目だからね?」

「どうしてですか?」

怠惰の兄かもしれないから、などと言う訳にもいかず、椿は黒猫は不吉だからと答えて誤魔化した。拾っちゃいましたとか言いながら怠惰の黒猫を腕に抱えている彼女が簡単に想像できてしまうあたり、本当に洒落にならない。

「でも、黒猫も可愛いですよ?」

「駄目なものは駄目」

少し不満げに抵抗の意を見せる百合音にぴしやりと言い放ち、椿はそれこそ不吉な未来を回避しようとは度々も言い含める。

やがて根負けしたのか、分かりましたという言葉が百合音の口から出たところで漸く椿は一安心した。

安心と、毛並みを撫でる優しい手付きに絆ほたされたのか……そこら辺で、椿の意識は途切れた。

ばさばさばさつ、と積まれた本か何かが崩れ落ちる音が室内に響いた。

そしてその物音に、黒い毛並みに覆われた狐の耳がぴくりと動く。

「……………あれ?」

覚醒してまず、自分が狐姿のままであることを驚く椿。

(あ、そうだ。百合音にブラッシングされてる途中で寝ちゃったんだ……)

続いて自分の居る場所がベッドの上で、小さなタオルが身体に掛けられていたことを知る。

狐姿でいること自体少ない上に、その状態で眠りこけてしまうなど予想外もいところだった。絡み付くタオルからもぞもぞと脱出し、椿はベッドから跳んでくるりと人の姿へ戻る。ベッドサイドに備え付けのデジタル時計を見やれば、時刻はもう夕方だった。

「あ、起こしちゃいました?」

声のする方を振り向けば、テーブルの下に落ちてしまった教科書を拾っている百合音がいた。学校の宿題でもしていたのだろうか、その手には小花柄のシャーペンが握られている。

「終わったときに起こしてくれば良かったのに」

「ぐっすり寝てたので、つい」

可愛かったです、と百合音はいつにも増して緩んだ笑顔を見せた。彼女はそのままぱたんぱたと教科書とノートを互い違いに挟んで閉じると、すっと表情を整えて椿の側へ。

「ちよつとお話しましょう??椿さん」

そう言つてベッドに座る彼女に、隣に腰を下ろして椿は顔を向けた。

何となく胸がざわつくような嫌な予感を感じていたが、黙つて百合音の切り出しを待つ。

そして。

「椿さんつて、人間が嫌いなんですか?」

その、オブラートの欠片もない質問に、椿は時間が止まったような錯覚を受けた。

実際に止まっていたのは椿の思考だけであり、視線の先の少女は真つ直ぐに椿を見つめ返したまま回答を待っている。

「……どうして、そんなことを聞くの?」

その部分に触れて欲しくなくて、椿はわざと質問に質問で返した。いつもなら、百合音は少しでも相手がその話題に拒絶を示せば決して深入りすることはしない。居たたまれない沈黙すら作らず器用に別の話へ持つていくだけの話術がある。その距離感の心地好さが、ひいては彼女と接することの楽しさに繋がっているのだから。

しかし隣に座る彼女は、何かを思案するように一瞬だけ視線をずらして、それからまた、真摯しんしな瞳で問い掛ける。

「じゃあ、私のことは、嫌いですか?」

それは、先程の質問と何も変わらなかつた。

寧ろ、より悪質だとすら思った。

——人間わたしのことは、嫌いですか?

どう転がっても、彼女はこの話題を続けるつもりなのだと思はれる。そしてその瞬間から、彼自身と少女との間に一本の線が引かれていくのが分かつた。

木の棒で砂の地面を抉るように。

ザリザリザリザリと耳障りな音を立てて。

曖昧だった境界線が、明確に、引かれていく。

くつきりと脳裏に刻まれていくそのイメージに目眩を覚えながら、椿は百合音へ、答えを返す。

「……嫌いじゃ、ないよ」

常のように回ってくれない思考回路でも、その答えだけは明白だった。嫌いなら、大事な家族の居るこの場所に連れてくる訳がない。

絞り出すような声で答えた椿を、彼女はどう思ったのだろうか。

心臓の鼓動が、やけに頭に響く。どくり、どくりと血を送り出す音が耳に反響する。

彼女との線引きがはつきりするにつれて、感情の制御が利かなくなっているのが椿には自覚できていた。本来の彼が“人間”へ向ける、少女には隠していた筈のどろどろとした内側が、意思に反して流れ出ようとしている。

(違う、この子は、他の“人間”とは、違う……！)

それを抑え込もうと始めた自問自答の解は、残酷なまでに椿自身に對して容赦がなかった。

こんなにもはつきりと、境界線が引かれているのに？

返ってきた“何か”からの、ただ一言で、椿の思考は真っ白になった。

遠く遠く、手を伸ばせない場所まで、直ぐ隣に居るはずの少女の存在が離れていく。

……
がしやん、とどこかで。

天秤の壊れる音がした。

ゆっくり、瞬きを一つ。それだけで、椿の赤い瞳に映るものは変わっていた。

“何か”との自問自答は続く。

目の前に居るのは、誰だ？

スズシロユリネという名前の少女。

誰とでも仲良くなれる明るい子で、いつでも笑顔を絶やさな
い……孤独も闇も血も悪意も敵意も知らない、恵まれた……“人間”。

椿の様子に気付かないのか、黒髪の少女は、先程椿の口にした答えを引き継いで、会話を続けていく。

「なら大丈夫ですよ、椿さん」

本人が安心したというよりは、椿を安心させようとするような笑顔で、少女は笑う。

「……何か？」

「何かを嫌うとか憎むとかかって、本人はあまり気付かないけど凄くエネルギーがいることなんですよ。まして“人間”全体を嫌うなんて大きすぎる負担になります」

「……………」

「でも、椿さんは“人間”の一人である私を嫌いじゃなくなつたんですよね??だったらもう、“人間”なんて大きな一括りのものを嫌う必要はありません。好きにはなれなくても、嫌わなくて済むなら椿さんの心の負担は軽くなるはずですよ」

だから、大丈夫なんですよ。

そう言つて微笑む彼女は、椿の目には見惚れるほど純粹で綺麗で無垢で真っ白に見えて。

身の内側に黒を宿した椿には、触れることの出来ない存在に見えて。

(……ああ、届かない)

そう思つた瞬間、どろりとした黒色が溢れた。

黒い“何か”は狐と成つて、椿に囁く。

届かないなら。

届く場所まで、墮としてしまえばいい。

そうして、椿の口元が。

綺麗な綺麗な三日月を、描いた。

(ひだり……は、まず……い……)

人体構造上、左側には主に動脈が走っている。加えて首の太い血管に牙を立てられれば、どれ程の出血が見込まれるかは想像したくもない。

そんな事態の渦中にある百合音は、急激な出血によって一気に遠退きそうになる意識と戦っていた。酸素を運ぶ機能が低下しているせいか、激しい運動をした後のように息が上がる。

それでもここで眠ってはいけないと必死に意識の糸を繋ぎ止める彼女の視界に、白い手が差し出された。いつの間にか身を起こして百合音を見下ろしている椿の人差し指の先に傷が付けられ、赤い雫が浮かんでいる。

影が掛かって見えない表情とは対照的に、虚ろな赤い瞳だけが狂気を宿して光って見えた。

「ねえ百合音、僕の血を飲んで。吸血鬼になって。僕と同じところまで、堕ちてきてよ」

その台詞を聞いて。

ああ、私は今、死にかけているのか、と。

漸く百合音は自らの状態を理解することが出来た。

死に掛けている人間に真祖サヴァンブの血を飲ませると下位吸血鬼サブクラスになる。椿が言いたいののはつまりはそういうことなのだろう。他の真祖の主人である人間が下位吸血鬼サブクラスになることは可能なのかとか、そんな事を考えられるほど今の彼女の思考回路は平常ではない。

浅い呼吸を繰り返しながら、それでも百合音は右手で椿の差し出している手を掴み……ぐつと横へ逸らした。

「わたしは、吸血鬼には、なれません」

失血の影響でぐらぐらと揺れるような脳内でも、それだけははつきりしていた。意識を落としてしまわないように歯を食い縛りながらも、百合音は椿から視線を外さない。

「……………死ぬよ?このままだと」

光のない赤い瞳で、椿が静かに言葉を落とす。

その無慈悲な宣告を耳にした瞬間、混線していた百合音の思考が一

気に風いだ。

気付けば。

はっ、と。か細い吐息に混ぜるように、彼女は笑っていた。

考えるよりも先に言葉が、彼女の口をついて出る。

「このくらいじゃ死にませんよ」

今も首筋から血を流したままで、その口角が不自然に上がる。椿の狂気に引きずられるように顔を出したのはソレは、少女の無意識の中に潜む翳り^{かげ}だった。

「これで、死ぬなら、もう、とつくにー」

そのまま溢れそうになった言葉を、寸前で我に返って百合音は引き戻した。椿の赤と目が合つて、今しがたの自分の行動に困惑する。

(……駄目、何やってるのよ、私。今はそんなことどうでもいいのに) 気を取り直して見上げれば、突然笑ったり黙ったりしたりした百合音にペースを乱されたのか、椿が若干感った表情をしていた。

そんな椿に百合音は、色々と言いたいことがあったのだが、酸素の回っていない現状の彼女の頭ではその言いたいことすら満足に纏めることが出来ない。

加えて残念なことに鈴白百合音は、こんな状況でも聖母のように慈愛に満ちた微笑みと優しい言葉で諭すタイプの女の子^{ヒロイン}ではない。

だから彼女はとりあえず、使えない頭を鈍器にすることにした。

そんなわけで。

「いっ!!」

ごつつ、と。

でこどでこがぶつかる鈍い音が響いた。

「~~~~つたあ……!!」

「……………」

まさか彼女がそんな行動に出るとは思わなかったのか、もろに鈍い一撃を喰らった椿がおでこを押さえて呻く。

一方で百合音は、自らの放った頭突きのせいで更に意識混濁になっていた。因みに、思考回路が行き詰まった時に後先考えず実力行使に走るのは日頃から家族にも注意される彼女の悪い癖だったりする。

一度思考が吹き飛んで正気に戻ったのか、痛みで薄ら涙の浮かんだ
椿の瞳から曇りが消えているのが見えて、百合音は安堵した。

安堵と、繋ぎ止めていた意識の限界がきたのか……そこら辺で、百
合音の意識は途切れた。

「……………」

ふと意識が浮上して、百合音は瞼を開けた。
今までに経験がないほど身体が重い。

(……………ここ)、今の、私の部屋、よね……)

彼女の瞳に映ったのは、ここ数日で見慣れた天井だった。しかし左
に視線を動かせば、寝かされているベッドの脇には点滴のスタンドが
設置されている。造血剤と黒いマジックで書かれた袋から伸びる管
は、百合音の左腕へと繋がれているようだった。

それから数秒、ぼうつと天井を見つめていた彼女の記憶に、意識を
失う間際の出来事が徐々に蘇ってきた。あれから椿はどうしたのだ
ろうか。意識のない人間でも下位吸血鬼サブクラスにすることは出来るはずだ。
彼女が意識を失った後に血を飲まされた可能性もある。試しに百合
音はぐると舌を口内で一周させてみるが、牙らしきものが生えてい
る様子はない。とはいえ、確証がないのでは落ち着くことも出来な
かった。直ぐにでも、椿に確認するか鏡でも覗き込むしなければな
らない。

鉛のようなという表現を体感しながら、百合音は緩慢な動作でゆっ
くりと上半身を起こした。

すると視界に入ったのは、ドラマなどでありそうなベタな光景だっ
た。

(……………なんか右側が暖かいと思ったら)

ベッドの右サイド、百合音の腰辺りの位置で、白い羽織を羽織った
黒髪の青年、つまりは椿が、椅子に腰掛けた状態から掛け布団の上に
突っ伏している。

これは起こせばいいのか、それとも叩き起こせばいいのか、それともこちらもベタにフライパンとお玉で起こせばいいのか。

未だにぼやけた思考でぐるぐると百合音が考えていると、控え目なノックが聞こえてきた。

反射的に彼女はドアの方へ意識を向けたが、返事をしてもしも良いのか迷う。

『……返事がないのは、困ります』

暫くの沈黙の後で聞こえたのは、紛れもなくオトギリの声だった。この部屋の鍵自体は持つていたらしく、ガチャリとドアが開かれる。

部屋に入ってきたオトギリは起き上がっていた百合音の姿を見て微かに目を見開くと、直ぐに駆け寄り体調や気分を尋ねてきた。

「悪くはないです。ちよつと体が重いですが、ど……」

その時、何とはなしに視線をさ迷わせた百合音の目に、ベッドサイドの時計が映った。そこに表示されている情報に絶句して言葉尻が途切れる。

時刻は夜の9時。そこはいいのだが、問題は簡易表示されている日付だった。

「……………私、丸一日寝ていたんですか」

椿にブラッシングを持ち掛けたのが昨日どようびで良かったと百合音は心底思った。これが平日で学校に行けていなかったら、同級生たちに後でその理由を誤魔化すのに苦心しただろう。

内心で冷や汗をかいていると、オトギリの手が百合音の首に巻かれた包帯に触れた。椿に吸血された際の傷を処置したものだろう。

ほどけていないかを確認する仕草に、百合音はオトギリが来る前まで考えていたことを思い出し、ぱつと顔を上げた。

「オトギリさん、私……」

わざと途中で言い淀んで見上げれば、オトギリは正しく百合音の聞きたいことを察してくれた。いつかのように手を取って、大きな赤い瞳が百合音を映す。

「百合音は、変わりません。変わらず、人間です」

視界の端で、白い羽織が揺れたのが見えた。

言葉にはしなかったものの、百合音は確証が得られたことにほっとした。椿は踏み止まってくれていたようだ。

……よくよく考えてみれば、もし吸血鬼になっていたとしたら点滴など必要ないはずである。やはりまだ思考回路が本調子ではないな、と百合音はゆるく首を振る。

それから、オトギリは脈拍や点滴の確認をしたりした後で、突然ポケットから取り出した小さなメモを百合音へ差し出した。

『また来ます。今は椿さんを、お願いします』

簡素な内容だったが、百合音はオトギリの言いたいことを察した。確かに今は、先に椿をどうにかしなければならぬだろうと百合音も思う。

ばたんとドアが閉まった後で、彼女は相変わらず突っ伏したままの椿に顔を向けた。

「椿さん？」

一度目の呼び掛け、返事なし。

「つーばーきーさーん？」

二度目の呼び掛け、返事なし。

「……というか、私が起きた時から起きてたりしません？」

ぴくっと白い羽織が揺れた。

「オトギリさんが来てタイミングを逃したのは分かりますけど、そろそろ諦めて起きてください」

「……………」

恐る恐るという風にながった顔を覗き込めば、秀麗な柳眉が情けなく垂れ下がっている。

そこでふと頭突きの際を思い出して、百合音は椿の額に片手を伸ばした。

勿論、頭突きの痣どころか指の切り傷の方も既に跡形もないだろうと分かっている。それでも彼女が手を伸ばすのは、吸血鬼の回復能力の如何いかんなど知らない一般人ならそうするのが自然だからだ。

さらさらとした前髪を指先で分けければ、傷の一つもない肌が見える。

「おでこ、治ってますね」

吸血鬼の回復能力から分かつてはいたものの、痛々しい光景が広がっていなくて百合音は安心したようにそう呟いていた。

怪我の心配をされた、というのが伝わったのか、椿が僅かに視線を上げて百合音を見詰めた。整った顔には不思議そうな、不安そうな、複雑な表情が浮かんでいる。

「……怒ってないの？」

「無理矢理吸血したあげく吸血鬼になるよう脅迫したことについてですか？」

さりりとした調子で放たれた百合音の一言に椿は俯いて撃沈した。彼女としては昨日起こった出来事を一言に纏めただけのつもりだったのだが、どうやら椿の期待を一刀両断してしまったようだ。

「それはまあ、怒ってますよ、それなりには」

「……………ごめん」

「ダッツのバナラとか奢ってくれないと許しません」

「……ん??えっ、えっ?」

しおらしくった椿が困惑しながら顔を上げた。

「……ダッツで許してくれるの?」

初めて耳にした言語を真似ているようなたどたどしい抑揚で聞き返してきた椿に、百合音は頷く。椿の表情がいよいよ訝しげなものに変わった。

許すも何も、そもそも正直なところ、彼女は怒ってはいない。怒る理由もないのだから。昨日は椿の地雷を踏み抜いたようだという自覚があるので、寧ろ謝るべきはこちらではないかとすら彼女は思っている。しかしそれでは椿の方に負い目を残すことになる可能性があるため、百合音はあえて目に見える「謝辞」を要求した。ただそれだけである。

ダッツに納得したのかは定かではないが、椿は怪訝な顔から再び眉尻を下げて、まるで懺悔するような声で問う。

「……君は僕を怖がらないの??嫌わないの??疎ま^{うと}ないの??憎ま^{にく}ないの??」

いえ別に、と口にしかけて百合音は、昨日の椿の暴走を思い出して一度唇を引き結んだ。椿の暴挙自体は全く気にしていないが、少し思うところがあったのだ。

そもそも彼女は、椿にああいう面があるだろうことを、以前冷優から聞いた。真祖との殺し合いを始めようとしている。ことから予想していた。今更そこに動揺や恐怖を抱くことはない。

寧ろ椿が百合音に対してそういう面をおくびに曝気にも出さないことの方が問題だと思っていた。

そして今回の件で確信した。どうやら椿は、鈴白百合音という人間は自分と違う世界に生きる存在だとも認識しているらしい。

(届かないと思われてるなんて意味がない。そんなのじゃ、きっとこの人は救えない)

椿が百合音を遠い存在だと感じるというのなら、それは間違いなく椿が百合音を遠ざけたいからそう見えているだけである。百合音に対して線を引き、壁を作り、届かないと錯覚しているのは、椿の方なのだ。

逆に言えば、椿の方からそうして線が引かれている以上、今は百合音からも椿には手が届かないということでもある。

(けど、それがはつきり分かったのはある意味収穫ね)

意識してにつこりと笑い、百合音は椿の左手を取って口を開く。

「言ったじゃないですか。誰かを嫌うとか憎むのって、エネルギーがいるんですよ」

椿の瞳が見開かれる。昨日と違い澄んだ宝石に似たそれを百合音は、素直に綺麗だと思った。

「だから私は、どちらかという仲直りがしたいです」

最初に「偶然」を「必然」に変えたのは椿だ。

もう百合音の頭には、椿の抱える闇を知らない振りで通すという選択肢はない。

届かないなら。

届く場所まで、踏み込むだけだ。

掴んだ手の温度を確かに感じながら。
少女は不敵に微笑んでみせた。

舞台裏 〃暗転直後、悩み憂いて狐が一匹右往左往〃

全く予期していなかった痛みによる反射で薄らと張った涙の膜が乾いた時には、椿の中で渦巻いていた黒い〃何か〃はすっかり晴れていた。

見下ろせば、目を閉じてベッドに横たわる少女の姿が視界に現れる。

(……………)

微動だにせず眠る少女は、吐息さえ感じられないほど静かだ。

椿はほとんど無意識に、彼女の顔に掛かってしまっている一房の髪を払おうと、おもむろに手を伸ばした。その時。

ぽたり、と。

椿の人差し指から垂れた赤色が、少女の首筋に落ちて彼女の赤と混ざり合った。

「……………あ、」

その一滴から、じわりと椿の視界に色が戻る。

白いシーツを染め上げる^{おびただ}量の血液、所々が赤に汚された黒髪、閉じられた瞼、病的に青ざめた顔色をした――。

(――ゆ、りね……)

そこで漸く、意識を落としてぐったりと横たわる彼女の姿に現実味が追いついた。

『……………死ぬよ?!(このままだと)』

たった数分前に自分で吐いた言葉が甦り、跳ね返って来て椿の背筋を冷やした。死ぬ。このままだと、この少女は死んでしまう。

咄嗟に血を与えようと、椿はもう傷口が塞がりかけている左手の人差し指に牙を立てる。そうした後で、また一つの台詞が甦る。

『わたしは、吸血鬼には、なれません』

確かに彼女はそう言った。〃なりたくない〃ではなく、〃なれない〃と言ったのだ。

それがどういう意味を含んでいたのか、椿には分からない。けれど、彼女にとってはそう答えるだけの理由があったはずなのだ。

だとすれば今、椿が取るべき行動は何か。

(……………オトギリ、)

椿の頭に浮かんだのは、口数が少なく冷静な、ナース姿の
下位吸血鬼だった。

窓の外は暗くなり、白い電灯の光に満たされた部屋の中で。

椿は点滴に繋がれてベッドに寝かされている百合音の近くに佇み、
当たり前だが未だに血色の良くないその顔を見詰めていた。

あの後、思考の纏まらなまま廊下へと飛び出した椿は、偶然にも
百合音の部屋を訪れようとしていたオトギリと鉢合わせになった。

少しだけ迷って、しかし直ぐに彼女を部屋に呼び込んで状況を見せ
ると、その後は情けないが彼女の迅速な対応を見ているしかなかっ
た。

オトギリは、最後まで何も訊かなかった。

あの惨状を見れば何があつたかは容易に察せられただろうに、椿に
対して彼女は何も問わず、すべきことをこなしていった。動揺も困惑
もなく、ただ淡々と。

……聡明な彼女だから、椿と百合音を見ていていつかこうなるかも
しれないことくらい、想定していたのかもしれない。

ふう、と溜め息を一つ吐き出して、椿はゆっくりと室内に視線を巡
らせた。

「……………」

その時、微かな違和感が椿の胸中を掠めた。

何か気になる物でも視界に入ったのかと、赤い瞳をさ迷わせる。目
につくものといえば、壁際のクローゼットとその隣に置かれた青い
スーツケース、机の上には簡単に片付けられたノートと筆記用
具……だけ。

ぞく、と。その異常の正体に辿り着いた椿は悪寒のようなものを覚
えた。

(何で、何も変わってないの…?)

例えばリモコンやゴミ箱の位置、例えば椅子の角度、例えばアメニティの数や並び方。そういう、生活していれば意識せずとも変化を受ける物が、一切動いていなかった。一言で言えば、生活感がない。壁際のスーツケースがなければ、この部屋を誰かが使用しているという事実に気付かないのではないかと思うほどに。写真に撮ってそのままホテルの紹介ページに貼り付けても構わないのではないかと感じるほどに。

勉強道具が置いてある机も、教科書とノートのワンセットに黄色いシャーペンとカバーの無い消しゴムがあるだけだ。コップやペットボトルなどの飲料の類いも、小物の一つすら置かれていない。

もし今、彼女が姿を消したとして。

彼女が確かにここに居たと証明できる痕跡が、この部屋には何処にも存在していなかった。

それは単に彼女の性格に因るものか。

それとも、椿の元に長く留まるつもりはないという意識の表れなのか。

前者であつても後者であつても、あれほど周囲に溶け込み交遊関係を築くのが得意にも関わらず、彼女は実は非常に淡泊な人間なのではないだろうか、椿は思った。いつか、あつさりと椿の前から消えてしまふような予感すらした。

(…ああでも、今はそれ以前の問題だ…)

目を覚ました時、彼女は椿を見てどんな顔をするだろうか？

怖がられて嫌われても仕方のないことをした自覚はある。あの時、椿は些細な…後から考えてみれば本当に些細な引掛かりから、彼女を殺してしまうところだったのだから。身の危険を感じるのも、危険の元から離れようとするのも当然の反応だ。

そこに加えてこの部屋の異常を知ってしまった椿は、もう正直なところ気が気ではなくなってしまっていた。『僕が居ないときに目を覚まして何も言わずにどっか行っちゃたらどうしよう』という不安がぐるぐると渦を巻く。

無意識に口許に当てていた右手を下ろし、椿は点滴スタンドの反対側にそそくさと椅子を運んだ。少なくともこの場所を陣取つていれば、彼女が起きた時に逸早く気付けるはずである。嫌われても仕方ないのかもしれないが、せめて意識が戻った時にはきちんと会話をし、謝りたい。そのために、彼女が覚醒する瞬間を逃してはならない。

……結局、いざ少女が目覚めた時に気まずさに抗えず寝たふりをしてしまったのは、ご愛敬。

15. 幕と闇へ落ちる

連れ去られた火曜日。

親睦を深めた水曜日。

同盟を結んだ木曜日。

色々とバレた金曜日。

地雷を踏んだ土曜日。

仲直りをした日曜日。

そして今日、すなわち月曜日。

健全で真面目な女学生である鈴白百合音はいつも通りに登校しようとして、椿と下位吸血鬼サブククラスたちに全力で引き留められていた。

他人の機微に聡いわりに天然な部分を併せ持つ彼女は、同じ学生である綿貫桜哉に向かって端的に一言問う。

「何で?」

「丸一日意識不明だった奴が次の日平然と学校行く方がおかしいだろ」

リビングのソファに座らされた百合音の前に立つ彼が真顔で吐いた言葉に周りの下位吸血鬼サブククラスもうんうんと頷く。どうやらこの場に彼女の味方はいないようだった。

では状況を説明しよう。朝食後、一度自室へ戻ってからスクールバッグと共に廊下へ出た彼女が桜哉によって確保されたのがおおよそ五分前。そこからリビングに連行され、居合わせた椿とその他数名から懇々と説教じみた説得をされているのが現状である。

「意識不明っていつても、実質寝ただけみたいなものなのだけども……」

「点滴の世話になった時点でアウト」

「えー……」

実は桜哉含む下位吸血鬼サブククラスたちには、土日に椿と百合音の間に起こった出来事が非常に曖昧に伝わっている。具体的に説明すると、首にガーゼを貼り付けた状態で現れた百合音に対して朝のリビングではこんな会話が あった。

回想開始。

『……おい、なんだよその怪我』

『ああこれ?!椿さんと喧嘩して噛まれたの』

『待って百合音それ間違ってるじゃないけどなんか違うよ!?!』

『喧嘩して噛み付くとか犬かアンタは!?!』

『まあまあ桜哉くん。その件は昨日の夜にダッツ買いに走ってもらって円満解決してるから』

『確かに昨日なんか遅くに飛び出してたなと思ってたけどそれか!?!』

『てゆーか二人とも昨日ずっと見かけなかったけど、まさかつばきゅんコイツの血イ吸ったのオ〜?★☆☆★』

『ぎくっ』

『“ぎくっ”じゃねえよ!?!預かりものだから手え出すとか言つていって何やってんだよ!!』

『ちよつと貧血になって点滴してもらったくらいだから大丈夫よ?』

『百合音、困ります……出血多量の意識不明は、貧血とは言いません』

『はあ!?!』

強制終了。

そういう訳で、下位吸血鬼^{サブクラス}たちには極めて漠然とした情報しか伝わっていないわけなのだが、椿も言っていた通り間違ってるはいない。ぶっちゃけて言えば、朝っぱらからシリアスな空気になるのを嫌った少女が全力で事実を茶化していつそギャグに仕立てあげるくらいの気持ちで展開を操作した結果である。

しかし、吸血鬼として人間の左側の首筋に牙を立てるとどうなるかを身近な事象として知っている彼らにとっては洒落では済まなかったようだ。

……それ以前に、自らが瀕死にまで追い込まれた事案をギャグに変換しようとするのは普通の人間の感性からは逸脱した行為のはずなのだが。小さく紛れたその異常が浮き彫りにされることはなかった。「とにかく、今日は大人しくしてろ」

結局、その一言が全体の総意だった。

この状況ならば椿とシヤムロックは押し切る自信があったのだが、桜哉とオトギリにまでストップを掛けられれば流石に百合音も首を縦に振るしかなかった。

そこまでは、良かったのだが。

残念ながら、根つからのアウトドア派な彼女が丸々一日大人しくしていられる訳もなかった。

昼を過ぎたあたりで本日の夕食に話が飛んだとき、材料の買い出しに行くと言乗りをあげて引かなかったのである。

如何せん彼女は体を動かさないとストレスが溜まる人種だ。椿の地雷を踏み抜いたせいで土日をほとんどベッドの上で過ごしたということもあり、どうにか少しでも外の空気を吸いたかったのだ。

結果、妥協案として百合音と椿の二人で買い物に行くことが決定した。

「……そしてこれは、その道中の出来事だ。

椿と歩く大通り。そこで百合音は、どんつと横合いから出てきた白い影とぶつかった。

「おっと、失礼」

「あ、すいませんっ……………」

咄嗟に謝罪を口にして、そのまま百合音は固まった。紳士的な謝辞を残して去っていく後ろ姿を凝視する。

「百合音?!大丈夫かい?」

「……………はい、大丈夫です」

動かない彼女を気に掛けた椿の声に、生返事しか返せない。そのくらいに衝撃的だった。

(なに考えてるのよ……風谷っ!!)

そう。

ぶつかってきた人物は、普段通りの白衣を纏った風谷巽その人だったのだ。

(椿さんたちに顔がバレてないからって直接会いに来ることないでしょ!?)

前々から頭のネジが数本飛んでいると知ってはいたが、変装も何も

なく素のまままで平然と接触してくる辺り、大胆不敵にも程がある。

直ぐに雑踏に紛れてしまった白衣に心の中で文句をぶちまけながら、百合音は動揺を隠すように踵を返して椿の隣に並んだ。

大通りで一週間ぶりに娘の顔を見た後、風谷は白衣のポケットに手を突っ込んだまま迷いなく路地の一つに身を滑り込ませた。

さほど複雑ではない道順を抜け、別の通りに顔を出す。そこに、彼女の目的の人物が、測ったようなタイミングで通り掛かった。

「君、ちよつと」

「……………？」

「君だよ。少しだけ立ち話に付き合ってくれないかな？」

風谷が呼び止めたのは、一人の少年。

色素の薄い髪にどこか怯えたような暗い表情、そして細い手首に巻かれた包帯が印象的な、椿の下位吸血鬼^{サブクラス}だった。

側近として椿の近くに居ることの多い面子との夕食を済ませた後、自室に戻った百合音はおもむろに外出時から履いていたジーンズのポケットを探った。

「……………やっぱり」

何も入れた覚えのない左ポケットから、折り畳まれた一枚のメモが出てきた。

犯人は言うまでもなく白衣の彼女だ。椿と共に買い出しに出掛けた時の衝突の際にでも振じ込まれたのだろう。

『20時に屋上。荷物は纏めて部屋の外へ』

見慣れた筆跡で書かれていたのは、必要最低限の内容だった。

それでも、省略された部分をきちんと補完できる程度には、百合音はこういった指示に慣れている。

(……潮時、って意味かしらね)

ぐしゃりと手の中でメモを丸めながら彼女は、ぐるりと室内を見渡した。取り出しやすいようにとクローゼットに掛けた数着の衣服以外、特に片付けなければならぬ私物はない。畳んでスーツケースに仕舞うにしても、十分も掛からないだろう。となると、指定の時間まではまだ自由時間がある。

もう一度、どこからどう見てもホテルの一室にしか見えない部屋を、彼女は見回した。

微かな溜め息と共に、華奢な指先が前髪を雑に掻き上げる。指の間から落ちた黒髪の間から覗く顔は、どこか不貞腐れたような無表情だった。

さて。

残り時間、というのはあつという間に過ぎ去るものだ。

何をするでもなくごろりとベッドに身を委ねていた百合音がふとベッドサイドの時計を確認したときには、既に20時まで五分ほどしか残されていなかった。

起き上がる、髪を整える、靴を履く、それぞれの動作を淡々と済ませ、彼女は忘れ物がないかを再度視覚と記憶で確かめてから、部屋を出る。

指示通り、青いスーツケースは部屋の外に横付けしておく。ここから風谷がどのようにしてこの荷物を回収するつもりなのかは謎だが、それは百合音の知ったことではない。

誰とも会うことなくエレベーターに乗り屋上へ出れば、心地よい夜風が黒髪をさらった。複雑な鉄骨に支えられて屋根のように屋上に被さっているヘリポートを見上げながら、百合音は端の方に設置されている室外機に歩み寄る。僅かにヘリポートの屋根からはみ出した屋上の縁にずらりと並んだその一つに腰掛ければ、何の障害もなく夜空を展望することが出来た。昼間には分厚く空を覆っていた雲は薄れ、空には満月に近い形の月が黄金に輝いている。

それから何か「動き」があるまで待つこと、夜風に吹かれて十五分、といったところだろうか。

この屋上に通じる扉が開閉される音が、微かに聞こえてきた。百合音は座ったまま上体を捻って振り返る。

「……こんばんは、椿さん。綺麗な月夜ですよ」

彼女の視線の先では、夜闇の黒に映える白い羽織が揺れていた。来ると予想していた椿の後ろに更に二つの人影があるのを見留めて、百合音は目を細める。からころ響く下駄の音がそれ以上近づく前に、彼女は室外機から下りた。

「シャムロックさんにライラックまで、どうしたんですか？」

ライラックが居る時点で、椿が何のために来たのかは予想がついていた。だが百合音はあえて何も分かっていないような素振りで尋ねる。

「それは、君ならもう分かっているんじゃない？」

コン、と足を止めて、椿がそう切り返してきた。

どうやら予想通りライラックが、百合音が主人だということ椿に話したようだ。

(絶対、風谷が何かしたわね)

それは確定事項だった。あの優しいライラックが、自分から百合音との約束を反故にするなど考えにくい。椿の後ろで強張りきった表情のまま身を縮ませているライラックに、百合音は気付かれないよう視線を向ける。風谷が彼に何を吹き込んだのかは知らないが、相変わらずろくでもないということだけは分かった。

もう一步、椿が下駄を鳴らして近付く。

「百合音、君は、何番目の兄さんと契約してるの？」

「……ふふっ、」

その、余りにもあからさまな椿の質問に、百合音は思わず笑ってしまった。

この場合、「何番目」から「契約」まで全てに首を傾げるのが「正しく何も知らない人間」の反応だ。質問の内容を一つでも「理解」しようものなら、即座に嘘を看破されるだろう。

だから、少女は笑って、

「その聞き方じゃダメですよ、椿さん」

全部を、理解してみせた。

そして流れを奪うために、一つ斬り込む。

「だって、『兄さん』じゃない可能性だってあるんですから、ね？」

「……………」

沈黙を受けて百合音は、満足げに微笑んだ。

恐らく今、椿が頭に浮かべているのは上から四番目の紅一点だ。兄ではなく姉の可能性もあるだろうと、そう百合音が言いたいのだと誤解している。

これは風谷がよく使う、情報量の差から生まれる認識のズレを利用するやり方だ。嘘でもハツタリでもない、けれど確実に相手の認識をねじ曲げる一手。『冷優』という存在を知らない椿は、絶対に正しい認識には辿り着けない。

（さてと、これで椿さんたちは『私が主人である』ことの確信を充分に得られたはず）

契約のことを否定せず、あまつさえ椿の問いを完全に理解してみせた。ここまですれば、ライラックの密告が間違っていたとは思わないうだろう。

（椿さんが家族を疑うことにはないとは思うけど……一応証明しておかないとね、ライラックは嘘つきじゃないって）

強引な彼女の頼み事に付き合ってくれた優しい彼が責められる要因など、残しておくわけにはいかなかったのだ。

彼女が内心でそつと息を吐いた時。

不意に、彼女の視界に赤い月が過った。

（……ああ、なんだ、）

少女の口角が、緩やかに上がる。

（もう、とつくに、迷い込んでいたのね）

やるべきことを終えたことを確認した百合音は、椿たちから視線を外さないようにしながら軽く体に弾みをつけて室外機の上に乗った。さほど広くないそこに立ち、夜に似つかわしくない明るい笑顔で笑う。

「さ、それでは椿さん。潮時みたいなので、私はそろそろおいとましま

すね」

彼女の行動と台詞に、まさかと瞠目する椿たちが反応するよりも速く。

口許に笑みを湛えたまま、百合音は室外機の固い感触をつま先で蹴った。

少女の体が、室外機に向こう側へ落ちていく。

「っ、」

「シヤムロック」

咄嗟に後を追おうとしたシヤムロックを、椿が制した。

「若……良いのですか?」

「うん。あの子が誰かの主人イヅなら、どのみち近いうちにまた会うだろうしね」

言いながら椿は、屋上の縁に立つ。

彼女が消えた夜の街を、凧いだ赤い瞳が見下ろしていた。

舞台裏 “暗躍の種明かし、あるエキストラの奮闘”

オートロックの扉が静かに開かれる音が聞こえてきた。

次いでスーツケースのキャスターが回る音と微かな靴音、扉が閉まって施錠される音、何かが廊下に落ちたような音。

決して大きくはないが、耳を澄ませば確かに聞こえる程度の足音が床伝いに響いてくる。予定が狂っていないければその足音は、鈴白百合音という名の少女のもので間違いないはずだ。キャスターの音は聞こえず、スニーカーが床を擦る音だけが鳴っていた。

(……………そろそろ、行った……………?)

同じ廊下の直線上、少女が歩いて行った方とは反対側を曲がった所で(蹲うずくまって身を縮こまらせつつ口を両手で覆うという徹底ぶり)息を潜めていたライラックは、遠ざかる足音を聞いてそろりと顔を覗かせた。視線の先にもう少女の姿が見えないことを確認して、ほっと息を吐き出す。

彼の視線が定まる先には、少女が置き去りにした青いスーツケースがあった。その近くには、部屋のキーが床に転がされている。

(まずはあれを、地下まで運ばなきゃ……………)

ごくりと唾を飲み込み、ライラックは慎重に立ち上がってスーツケースに駆け寄った。目立った傷や色剥げ、ストラップの類いすら付いていないそのハンドルの部分を引き出す。そして引き出し過ぎて最高点でカコンツと音が鳴り、か細い悲鳴が無人の廊下に響くことになった。

今の音(と自分の悲鳴)で誰か来ていないかを首を左右に振り切りながら確認するライラックの心情は既にパニックに近かった。ハンドルを握り締めている手に力を込めていなければ震えながら廊下の隅っことお友達になっていたかもしれない。

それでも彼がスーツケースを手放さないのは、昼間に出逢った人物の笑みが今も脳裏に張り付いているからだ。

ここで少しだけ回想を挟もう。何故彼がこんな事をしているのか、その理由を知るために。

遡ること数時間前、ライラックが昼間の大通りを歩いていたとき。

「君、ちよつと」

突然横合いから、一人の女性がライラックを呼び止めた。

「君だよ。少しだけ立ち話に付き合ってくれないかな?」

顔を向ければ、皺一つなく風に靡く白衣とゆるいウェーブを描く黒髪。女性にしては低く落ち着いた声と、形よい口許には綺麗な微笑。

しっかりと着こなされているその白衣からC3の人間を連想して、ライラックは咄嗟に逃げの姿勢を取った。しかし彼が実際に距離を取るより前に、彼女が先手を打つ。

「初めまして。私は風谷巽という。百合音の保護者だよ」

「!?!」

保護者。

その単語に思わずライラックは風谷と名乗った女性を上から下まで見直してしまった。成人していることは分かるが、それでもかなり若く見える。保護者という言い回しをするくらいだから、百合音と血は繋がっていないのかもしれないが。

ライラックが一先ず足をその場に留めたのを確認して彼女は、路地の中へと手招きした。立ち話に付き合って、と言っていた件だろうか。

不審には思いながらも、人当たりの良さそうな笑みが百合音の保護者という自己紹介に妙な信憑性を与えていて、ライラックは恐る恐る大通りから細い路地へと数歩踏み込んだ。

「さて、確認なんだが……三日前の金曜日、君は別の真祖の低位吸血鬼に襲われたところを百合音に助けられたね?」

「なんで、知って……っ!」

「分かりやすい反応をありがとう。そこで主人の能力を露見させてしまった百合音は、君にそれを黙っていてくれるよう頼み込んだ。君はそれを了承した。ここままで間違いは?」

「……………」

「沈黙は肯定だ。うん、事実確認はこれで済んだね。円滑に進んで良かったよ」

勝手に頷きながら、風谷は満足げに笑った。

ところが瞬きの間にその笑みは打ち消され、深刻そうな表情が浮かべられる。

「だが、これから先ずつとこの状態を続けることは不可能だ。君にも分かっていいるだろう?」

「……それ、は……」

「君がこのまま秘密を守ったとしても、そう遠くないうちにこの均衡は崩れる。……そうなったとき、君は命を救ってくれたあの子のために、何か出来るのかな?」

「っ、」

暗に、何も出来ないだろう、と言われたのが分かって、ライラックは俯いた。

そのまま追い討ちを掛けられるかと思つて身構えたが、次に掛けられた言葉は意外にも彼に配慮したものだつた。

「そんなに怯えないでくれたまえ。別に咎めるつもりはないよ、単なる優先順位の問題だからね。そこで椿を選ぶ君は間違っていない」

猫撫で声のように優しく過ぎる声色ではなく、きちんとライラックに対しての理解を示したものだつた。

でもね、と区切りの線を引くように彼女は真剣みを帯びた口調で続ける。

「あの子は見ての通りのお人好しな子で、見ず知らずの他人にも心を配れる子で、人間も吸血鬼も分け隔てなく接する子だ。そして察しが良く行動力も勇氣もある。そんな子が椿の計画を知ったとき、反発しないわけがないだろう?」

「……………」

反論が、出来なかつた。

他の真祖サヴァンブや主人イヴを襲おうとしていること、何より下位吸血鬼サブクラスは既に何体も襲っていることを知れば間違いない心優しい彼女は声を上

げるだろう。そうなってしまえばもう、あの少女は憂鬱組にとっては敵になる。

仮にそうならなくとも、彼女は主人だ。いずれ敵対することは避けようがない。今まで有耶無耶にしてその場しのぎにしてきた現実が、手酷く突き付けられるだろう。

「だから君がもしあの子に、助けられた借りをしつかり返したいと思っっているのなら、行動するべきは百合音と椿が決定的に対立する前、つまりは今しかない」

少しずつ、けれど確実に、説き伏せられている感覚があった。

「私は出来るだけ安全にあの子をあのホテルから逃がしたいんだ。そのため、君に少しだけ手伝いをしてもらいたい。…引き受けてくれないかな？」

向けられた微笑みは慈愛を含んだものだったが、ライラックはそれどこか悪魔との契約を想起した。

しかしそうと分かっても既に彼の心はその契約を結ぶ方に傾いているのだからもう、どうしようもない。

哀れな子羊は、こうして悪魔と契約した。

あそこで頷いた以上、もう後戻りは出来ない。

ぐつと拳に力を入れて、ライラックは震えそうになる身体を諫める。深呼吸をして息を整え、少女の後を追うようにしてエレベーターの方へ歩き出す。

頭の中に反芻するのは、淀みも過不足も無い指示の声。

『百合音には20時に、荷物を部屋の外へ出して屋上へ向かうよう指示してある。君はそれを見届けた後、その荷物をエレベーターで地下五階まで運んでほしい』

スーツケースのキャスターが床に擦れる音が静かな廊下に反響する。思えばライラックが廊下の端で百合音が出てくるのを待っている時から、不気味なほど人気がなかった。決して、まだそう遅い時間

帯ではないというのに。

また浮かぶのは、戯れのような彼女の言葉。

『大丈夫、保証してあげるよ。君があの子の荷物を運ぶ間、君は誰も出会わない』

その通りになった。

ライラックの乗り込んだエレベーターは一度も止まらずに、地下五階まで辿り着いたのだから。

『着いたら荷物はエレベーター前に放置してくれて構わないよ。そこまで運んでくれればこちらで回収できるから』

言われた通りにライラックはエレベーターを出て直ぐの場所にスーツケースを止めた。ぐるりと周囲を見渡してみるが、ここにも人の気配はない。

これで一つ目の指示は完遂した。

『さて、次が本題だ』

再びエレベーターに乗り込み、ライラックは椿や戦闘力の高い下位吸血鬼たちがよく屯しているリビングのある階を目指す。

『椿に、百合音が主人であることをバラせ』

その言葉を落とした時の底冷えするような風谷の笑みを思い出して、どくりと心臓が大きな拍動を響かせた。

そんなことをしたら、と戸惑うライラックを見て彼女は薄く薄く笑っていた。

『大丈夫、セッティングさえ万全にしておけばあの子は上手くやるさ。君が心配する必要はない』

記憶に甦るのは、主人であることを黙っていて欲しいと頼まれた時のこと。

百合音は最初からライラックに、〃不都合が起こればバラしても構わない〃と言っていた。〃その時はその時で何とかするから〃、と。それは気休めや気遣いではなく、本当にそう断言できるだけの自信があるからだっただろうか。

『何も難しいことはないよ。君は三日前のあの夜に見たことをそのまま椿に話せばいいだけだ。演技をする必要も、嘘を吐く必要もない』

五月蠅い心臓を抱えながら、ライラックはリビングのドアを開けた。真つ先に目に入ったのは窓際に腰掛けている綿貫桜哉。そして、椿はソファの方に座っていた。

「……っ、……椿、さん」

「ああ、ライラじゃない。どうかしたのかい？」

ライラックに気付いた椿が柔らかな笑みを浮かべて振り向いた。彼が家族にだけ向けてくれる、優しい笑顔だ。

この笑顔に向かってライラックは今から、真実を話さなければならぬ。

「あ……その、あ、えっと、ぼくは……」

急激に込み上げてきた恐怖に、ライラックの口からは意味のない言葉ばかりが溢れていく。

「そんなに慌てないで。話があるならゆっくり聞くから、とりあえずこっちへおいでよ」

椿は変わらず落ち着いた声で、ぽんぽんと着物に包まれた右手でソファを軽く叩く。ライラックはぎこちない動きでそこに座り込んだ。

「それで、どうしたんだい??何か悩み事かな？」

「悩み、じゃなくって……ぼく、っ、椿さんに、言わなきゃいけない、ことがっ……!」

「うん、聞くよ。ゆっくりでいいからね」

穏やかな雰囲気ですライラックの言葉を待つてくれる椿と、目を合わせる事が出来なかった。不安と恐怖と焦りで、結局筋道のはつきりしないままライラックは話を始めた。当然のごとく時系列が行ったり来たりしたり、一言話しては付け加えの繰り返しだ。

荒波のように渦を巻く思考の中で、酷薄な笑みと共に風谷が告げた台詞が甦る。

『君はどれだけ言い淀んだって吃つたって構わない。その怯えも焦りも、きつと椿が素敵に曲解して補正をかけてくれるさ』

……その通りになった。

普段から内気で臆病なライラックのことを分かっているからこそ、椿は当たり前のようにその挙動を受容した。急かしたり不審な目を

向けることなど一切なく、辛抱強く話を聞いてくれた。不安げなライラックの振る舞いが、「風谷翼の指示で動いている」という緊張から来ているものだと、気付かれなかった。

そうしてライラックは、普通に考えれば彼のような性格の者には絶対に出来ないであろう、スパイや工作員のような暗躍を――やり遂げてしまった。

話を聞き終えた椿は少し考え込むと、ライラックに向かって微笑みかけた。

「頑張つて話してくれてありがとう、ライラ。僕は少しあの子と話をしてくるから、君は部屋に戻っていて」

立ち上がった椿が、軽くライラックの頭を撫でて部屋を出ようとしている。

『話しきつたら、君の仕事はそこで終わりだ。後は椿が動くだろうし、その上で椿に何か指示されたらそれに従えばいい』

そう。ライラックの仕事はもう終わった。椿には部屋に戻っていていいと言われたのだから、一刻も早く自室に駆け込んで暴れている心拍を落ち着けるのが最優先だ。

分かっている、けど。

(けど、百合音がちゃんと逃げられるのか見届けなくて、このまま終わって、本当にいいの……?)

ライラックの葛藤を余所に、シヤムロックが部屋に入って来た。椿が彼と話を始めるのが視界の先に見える。

「シヤム、百合音にちよつと話があるんだけど、どこにいるか知らない？」

シヤムロックが首を横に振った。部屋に居るのでは、と憶測が聞こえる。無理もない、彼女が屋上に行っているなど普通は予想もつかないはずだ。

ぐつと奥歯を噛み締めて。ライラックは震えそうになる言葉を絞り出した。

「……百合音なら、さっきエレベーターで屋上に行くのを見ました」
椿とシヤムロックが驚いたように振り向く。

顔を上げ、ライラックは二人を見詰めた。

風谷に言われた通り、椿と百合音が対立したなら、ライラックには何も出来ない可能性の方が高い。最悪両者の邪魔になるだけかもしれない。

けど、それでも。

せめてその場に居なければ、何か出来たか出来なかったかすらも、分からない。

「椿さん……ぼくも、一緒に行きます」

だから彼は、最後の最後で。

光の当たらない舞台裏から幕切れ間近の表舞台へと、その足を踏み入れていったのだ。

幕間3 『友を呼ぶのも嫌悪するの』

切り裂かれたのは、絆でも友情でもない。

在ったかもしれない未来の、一枚の青写真だ。

『友を呼ぶのも嫌悪するの』

その日、桜哉は朝からきせわ気忙しかった。

昨日一日姿を見せなかつた少女が首に大きな医療ガーゼを貼り付けてリビングに現れるわ、大量出血で意識不明の重体に陥っていたと聞かされるわ、そもそもの原因となったのが椿という名のアホギツネだと発覚するわ、彼の心情的にはもはや修羅場と呼んで差し支えないほどだった。

そして何より、どう考えてもまだ体調が整っているはずのない彼女が当たり前のように学校へ行こうとするのを止めるのに、かなり苦労した。

彼女、鈴白百合音は吸血鬼などではなくただの人間だ。無理をして倒れてからでは遅い。そんな当たり前前のことを、引き留められてきよとんとしている少女に延々と言い聞かせること十分ほど。それでもそこで彼女が折れたのは恐らく、納得したからではなく桜哉が学校に遅刻する可能性がちらついたからだろう。

ここ一週間で、桜哉にはよく分かっていた。

鈴白百合音は、他人の世話と自分の世話の比率が破綻している。

他人への気配りが出来るのは美点だが、それにしても彼女のそれは“異常”の域だと桜哉は思う。寧ろ彼女の方をきちんと見ておかないと危なっかしいと感じるほどに。

一人登校した後も、桜哉の思考は彼女についてフォーカスしたままだった。

中でも彼女と同じくお人好しな親友と言葉を交わす度にその影がちらつく。

そうしている内に、彼はふと気付いたことがある。

桜哉は、学校での鈴白百合音という存在を知らないのだ。

恐らくは彼女が意図して、校内では桜哉と関わらないように努めている。突然の関わりで桜哉の「日常」が壊れかねないという懸念を掬い取って、それを綺麗に回避している。

だから桜哉は、直ぐ隣のクラスだというのに未だ彼女と校内で顔を会わせたことはない。彼女が誰と仲良くしているのか、どれくらいの人数で固まっているのか、そういうことを何も知らない。

知る必要があるのかと問われれば首を傾げることになるが、放っておくと直ぐ人助けに走るあの少女の行動予測の一助くらいにはなるかもしれない。

(帰ったら……いや、明日学校で探すか)

それは単なる直感だった。

本人に直接尋ねても、空振りに終わるような気がしたから。

……その直感が正しかったことを彼が知るのは、まだ先の話だが。

帰宅後。

部屋に仕掛けた狐避けの罫が不発に終わっていたことを含めて、概ねいつも通りに時間が流れていった。

件の彼女は夕飯が終わると珍しく、早々に部屋に引っ込んでしまった。早く休むつもりなら良いことである。桜哉は定位置の窓際で夜景を見下ろしながら、学生らしく直近の、明日のことを頭に浮かべ始める。

明日は、先週のL H Rロングホームルームで決まりきらなかった文化祭の役割決めがあつたはずだ。

前回で話が纏まらなかったのは時間的に余裕がなかったのもあるが、不人気な係を決めるのにもたついたというのが大きいの。この分だとまた、お人好しで面倒事が嫌いな「彼」が引き受けることになるかもしれない。

そこまで考えたところで不意に桜哉の記憶の中から、すっかり忘れていたことがぽんと浮かび上がってきた。

(あ、英語の宿題)

確か先週の授業で出されていた分があつたはずだが、そういうばやった覚えがない。逆に、教科書ごと学校の机の中に置いてきた覚えならある。

……仕方がない、これはもう明日の朝に写させてくれと、親友に前もって嘆願しておくしかない。

桜哉はそう結論付けると慣れた手付きでメールを起動させ、送信相手を選んで本文を作成する。その文面自体は学校での彼のお調子者キヤラそのままの口調でエクスクラメーションマークが並んでいたりするものの、書いている本人が至って真顔なあたりが顔の見えないコミュニケーションの怖いところだ。

丁度その時、ボタンと盛大な開閉音と共に派手好きな手品師が飛び込んできて「つばきゆんただいまア〜!! ☆ゴメエ〜ン!!? 例の黒猫見失っちゃったア〜! ★☆☆」とか何とか叫んでいたが、桜哉はスルーした。

出来上がったメールを一度だけ見直してからワンタップ。そして送信完了という文字が表示されたのを見てから、桜哉の口から小さく「あっ」と声が漏れた。

教科書は学年共通なのだから、それこそ隣のクラスだろうが関係はない。明日の朝まで待たずとも、彼女に言えば簡単に見せてもらえたはずではないか。

(……まあ、もう真昼にメールしたし、いいか)

気付かなかったことにしよう、と桜哉は気を紛らわすようにヘッドフォンを耳に当てた。視界の端でちらりと珍しい人物ローライラックが部屋に入ってきて来る姿が見えたが、彼は特に気を向けることなくスピーカーから流れ始めた音楽に目を閉じた。

それから、二十分ほど音楽の世界に身を委ねていただろうか。

いつの間にか出て行っていた椿が、戻って来た。そこまでなら桜哉が気にすることはなかったのだが、その後少し遅れて入って来たシヤムロツクの表情が余りに険しかったため、桜哉はヘッドフォンの片方をずらして意識を傾けた。

「若、部屋はもぬけの殻となっておりまして…」
「そう」

聞こえてきたのはそんな会話だった。
たったそれだけだったのだが、桜哉はとてつもなく嫌な予感を覚えた。思わず、椿に向かって声を掛ける。

「……なんか、あつたんすか」

椿とシャムロックの視線が、同時に桜哉へ向いた。
いつも以上に底の見えない瞳をした椿が、整った顔立ちに影を落とすように答える。

「百合音が、帰ったんだよ」

告げられた事実には、桜哉は瞠目した。

有り得ない、と思つたのだ。あれほど彼女に固執していた椿が、呆気なく手放したりするものか、と。

「なん、でっ……いー」

思考を埋め尽くす衝動のまま途切れながらも放たれた桜哉の声に、一瞬、椿は躊躇ったように見えた。

しかし硬直は本当に瞬きの内で、細身のサングラス越しの赤い瞳が桜哉をしっかりと見詰める。その瞳には先程までの昏さとは打って変わって、どこか桜哉を心配するような色を宿していた。

それでも、桜哉の問いに正直に答えるために椿は口を開く。

「……………百合音は、主人^{イッ}だった」

「は…………？」

言われた瞬間、言葉の意味が分からず桜哉は戸惑った。

そして、その単語が真祖と契約した人間のことを指すものだと遅れて理解して、彼は。

(なんだよ、それ……じゃあ、アイツは、今まで、ずっと、ずっと……………)

ずっと、嘘を吐いていたのか。

「……………」

握り込まれた指の爪が掌の皮膚を裂く音が、桜哉の耳には聞こえなかった。拳からぬるりとした感触が溢れ出す。

桜哉が彼女と時間を共有したのはたったの七日、一週間だ。その短い記憶の中にある彼女の表情はいつも、一点の曇りもない笑顔だった。

その笑顔全てに輝^{ひび}が入り、ガラス同然に砕け散っていく。ばらばらになった“彼女”はもう彼女ではなくて、どこにも“本当”は見付からない。

だったら。

彼女がこの場所で見せていた姿が嘘なのだとしたら、もしかしたら。

『お友達になりましょう、桜哉くん』

あの言葉、もー。……

きつとまだ、綿貫桜哉と鈴白百合音の間には、絆や友情なんてものは結ばれてはいなかった。

けれど、遠くない未来で、そうなることが出来たかもしれないのに。偽りの記憶で偽のスタートを切った関係ではなく、本当に一から積み上げていけるかもしれないと、思っていたのに。

……いや、それだけならまだ救い様があった。彼女が主人^{イザ}であったという事実は確かに一つの未来を壊したが、それはあくまで必然的なことであり、運命か神様でも呪えば済む話だ。

しかしこの時桜哉は、絶対に気付きたくなかったことに、気付いてしまっていた。

そもそも彼女は最初から最後までずっと、吸血鬼のことを知らない普通の人間として振る舞っていた。椿に連れられてこのホテルに足を踏み入れたその瞬間から、ずっとだ。

椿や下位吸血鬼^{サブクラス}たちを相手に一つの綻^{ほころ}びもなく嘘を吐き通すなど、少なくとも桜哉の親友のような、ただのお人好しに出来る芸当ではない。それは、つまりは。

(つまり……アイツもオレと同じような、大嘘吐きだったって、ことかよ)

何のことはない。桜哉が学校でやっていることを、彼女はここで

やっていた、というだけのことだ。

「……椿さん、オレ、やっぱ嘘つきは嫌いです」

その言葉で、たったの一言で、桜哉は「全て」に蓋をした。もう、彼にはそうするしかなかった。

「……そっか」

変わらず心配の色を滲ませながらも、椿はそう頷いて、後は何も言わなかった。

それだけが、桜哉にとっては救いだっただけ。

そして。

桜哉が、親友が一匹の黒猫を拾ったことを知ることになるのは、この翌日のこと……。。

わずに済むと思っていたけれど、貴女はいつもいつも『……』

……と、まあこんな感じが延々と続いた。

合間合間に反論出来る部分もあるにはあったものの、口を挟めば更に長引くだけなので百合音は黙って耐えた。正直心の中では「(え、今回のこれって私が悪いの……?)」と不服を抱えていたが。

予め用意されていた原稿を読み上げているような平淡な口調で語られるお説教に唖が重くなってきた頃、最初から横であわわわしていた有紗が必死で切り上げに入ってくれたことが、せめてもの救いだっ

た。
因みにホテルの部屋の前に放置したはずのスーツケースはしっかりと回収されていた。結局どうやったのかは不明である。表舞台の裏側をこっそり覗きでもしなければ、知ることは不可能だろう。

さて、と百合音は心中の声を敢えて口に出す。

柔らかく朝日を通すレースカーテンだけを閉めて、分厚いドレープカーテンは両サイドに引いてタッセルで束ねる。こんなにも晴れた日に鬱々とした記憶に気分を害されたままにいるなど勿体ないことだ。

そう思っただけで実際にさっさと学校へ行く準備を始めてしまう切り換えの速さは、あまり見せない彼女本来の性格に因るものだったりする。

きっかり一時間後、常人なりに朝は眠たげな有紗と低血圧で朝に弱い冷優に一声掛け、いつ寝ていつ起きているのか分からない風谷に見送られて百合音は家を出た。

その後、無事に登校した彼女が学校での日常を取り戻すには、朝の
S H Lショートホームルームから一時間目が始まるまでの時間で充分だった。

百合音は長所の一つと自負する程度には顔が広い人間だが、彼女を知る全員が昨日の彼女の欠席を知っているわけではない。同じクラスの生徒たちに、少し体調が悪かっただけ”と伝えればそれで終了だった。ついでに心配してくれたことへの感謝を付け加えれば、誰しもが満足して席へ戻るか、別の何でもない話題へと移っていった。

誰も、体調不良そのものの理由について尋ねる者などいない。

そんなことは知らなくても、彼らの日常は恙なく回っていくのだから。

だからその日、百合音が校内で気に掛けたことといえば隣のクラスの或る生徒に会わないようにすることだけだった。

(流石に昨日の今日で普通に椿さんの下位吸血鬼と会ったりしたら冷優にまた怒られそうよね…)

二日連続のお説教は嫌だ。良くも悪くもその一心で百合音は綿貫桜哉との接触を避けた。元々校内では彼に関わるつもりがなかったが、万が一にも顔を会わせないようにいつも以上に気を回した。

ここで一つ留意すべき点がある。

前述の通り、百合音が桜哉を避けた理由は冷優のお説教を免れるためである。

…それが綿貫桜哉の視点から見ればどうなるかは、この時の彼女の頭にはなかった。

放課後にお化け屋敷のスタッフ役のメンバーで文化祭の打ち合わせがあり、百合音が家に帰り着いた時刻はいつもよりやや遅かった。

外から帰ったら手洗いうがい、と洗面所に向かう。そんな彼女に、リビングから顔を出した有紗がこんな事を言ってきた。

「おかえり百合音。ね、これからカラオケに行かない？」

見た目通りに内気な彼女からの外出提案は珍しいことだ。勿論、と二つ返事で百合音は頷く。先週から心労の続く彼女のことを慮っての提案だろう。有紗の透き通ったソプラノの歌声が聴けるのなら百合音としては大歓迎である。

因みに大抵は百合音が、自分が歌いたい十有紗の歌を聴きたいという理由で有紗(とついでに冷優)を引っ張って行く。冷優も音楽自体は好むため、満更でもない様子で着いてくることが多い。

風谷は何やら自室に籠って調べ事をしていたので外出の旨だけを伝え、三人は早速家を出た。百合音は財布などを詰めた小さなボディ

バッグを身に付け、冷優は白地に金色の文字が刻まれた装丁の一冊の本を胸に抱え、有紗は貴重品の類いを持たせるとよく落とすのでほぼ手ぶらの状態である。

元々百合音の帰宅が遅くなったため、外は既に暗くなり始めていた。街灯や店の明かりがその本分を發揮している。

「いつもの駅前のでいいわよね？」

「うん。この前ももらった割引券も持ってきたよ」

「長居は出来ないわ。吸血鬼が本格的に動く時間までには出るから、二人ともそのつもりでいること」

「分かった」

「はいはい」

「百合音、〴〵は一回」

会話内容はともかく、高校生程度の女子が三人和氣藹々あいあいと並んで歩く姿は中々に微笑ましい。この三人、性格がバラバラなだけで決して仲は悪くないのである。

そんなことはさておいて。

それは、他愛もない会話をしながら、雑貨店に洋服屋に食事処などが建ち並ぶ商店街に差しかかったときだった。

「……??あれ、なんだろう、凄く人が集まってるけど…」

「ショーか何かでもやってるのかしら」

「……………」

ざわざわと落ち着かない人々の群れを目の前にして三人は足を止めた。有紗と百合音の二人が、興味本位で集団の視線の先にあるものを覗こうと試みる。

直後、「ひっ!!」と有紗が引き攣つった悲鳴を上げた。

「有紗??何が見えーっ!」

悲鳴に驚きつつも、百合音は有紗が覗いている場所から割り込むようにして人だかりの先を見る。

そこには、血溜まりに倒れている少年と、その傍らで必死に呼び掛けている少年が居た。しかも片方は名前すら分かるほど見覚えのある人物だ。

(まさかあれ、虎雪くん……っ?)

隣のクラスに所属する温厚な性格の同級生である。そんな彼が、何故あんな状況下に取り残されているのか。

百合音が息を呑んでいる間にも状況は動く。ガラスの破片を踏み締める音と共に人々のざわめきが大きくなった。ウィンドウの破られた洋服店から、誰かが歩み出て来たのだ。

白基調のスーツとピンクのポニーテール。

手品師然とした大きなシルクハット。

見馴れたその格好に頭の中で瞬時に該当する人物が浮かび上がり、百合音は目を見開く。

(……ベルキアさん!?)

見るからに不機嫌そうなオーラを出しながら、シルクハットをかぶり直したベルキアが未だに道路に倒れている少年と虎雪にゆつくりと近付いていく。

そのシルクハットから正しく手品のように剣が取り出されるのを見て百合音は即座に悟った。あそこで血を流している少年はベルキアの手には掛かったのだと。そして虫の息だろう彼に、とどめを刺そうとしているのだと。

考えるよりも先に、彼女はベルキアを止めるために人だかりの先へ向けて足を踏み出す。

その彼女の襟首を掴んで、冷優が群衆の外へ引き戻した。

「んぐっ」

問答無用で首が締められ、呼吸のリズムが狂って百合音は咳き込む。彼女を尻目に、人々のざわめきにまた波が立った。

……龍征連れて逃げろおっ!!

生理的な涙で滲んだ視界の中で百合音は、ベルキアの頭に飛び付いている別の少年の姿を見た。意表を突いたはいいが、吸血鬼相手にあの捨て身はいただけない。あのままでは彼もベルキアに殺される。

だから百合音は、冷たい視線を送ってくる冷優を無視してもう一度渦中へ飛び込もうと人の壁を見据えた。

しかし。

「有紗、撤回」

「えっ」

「帰るわよ」

無情な声と一緒に再び襟首を掴まれた。

今度は困惑した様子の有紗も加わって、背中を押される。

「待ちなさいよ、吸血鬼が暴れてるなら止めないと!?! 帰るなんて正気!?!」

「色欲のお兄様の幻術に巻き込まれるのは御免だわ」

「は?!?色欲って、確か七番目の:?!いや違う今はそんな場合じゃないでしょ!!?!ちよつ、有紗まで押さないで!!」

「ご、ごめんね?!?でもなんか、もう別の真祖も飛び出してきてるみたいだし:..」

冷優に襟元を捕まれ背中を有紗に押され、大人しくとは言い難いまま、百合音は強制送還されていった。

家に帰り着くや否や、百合音はやや乱暴に冷優の手を振り払った。何も言わずとも玄関を上がった時点で襟首から手を離していた冷優に対しては全く意味のない動作だった。

そう広くもない廊下で数歩距離を空けて振り返った冷優は、氷のように冷たい瞳を百合音に向けた。彼女が食って掛かるより先に、冷優の方から言葉の槍が放たれる。

「いい加減にして。昨日あれだけ言ったのにまだ理解していないの?!? 吸血鬼絡みの事にこれ以上首を突っ込むのは止めなさいと言っているのよ」

言葉も瞳も凍えるような温度の低さを伴っているにも関わらず、その中には明確な怒りの色が感じ取れた。

だが勿論、百合音の方も怒っているわけで。

「同級生が襲われてたのに黙って見ていられるわけないでしょ!?!」
彼女は感情を露にすることを厭いとわず、怒鳴るようにそう言い返し

た。

青の瞳がいつそう温度を下げっていく。

「姿は見えなかったけれど、あの場には怠惰のお兄様も色欲のお兄様も居た。貴女が飛び出さなくとも勝手に事態は収束すると、どうしてそのくらい推測が出来ないの？」

「他の真祖の気配なんて読めるわけじゃないでしょうが!?!それにその推測が必ず当たるなんて保証はないわ。もしも何かあった時にその場に居なくて、何が出来るのよ!」

「何も出来ないわ」

あまりにも迷いのない首肯を受けて、百合音は言葉に詰まった。

次の台詞を考える間もなく、形良い唇が動く。

「だから最初から、何もするなど言っているでしょう」

「……………」

にべもなく吐き捨てられたその台詞に百合音は完全に言葉を失う。元々この二人は正反対なものの見方をする性格で、見解の相違によって衝突することは珍しくもない。だが、これほど一方的に、相手の考えを端から潰すような意見の押し付けをされることは滅多になかった。

絶句する彼女に冷優は青い瞳を^{すが}眇めて。

「……………とにかく、もう吸血鬼の揉め事に関与するのはやめて。私はお兄様たちと関わりたくないの。これ以上面倒な真似をしないでちょうだい」

言い捨てるように、冷優は踵を返して自室へ戻って行った。くるりと舞った白いワンピースの裾だけが、軽い調子で揺れていた。

冷優の足音が聞こえなくなった頃、口を引き結んで佇む^{たたく}百合音の袖を、後ろからちよんと有紗が引いた。控え目な声が紡がれる。

「あのね、冷優は……………何かを怖がってたんじゃないかな。何をかまでは、分からないけど……………」

「……………分かってるわよ、それくらい」

身長差の関係で上目遣いに見詰めてくる有紗に対し、不貞腐れたような素っ気ない口調で百合音は答えた。言われなくともそれくらい

は分かっている。さっきの冷優はまるで毛を逆立てて威嚇する猫のようだったのだから。

「分かっているけど……だから何だって言うのよ」

悔しそうな響きを乗せた呟きが、暗い廊下にただ反響する。

「閉じ籠って関わらなければ勝手に解決するものでも、ないでしょうに」

「……こうして、始まりの一日が終わった。」

歯車は回る。

避けようとも、見ぬ振りをしようとも、既に組み込まれてしまった歯車は逃れられない。

物語の主軸となる歯車は、少女たちの運命をも噛み合わせながら、今この時も回り続けている。

17. 歪みと矛盾

帰り道のことだった。

軽やかな下駄の音が響いたかと思えば、視線の先で歩いていた一人の学生が、消えた。

「……………え…?」

丁度、その学生に追いついて声を掛けようとしていた百合音は、足を踏み出しかけた状態で立ち止まった。道行く人々が急に動きを止めた彼女に一瞬だけ視線を投げてくるが、当の本人はそれどころではない。

（あれ、昨日ベルキアさんに飛びかかった男子だったわよね??今、いきなり、消えた…?）

商店街の一本道でのことである。前方を歩いている少年が、昨晚の事件でベルキアを止めていた彼だと気付いた。それなりに距離があったので軽く走って追いつこうとした矢先に、少年の姿が消えたのだ。

学生が昨日の彼だと認識してから、百合音は目を離してはいない。周りの人間に姿が紛れるほど混雑はしていないし、彼が走り去るような素振りもなかった。本当に忽然と、彼だけが別の場所へ瞬間移動してしまったかのような消え方だったのだ。

手掛かりは一つ、聞き慣れた下駄の音。

そこから連想できる人物は、今の所ただ一人。

考えが行き着いた瞬間、百合音は自宅に向かって全力で駆け出していた。肩に掛けたスクールバッグの中身がガサガサと音を立てて揺れているが、気にしている場合ではない。

（さっきのあれはたぶん椿さんの幻術。冷優なら何か手掛かりが掴めるかもしれないっ!）

百合音と契約している九番目の真祖は、幻術を操ることが出来る。色欲の兄には敵わない、と本人は言っていたことがあるが、彼女の性格を鑑みるに恐らく「勝てないだけ」であって、「負けない」程度の力量はある。

乱雑に玄関のドアを解錠し、冷優の私室に駆け込む。

「足音が五月蠅いわよ。もう少し静かに歩きなさい……っ!!」

「時間がないの!?!さっさと来て!!」

相変わらず読書に耽^{ふけ}っていた彼女の腕を掴んで百合音はぐるりとUターンする。びっくりしながらリビングから顔を出していた有紗に鍵を閉めるよう頼みつつ、途中で廊下にスクールバッグを放り出して外へ出た。一方の冷優は表情だけは珍しく驚きを示したものだ。だが、引つ張られている方とは逆の手で本を持って来ているあたりが彼女らしい。

道路に出た所で陽の光に当たって猫姿になった冷優を腕に抱え込みながら、百合音は元の商店街を指して再び走る。

少年が消えた場所まで来て、そこでようやく百合音は足を止めた。そこそこの距離を全力疾走したせいで上がった息に邪魔されながらも、腕の中の白猫へ要件を話す。

「……でっ、昨日商店街にいた男子が、消えたの!?!椿さんの、幻術だったとしてっ、どこに行ったか分からない!?!」

「……………」

どうして椿の仕業だと仮定するのかについて何の説明もしていないが、相手は「一を聞いて十を知る」を地で行く聡明な少女だ。証拠に冷優は、要点しかない百合音の言葉に疑問は挟まずじっとコバルトブルーの瞳を商店街の一点に向けていた。

そして、唐突に百合音の腕から抜け出そうと暴れだす。

「えっ、ちょっとー!」

腕の中でもがく冷優との攻防がしばらく続き、一瞬の隙を突いて猫の肢体が伸び上がるように飛び出した。

「あっ……!」

捕まえ直そうと伸ばされた百合音の手をしなやかな動きで躲^{かわ}し、くると回って冷優は彼女の背後へと落下していく。

そしてその途中、後ろ足で思い切り百合音の背中を蹴り飛ばした。

「うわっ!?!」

猫の脚力を甘く見てはならない。自分の身長は何倍もの高さへと

軽く跳んでみせることからそれは分かるだろう。

前に倒れることを予測した身体が咄嗟に手を突く準備をしようと腕を前に出す。その動作と同時に、ざわりと周囲の空気が変わったのを百合音は感じ取った。

「……て欲しいだけなんだっ!!」

先ず聞こえたのは、椿の声と、何か硬いもの同士がぶつかる甲高い音。その音の正体を認識する前に百合音は、蹴り飛ばされた勢いのまま前につんのめり地面に転がった。

「……っい、たあ……」

後ろから押されて倒れ込んだせいで体の下敷きになった腕の痛みに小さく呻き声が漏れる。その時、俯せの状態の彼女に見えたのはアスファルトではなく、霧に^{ぼか}暈されて曖昧な地面だった。

サアサアと雨の音が耳につく。

聴覚からの情報と体感が合わない。ずっと降り続く小雨の音が聞こえているのに、肌に雨粒の感触はない。

顔を上げて見渡せばそこは商店街ではなく、赤い霧の立ち込める空間だった。

次いで、突然現れた彼女に驚愕している三人の人物が視界に入る。昨日の少年と椿、そして椿の持つ刀を服の裾(?)で受け止めている薄い水色の髪の青年。

だが、辺りを見回しても白い猫の姿が見えないことに気付いて百合音は心の中で舌を打つ。

(あの子、私を放り込むだけ放り込んで一人で帰ったわね……!)

仮にも主人を置き去りにする下僕とは如何なものか。しかし、それだけ兄たちに「会いたくない」という意思表示でもあるのかもしれない。

直後、また高い金属音が響いて椿と水色の青年が距離を取った。左手に黒い刀を構えた椿が、雨の音を掻き消すように笑う。

それから、ゆったりとした挙動で彼は百合音の方へ身体を向けた。

「やあ、百合音。まさかこんなに早く再会できるなんて思わなかったよ」

「私もです。けど同級生が巻き込まれてたら見過ごすわけにいかないじゃないですか」

同級生、という単語に少年が驚いた顔をしていた。立ち上がりながら、同じオレンジ色のブレザーに身を包んだ彼を改めて正面から見て、百合音は彼の特徴と頭の中に入れてある名前とを照らし合わせる。

「貴方、城田真昼くんであつてるかしら？」

「え、なんで、俺の名前……」

「私は隣のクラスの五組の、鈴白百合音。貴方の名前は虎雪くんから聞いたことがあるわ」

虎雪の知り合い……!?と目を見開く城田真昼に詳しい解説は付け加えることなく、油断せず百合音は椿に向き直る。

すう、と息を吸い込んで、左足首に意識を集中させる。

すると白い光が螺旋を描いて飛び出し、黒い大鎌を象かたどって彼女の手元へ落ちてきた。

輪郭だけが白く輝くその柄を両手で掴み、彼女は自然な持ち方で構え直す。その大きな見た目に反して軽く振るえる程度の重さしか感じない。手に馴染んだそれを握れば、神経が研ぎ澄まされる感覚があつた。

「へえ、それが君の武器なんだね」

興味深そうに呟きながら、椿は百合音ではなくその周辺に視線を配っている。恐らく、彼女の真祖の姿を探しているのだろう。見付かるわけがないのだが。

案の定、不満げな顔で「ねえ、君の真祖はどこ？」と問い掛けられた。仕方がないので百合音は素直に答える。

「帰りました」

「は??主人イザの君を置いて?」

「はい」

「……仲悪いの?」

何故か、若干憐れむような視線が椿から送られてくる。

「別に悪くはないですよ??あの子と仲良しこよしになるのは寒気がし

ますけど」

「いや完全に仲悪いだろそれは……」

成り行きを見守っていた真昼からもツツコミが入った。反りが合そわないだけなのだが、と百合音は納得のいかない面持ちおももで眉を潜める。

その時。

「ねエねエつばきゅん☆結局コイツどーするのオ? ★☆☆★」
「!!!?」

突然足元から聞こえてきた声に百合音はその場から飛び退いた。

二歩分ほど離れ、元の位置を見下ろせばいつの間にかそこには既視感のあるフォルムの人形が座っていた。

「え……………ベルキアさん?」

「他のナニに見えるのサア? ★☆☆★」

「本人!」

近付きしやがみ込んでまじまじと観察すれば、見慣れた手品師の服装に白いシルクハット。眼はボタンで口は縫い目。袖は何故か萌え袖状態になっている。

(可愛い…………)

物へのこだわりが薄い彼女だが、可愛いものは素直に好きである。おもむろに鎌を地面に置き、しやがんだまま百合音はベルキア(人形)に手を伸ばし腕に抱え込んだ。手足をだらんとしてされるがままなところがまたあざとい。

人形フォルムのベルキアを抱っこした後、少し遅れて百合音は首を傾げた。ベルキアが言った、どうする?、とはどういう意味なのか。既に彼女は風谷の元に戻った、自由の身なはずなのだが。

疑問符を浮かべた百合音が椿の方へ視線を投げれば彼は彼で、んー、と右袖で口許を隠しながら悩む素振りを見せている。一体憂鬱の彼らの間では鈴白百合音に関してどんな議論があったのだろうか。

「迷うくらいならさア、とりあえず連れて帰っちゃえばア? ★☆☆★ どうするかは後でも考えられるしイ☆☆☆」

いつものノリでさらつととんでもないことを提案したベルキア（人形）を百合音は反射的に放り投げた。ペしやつ、と軽い音を立ててベルキアが顔面から地面に落ちる。

「イツた〜い!? ナニすんだヨ〜!! ★☆☆★」

俯せでジタバタしている様子は絵面だけなら可愛らしいのだが、暢気のんきにそれを愛でている場合ではない。何故ならば、

「あはっ……そうだね。そうしようか」

椿が乗り気になってしまっているからだ。

「お断りします。前みたいにやすやすと拐さげられるつもりはありませんよ」

大鎌を両手で掴み直して立ち上がり、百合音は椿と対峙する。

と、その前に。

「椿さん、一つ聞きたいことがあります」

「なあに？」

「貴方は何をしようとしてるんですか？」

「君さっきの僕の話聞いてな……あ、聞いてなかったね」

「どんな話か知りませんが、聞いてないですね」

え、さっきのくだりもう一回やらなきゃダメ？と引き気味に少し後退る椿。どうも、百合音がこの空間に割り込む前に城田真昼に対して似たようなことを話してしまったようだ。

「別に長々と語ってもらうつもりはありません。私はただ、どうして一般人を襲ってるのかの根本的な理由が聞きたいだけです」

「……僕は『戦争』がしたいんだよ。僕と、僕を知らない兄さんたちとの『兄弟戦争』が」

「椿さん一人対真祖七人ってことですか？」

「そうだよ。だから君の真祖が誰なのか、早く知りたいんだけど」

「……近いうちに分かると思いますよ、きつと」

「へえ……」

ゆら、と白い羽織が揺れる。それは彼が動き出す前の、僅かな予備動作。

「それは楽しみだねっ……!!」

「！」

ガキンツ!!と鋭い金属音が響いた。一瞬で距離を詰めて襲い掛かってきた椿の刀を、寸前で百合音は鎌の柄で受け止める。

しかし当たり前だが、吸血鬼と張り合えるような腕力は彼女にはない。このままでは数秒ともたずに押し切られるだろう。

「クロツ!!」

「めんどくせーのが増えた……」

怠そうな低い声とは裏腹に機敏な動きで水色の青年が百合音と椿との間に割り込んできた。状況から察するに、彼は城田真昼と契約した真祖サイヴァンなのだろう。上着の裾が黒く伸びて、椿の刀と拮抗する。

キンツ!と硬質な音が響き、一度距離を取るために後ろに跳んだ真祖に対し、追った椿の飛び蹴りがその胴に入った。仰向けに地面に叩き付けられた彼の胸部を、潰す勢いで椿の下駄が踏む。

内臓が破裂でもしたのか血を吐いた真祖を、更に椿は蹴り飛ばした。

「クロツ!!」

「……はあっ!!」

血を流す真祖に駆け寄ろうとした少年を庇う形で椿の前に飛び出し、百合音は横風ぎに鎌を振るう。が、椿は身軽な跳躍一つでそれを避け、宙でくると身を翻して上から百合音へと斬りかかる。

「っー」

刃を受け止め、直ぐに重点をずらして受け流したところまでは良かった。

しかし今度は着地した椿が水平に刀を振るう。柄で刃は防いだものの横合いからの強烈な衝撃に堪らず百合音はバランスを崩してしまった。片足が地面から離れ、危険を感じた瞬間にはもう、更に重い打撃を鎌の柄に叩き込まれて百合音の身体は吹き飛ばされていた。

「……っ、……いー」

赤い霧に覆われた地面に転がった彼女に慌てて駆け寄ろうとした真昼が、首元に刀の切っ先を向けられて否応なく立ち止まる。

動くことを禁じられたからか、収まりきらない感情と思考が彼の口

から溢れだしていた。

「分つかんねえ……戦争つてなんだよ……何でそんなこと……!」

混乱を如実に表している城田真昼の胸ぐらを、椿が掴んで持ち上げた。そして端的に答えを放つ。

「面白いからだよ」

聞き慣れたそのフレーズに、思わず百合音は体の痛みを無視して顔を上げた。椿の横顔を食い入るように見詰める。

「面白いから」。それは、彼女の保護者である風谷巽がよく口にする台詞だった。

だが違和感がある。同じ理由なのに、全く違うように聞こえる。

「誰が死んだって関係ない。僕が面白いなら他のことはどうでもいい」

続いて放たれた台詞を耳にして、百合音はその「ずれ」の正体に気付く。

(……ああ、道理で……)

二人の違いが、分かった。

風谷もまた自分が面白ければ他のことはどうでもいいと豪語する人間だが、彼女の根幹を成すのは意外にもまともな道徳心だ。だから風谷は常に、一つでも多くの命が守られるようにと、無意識下でそういう方針に従った行動を取っている。要は彼女にとっては、如何に命を潰すかより如何に救うかを考える方が「面白い」のだ。

(それに、風谷はあんな顔はしない……)

無表情の上に狂気を塗りたくって笑みを貼り付けたような椿の表情は、同じように「面白い」という理由を口にする時の風谷とは全く異なる。風谷ならばもっと、心の底から愉快そうで、子供のように純粋な笑みを浮かべて言う。両者は同じ理由を掲げていても、そこに込められた感情に明確な差があるのだ。

そして、普通に考えて言葉と表情が噛み合っていないのは、椿の方である。

(……いつもは笑いながら面白くないって言うくせに、面白いからって言ってるときの顔がそんなんじゃない、いつまでたっても笑えません

よ)

一つ、確かに見付けた椿の「歪み」。

人は簡単に矛盾や歪みを抱えるものだが、それらが深く心に根を張ってしまふと非常に生き辛くなる。その苦しみは、百合音もよく知っている。

「君に僕の気持ちは分からないし、どうせ誰も僕を知らない。どうせ世界の誰も僕を理解しない」

不自然に感情の削がれた声だった。

まるで何度も口にしたせいで、乗せていたはずの感情が擦りきれて^{まもろう} 磨耗してしまつたように。

一体何度、彼はその言葉を口にしてきたというのだろう。言葉はある種、呪いだ。自分自身を圧迫し、歪めていく呪いだ。椿の心は、どれほどその歪みに蝕まれているのか。しかしそれを知る術は、今の百合音にはない。

「……何も面白くないのは、お前が自分の気持ちと向き合えてないからだっ……!」

その時、苦しい体勢のまま、それでも絞り出すように言葉を紡がれた真昼の台詞に百合音ははっとした。

強い意志を込めて放たれる言葉は、ただの一般論から組み上げられた正論とはどこか違う。

「お前が、誰も自分を知らないって感じるのはっ……、お前自身が誰とも向き合っていないからだ……!」

真昼の言葉に椿はきよとんとした顔で瞳を瞬かせた後、理解不能だという意思表示をしてから彼の身体を放り出した。

そして、嗤う。

「そうかもねえ?!?!だから「戦争しよう」って言ってるんだ!? コミュニケーションの手段だよ!? ポジティブでしょ!?!」

「違えよ!!?!? お前がどうしても戦争するっていうなら、俺が止める!!? 俺にだって、お前と向き合う手段があるんだ!!!」

少年が、立ち上がる。

「吸血鬼は、名前を付けて血を飲ませれば、少しは俺の言うこと聞くん

だろ……っ!？」

強い決意を秘めた真昼の表情に百合音は息を呑んだ。椿と過ごした時間の中で彼女の手が届かなかった部分に、彼は一気に踏み込もうとしている。

……ぶわり、と百合音の周囲に青い霧が発生したのはその時だった。

「俺と向き合えって言ってるんだ!!?」

「……」名前を付けてやる!」
椿に正面からぶつかっていく城田真昼の姿が、青い霧に邪魔されて見えなくなっていく。……」

……」はた、と気が付けば、百合音は薄暗い路地に座り込んでいた。

「……気は、済んだかしら?」

「っ!」

振ってきた声に対し反射的に見上げれば、彼女の傍らには不機嫌そうな冷優が立っている。どうやら帰ったわけではなかったらしい。彼女によつて、あの空間から強制的に引きずり出されたようだ。

「……城田くんたちは?」

「性欲のお兄様が助けたわ」

簡潔な答えだった。それ以上のことは、話したくないというように。

しかし百合音には、聞いておかなければならないと思う疑問があった。

「ねえ、どうして椿さんは貴女のことを知らないの?」

「……………」

百合音が敢えてした質問で、
「椿さん一人対真祖七人」と言った時、椿は躊躇いなく頷いていた。それが過不足のない正解である信じ、何も疑っていないかった。

吸血鬼の真祖は七人兄弟。上から怠惰、傲慢、嫉妬、憤怒、強欲、暴食、性欲。そのことは大分前に冷優から聞かされたことがあった。

ならば、八番目と九番目は共に「番外」の存在であるといえる。し

かも、椿も冷優も過去にC3に居たと聞いている。こうも境遇が同じであるのに、何故椿は冷優の存在を欠片も知らないのか。

百合音の問いに、彼女は一瞬だけ眉を動かし、それでも無表情を貫いた。

「お兄様たちは誰一人も私の存在を知らない。それでいいの。……そうでなければならぬの」

最後に付け加えられた言葉はどういう意味かと百合音が尋ねるより先に、冷優は踵を返して背を向けていた。

(……兄弟の誰からも存在を認知されてない状況に、悲しんだり憤ったりするならまだ分かるわ。けど、〃そうでなければ〃なんて台詞が出てくるのには絶対に何か、別の理由が挟まっているはず。……それに、)

先程、冷優の顔を見たときに百合音は幻術空間で椿に対して感じたものと同じ〃ずれ〃を感じた。

(どう見ても、〃それでいい〃って顔してなかったわよ……)

真祖たちのことを〃お兄様〃と呼んでいることから考えても、冷優は決して兄たちに悪感情を抱いているわけではないように思う。寧ろ、感情表現に乏しい代わり^かに知的好奇心旺盛な彼女のことだから、実は会ってみたいと思っ^ているという方が百合音には腑^ふに落ちる。表情の違和感と合わせての直感だが、冷優もまた、椿とは違った矛盾を抱えているのかもしれない。

それでも今は何も言わず、百合音は既に帰路を歩み始めている冷優の背中を追った。

だが、路地から商店街へ戻る直前で、ふと足を止めた冷優に阻まれる。

「……僕の名前は〃椿〃だ。…ねえ??先生……」

コン、という下駄の音と一緒にどこからか聞こえた椿の呟き。

「……………先生」

その名を、冷優は噛み締めるように繰り返していた。

それは、普段の淀みない彼女の口調とは違う、酷く頼りなさげなものであった。

18. 記憶を手繰（たぐ）る

「……分らないなら、分かる人に聞けば良い。

そういう訳で、冷優と共に家に帰り着いた百合音は風谷の部屋へ直行した。彼女に尋ねれば大抵のことに関しては何ら正確な答えが返ってくる。

しかし。

「『なぜ椿は冷優のことを知らないのか』、か……難しい質問だね」
百合音からのストレートな質問を受けた風谷は、そう言って苦笑した。珍しい反応である。

仕事用のデスクの前に座っている風谷に、向き合うようにベッドに腰掛けながら百合音は、先ずは事実確認に立ち返ることにした。

「冷優って、貴女がC3から引つ張り出してきたのよね？」

「雑な言い方だとそうなるね」

「でも椿さんが、自分と同じようにC3に捕らえられてる真祖のことを全く知らなかったなんて考えにくいのだけど」

「あの子は少し、扱いが特殊だったんだよ。……というより、C3の方も、どう扱っていいのか困っていたと言った方が良いかな」

特殊??と尋ね返す百合音に、私室の中ですら白衣姿な彼女は頷く。そして口を開いた。

「あの子は元々、C3では『未完成の真祖』と呼ばれていた」

「『未完成の真祖』?」

聞き慣れず、意味も理解しがたいそのフレーズを百合音はそのまま鸚鵡返しに繰り返した。再び領いた風谷の手が、おもむろにデスクの上にあった黒ボールペンを掴み取る。彼女の手の中で、準備運動のように一度、百円均一の量産品がくるりと回された。

「そう。あの子はまるで茨姫のように、ただ眠り続けていたんだよ。脈拍や心拍、脳波、血流なんかの状態は何ら異常なしのまま、意識だけが覚醒しない。瞳だけを開かない。そんな状態だから、ずっとC3の最下層近くに『保管』されていた」

遠い国の歴史を語るように、淡々と風谷はそう語った。その間、速

くもなく遅くもない口調とは裏腹に、軽く残像が見える速度で黒ボールペンが彼女の指の間を駆け巡っていた。

「……でも、貴女が連れてきたときにはもう、あの子は」

「うん。誰がどう見ても欠陥のない真正銘の真祖だったね。私があるの子を『完成』させたから」

「えっ」

「という言い方には少々語弊があるけど」

「……………」

「ふふ、ごめんね。でも別に間違っではない。私があの子を目覚めさせたことは事実だ」

結局どっちなのか、と百合音は無言で続きを促す。風谷の言葉遊びに付き合っていたら今日中に話の核心にまで辿り着けない。

「さつき言ったように、あの子はC3施設内で眠り続けていた。だから私はまず、直接あの子と会話するためにあの子の中に入った」

「……………入った？」

「サーヴァント真祖には未だに謎めいた事象が多いが、その一つとして真祖の心の中のような空間に他者が取り込まれるという現象が確認されている。君も過去に一度、そうなったことがあるだろう？」

真祖の心の中に取り込まれる、と聞いて、百合音の脳裏にはまだ九番目の真祖と契約して間もない頃の、ある記憶が呼び覚まされた。印象的だった部分を挙げるなら、比喻抜きに埋もれそうなほどの量の本と、幸せを唄う青い小鳥、そして光を帯びた水を湛たえた泉。全くもって、心理世界と表現する他ないような奇妙な世界だった覚えがある。

「その頃、とある研究者が『意図的に真祖の内部に入る方法』を研究していてね。実験名目で、その試作品を使わせてもらった」

そして、結果としては実験成功。風谷は心理世界で冷優と会うことが出来たという。

語りながらも人差し指から小指まで、指の間をボールペンの行ったり来たりが止まらない。

「まあ色々あったんだけど、最終的にあの子は私の手を取ってくれた。その瞬間、気が付いたら現実に戻っていてね。あの子は既に目を

覚まして起き上がったよ」

だから私にもあの子を完成させたなんて実感はろくにないんだ、と。締め括ると同時にボールペンがピタリと静止する。

大雑把にもほどがある説明に百合音は取り繕う気もなく呆れ顔になった。話の最後が簡略化されすぎていて一気に理解が浅くなる。

「重要な部分を『色々』で済ませますのやめなさい。…あと、毎回毎回何なのその手の動きは…」

「うん??今やってたのはたぶん、ハーモニカルフルーエントソニックかな」

「別に技名が知りたかったわけじゃないわよ」

誰がどう見てもそれなりに熱中した経験があるのだろうとわかる技術のペン回しは、考え事をしてるときや昔の記憶を手繰り寄せるときに出る彼女の癖である。気付いたときには回して、手近なペンを手に取る瞬間は完全に無意識なのだとか。

「ま、それはさておき。その後、私はそのままあの子を引き連れてC3から脱走してきたわけだ。未だに私がC3職員から嫌われているのはこれが主な原因だね。彼らにとって忌むべき吸血鬼の真祖を、増やして外の世界へ放つたのだから」

「……それが五年前、貴女が冷優を連れて帰ってきた日の真相ってわけ?」

「そうだよ」

「……………」

風谷の返答は、その一言だけだった。これまた珍しい、と百合音は数度瞬く。

以前椿に、情報屋の娘なのに吸血鬼に関する情報を何も持っていないのか」と訊ねられて、百合音は「娘だからと何でもかんでも教えにくれるほど仕事を軽んじてる人ではない」と答えた。

あれは半分嘘である。

風谷は確かに仕事を軽んじてはいないが、家族に対してはよく世間話のような感覚でぼんぼんと末端の噂から機密レベルの情報まで躊躇いなく漏らしている。聞いてもないのに喋るので、大体は話し半

分に聞き流しているのだが。

しかし風谷は今回、百合音の確認に頷くだけで話をろくに広げようとしなかった。余計なことまで喋るのがデフォルトな彼女にしては、かなり消極的な態度と言えるだろう。

(……それに、)

今までの話で風谷は、重要な部分をあからさまに暈ほかした。そして普通、核心が欠けた内容を「真相」とは表現しない。指摘されれば「嘘」だとも言えそうな、ぎりぎりの言動を彼女はしたのだ。

普段なら風谷は、特に百合音に対してはいつも誤解を生まないように真実を包み隠さず伝える。それは、家族だからという理由の他に、鈴木百合音は嘘が大嫌いだとよく知っているからだ。

それでもグレーゾーンを行つたということは。

(それくらい話したくないってこと……?)

元々、風谷が昔C3とどういう関係にあったのかを百合音は聞かされていない。そこで風谷が何をしていたのかについては全くといっていいほど、話されたことがないのだ。この話もC3関連であるが故に、話したくない部類のものなのかもしれない。

「……だから椿があの子の存在を知らなくても、私は無理のないことだと思う。そもそもあの子は真祖として扱われていなかったし、保管されていること自体も一部の職員しか知らない情報だったのだからね」

「……なるほどね」

簡潔に締められた結論に、別のことを考えていたことを悟られないようにしつつ百合音は相槌を打った。本題の方へ思考を戻す。

椿が冷優を知らない理由は一先ず風谷の提示した理由で納得できる。しかしそうなると今度は、眠り続けていたにも関わらず「何故冷優は椿や他の真祖についての明快な知識があるのか」という謎が新たに浮上してくる。

(……まあ、これは本人に聞いた方が早いかしら)

どうやら真祖としての冷優に関することは、風谷にもあやふやな部分が多いらしい。近い内に何とか彼女自身から答えを聞き出してみ

ようと、百合音は心に決めた。

「ところで百合音。私からも一つ質問があるんだが」

「何?」

この時、あの白猫の口をどうやって割らせようかを脳内で試行錯誤していた百合音は、適当な調子で質問内容を促してしまった。

だから、何でもない口調で続けられた風谷からの次の質問に、一瞬思考が停止した。

「綿貫桜哉は、友人かい?」

「……………」

全く別の話題を持ち出され、百合音は戸惑う。

「……どうして、ここで彼の名が出てくる?」

理由は見当もつかず、不吉な予感だけが彼女の胸に渦巻き始めた。

息を詰まらせ答えを発することが出来ないままの彼女に、風谷の呂色の瞳がすっと細められる。

「彼には、深入りしない方が良いかもしれない」

「……………」

「君が苦しむことになるかもしれないから」

きつぱりと、風谷はそう言った。

「かもしれない」と仮定として話しているにも関わらず、その言葉には確信がこもっていた。

風谷異は曖昧な予測を口にしたりはしない。だからそれは、百合音の知らない根拠によって徹底的に裏付けされた未来像なのだろう。

ぐつ、と無意識に百合音は奥歯を噛み締めた。

風いだ光を宿す呂色^{ろいろ}を、正面から見つめ返す。

ここで俯いてはならないと、直感的に彼女は感じていた。苦し紛れでも、何か言わなければならぬ。ここで沈黙を保ってしまえば、もう二度と彼に顔向け出来なくなるような、そんな予感があった。

諭^{たと}えこの先、風谷の言った通りになったとしても。

「……………」桜哉くんは、友達よ。私がそう言い出したんだから」

百合音は絞り出すようにそれだけを言って、ベッドから立ち上がる
と逃げるように部屋のドアノブに手を掛けた。

ドアを開ける瞬間、背を向けた風谷から追うように言葉が掛けられる。

「そうか。それなら、止めはしないよ」

きい、と無遠慮にドアが軋みの音を上げる。

「ただしその言葉を……決して、最後まで忘れずにいなさい」

ドアが閉まる音の直前に百合音の耳に届いた声は、どこか愁いを帯びていた。

ばたん、と閉められたドアを見詰めて、風谷は小さく溜め息を吐き出した。娘とその友人の行く末を案じて瞳が揺れる。

(私のように、拗らせなければいいんだが……)

きつと拗れるだろうなあ……と風谷はぼやく。

同時に、もつと早くに『綿貫桜哉』について調べておけば良かったと後悔した。

(もし彼が、彼の過去から私が推察した通りの人格形成を遂げていたら、十中八九あの子とは相性が最悪だ)

深入りすれば百合音は苦しむだろうし、悩むだろう。

しかしそれが彼女の精神的な成長に繋がる可能性も、無いとは言えないのだから、もうどうしようもない。

(一体どうするのが正解なのか……。こんな時、誰かに相談できれば、な)

心の中でそう呟き、その呟きを反芻して、風谷は自嘲気味に表情を歪めた。

(いや、違うか。『誰かに』じゃない。『君に』相談できれば、だな)

今も昔も、『相談相手』で真つ先に頭に浮かぶ人間は、風谷には一人しかいない。

目を閉じれば、アフターファイブなどお構い無しに今も仕事漬けになっているだろう『彼』の姿が、瞼の裏に浮かんだ。特徴的な逆三角形の眼鏡を掛けた、生真面目で若干不幸体質な、優しい『学友』の姿

が。

(君はまだ、私のことを友人と呼んでくれるかな……)

ねえ、露木……?)

答えはない。

どれほど記憶を手繰り寄せようとも……その答えだけは永遠に、得られはしないのだから。

19. その罪の名は

さて、諸君は覚えているだろうか。

風谷家（仮）では、家事は当番制である。しかも四人の内一人が料理下手、一人が不在常習犯なので、基本的に料理当番は百合音と冷優の二人で回っている。

その状態で、片方が一週間もの間、不在を余儀なくされたらどうなるか。

当然残された一人が料理を作り続けるはめになる。つまりは冷優が補っていたのだ。そこに関しては百合音も申し訳なかったと思っている。

だが問題はその後だ。

滞納した回数分、きっちり返納を要求された。いつ作ったのか、臨時の当番表まで用意されている周到ぶりである。当然と言えば当然なのだが、決して自分から一週間家を空けた訳ではない百合音としては複雑な気分にもなる。

しかし借りは借り。彼女は真面目に一週間分の当番を引き受けることにした。

（夕飯はあれとあれとあれで……明日の朝は……）

そんな事情を背景に現在、百合音は放課後の学校からスーパーへ直行し食料品売り場をさ迷っている。頭の中は完全に主婦そのものである。

菓子パンコーナーの横に並んだ厚切り食パンに伸びた手が、消費期限を気にして手前の方の袋を掻き分ける。

一番期限の遠いものを選び取り、顔を上げた百合音の目に斜め横の卵売り場が映った。

（あ、卵安い……今日の夕飯で家にある分使っちゃうし、買つところかしら）

思考に従いそちらへ足が動く。

パックに記載された期限を見つつ卵を品定めする彼女の隣に、同じように安値の広告に釣られたらしき人が一人並んだ。

奥の方に隠された期限の長いパックを取ってカゴへ放り込んだ百合音は、そこでふと隣の誰かさんを見てしまった。

「……あ、」

彼女の漏らした呟きに触発されたのか、彼もまた百合音の方へ顔を向ける。

二人の視線がばつちりとかち合ったところで、その人物——城田真昼が叫んだ。

「……あつ、昨日の!!?」

まさかこんな所で出会うとは思っていなかったのだろう。髪色と同じ茶色の瞳が、大きく見開かれている。

百合音の方も、学校で会うならまだしも近所のスーパーで買い物中に会うとは予想していなかったものでそれなりに驚いてはいるのだが、彼の驚きはそれ以上だったらしい。

何から言葉にするべきか迷っているのか、結局ぱくぱくと口の開閉を繰り返すだけの少年。そんな彼を見て、百合音は一つ提案をした。「とりあえず、先に買い物済ませない?」

……決して立ち話が面倒だったからとかカゴが重かったからとかではない。急に大声を出した彼に対する他の客の視線が痛かったという、大人の事情である。

——十五分後。
エコバッグをぶら下げた学生が二人、夕日に照らされた帰路を行く。

「——それで、えっと、」

「鈴白百合音」

「ああ、鈴白さんも、俺と同じ主人……なんだよな?」

昨日の、椿の幻術空間での出来事を思い返しているのだろう真昼の問いを、百合音は素直に頷いて肯定した。あの時できたのは言い捨てるような自己紹介だけだったので、確認したいことは多々あるだろう。まだ冷優のことを話すつもりはないが、百合音自身に関する事ならば何でも答えるつもりをしていた。

「そうだ、椿と戦ってたとき吹っ飛ばされたりしてたけど大丈夫だった

たのか!? 怪我とか……!」

「心配しないで。受け身とつたし、大した怪我もしてないわ」

「そっか、良かった…」

心からほっとした表情をする彼に百合音は口許を緩めた。椿との関係すら疑われるような人物に対して真つ先に怪我の心配が出てくるあたり、かなり人が良い性格なのだろうと見当付ける。

少しの沈黙が挟まった後、思いきったように彼は真つ直ぐに百合音を見てこう言った。

「俺、椿を止めたいんだ。そのために一緒に戦ってくれる仲間がほしい。だから、鈴白さんも協力してくれないか?」

決意を秘めた瞳と視線が重なる。雑じり気のないそれを、百合音は好ましく思った。それに彼女としても椿を止めることに異存はない。「そうね。私も椿さんがやろうとしてることは間違ってると思うわ。だから、ぜひ協力させて」

そう言って手を差し出せば、眩いほどの笑顔で彼は手を握り返してくれた。

そこから暫くは、トントントン拍子に情報交換が続いた。

椿とは昨日が初対面だったこと、怠惰の真祖と契約したのもつい先日であること、肩にちよんと乗っている黒猫が彼の相棒であること等々。冷優がろくに話さないせいで現状に対する情報が欠けていた百合音にはかなり有意義な時間だった。

しかし互いに気になっていることに質問をぶつけ合うことで進んでいた情報交換の最中、真昼が指折り数えながら。

「クロが『怠惰』で、リリイが『色欲』で……鈴白さんは、『何』の真祖と契約してるんだ?」

「……私は、」

答えようとして、百合音は言葉に窮した。

真昼に九番目の真祖のことを言っただけの良いものか悩んだのではない。

(あれ、冷優って『何』の真祖だったっけ……?)

単に、正答が浮かんでこなかったのである。

そもそも冷優の口からそういう話をされたことがほとんどないの

で、一度も耳にしていなくてもおかしくはない。

口ごもった百合音に、真昼が不思議そうな顔をしていた。どう繕おうかと思案する彼女は、歩くペースを落としながら公園を横切ろうとして、はたと思わず立ち止まった。

公園の周りをぐるりと囲む花壇から、見慣れた白猫が覗いていたからだ。

赤いリボンチョーカーを首に巻いた青い瞳の猫など、野良でいるわけがない。間違いなく冷優である。

(いや何してるのよあの子……)

真昼も気付いたのか、百合音と同じく花壇の猫に視線を向けている。勿論彼はあの猫が百合音の真祖であるなど知るよしもないので、相変わらずの不思議顔だった。

白猫は、ただじつと青い瞳でこちらを見つめている。

しかしよくよく観察すれば、その視線の先に居るのは百合音ではなく真昼……の肩に乗っている、クロだった。

数秒、そのまま膠着状態が続いた。

正確には、白猫が興味をなくしたようにくるりと身を翻して公園の向こう側に走り去るまで、だが。

あ、と百合音の口からはまた意味のない母音が転がり落ちる。

冷優が何を考えているのかは分からないが、今は彼女を追わなければと百合音の勘が訴えていた。こういう時の彼女の勘は当たる。故に彼女の行動は素早かった。

エコバッグを地面に置き、しゃがみこんだままスクールバッグからメモとシャーペンを取り出して、膝を台座に走り書きをする。

「……ごめんなさい用事思い出したから帰らなきゃ!?!はいこれ私のメアド?!?後で適当にメールしておいて!」

「えっ!?!」

隅っこにウサギのシルエットがあしらわれたメモを真昼に押し付け、百合音は冷優を追って走り出した。真昼に引き留める暇も与えず、公園を突っ切つて路地へ入る。

角を一つ曲がったところには、彼女が追い掛けて来ることを予想し

ていたかのように、人の姿に戻った冷優が立っていた。胸元には白いハードカバーの本を抱き締めている。静かに青い瞳が百合音を映し、可憐な唇が動いた。

「懲りないのね」

「何が？」

「お兄様たちに関わるのはもういい加減にして」

「……いい加減にするのは貴女の方よ」

聞き飽きた台詞を、百合音は反論で返す。

「このままじゃいけないってことくらい分かってるでしょ??何も行動しないままじゃ、事態は悪い方向にしか転がらない」

「……私の問題よ。口出ししないで」

「貴女の問題ならなおさら、貴女が動かなくてどうするのよ」

珍しくも舌戦で冷優が押し黙った。

恐らく彼女自身も、「現状維持」が不可能であることくらい理解しているのだろう。

「……なら、私が憂鬱のお兄様と共に行動したいと言ったら、貴女はどうするの？」

いつも淡々と紡がれる彼女の声が、今は心なしか震えを帯びているように聞こえた。どうにも真祖に関する話題、特に椿が絡む発言をするとき、冷優はらしくない様子を見せる。

しかし、半ば嚇しおどのような彼女の問いに、百合音は迷いなくあっさりと答えた。

「別に、どうもしないわよ」

青の瞳が見開かれる。

寧ろ、そこまで驚かれることが百合音にとっては驚きなのだが。

「だって『私と貴女』だもの。意見が合わないのにはもう慣れっこよ」

「……………」

実際、冷優が椿の側につくというのは十分に可能な未来だ。先ず二人の間には限界距離の縛りがない。そして冷優には主人の血がない状態でもある程度は戦える戦闘能力があり、百合音も生身で吸血鬼を

相手に出来る程度には武器リードの扱いを覚えている。両者が敵味方の陣営に別れたとしてもそれぞれで実力を発揮できる。

加えて言えば、二人はお互いを敵に回すことに躊躇ちゅうちゆしない。

昔から、冷優が白と言えば百合音は必ず黒と答えていたような間柄だ。その度に衝突し手も足も出す喧嘩になり最終的に有紗に怒られるか風谷に諫めいさめられてきた。なので、今さら対立することに躊躇ちゅうちゆいも何も感じるわけがない。

「私が言ってるのは、このまま無関係を貫き通すのは諦めなさいってこと。だから貴女が椿さんの方へ行きたいならそれはそれで構わないわ」

元より、いつも隣に居なければ落ち着かないような関係ではない。百合音の言葉は本気だった。冷優もそれが分かったのか、言い返すことが出来ないでいた。

だが、ここでこのまま沈黙を続けても面白いことはない。

冷優の葛藤や自問自答の時間に付き合うつもりは毛頭もうとうないので、時間を埋めるために百合音は、風谷から話を聞いてからずっと疑問に思っていたことを問うことにした。

「それはそうと、どうして貴女はそんなに一方的に、椿さんとかについて詳しいわけ？」

全く空気を読まず投げ掛けられた百合音の質問に冷優は一瞬綺麗な顔を顰しかめたものの、小さな溜め息と共にそれに応じた。

「私がそういうふうふうに作られているから」よ

「はっ。」

流石に抽象的すぎると思ったのか、直ぐに具体的な説明が付け加えられる。

「吸血鬼サイヴァンブに関する事、中立機関に関する事、それから八人のお兄様たちそれぞれそれぞれの、特化した能力、外見、大まかな性格タイプまで。そういう情報を私は目覚める前から知っていた」

「………?」

何それ、と百合音は呆けたように息を吐いた。剩あまりにも斜め上を行く説明に理解が追い付いていかない。

彼女の思考回路が上手く回っていないことを見てとったのか、冷優は少し思案して補足を重ねる。

「電子辞書みたいなものよ。あらかじめ、私の頭の中には『先生』が決めた量の『知識』が登録されているの」

およそ『人』に対して使うものではない単語に百合音の表情は更に険しくなった。

「そんなの、貴女は機械と同じって言うてるようなものじゃない」

「そう解釈しても問題ないわ。これ以上詳しい説明をしても余計に分からなくなるだけでしようし。……それに私は所詮、『作られた側』だもの。私自身にも未解明な部分がある」

付属された説明書を読み上げただけのような、とても自らのことを語っているとは思えないような口振りだった。

機械と同じと言われても何の動揺もせず、それで合っていると答える。そこには何かしらの感情を押し殺した形跡すらなく、ただ当たり前前的事实を当たり前に受け入れているだけなのだと感じられるほどの無機質さがあつた。

何も気にせず、違和感も見せず、事実だから事実なのだと言口にすることを憚らない。

それは、集団の中で行えば大多数の人間の反感と嫌悪を買う言動の一つだ。だが、冷優にはそれが分からないということ百合音は知っている。

この場に他の誰かが居たなら率先して今の発言に噛み付いていたところだが、生憎と今は百合音しか聞いていない。そこに頓着するより、気になることを聞いてしまった方が良いだろう。

「『先生』って人は、どうして貴女をそういうふうに作ったの……？」

「それが私の冠する罪に、相応しかつたからでしょう」

「罪？」

「怠惰、傲慢、嫉妬、憤怒、強欲、暴食、色欲、憂鬱……お兄様たちのように、九番目の私にも罪が与えられている」

「ああ、その『罪』ね」

真昼に訊ねられて答えられなかったことを思い出す。果たして『先

生』なる人物は、目の前の少女にどんな罪を背負わせたというのか。
内側から言葉が溢れているかのように、滔々とした口調で形良い唇
から言葉が紡ぎ出される。

「私の罪は、私の行動原理、そのもの――」

湖畔のような静けさを保っていた青が、光を吸い込んだように爛々と輝きだしていた。

「それは私を表す、私の代名詞――」

それはある意味、彼女が無機質な機械などではないと証明するため
に在るようなものだった。

「そして、人を最も罪深くする果てしない欲」

その罪の、名は。

「――知欲」、よ」

きらりと。

白い本に挟まれた金色の葉が、夕日を反射して煌めいた。

20. 怖いながらも

キンツ、キンツ、と金属同士がぶつかり合う音が響く。広大な有栖院家の庭では黒い大鎌を武器とする二人、リリイと百合音が戦っていた。

無論二人とも本気ではなく、あくまで練習として武器を交えている。色欲の真祖は物理的な攻撃は得意ではないというし、百合音も他人の庭を荒らすつもりはないのだから。

現在、彼女は城田真昼と一緒に武器リイドの扱いを覚えるために有栖院家にお邪魔している。

先日メアドを交換した彼が話を通しておいしてくれた結果、多少の警戒は残れど百合音は有栖院の庭に入ることを許されていた。もつとも、椿の空間でのやり取りを聞いていたらしき色欲の主人イヅから「一体、貴様と椿はどういう仲なんだ!」と詰問されたので「新作アイスと一緒に味見する仲、かしら」と答えてみたところ、「なっ：そ、それはどのくらいの親密さだ!」という感じで一悶着あったが。

横風ぎに振るわれた斬撃を、百合音は後ろに跳んで避けた。余裕のある笑みを浮かべたまま、色欲の真祖・スノウリリイは容赦なく追撃をしてくる。

軽やかなステップと共に繰り出される斬撃は、重くはないが素早く隙を突いてくる。しかも力を込める素振りもなく振るってくるため、攻撃の前兆が読みにくい。言ってしまうえば百合音の苦手なタイプである。

カーンツ!!?と耳に痛い音が響き、リリイの大鎌によって弾かれた百合音の武器リイドが彼女の手から離れて放り出され、背後の地面に刺さった。

「では、このくらいにしておきましようか」

「はーん」

鎌を下ろして穏やかにそう告げたりリイに、素直に百合音は応じた。ここで食い下がる理由はない。状況的に、明らかに負けなのだから。

リリイと共に、屋敷の中で武器^{リイド}を出す練習をしているはずの真昼と御園の居る場所まで戻る。

「真昼くん、お疲れさま。武器^{リイド}は出せるようになった？」

「ああ鈴白さん、お疲れ。実はまだ全然で……」

「まあ、慣れね。挑戦あるのみよ」

「うっ……もう少しなんか、コツとか……」

「コツねえ……」

壁際で鎌の柄に腰掛けて足を休めながら、百合音は考え込むように首を捻る。

「……ってその鎌飛べるのかよ!？」

ナチュラルに浮いていた彼女に、数秒遅れて真昼のキレのあるツツコミが入った。

「ええ、まあ」

魔女のホウキよろしく細い鎌の柄に横向きに腰掛けながら、彼女は地面から一メートルくらいのところまで浮遊していた。見た目は鉄棒の上に座っているのと似たような感じである。

もつと地面すれすれを飛んでいけばバレなかったのではないかとも思うが、あまり地面に近すぎると「飛んでいる」という意識が薄くなるのか安定性がなくなるため、そこそこの高さを保たなくてはならないという事情があるのだ。

「この武器^{リイド}って、意外となんでもアリっていうか……強いイメージと意思の力さえあれば、結構色々できるみたいなのよね」

「だが、自由に出し入れも出来ないんじや、戦う以前の問題だ」

御園からの厳しい指摘に真昼がぐつと息詰まる。横でゲームに熱中しているクロに助けを求めるが、スルーされたようだ。

代わりに主人が座る椅子の横から顔を出したりリリイが助け船を出す。

「真昼くん??何のために力が欲しいのか、具体的にイメージしてみたらいかがでしょう」

「具体的に?」

「貴様の真祖^{サーヴァンテ}にやる気がないのは、貴様の意志が弱いからだ」

「じゃあお前のリリイが脱ぎまくるのは、お前が何かから解放されたがっつてること……!!」

「アレはただの性癖だっ!!」

あらぬ疑いを掛けられた御園が顔を赤くして反論する。その真横で若干脱ぎ始めているリリイは完全に面白がっていた。喧騒の傍ら、ぶらぶらと浮いている足を揺らしながら百合音はじつとそんな「彼ら」を観察する。

(警戒しながらでも私を入れたあたり、御園くんの方はわりと他人に對する許容が大きいわね。趣味嗜好は冷優と似てるような気もするし……)

百合音が今考えているのは、ここに九番目の真祖として冷優を放り込んだら誰がどんな反応をするかということだ。

三人が会話を続ける中、百合音はそれぞれの性格を鑑みて、彼らが彼女にどんな対応をとるかどうかを考察していく。

(怠惰の真祖と真昼くんは問題なさそうね。ただリリイさんはなんと
いうか……あの子と衝突はしないでしようけど、打ち解けるには時間
がかかりそう)

近々冷優の存在を露見させる前提で考えているので本人に聞かせればまた無言で睨まれそうだが、正直に言っつて百合音は彼女の存在を隠したままにするつもりがない。今は適当に話を逸らして伏せてあるが、いずれは彼らにも話さなければならぬと思っっているからだ。たとえ冷優が椿の元へ行くことを決めたとしても、それは変わらない。

「……まずは桜哉かな!?俺の幼馴染!」

「!」

思考の最中、不意に耳に入ってきたその名前に百合音は意識を真昼の方へ向けた。

「やめろ。巻き込むことになるし、椿のことがなければ、僕と貴様に共通の話題なんか……」

「シンプルにさ、友達の友達」が友達になっつたっつていいじゃん!」

真っ直ぐな瞳を持った少年の言葉は、百合音の脳内で右から左へ流

れていく。

(…そうだった。どうして今の今まで、考えてなかったの……)

綿貫桜哉。彼は椿の下位吸血鬼だ。

そして城田真昼の「友達」でもある。虎雪から名前を聞いたとき、もつとしっかりと結び付けておくべきだった。今になってその関係性を理解するなど遅すぎる。

(真昼くんが椿さんと敵対するつもりなら、桜哉くんは……)

こくりと、彼女は無意識に唾を飲み込んだ。

(……いや、それもだけど、)

真昼が放った台詞に、百合音はもう一つ可笑しな事実を見付けていた。真昼が桜哉のことを「幼馴染」と称したことだ。

綿貫桜哉は不老不死の吸血鬼なのだから、人間の城田真昼と「幼い頃から一緒に成長してきた関係」であるなどあり得ない。恐らくは幻術により真昼の記憶が改竄されている。だが、そもそも単に高校に潜り込むだけなら「幼馴染」などという設定を盛り込む必要はないはずだ。

(どうして、そんな嘘を……)

人間というのは基本的に、素直な生き物だ。嘘を吐くのなら何らかの理由を要する。

ふらりと、百合音の乗る鎌が安定性を失って僅かに揺れた。それは今の彼女の心の動きを端的に表したものだ。

その後、時計の針が九時を指した瞬間に御園が寝落ちたことよって、場はお開きとなった。

有栖院家からの帰り道を真昼と並んで歩きながら百合音は、思いついて真昼に桜哉のことを尋ねてみた。

すると彼は、少年らしい生き生きとした顔で、けれど少し気恥ずかしそうに。

「お調子者っていうかき、良くいえば、ムードメーカー?! まあ冗談ばっか言ってるようなやつだけど、でも、良いやつだよ」

「……そう」

椿のホテルに居る時の綿貫桜哉のイメージと違うことには、別段驚

かなかった。学校で友達に見せる顔と家で家族に見せる顔が異なるくらい、誰にでもあることだからだ。

だから、聞くべきなのはもつと核心的な部分。

「真昼くんは……桜哉くんのお家とか、行ったことある？」

「ああ、もちろん!?!小さい頃とかはほんとよく遊びに行ってたよ」

「そう、本当に仲が良いのね」

在りもしない記憶の温かさに笑う彼を、百合音は直視することが出来なかった。

彼は、何も知らないのだ。

何も、気付いてないのだ。

人は皆、現状に満足しているなら、その現状を作り上げているものを追求しようとはしない。取り巻く現実には嘘が紛れていても気付かない。幸せな現状に疑いの目を向けるなど、あり得ない。

そういう心理につけ込んで、人々の目を曇らせる。それは呼吸をするのと同じくらいに鈴白百合音という少女の体に染み着いている行動で、だからこそ醜悪に感じられた。

(……まるで、あの頃の私の周りの人たちを、外側から見せられているみたい)

甦る記憶に歪む表情を真昼に悟られないよう、百合音はそつと顔を伏せた。

それでも、垣間見えた事実に見ない振りをすることだけは、彼女の性格が許さなかった。

そうしてこの夜、百合音は絶対に気付きたくなかったことに、気付いてしまった。

綿貫桜哉が、自分と同類だということに――。

所変わって。

東京ワールドツリーホテル、最上階の一室。

シャムロツクが用意してくれた羊羹を黒文字で口に運びながら、椿

は（こ）一時間ほどずっと一人で考え事をしていた。

（うーん……………やっぱり、どう考えてもおかしい）

どれだけ頭を捻ってみても、結局辿り着くのは一つの帰結のみだった。

（僕の知ってる情報のどれかが間違つてるとか??…でもほとんどは僕が実際に確かめに行つた事実だし、ちゃんと別方面からも裏取りはしたしねえ…）

むぐむぐと滑らかな舌触りを楽しみながら最後の一切れを飲み込んで、椿は立ち上がった。羊羹の乗せられていた皿を持って、キッチンへ足を運ぶ。

白色灯の下で、何やら明日の朝ご飯の仕込みをしていたらしきエプロン姿の家族の姿を見留めて椿は相好を崩した。

「シャム、差し入れありがとう。美味しかったよ」

声を掛ければ、途端にぱつと効果音が付きそうな勢いで彼が振り向いた。

「若のお口に合つたのでしたら、恐悦の至りにございます」

恭しく頭を下げてくるのはいつものことなのでスルーしつつ、椿はお皿を返して手短に要件を告げる。

「少し外に行つてくるね」

「どちらへ？」

「ちよつと風に当たつてくるだけだよ。すぐ戻るから心配しないで」

下手をするといつてきそうな彼に先手を打ってやり過ぎし、エレベーターを使つて椿は屋上へ出た。ヘリポートの下をくぐり、室外機の辺りまで真っ直ぐ進む。夜風に吹かれて白い羽織がゆらゆらと揺れた。

こん、と足を止めて眼下の街を見下ろす。

そこへ身を投げて姿を消してみせた少女のことを、想う。

（この前会つたときに武器も確認したし、あの子が主人なのはもう疑えない。問題は、誰の“主人”なのかだけ…）

当然のこととして椿自身は省かれる。従つて七人兄弟のうちの誰かということになるはずなのだが……どうにも、おかしいのだ。

一体の真祖につき主人の椅子は一つだけ。椿が手に入れている情報に間違いがないのなら、その帳尻が合わない。

考えうるのは、持っている情報が正しくないのではなく、前提そのものが間違っているという可能性。

(…もし本当に、〃そう〃なんだとしたら、僕は、)

揺れているのは心か、現実か。

胸の内を占めるのは期待か、不安か。

「……いきはよいよいかえりはこわい」

やや掠れた低い声で、おもむろに椿は謡う。

「こわいながらも通りゃんせ、通りゃんせ…」

短い童謡は羽織を揺らす風と共に、月の浮かぶ空に消えていった。

幕間4 『沈思黙考して溺れゆく』

暗い暗い、水底へ。

踏み出せばもう、沈んでいくだけ。

『 沈思黙考して溺れゆく 』

ぺらり、ぺらり。 頁ページを捲めくる音が響く。

静かな自室で冷優は一人、夜半へ向けて日が傾く窓の外へ微塵も関心を示さずに、本の世界へのめり込んでいた。

彼女が腰掛けているベッドの反対側には、スライド式の二重構造になっている白い本棚が鎮座している。中身は九割五分が埋まっており、その内六割が日本語以外の言語で記述された本だ。堅い学術書から夢のある小説まで、分類はされているものの種類は多岐たきにわたっている。

音もなく、針が時間を刻む。

何事であろうと、集中していれば時間の進みは速い。窓から入る光の量はどんどん減り、室内の明るさは読書には適さないほどになっていった。

レースカーテンの引かれた窓の隣には、文字盤に金色のローマ数字が刻まれた時計が掛けられている。スイープ式の秒針は文字盤の上を止まることなく滑らかに動き続け、静寂を壊さない。長針は秒針に追い立てられるように進み、短針を道連れにして時の流れを示し続けている。

数時間ただ本の頁ページを捲る時間を過ごし、不意に室内に入り込む夕日の中に数羽の鳥の影が素早く過つたのを視界の端で無意識に捉えて、冷優は次の頁ページを開こうとする指の動きを止めた。

既に手元すら見にくくなっている室内の暗さによろやく気が付き、彼女は未練がましく頁ページを捲ろうとする指を離れた。読みそびれたところに、慣れた手付きで長方形の葉を挟む。金色のそれは隅っこに猫のシルエツトがあしらわれていた。

中断した本を脇へ置き、冷優はそのまま後ろに倒れた。ぼすつ、と

柔らかなベッドに受け止められるまま、白い天井を見上げる。

(……………)

読書から思考を放した瞬間、彼女の脳裏に浮かび上がったのは二人の人間の言葉。

『別に末の兄の側に付いたっていい』

『貴女が椿さんの方へ行きたいならそれはそれで構わないわ』

随分前に風谷に言われた一言と、ついこの前に百合音に投げられた言葉だった。どちらも意味することは同じで、だからこそ理解しがた
い。

あの二人は、敵味方の区別という概念が薄い。

敵でも助けが必要に見えたなら助けるし、味方でも間違っていると
思えば対立する。

特に百合音の方にとって、その区分はあくまでレッテルであり、彼
女の行動方針を左右するほどの意味を持たない。

(……………本当に、迷惑だわ)

どうして彼女たちがそこまで冷優の存在を引きずり出そうとする
のか、分からない……………というわけでもない。風谷の思惑も、百合音の
考えも、冷優はある程度把握していた。その上で迷惑だと思っている
のだ。

目を閉じて考えるのは、二人に示された道の先にいる兄のこと。

椿。

冷優と同じく七人兄弟の後に作られ、〝先生〟の死と共に存在を葬
られていた真祖。

確かに、他の兄たちと比べて親近感がないのかと聞かれれば、否定
は出来ない。

しかしその親近感を台無しにするような理不尽な問題を、冷優は抱
えていた。

(ある意味、〝私〟に相応しい業ごうなのかもしれないけれど)

彼女は他の真祖たちを、薄い紙の上に描かれた物語の登場人物のよ
うな感覚で捉えているところがある。一枚の膜を隔てた別次元の話
を聞いているかのように、存在に現実味を欠いているのだ。

それは彼女が知欲の真祖として、他の真祖たちの情報“だけ”を与えられたことの弊害である。今の冷優にとって兄たちは、活字の羅列で表現された小説のキャラクターたちと、大差ない。

……それが悲しいことなのか、幸いなことなのかは、彼女には分からないが。

閉じた瞳を開けば、暗さは更に増していた。

明かりを点けに来るお節介は、今はいない。学校帰りに怠惰の主人と一緒に、色欲の主人の家へお邪魔するのだと言っていた。帰ってくるのはきつと、しつかりと夜になったと言えるような時間帯だろう。

横目でちらりと時計を確認して、再び冷優は瞼を閉じる。室内と同じくらい暗い海へと、身を投げ出す自分を想起した。それは闇だの孤独だのを表したのではなく、ただ純粋な彼女の思考を象徴したものである。

思考の海の中は、静かで心地好い。

何にも邪魔されずそこに溺れていられる時は、冷優にとって最も心安らぐ時間だ。

深く沈んでいく感覚の中で冷優は、己を作り出した人物———椿曰くの、“先生”のことを考え始めた。

あの人が九番目の真祖を作ろうとしたのは、ただの遊び心だったのではないかと。

冷優はそう思っている。

本当なら、最高傑作と云われた八番目が完成した時点で、研究の手を止めても良かったはずなのだから。

九番目は云わば余談、或いは蛇足。……しかしそれだけに“特別”だったのかもしれない。

瞳は『不可能の花』よりも青く、主人との限界距離は無限に、仲間を増やす能力は脆弱に。

子供がブロックを組み上げるように、人形を着せ替えるように、意外性に走った産物。

その行為には必要性も理念もなく、大それた目的も意義もなく、ただ作られただけの存在。

今となつては「彼」の真意は誰にも分からないが、少なくとも冷優は、そういうことなのだろうと解釈している。

(……それでもただ一つ、「私」に意味があるのだとしたら、それは――)

たった一人で八体もの化け物を生み出していた人間が、最後に作った化け物。

七つの大罪に準なぞらえて化け物を作っていたその人物が、最後に付け加えた本当の「大罪」。

すなわち、知欲。

ひたすらに知識を求める欲望こそ、人間の最も根本的な所に芽吹く罪である。

「先生」は最後に、その考えを形として示したかたではないかと、冷優はそう思う。

(どちらにせよ元々、私にはお似合いの罪だったのかもしれないけれど……)

流されることもなく下へ下へと、彼女の思考は深みへ沈んでいく。

思い起こすのは、冷優が知欲の真サーヴァント祖として日の目を見た日のこと。彼女がまさに、『未知』への欲に負けた日のことだ。

人とは結局、禁忌を破って知恵の実に手を伸ばした愚かな生き物なのだろう。

――あの日冷優が、愚かしくも一人の人間の手を取ってしまったように。

(もう、懐かしく感じるほどね。それでも鮮明に覚えているわ。風谷……貴女が私を連れ出したときのことを)

風谷が彼女に掛けた誘い文句を思い出し、冷優は今でさえ抗い難い欲を煽あおられる感覚に、目を閉じたまま眉間に皺しわを寄せた。

……あれは今考えても、無理だと彼女は思う。

『おいで、君の知らない世界を教えてあげる』

あんな殺し文句を面と向かって言われて動かさずにいられるほど、彼女は無欲ではない。寧ろあの言葉に揺り動かされないのなら、彼女の根幹に在るものを否定するのと同じことだった。

海面の僅かな光から遠ざかるにつれて、胸が苦しくなる。

それでもまだ、彼女は沈んでいく。

今一度思考を傾けるべき事柄があったような気になって、沈み行く最中に冷優は瞳を開いた。窓の外は完全に日が落ちて、部屋の中は暗闇に包まれていた。青い瞳を瞬かせ、今度は瞼を開けたまま、また溺れるように思考の海へ沈んでいく。

もう一度、二人の言葉を思い出した。

椿か、七人の兄たちか。

どちらを選んでも構わないと言う彼女たちは二人とも、裏を返せばせめてどちらかを選べと要求している。

(……そろって馬鹿ね。そんなこと、最初から考えるまでもないのに) こればかりは、熟考の必要も感じないほどの自明の理であった。真祖は契約した主人によって性質ががらりと変わる。そのことの本格的な意味を、彼女たちは全く分かっていない。初めから、冷優が行動する理由など一つしか与えられていないというのに。

一筋の光も見えないほど暗い場所まで沈んで、ようやく息が出来るようになった。

それはまるで、彼女の安寧の地はそこであるのだと、暗に伝えているようだった。

瞼を閉じたのと大して変わらない明度の視界で、ただ天井を見詰めながら。

彼女はその後、時間の許す限り思考に溺れ続けた。

明かりを点けに来るお節介が帰って来るまで、ずっと――。

21. 乗り越え方は

朝。

まだ半分寝ている眼をぎゅっと閉じたり開いたりして起こしながら自室から出てきたのは、九番目の真祖・冷優サブクラスの下位吸血鬼である有紗だ。

チエツク柄の寝巻き姿のまま、窓から取り入れられている朝日で照らされた廊下を、よたよたとした足取りで歩きながら洗面所に向かう。

朝日、つまりは日の光は吸血鬼である彼女には大敵だが、そこは勝手知ったる我が家。廊下のどこらへんに窓からの日差しが射し込むかくらいは把握している。もつとも本日の空はあいにくの曇りで、注意しなければならぬ程の強い太陽光は降り注いでいないが。

洗面所にて歯磨き洗顔を済ませ、幾分かすつきりとして眠気の覚めた有紗は、今度はリビングへ足を向ける。

と、そこでようやく気が付いた。

(あれ……?)

やけに家の中が静かで、いつもの朝と違っていることに。

リビングの扉を開けてみても、いつもなら確実に居るはずの人物の姿が、ないことに。

(……もしかして百合音、まだ起きてない……?)

そう、この家で一番早起きな彼女の姿がどこにもなかった。

寝坊だろうか。だがそもそも百合音の起床時間は一般的な高校生のそれよりかなり早い。少し寝過ぎした程度では学校に遅刻するほどの時間にはならないが……と有紗はリビングの掛け時計を見上げる。短針は7を僅かに過ぎた場所を指していた。

通学に時間が掛かるほど学校が遠いわけでもない。今起こせばそれほど慌てることもなく準備が出来るだろうと、有紗は百合音の部屋へ足を運んだ。

シツクな茶色のドアを、ノックをする。

「百合音、そろそろ起きないと学校に遅れちゃうよ?」

……返事がない。

「百合音?…入るよ?」

ノブを下げ、ドアを押す。

静かにスライドしていくドアと共に足を踏み入れれば、ベッドにはまだ眠っているのだらう百合音の姿がちらりと見えた。ドレープカーテンが引かれたままの室内は、朝日もろくに入らず薄暗い。

ベッドまで近付き、壁側を向いて眠っている百合音にもう一度声を掛けようとした瞬間、彼女の体がびくりと揺れた。

有紗が近付いたことに反応して起きてしまったのだらう。相変わらず人の気配には敏感である。

「だ、大丈夫??百合音…」

「っ……………あ、ありさ……………」

寝起き特有の、力の抜けた声が聞こえた。緩慢な動きで百合音がこちらへ寝返りを打つ。少し癖のある長い黒髪が緩やかに曲線を描いて散らばっていた。

朝型体質で寝起きの良い彼女にしては珍しく、ぱちぱちと眠気を振り払うように何度か瞬きが繰り返される。

「……………あ、今、何時?」

「7時ちよつと過ぎ」

「!」

有紗の返答を聞いて思考が覚醒したのか、慌てて百合音が上体を起こした。

「あ、待って!」

そしてそのままベッドから下りようとするその動きを、寸前で有紗は押し止める。ただの寝坊なら止めたりはしなかったが、彼女には今の百合音の反応や顔色には嫌な心当たりがあった。

「ねえ百合音、もしかして昨日、あんまり眠れなかった…?」

「……………」

そこで視線を逸らして黙り込むのは凶星であると、有紗は知っている。

あれは、もうかなり前のことだ。風谷が百合音を拾ってきて直ぐの

頃、彼女は慣れない場所でほとんど眠れずにいたことがあった。しかも本人がそれを隠して振る舞うため、まだ幼かった有紗は違和感を垣間見つつも見過ごしてしまっていた。その件はその後色々あって解決したが、有紗の記憶には強く焼き付けられている。だからこそ今、日増しに顔色の悪くなる彼女を間近で見た経験のある身としては、二度と同じことをさせるわけにはいかない。

「とりあえず、風谷呼んでくるねっ」

「えっ、ちよつと有紗?!!」

ベッドの上に百合音を座らせたまま、有紗は部屋から飛び出した。

後ろから大丈夫だからと聞こえた気がしたが、この世で百合音の言う「大丈夫」ほど信用してはいけない言葉など中々ないと思っっている有紗はスルーした。ついでに風谷の部屋に行くと彼女も書類を読んでいる途中で寝落ちたようで机に突っ伏していたが、こちらにも容赦なく有紗は引つ張り起こした。

ぐいぐいと服の裾を引つ張りながら部屋から出ると、往生際悪く風谷が言う。

「ねえちよつと有紗、眼鏡が机に置き去りなんだが…」

「なくても見えるよね?」

「うっ」

振り返りもせず言われた有紗からの一言で凶星を突かれた風谷は呻いた。

ぶつちやけ彼女は、電子機器の普及で視力をガリガリ削られている。そこいらの現代人たちより余程目が良い。いつも掛けている銀縁の眼鏡はいわゆる伊達眼鏡だ。寧ろブルーライトカットとか、視力を矯正するのではなく目を守るための意図を持って掛けている眼鏡である。故に掛けていなくても実は大して問題ない。

そのまま階段を下り、百合音の部屋に到着。中へ突入すると数分前と変わらず髪を下ろしたままの彼女が居た。軽く俯いているせいで長髪が表情を隠している。

そしてここでもうやく有紗は、風谷を連れて来たは良いが百合音の状態の説明をすっかり忘れていたことに気付いた。が、観念したのか

自主的に部屋に入っていった風谷が既にベッドの横に勉強机の椅子を持ってきて診察体勢に入っていたため、こっそりその隣に立つ。

「顔色が良くないね。昨日の夜からそんなに悩んだのかい？」

「……………」

「悩み事？」

風谷の台詞に有紗は首を傾げる。

あの百合音を不眠に追い込むほどの悩み事など、有紗には皆目見当がつかなかった。百合音は仮に何か失敗をしたとしても激しく落ちこむタイプではないし、塞ぎこむタイプでもない。一人で解決できない問題に突き当たったなら頼れそうな人にどんどん頼っていく。そんな彼女がここまで精神的にやられるなど、全く思いもよらない事態だ。

「まあ、今の君がそこまで悩む事柄なんて私には一つしか思い当たらないが」

「……………」

また、百合音が返したのは沈黙だった。

どうも、有紗の知らない何かがあるらしい。

「彼……綿貫桜哉について、知ってしまったのかい？」

ワタヌキサクヤ。

有紗の知らない人物の名だった。名前からして男性であることだけは分かったが。

風谷に促されるように、百合音は視線を下に向けたまま呟く。

「……真昼くんが、知らなかったの。それに、知らないことに、気づいていなかったの」

ぽつりと溢されたのは、また有紗の知らない誰かの話だった。

「桜哉くんはたぶん、真昼くんと友達でいるために嘘を吐いてる……。それに、誰も気づいてない」

嘘。それは一つのキーワードだ。

恐らくサクヤくんとマヒルくんは、百合音の口振りからして同級生あたりだろう。

「どうしよう、私、桜哉くんは友達だって言ったのに。でも、今の桜哉

くんがやってることは、私と……私と、同じにしか、見えないの」
普段よりずっと拙い、聞き手の解釈力に頼った伝え方で吐露されたその言葉を聞いて。

ああ、とやつと有紗も理解が追い付いた。

百合音は嘘が嫌いだ。けれど、彼女は誰よりも嘘を吐く。

その場を丸く収めるため、対立をなくすため、誰かを安心させるため、他人を庇うため。そういう理由がある状況になれば、鈴白百合音は躊躇なく嘘を吐く。誰にも見抜けない上手な嘘を、吐いてしまえる。

そこに悪意や保身は欠片もなく、ただ笑顔でいられる人が一人でも増えるなら、その方が良いというだけの理由だ。嘘はいけないものだと、分かっているのに。

だから彼女は、そんな自分自身をこの世で一番嫌っている。

嘘が嫌いで、けれど誰かのために嘘を吐いて、嘘に塗れた自分が嫌い。それが鈴白百合音という少女だ。

因みにそれを冷優に言わせると、「他人への優しさで自分を傷付ける死ぬほど面倒くさい馬鹿」となるのだが。

……だからこそ、「自分が嫌い」な彼女は、どう頑張ろうとも「自分と似た」人物を肯定することが出来ない。

きっと、友達だと言った彼に対して嫌悪感を抱く自分と、そのことに罪悪感を抱く自分との狭間で今、百合音は苦しんでいるのだろう。

未だ俯く彼女の頭を、風谷がそつと撫でた。

「焦る必要はない。その言葉を忘れていないなら問題ないさ。大丈夫、君は乗り越え方を知っているはずだよ」

優しく、慈愛に溢れた声色だった。

「家族」しか知らない、風谷翼の一番穏やかな声。

「少し寝なさい。学校には連絡しておくから」

撫でられるままだった百合音が、少し顔を上げた。

「でも、この前も休んだところ……」

「おや、何のために普段真面目に通っていると思ってるんだい??こういう時にずる休みだと疑われないためだよ」

「それは違うと思うけど」

思わず有紗と百合音が声を揃えると、風谷は可笑しそうに笑った。百合音をベッドに押し込み、風谷と共に有紗は部屋を出る。百合音を一人にするのは心配でもあったが、風谷がこれで良いと判断したのなら大丈夫だろうとも思えるのだから、不思議なものである。

そしてその、四時間後。

風谷はまた部屋に戻っていたが、有紗はリビングに残っていた。更に何故か冷優が、起きてきてからずっと珍しくもリビングで読書をしていた。

そんな状態で、もうすぐお昼時に差し掛かりそうな時間帯になったところで、である。

「……買い物行くわよ!!」

「!?」

バンツ!と効果音が付きそうな勢いでリビングの扉を開けて現れた百合音に、有紗は驚きで小動物のように身を震わせた。

「ゆ、百合音?!もう大丈夫なの?」

「大丈夫じゃないわ」

「えっ」

「けどここから先はもう、次に桜哉くんに会ったときに考えることにした」

だから今は休日を有意義に使う!と宣言して彼女はキッチンの棚に入っているエコバッグを取り出した。ついでに、いつの間にかリビングから出ていこうとしていた冷優の首根っこを捕まえて。

「なに返ろうとしてるのよ。当然貴女も連行するわよ?」

「私に行くメリツトがないわ」

「帰りに本屋さん寄ってあげる」

「……………」

沈黙とはこうも雄弁に肯定を語るものだっただろうか。冷優の同行が決まり、上機嫌で百合音は買い物の準備を進めていく。

……強いなあ、と有紗は呟いた。自分には無いものを持つ者に対する羨望せんぼうの感情がこもった声で。

鈴白百合音は強くて、明るくて、どんな困難にも立ち向かっていく人間だ。

決してそれが彼女の全てではないと知っているけれど、どうしようもなく懂れてしまう。

「……ほら有紗も行きましょ!? 今日かなり曇ってるし、大丈夫よね?」

数時間前までの落ちこみ様など全く見せない、屈託のない笑顔を浮かべた彼女が手を差し伸べていた。

(同じにはなれないけど、私もいつか百合音みたいに、自分で乗り越えられるようになれたらいいな)

……流石に数時間で立ち直るのは無理そうだけど、と心の中で苦笑しつつ、有紗もまた笑顔でその手を取ったのだった。

丁度良いことに特売をしていたスーパーで色々と買い込み、エコバッグを抱えながら百合音たちは冷優お気に入り書店へ向かっていた。

空は朝と変わらずもの見事に真っ白で、しかし雨を降らせそうな黒雲は見当たらないという、有紗を連れ回すには格好の日和だった。隣でスーパーの袋を提^さげて歩く彼女は吸血鬼であり外出には気を使うため、百合音はこういう日には積極的に連れ出すようにしていたりする。

(朝はちよつと心配かけちゃったみたいだし、これで不安が晴れてくれたらいいんだけど…)

綿貫桜哉の件がこれほどまでに心に重くくるとは、彼女自身も計算外だった。やはり風谷の予測は侮れない。

エコバッグを抱え直しながら、いつかの帰り道のように公園に差し掛かったとき。ふと百合音の目に綺麗なピンク色の髪が留まった。

「あの子たち、たしかリイさんの下位吸血鬼の子じゃ…?」
「!」

幼い双子の姿をした吸血鬼が、公園の向こう側にいた。

そしてまさか百合音の声が聞こえたのかは分からないが、双子がぱつと振り向く。その直前、百合音の眩きを聞いた冷優が一瞬にして猫の姿になり公園の周りを囲っている花壇に逃げ込んだ。

「百合音！」

「百合音！」

ぱたぱたと揃って駆けてくる二人に、百合音と有紗も迎えるように公園の中へ足を踏み入れた。

「二人とも、こんなところで何してるの？」

「リリイのおつかい」

声を揃えて二人が答える。

椿の^{サブクラス}下位吸血鬼に襲われる可能性を考えればあまり得策ではないのに、と百合音は眉をひそめた。

その時。

「————ひっ！！」

どさり、と買い物袋が取り落とされる音。

それに付随する、引き攣った悲鳴。

「有紗……？」

それらの音源となった少女へ、百合音と双子の視線が動く。

紫紺色の瞳は恐怖に染まり、目頭には微かに雫が溜まっていた。そしてその視線が向いているのは、百合音の後方。

コンツ、と。

その音が耳に入った瞬間、ぞわりと背筋に悪寒が走った。

ゆっくりと、百合音は振り返る。

同じ公園の花壇の囲いの中で、彼らの姿は明らかに浮いていた。

からころと鳴る下駄、目を引くシルクハット、鈍く光るアタツシユケース、見慣れたナース服。

鮮やかな緑の髪だけが見えなかったのは、まだ幸いだったかもしれない。

先頭を歩く彼が、穏やかな口調で告げた。

「やあ百合音、久しぶり」

——それは、新たに立ち塞がる壁だった。

しかし今度は、百合音が乗り越えるべきものではない。

風の所為かはたまた別の要因か、花壇の茂みが微かに揺れた。

舞台裏 “主人の預かり知らぬ下僕の受難について

”

死にそうだった。

「う……………つ、……………あ……………」

不死の身ではあるが、現在冷優は本気で、死ねた方が楽だと思っていた。

カーテン越しに朝日が分かる程度に明るくなってきた時間帯、時計は確認していないが光の加減から大体7時くらいだろうと予想しながら、冷優はベッドの中で意味のない寝返りを打つ。普段ならあと一時間ほどはベッドの中な彼女だが、主人からの “干渉” を受けすぎた身体は眠気さえ殺してしまっていた。

(……………最悪。過去最高に最悪だわ)

今すぐ元凶の所へ殴り込みたくなかったが、悪化するだけだと容易に予測できるので冷優はぐつと堪えて枕に顔を埋めた。

気分が悪い。

言ってしまうえばその一言に尽きるのだが、それが自身の体調云々ではなく契約により繋がっている人間の精神から影響を受けたものなのだから、性質たちが悪い。

何故ここまで主人イヴ、もとい百合音が精神的にやられているのかは不明である。契約による結び付きがあるとはいえ、このように冷優の方にも影響がある場合は稀だ。冷優の知らないところで何かあったらしい。

そもそも鈴白百合音はメンタルの弱い人間ではない。寧ろ強い部類に入るだろう。その彼女がここまで精神的負荷で押し潰されそうになるなど、契約を結んで既に年単位の時間が経っているが、ほとんどなかったことだ。

経験したことはないが二日酔いの朝とはこんな感じなのだろうか、彼女にしてはつまらないことを考える。それほどに、元より低血圧を抱えているため朝に弱い冷優からすれば正しく地獄だった。

そのまま言い表しようもない気持ち悪さに冷優が唸っていると、無遠慮にドアが開かれた。

「おっと、やつぱり君もか」

「……………」

「百合音があんな調子だから影響されてるかなあと思つて来てみたけど、その様子だどがつつり干渉を受けてしまっているみたいだね」

軽い調子の声と、ベッドの側まで近付いてくる足音が聞こえた。もぞりと布団から顔を出せば、何故か眼鏡を掛けていない風谷の姿があつた。

「……あの子は」

「君と同じ状態」

「原因」

「あの子の一番嫌いな人間に似た人物に出会つてしまったこと」

ぽんぽんと無駄の省かれた会話が飛び交う。背景説明や論理展開の諸段階を必要とせず最低限の言葉からお互いに読み合いをするため、端から見れば淡泊すぎるコミュニケーションになるのがこの二人のデフォである。

風谷からの返答に、状況を理解した冷優の眉間の皺がいつそう深くなる。

「二応、その人物のことは調べたから掻い摘んでなら説明できるけど、必要かい？」

「聞かせて」

おもむろにベッドに腰掛けた風谷は、宣言通りに掻い摘まんで「綿貫桜哉」なる吸血鬼に関する事を話し始めた。

数分で全て聞き終えた冷優は、感想としてぽつりと一言。

「馬鹿ね。相変わらず」

にべもない。だが鈴白百合音という少女のことを多少なりとも理解している身として、納得することは出来た。確かにそのシチュエーションは百合音にとっては悪夢と同じようなものだろうと、想像がつく。

とはいえ、冷優にとってはとんだ巻き込まれ事故である。このまま

寝ていても良くなることはない。まだ興味のある書籍を読んでいた方が気が紛れるだろうと、彼女は身を起こした。

「おや、起きるのかい??一応朝ごはんは作ってきておいたし、まだ温かいと思うけど」

そういう貴女は寝るつもり? と口にし掛けて愚問だということに気付き冷優は口を閉じた。今の風谷は眼鏡をしていない。そこから推測するに、寝込んでいる百合音を発見した有紗に叩き起こされたのだろう。そして残念ながら冷優は、寝落ちするまで活字を追い続けるという不摂生な生活に文句を言える立場ではない。身に覚えがあまりすぎるからだ。

「いつ頃だと思う?」

「夕刻までには」

風谷の問いに簡潔に返答を返し、冷優はベッドから下りる。二人の会話は脈絡がないように見えるがその実、予測で補完できる程度には繋がっている。この場合、風谷の問いである「何時」に当てはまるのは、「いつ百合音が立ち直れるか」以外にない。

「流石だね。それでも心配かい?」

「まさか。確定事項に答え合わせは必要ないわ」

「なら有紗かな?」

「冷めるでしょう」

「それは嬉しい気遣いだね」

「早く寝なさいな」

「こちらこちら。八つ当たりはよくないよ」

窘めるようにするりと頭を撫でられて冷優は更に顔を顰めた。どうやら「私が貴女に気遣いをしているなんてありえない結論にたどり着くほど思考回路が睡眠不足でショートしているようね、五月蠅い口を閉じるという意味でも」早く寝なさいな」と言ったさっきの発言の丸括弧内を、しっかりと読まれていたらしい。

それでも実際、ぐらぐらと頭が揺れているような感覚で気分が悪いせいで機嫌も最悪である。普段は言外の発言であつてもあんな下らない事は含ませたりしないため、確かに無意識に八つ当たりしていた

のかもしれないと彼女は反省した。

因みにドアを開けて出るときに後ろから「ねえ君、なんか今すごく論点のずれた反省をしなかった？」などと聞こえてきた気がするが、相変わらず機嫌は悪いので冷優は迷わず無視した。不可抗力である。

たんとんと覚束ない足取りで階段を下り、リビングへ顔を出せば、丁度ベーコンエッグを乗せた食パンを頬張っているところの有紗と目が合う。

「んー！」

「飲み込んでからにしなさい」

恐らく反射的に「おはよう」と言いそうになったのだろうが、口に食べ物を入れたまま挨拶されても不快なだけである。冷優の指摘に素直に有紗はむぐむぐと咀嚼を優先し、ごくんと嚙下した後で口を開いた。

「おはよう冷優」

「ええ、お早う」

「いつもより早いけど、今日は調子が良いの？」

何も知らない有紗は、冷優が低血圧の調子が良かったから早く起きてきたのだと勘違いしているようだ。事実はその真逆なのだが。

だがここで冷優まで体調が悪いと申告すれば、ただでさえ朝から百合音の状態を見ている有紗は更に慌てることだろう。彼女が心配したり慌てたりしたところで何も好転することはない、極めて無益なことである。そして基本的に冷優は無駄が嫌いだ。

なので。

「……そういうことしておくわ」

「??？」

有紗が頭の上に大量に疑問符を浮かべているのが目にも見えそうだった。

彼女の反応を見て、冷優は小さく溜め息を吐いた。朝食を食べた後は読書に没頭しようという心積もりだった冷優にとっては誤算である。普段読書するときには自室に籠りがちだが、これは百合音が出てくるまでは代わりにリビングに居座っておくべきかもしれないと気付

いたのだ。主に、一人になった有紗が心配で空回って突飛なことを始めないか見張るために。

そんな考えでリビングに残っていた結果、予想より数時間も早く立ち直った百合音に捕まって買物に連れ出されることになることを、この時の彼女はまだ知らない。

22. 迷うことなく

ザア、と風が鳴った。

次いで、公園の砂を踏みしめる音が二歩分。

「久しいってほど、時間は経ってませんけどね」

険しい表情で百合音はそう答える。椿たちの姿に気が付くと同時に、彼女は双子の吸血鬼と有紗とを背に庇うように、最小限の歩数で立ち位置を調節していた。

その行動は、正しく現状の不利さを表すものだった。

(下位吸血鬼にとって他の真祖は天敵……有紗も双子の二人も、椿さんの前に出すわけにはいかない……！)

双子の方は下位吸血鬼としては高い戦闘力を秘めているのだが、その事を百合音は知らない。また、知っていたとしても彼女の判断は変わらなかっただろう。百合音にとっては、戦闘力の有無に関わらずほぼ全て、守るべき対象なのだから。

油断なく椿たちへ視線を向けながら、百合音は武器を出すべきタイミングを見計らう。

「今日はね、君に聞きたいことがあって会いに来たんだ」

「聞きたいこと??…そんな大所帯で、ですか」

「うん。どうしても答えてもらいたくて、ね」

細身のサングラス越しに見える赤い瞳が、初めて見る色を宿して百合音を見ていた。

次の瞬間。

ピアノ線のような糸が、無数に彼女へ迫る。

「！」

そして。

その悉くを、百合音の大鎌が切り裂いていた。

「……………」

はらはらと散って、見えなくなる糸。

半瞬遅れて、投げ捨てられたエコバッグが無惨に地面にぶつかる音が響いた。

「やっぱり君って、戦い慣れてるよね？」

「それはまあ、風谷翼の娘ですから」

口調だけは余裕を保ったまま、言葉を交わす。

：慣れてると言っても、百合音は風谷の戦術を少しかじっているだけだ。主に視覚から、あらゆる「予兆」を読み取り、通常より一步速く対処するという術を。今も、椿へ向けていた視界の端でナース服姿の彼女の手が僅かに動いたのが見えていたからこそ、武器を出すのが間に合っただけの話だ。

(今の系は、オトギリさんの能力)

白い燐光を放つ鎌をいつでも振るえる位置に構え直しながら、百合音は一つ得た情報を脳内で反芻させた。

(捕まったら厄介なのは間違いないけど、どっから出したのかもよく分からなかった……目を離しちゃ駄目ね)

オトギリ本人がそもそも物静かで自己主張が強くない分、意識から外れやすい。甘く見ていると一瞬で捕まるだろう。かと言って、彼女を注視し過ぎるのも隙になるので考えものだが。

「……それで、聞きたいことってというのは？」

先ほどの挑発めいた攻防などなかったかのように百合音は本題を促した。

椿もまた、挨拶をしただけのようによく微笑みすら浮かべて応じる。

「ずっと考えてたんだ。君の真祖は誰なのかを」

その一言で大体の用件を察して、百合音は思わず花壇へ向けそうになった視線を必死に制した。辛うじて動揺には気付かれなかったように、椿はそのまま言葉を続ける。

「一番引つ掛かってたのはさっきの、君が戦い慣れてるところだよ。風谷翼の影響だとしても武器の扱いが手慣れすぎてる。契約してからそれなりの月日が経っているはず」

「……………」

「でも、そんなに前から契約してるなら、僕がその情報を知らないわけがないんだ」

なるほど、と百合音は声に出さず呟いた。

ホテルに居た時に度々見掛けたが、椿は何やら随分と念入りな『計画』を練^ねっている様子だった。下準備に情報収集は欠かせない。兄妹たちの事を調べるために、彼なりの情報網を持っているのだろう。

だがどれだけ七人兄弟の契約状況を洗ったとしても、百合音と契約している真祖を割り出すことは叶わない。百合音と冷優という九番目の主従については、変な部分で過保護な風谷が徹底して情報規制を敷いているからだ。

「だから考えた。パズルが完成しないのは、前提条件のピースが足りていないからじゃないか、って」

「……つまり？」

「君は兄さんたちでも僕でもない……九体目の真祖^{サーヴァント}と契約をしてる」
違う??と。

そう首を傾けて問う椿に、百合音は予想が当たってしまったと心の中で溜め息を吐いた。さて、どう答えるべきか。

『お兄様たちは誰一人も私の存在を知らない。それでいいの。……そうでなければならぬ』

まるで法律の一文を読んでいるかのように無味乾燥、それでいて本心を吐露するようにそう溢した彼女の姿を思い出す。

——椿への回答を頭の中で一言に纏める。

きっと冷優は今この時も、椿に己の存在を知られることを恐れているのだろう。九番目の存在を見破られてもなお、はぐらかして隠し通したいと願っているのだろう。

——椿への回答を紡ぐために息を吸い込む。

もし、あの花壇の茂みに隠れているのが有紗だったなら。あるいは他の誰かだったなら。百合音は椿に否定の言葉を突き付けて、絶対にその存在を覚^{さと}らせなかつただろう。後ろの三人共々、無茶で無謀であつても必ず庇い通したはずだ。

しかし、そこにいるのは鈴白百合音^{スズしろく}が守るべき弱者ではない。

——だから彼女は迷わなかつた。

「名答、です」

迷わず、現状で最善の一手を打った。
先ずもって、百合音に真祖と下位吸血鬼三人を相手に出来るほどの技量はない。彼女一人だけの身軽な状態ならひたすら逃げの策を立てていただろう。

しかし今、百合音の後ろには守らなければならない者が三人もいる。よって百合音一人では対処しきれない。いわゆる「詰み」だ。打開するには冷優を引きずり出すしかない。

それに。

「これがベストなのは、どうせ貴女も同じ意見でしょう??――冷優っ!!」

百合音の呼び声に応えるように、花壇の茂みから白い猫が飛び出した。

白猫は百合音の肩に綺麗に着地すると、その首筋を噛んで血を啜る。溢れた血が滴るより速く、猫は肩から跳び上がりくると回って少女の姿へ変わる。同時に、百合音の左足首に出現した黒い輪から白く輝く鎖が伸び、少女の項に繋がれた。

ふわりと、地面に下り立ったのは。

真つ白なワンピースを纏った、青い瞳の少女。

彼女はひらりと風に舞うフレアスカートの裾を摘み、片足を引き、背筋を伸ばしたまま軽く膝を折る。そして、椿へと優雅に頭を垂れた。一連の所作はただ美しく、それだけで見惚れてしまうほどに洗練されたものだった。

「初めまして、憂鬱のお兄様」

顔を上げれば、人形のように整った顔立ちが露になる。

「私が九番目、知欲の真祖。……通り名はお兄様に倣い、知られざる九番目」とでもいたしましょうか」

ザア、とまた風が鳴った。

憂鬱の面々が各々に驚きの表情を浮かべている中、椿だけが瞳を凍らせていた。

「…君は一体、誰に作られた吸血鬼なの？」

「えっ……？」

声を漏らしたのは百合音だ。

椿の呈した疑問は、彼女には理解の及ばないものだった。何故、当たり前前に『先生』なる人物に作られたと受け入れられないのか。何か必要な情報が、欠落している。

しかし冷優には質問の意図が分かったようで、僅かに身を固くした気配が感じ取れた。

「僕はあの日……先生が殺されたあの日まで、ずっと先生の所にいた。君が僕の先生に作られたなら、僕が君を知らないのはどう考えたっておかしいよね」

初耳な情報が大量に語られて百合音は隣の少女を睥睨した。『先生』という人物のことは今まで漠然と「真祖を作ったひと」とだけ認識していたが、殺されたなどという話は聞いていない。

どこから出したのやら、刺繍のように金の文字が刻まれた白の本を強く胸に抱き、冷優は独り言のように小さく口を動かして呟く。

「……何か一つがずれていれば、全てが違っていたでしょう」
すつと視線を上げ、今度は聞き取りやすい明瞭な声で、冷優は自らの過去の境遇を語り出す。

「私は、お兄様と同じように『先生』の手で作られた真祖です。ですが、『私』を完成させる直前に、先生は亡くなられてしまいました」
ああそう繋がるのか、とようやく百合音は風谷から聞いていた話との取っ掛かりを見付けた。

同時にほんの少し違和感を覚えて冷優を見やる。何か、しつくりとこない気がするのだが、その正体を掴むに至らない。

ともあれ今は話についていかなくはと百合音は椿へ視線を戻した。要は、完成前に作り手がいなくなつたために、冷優は真祖として目覚めることなく眠っていた。椿と顔を会わせていないのは当然だ。それならばとりあえず、辻褄は合うように思えた。

冷優の説明に、椿は数秒考えるように俯いた後で、静かな声で応える。

「確かに先生は、僕を作った後も研究を続けていた。君はその研究で生まれるはずだった、九番目の真祖ってこと……?」

冷優が首肯する。

「その後で私はC3に『回収』されました。あの日から、風谷が私を連れ出した日までの間ずっと、私はC3に『保管』されていたのです」

と、そこで横から口を挟んだ人物がいた。片目ながら分かりやすく動揺を露にしているシャムロックだ。

「そういうえば……聞いたことが、ございます。都市伝説か妄言の類いと思ひ込んでおりましたが、C3の地下深くには、『未完成の真祖』が眠り続けていると」

彼の言葉に椿は、この場ではない別のところを見ているような目で、夢現ゆめうつのような口振りです。

ぼつりと。

「……………そう。君もずっと、あそこに居たんだね。そんなに、近くに……」

それはC3に囚われていたことか、それとももつと昔のことを言っているのか。百合音は判断できず眉を寄せた。

冷優の存在について納得したからか、椿の表情は少しばかり和らんでいた。兄たちには最初から容赦のない害意を向けていた彼だが、どうやら冷優に対する因縁はないようだ。実質初対面なのだから、これが普通なのかもしれないが。

どこかを見詰めていた椿の瞳が、冷優へしつかりと焦点を結ぶ。赤い視線が、見定めるような色を灯して冷優へ向けられた。

「ねえ、君は先生の死を悼んでくれる??悔やんでくれる??先生からの『期待』に、一緒に応えてくれる?」

期待と願いの込められた声色が響く。ともすれば懇願にも聞こえるような声だった。椿が何を言おうとしているのかが分かって、百合音は密ひそかに身構える。

「今からでも、僕と、」

「憂鬱のお兄様」

容易に続きの予想できる椿の台詞を遮って、冷優がよく通る声を響かせた。透徹した青い瞳が真っ直ぐに椿を見詰める。

「私は、貴方と行動を共にするつもりは御座いません」

「っ、！」

「！」

目を見開いたのは二人、百合音と椿だ。百合音はわりと真剣に冷優が椿側へ行くことを想定していたし、椿も、きつと少しくらいは冷優が葛藤すると踏んでいた。

それがどうだろう、最初から決定付けられていた事のように迷いなく冷優は言い切った。

「……理由を聞いてもいいかな？」

「私の主人が百合音だからです」

きつぱりとした即答。

一度だけ青の視線が百合音の方へちらりと動いて、また椿を見返す。

「真祖の戦う理由は主人の意思で決まる。そしてこの子の性質はとも厄介です。誰かを守るためにしか、力を揮えない」

少しだけ、愚痴を言うような調子を込めて。

「だからお兄様、壊す側の貴方と共に在ることは出来ません」

しん、と風が静まった。

それは長きに渡り対面することのなかった兄妹の、紛れもない決別の瞬間だった。

しかし百合音にはそんなことより言いたいことが一つ。

「ねえ、それつまり全部私のせいって意味？」

「あらよく分かったわね」

流れるように悪びれもなく頷いた冷優に百合音は真顔で軽く大鎌の刃を振った。がつんと手に伝わる衝撃は刃の背が本の背で受け止められたものだ。

瞬時に一触即発の雰囲気醸し出し始めた二人を、後ろから慌てた有紗の声が止める。

「ふ、二人とも!? 今ケンカしないで!?!」

「……………」

睨み合い。

23. 何も語らない

「冷優!?!分かってるでしょうね!?!」

「五月蠅い。頭に響くわ。ただでさえ貴女のせいでまだ気分が悪いのに」

「何の話?!?!」

そんな会話を冒頭に、戦闘は始まった。

椿は黒い刀を左手に九番目の主従へと斬りかかる。いつか、怠惰の主従にも同じような斬り込み方をしたが、あの時とは違い今回は真祖が主人を庇って前に出てくることはなかった。

ガキンツ!?!と百合音の大鎌と刀がかち合って耳に痛い音を奏でる。

「っ、最初から随分と本気なんですわね」

「遊びでも本気でやるタイプだからね、僕」

戯れのような言葉、その間にも攻防は続いている。百合音は器用に体を捌いて椿が大鎌の死角に入らないように細かく調節を行っていた。基本的に防御は柄で、牽制は刃の背で。彼女の中で決まった戦術が既にあるのだろう、その判断には迷いが無い。

因みに、隣に追隨してきてシヨール開始のお決まりの台詞を叫ぼうとしたベルキアは「さアさア喝采をオ!☆串刺しシヨールの始ま」で九番目の真祖に顔面を蹴り飛ばされて吹き飛んでいった。白いワンピースを翻す少女の容赦ない蹴りが頬骨に刺さっていたのが印象的であった。

開始早々、主従の二人は二手に別れる。椿はあえて百合音の方の誘導に乗り、真祖からは離れた。

「若っ、こちらは我々にお任せください!」

「うん、よろしくね」

これで戦況が椿と百合音、レイユとシャムロツク・ベルキア・オトギリという二つの陣に別れたことになる。真祖対下位吸血鬼は本来危険だが、恐らく九番目の真祖は椿の下位吸血鬼たちに牙を向くことはしないだろう。理由はさつき彼女自身が言ったように、彼女の主人が百合音だからだ。三人に囲まれた真祖の姿を視界の端に留め

つつ、椿は目の前の少女に意識を戻す。

その身に不釣り合いな大鎌を操る彼女は、椿の刀を柄で受け止めては流し、刃を横風ぎに振って一定の間合いを保つ。一言で言えば防戦一方だ。尤も、吸血鬼相手に防戦しきれているだけ凄いとも言えるが。

また刃がかち合い、椿と百合音の視線が至近距離で交差する。気概に満ちた黒檀の瞳が、強い光を宿しているのが見えた。その瞳へ、椿は問いを投げる。

「……ねえ、風谷巽はいつ九番目のあの子をC3から連れ出したの？」
「ざっと五年くらい前ですかね」

その回答は、思いがけず椿の心を刺した。そんなにも前から“妹”と呼ぶべき存在が同じ世界に居たにも関わらず、これまで当たり前のように椿は末っ子と名乗ってきた。自分より後など存在しないと決めつけて。

それは椿がずっと兄たちに抱いていた憂鬱の根源の一つだということ。

「でも、言っておきますけど、椿さんがあの子を知らなかったのはずっとあの子が自分の存在を隠してたからですよ」

「っ、どうして?」

「それは知りません。ただ、私が椿さんに関わっても自分は絶対に会わないように必死で逃げてましたね」

前に椿さんの幻術に割り込んだときもそうでしたし、と百合音は語る。あの時真祖が百合音と一緒にいなかったのは、百合音との不仲ではなく椿を避けていたからだということなのだろう。

決して余裕のある状態ではないはずだが、それでも彼女は真っ直ぐに椿を見返して更に付け加える。

「どの真祖とも関わりたくなかったみたいですけど、特に椿さんに対しては、何か抱え込んでるみたいですよ」

椿の心情を乱すためのブラフではないかと疑いたくなるような追加情報だった。平静を保とうと努めていたが、表情が強張ってしまったのを椿は自覚する。同時に椿は、最初に百合音の誘導に乗ったのは

失敗だったと舌打ちした。今すぐにも九番目の真祖と直接言葉を交わしたい。聞きたいことも言いたいことも溢れて纏まらないのが目に見えているが、それでも彼女と話がしたいと強く思った。

そのためには今、目の前の少女が邪魔だ。

殺すつもりはないが、早々に決着を付けてしまうために、椿は百合音の心臓目掛けて刀を突き出す。

「……うわっ!!」

しかし、椿の刀は百合音の身体には届かず空を切った。

ジャラジャラジャラツ!! と耳障りな鎖の音が耳に入り、椿は刃が届かなかった原因を知る。

椿が斬り込んだ瞬間、数メートル離れた場所でベルキアたちと戦闘をしている九番目の真祖が、主人イヅと繋がる契約の鎖を引っ張ったのだ。足首に繋がれていたそれを引かれた百合音は本人では出来なかっただろうバランスの崩し方をし、結果的に椿の凶刃を回避していた。

ちらりとそちらへ視線を投げるが、既に知欲の真祖サイヴァンは鎖からは手を離していて、一見こちら側へ注意を向けている様子はない。しかしタイミングは測っていたように正確なものだった。

(ベルキアたちだけじゃなくこっちの動きも完璧に把握してる、か……。面白くないなあ)

これはあくまでセオリーの話だが、真祖サイヴァンと主人イヅが共に万全の状態サイヴァンで戦闘をするならば、普通は真祖が前衛に出て敵と交戦し、主人は後方イヅで指示や戦況把握などに務めるといふ形が理想的だ。勿論主人が戦いに参加する場合もあるだろうが、それにしてもこの九番目の主従イヅに関してはセオリーの真逆をいつている。

即座に体勢を整えた百合音が、椿の足を払うように鎌を振る。当たれば払われるどころか刈り取られるが、椿が素早く跳んで避けたため生々しい事態にはならなかった。

「……そんなに僕を避けていたなら、あの子はどうして今になって、出てきたの」

「それは……今は答えられません」

何故か顔を顰めて百合音はそう答えた。埒が明かない。

やはり一刻も早く目の前の少女を倒さなければ、とその首筋を風ぐように刀を振ろうとした椿は、横から微かに、フォンツ、と何かが回転しながら空を切って迫る音を聞いて咄嗟にその何かを刀で弾いた。耳障りな高い音を立てて、弾き飛ばされた何かが少し離れた地面に刺さる。

「え、」

その正体は、ベルキアの剣だった。

「若ああ!!?お怪我はごいませんかああ!?!」

「つばきゅんゴツメ〜ン!! ★アイツに向かって投げたら弾かれてソツチいつちやったア〜! ☆★☆☆」

叫ぶような距離でもないのだが、シャムロックの絶叫とベルキアのいつものテンションでの謝罪が聞こえてきた。

弾かれて、という文言に椿の思考回路の中ではまさかと衝撃が走る。まさか、百合音の危機をサポートするために自分へ向けられた攻撃すら利用してみせたのか、と。

だが、そんなことが可能なのかと考えている暇は与えられなかった。

「―――よそ見、しないでもらえます?」

「?!」

挑むような声色。

視線を戻せば、数字の6に似た軌跡を描いて、下方から大鎌が迫っていた。

「つつー!」

身を屈めて一気に椿の間合いに入ってきた百合音の持つ鎌が、手首の切り返しのみで綺麗に回転する。丁度、刃と柄の付け根の端部分が椿の顎目掛けて振り抜かれる形だ。

反射的に椿は刀の柄で鎌の横面を殴り、軌道を逸らす。辛うじて、顔の横すれすれを刃が通って行った。

(今の攻撃、さっきの僕の刀を避けてから繰り出したにしては、速すぎる……!)

だとすれば、考えうる答えは一つ。

(九番目の真祖からのサポートが絶対入ると分かってて、最初から防御姿勢を取らなかつた……!?)

目を見開く椿の、その頬の間近で、回転に従って下から振り上げられた状態で鎌が静かに動きを止める。至近距離で、次の一撃へ最適なポジションにセットされたのだと覚った椿は後ろへ跳んで距離を取った。

椿を追って、百合音が走ってくる。先程の一撃が表すのは彼女と真祖との目に見えない連携だけではない。交戦開始から、初めて百合音が攻勢に転じたということも意味しているのだ。

しかし。

走り込み、構えた刃を勢いのままに振るう、迷いのないその一閃が、

「……百合音、」

「！」

凜と響いた呼び掛けに、ぴたりと静止した。

攻撃の手を止めた百合音が、油断なく椿を見据えながらも後ろへジャンプする。

とんっ、とんっ、とんっ、とリズム良くバックステップを踏みながら、百合音はいつの間にか下位吸血鬼たちの包囲から抜けていた九番目の真祖の隣まで戻っていった。二人が元の位置に立ち直ると同じタイミングで、主従を繋ぐ鎖がパキンと解ける。

不可解な戦線離脱に椿が眉をひそめていると、傷一つ無い真っ白な本を胸に抱えた少女がまた、不思議とよく通る声を響かせた。

「最初に申し上げた通りでございます、お兄様」

青い瞳が、椿を真っ直ぐに射抜く。

「この子の力は、誰かを守るためにしか振るえない。ただそれだけのこと」

そこでようやく椿は、ある事に気付いた。

最初に百合音が背に庇っていた、茶の髪の少女と双子の少女の姿が、見渡す限りどこにもない。

「……今までの戦闘は、あの三人を逃がすための、ただの時間稼ぎだっ

た…?」

二人共が首肯する。戦闘はあくまで椿と彼の^{サブクラス}下位吸血鬼たちの注意を引き付けるためのもの、そして三人が避難したことを確認したから、戦闘を止めただけ。正に、「ただそれだけのこと」だった。九番目の主従の目的は最初から、それだけだったのだ。

「椿さん、さっき答えられなかった質問、お答えしますね」

今ままで終始厳しい表情をしていた百合音が、初めて笑みを浮かべていた。

「答えは『有紗がいたから』です。私だけじゃ守れないことは目に見えていましたからね」

アリサ?と唐突に出てきた人物名を尋ね返しそうになるが、恐らく逃がされた三人の内の茶髪の少女のことだろうと椿は当たりを付けた。双子の方は確か、色欲の真祖の下位^{サブクラス}吸血鬼だったはずだからだ。あの時百合音が答えなかったのは、椿の意識をそちらへ向けさせないためだろう。

そして百合音は、その『アリサ』がいたから九番目の彼女は出てきたのだと言った。

つまり、椿の前に姿を現したのも、交戦していたときも、知欲の真祖の頭の中にあっただのは『アリサ』という少女を逃がすことだけ。椿は、そもそもあの青い瞳の眼中にはなかったのだ。

「……………」

最後の望みを掛けて椿は妹と視線を合わせたが、彼女は不自然なほど落ち着いた様子で佇み続けるだけだった。

美しい青の瞳はどこまでも無機質で、椿へは何も語ってくれない。そのことにぐつと唇を噛んで、椿は九番目の主従にくるりと背を向けた。

「……………今日は引くよ。元々、戦いに来たつもりじゃなかったし」

心の整理もつけないし、という本音は^{おくび}曖気にも出さないようにして、椿は下駄を鳴らして歩み出す。ろくな心構えも出来ていないのに連れ出してしまった家族たちには、申し訳なかったな、と思いながら。待つてよつばきゅーん、と後ろから追う声を聞きながら、椿はもう

一度だけと振り返りそうになる自分を戒めた。思考も心もままならない今の椿では、彼女とまともに話すことも出来ないだろう。それに今晩は、まだもう一つ実行予定の「作戦」が控えている。

だから今は、何も語らない。

こうして、存在しないはずの二人の真祖の邂逅かいこうが、幕を閉じた。

舞台裏 〃鎖と糸と剣が舞う、もう一つの戦地にて〃

初手から、作戦外だった。

ひらりひらりとダンスのように、白いワンピースの裾が揺れる。こんな状況なら普通は目障りに映るだろうに、視界に入るそれは気を抜けば見惚れそうな軽やかさだった。何もかもが当初の想定からずれている現状に、シヤムロックは胸中で歯噛みする。

未だに武器を取り出す素振りもない九番目の真祖に対し、^{サブクラス}下位吸血鬼三名は攻撃の一つも当てられずにいた。

「もくもくちよこまか動くなつてエ!!」

「捉えきれない……困ります」

「くっ……」

ベルキアの剣も、オトギリの糸も、白いワンピースを掠めることすら叶わない。

更に言うならば、何故か攻撃が空振るだけではなく、もれなく味方にも当たる。オトギリの繰り出した糸はベルキアに絡まり、ベルキアの突き出した剣はシヤムロックのスーツを裂き、シヤムロックの振り抜いたアタッシュケースはベルキアの頭に直撃した。

真祖の動きが速すぎるということはない。目視し狙いを定められる程度には追えている。だが、紙一重の歯痒い差異で、当たらないのだ。喰らえばそれなりのダメージを与えられるであろう攻撃も、当たらなければ意味をなさない。その点だけは剣だろうが糸だろうがアタッシュケースだろうが、同じだ。

唯一幸いなのは、真祖がシヤムロックたちへ向けて攻撃する様子が無いことだ。

逆に一番の泣き所は、^{イヴ}椿が主人である百合音の相手をしていること。本来、^{サブクラス}下位吸血鬼が^{サブクラス}真祖と^{イヴ}主人に立ち向かうならまずは人間である主人を狙うのがセオリーである。それが今は、皮肉にも椿と戦っているせいで余計な手出しができない。

とんつ、と軽やかに真祖が後ろへ跳ぶ。

^{イヴ}主人である百合音が前方にいるため、契約の鎖が彼女に引かれなが

らその体の真横を通る形になった。

その鎖に迷いなく、白魚のような指が絡む。

「……うわっ!?!」

離れた場所から驚いた声が聞こえ、シヤムロックはそちらを見た。百合音が左後方に体を傾けて今にも転びそうな体勢になっている。が、そうしてバランスを崩す前に彼女の左胸があつたのだろう場所を椿の刀の切っ先が裂いており、間一髪の危機だつたことが分かる。

平衡感覚が優れているのか、百合音は直ぐに鎌の柄を地面に突き、それを軸に崩れた体勢を整えていた。目の前で起きたことを総合して導かれる結論にシヤムロックは瞠目する。

(今のは、まさかつ……!)

青い瞳の真祖は既に用済みとばかりに鎖から手を離し、向かつてきたベルキアの剣に本の背を当てて弾いている。

主人^{イヅ}と繋がる鎖に手を掛けていたこと、同じタイミングで足を取られたように左側にバランスを崩した百合音、そして彼女の心臓を狙っていた椿の刀。一連のことを関連させて考えるなら、今この時もベルキアの攻撃をあしらい続けているあの少女は、主人^{イヅ}の危機に的確過ぎる援護を入れたことになる。

いや、ただ援護したのではない。

先程鎖を掴んだ手の動きは、少しも切迫したものではなかった。まるでダンスの中で踏むべきステップの一つのように、予め決まっていたタイミングで決まった動作をただけのように見えたのだ。現実には流動的に動く戦闘の最中であり、そんな筈がないというのに。

しかし実際には有り得た。

それはつまり、彼女がこの場に立っていた全ての者の動きを、完璧に把握していたということだ。

指先まで神経の行き届いた所作で、振り下ろされたベルキアの剣を避ける少女。避けるといってもそれは、剣の通る軌跡にさえ身をおかなければいいというように、必要最低限の身の引き方だった。

また華奢な手に引かれた鎖が、鞭のようにしななってベルキアの手にする剣に叩き付けられる。弾かれ宙を舞ったそれは、地面に落ちる前

に、落ちる位置が分かっていたかのように伸ばされた真祖の手に収まった。一秒前まで鎖を掴んでいたはずの左手に、だ。

まずい、と反射的にシヤムロックはベルキアに一度距離を取るよう指示を飛ばす。今まで武器の類いを手にしていなかった真祖の手に剣が渡ってしまったからだ。不本意そうな顔をしながらも体勢を立て直す必要は感じていたのか、ベルキアは大人しく下がった。入れ替わりに、牽制の意味を込めてオトギリの糸が真祖を狙う。

数秒ではあるが今の内に次の策を考えなくてはならない、と思考をフル回転させるシヤムロック。

しかし、そこで真祖の少女へ目を向けた彼の思考は、次の瞬間に止まることになる。

オトギリの糸を身を捻って躲かわしている最中の真祖の青い瞳が、じつとシヤムロックを見ていた。

「……ッッ!!」

ザツと血の気が引く感覚があった。

彼女は、自分の身に降りかかる火の粉を完璧に避けながら、視線は全く別の事を「観察」しているのだ。しかも恐らくは、そうして得た情報から予測を立て、瞬時に対策を編み、次の行動に組み込んでいる。

先程主人イヴの危機を回避した時も、それが訪れるより何手も前から予測ができていたからこそ、彼女にとっては来ると分かっていたタイミングに合わせて鎖を引いただけ。

そうしている間にも次々に更新される情報を同じように汲み取り次へ繋げる。勿論、思考とは別に身体も動かしながら。

どれだけ効率的な情報処理能力があればそんな芸当ができるのか、シヤムロックには想像もつかない。「頭が良い」のレベルを越えている。

シヤムロックからの次の指示がなかったためか、痺れを切らしたベルキアが真祖へ向かって飛び出していく。

ちらりと、椿と百合音の方へ青い瞳が動いた。

同時に、真祖の左手から剣がするりと取り落とされる。右手は白い本を胸元に抱き寄せており、左側は剣がなくなったせいでがら空きの

状態になった。身の安全を確保するため距離を取ろうとするように、ローヒールの靴の爪先が地面を蹴り少女の体が後ろへ遠ざかる。

その状況を見て、シヤムロックは条件反射でアタツシユケースを振りかぶっていた。今の状態、一つも当たらない攻撃を当てるのに絶好のチャンスだと感じたからだ。勝つために真祖の隙を窺い続けたからこそ、まさしく『反射的』な行動だった。

だがその時、シヤムロックは見失ってしまった。

視界の端で、椿の刀が百合音の首筋を風ぐように振りかぶられていたのを。

自らの腕が、今にも真祖へアタツシユケースを投げそうになっているのをどこか客観的な頭の片隅で認識して、シヤムロックはまた冷や水を被せられたような心地になった。振ろうとした腕が、寸前で止まる。

予測だけではない。

「……ベルキアツツ!!」

シヤムロックの叫びは、あと一步で間に合わなかった。彼と同じように真祖の決定的な隙を狙って投擲とうてきされた剣は、既にベルキアの手を離れている。

そして、計算し尽くされた動きで、向かってくる剣の横面へ本の角が当てられた。軌道が逸れ、いや逸らされて、更に回転が加わった状態で剣は椿の方へ飛んでいく。

ギインツ!?と金属が金属を弾く音が響いた。

剣は椿を傷付けることはなく、椿の刀によって弾き返されていた。無論、そうして刀を防御に使ったことで、百合音への攻撃は中断されている。

「若ああ!!?お怪我はございませんかああ!?!」

「つばきゆんゴツメ〜ン!! ★アイツに向かって投げたら弾かれてソツチいつちやったア〜! ☆★☆☆」

ベルキアのふざけた謝罪に思わずアタツシユケースを振り抜きかけたが、ふと、それさえも読まれているのではないかという疑心にシヤムロックの手が静止する。

青い瞳の真祖へと視線を戻した彼は、つい今しがた彼女が行ったことに畏怖すら感じていた。

誘ったロー導いたのだ、彼女が。

主人の危機を滅するために必要だったから、ベルキアが剣を投げるよう誘導した。わざと距離のある状況で、大きく隙を見せることで。

こちらの攻撃が空振るだけではなく味方に当たってしまったのも、そうなるように誘導されていたからなのかもしれない。そこまですぐに思いついて漸く、シャムロックはこちらの戦況が初めから今まで完璧に真祖の掌の内で操られていたのだと、気付いた。

冷たい瞳が、またシャムロックを見ている。

それが思案するようにすつと細められたのが見えて、彼は覚った。今しがたシャムロックが気付いた事に、気付かれたのだということ。

彼女の思考は完全に、参謀としての自負があるシャムロックの頭脳の上を行っている。そのことを理解してしまえば、どうすればこの戦闘を征することが出来るかなどと頭を捻ることさえ滑稽に感じるほどだった。三対一の状況で、たった一人の身でシャムロックたちを翻弄し続けている少女。彼女の強みは、真祖としての身体能力や戦闘力の高さではない。本来なら主人によって使役される側であるにも関わらず、司令塔、あるいは後方支援としての才覚が飛び抜けている。何よりも頭脳の格が、圧倒的に違う。

相変わらず真祖は、シャムロックたちへ向けて攻撃は仕掛けてこない。くるり、ひらり、真つ白なワンピースが、彼女の動きに合わせて揺れる。

そして、突然に彼女は、無謀にもシャムロックらへ背を向けて見せた。

そのまま、まるで今まで戦っていた三人など居なかったとでもいうように、戦闘開始時に彼女と百合音が立っていた辺りまで戻っている。

余りにも悠々とした歩みに、好機と見て追おうとしたベルキアをシャムロックは制止した。彼女の行動はどう考えても不可解であり、

何かの罫である可能性が高いと判断したからだ。

最初の位置まで戻り、振り返る少女。

形良い唇が、主人の名を呼ぶ。

初めから示し合わせていたかのように「ーいーいや、実際に彼女たちの間では示し合わされていた結果なのかもしれないがーいー語られたのは、今までの戦いはただ守るべき下位吸血鬼^{サブクラス}たちを離脱させるためだけの戦闘だったこと。つまるところ、主人も真祖も両方が囮に過ぎなかったのだということ。

その後、今日は引くという選択をした樁の後に続いたシャムロックの頭には、強く刻み付けられた事柄が一つあった。

知欲の真祖は、頭脳戦においては目下最大の敵である、とーいー。

24. 重なる過去

寝耳に水な話だった。

文化祭前日で、浮き足立った教室内。皆が各々に準備の最終段階に取り掛かる中、飾り付け用の画用紙にハサミを入れていた百合音と一緒に作業をしていたクラスメイトの口から零れた噂話に、目を見開いて固まった。

教室の窓に貼る予定のデフォルメされたおぼけの切り紙が、ひらりと彼女の手から滑り落ちる。

「……桜哉くんが、転校した……？」

そんな話は、一昨日まではどこにも無かったはずだ。

話を聞くに、桜哉が転校したのは先週のことらしい。だがそんなことはあり得ない。百合音は校内では顔が広く、それ故に耳も早い方だ。特に人の噂には常にアンテナを張っている。もし本当に彼が先週転校していったのなら、彼女ならばとつくに聞き及んでいたはずだ。

(……なのに今いきなりこんな話が飛び込んでくるってことは、文字通り、転校の話が皆の記憶に「差し込まれた」から……)

動揺して落としてしまった切り紙を、クラスメイトが拾ってくれた。それに反射的に礼を言いながらも、疑問は止めどなく溢れ出す。

(まさか昨日、私の知らないところで、何か起こってた??冷優のことを暴きに來た椿さんたちの中に桜哉くんがいなかったのは、関係がある??それとも、もつと他に……)

思考が意味もなく空回る。

一度に大量に情報を与えられると整理しようとして逆に全ての思考をストップさせてしまうというのは、彼女の悪い癖だった。落ち着いて考えれば良いだけの話なのだが、どうにも思考の制御という点には普段の器用さが発揮できないのだ。

(……今は、とりあえずこの作業を終わらせなきゃ)

考えずとも色ペンの縁取りに沿ってハサミを進めることくらいは出来る。使い物にならない思考が落ち着くまで、百合音はしばらく何

も考えないことにした。

昨夜の騒動で怪我を負った御園の入院に際する手続きや必需品の持ち込みが粗方終わった頃合いだった。

小さめの冷蔵庫に食後用の林檎を忍ばせていたリリイは、ぱたぱたと駆けてくる控えめな足音を耳にしてドアへ顔を向ける。

「リリイー」

「リリイ！」

すると双子の下位吸血鬼^{サブククラス}、ユリーとマリーが病室へと駆け込んできた。

「おや、二人とも、病院の中で走ってはいけませんよ」

「ごめんなさい……」

「でもお話があるの」

昨夜は無理をしたせいか、御園は未だに眠っている。怪我は深くはなかったため、昏睡という訳ではなくあくまで正常な睡眠である。個室にも関わらず広いこの病室でなら、静かな声で会話をすれば御園が起きることはないだろう。

そう判断したリリイは、双子を部屋の隅に招いて視線を合わせるために膝を折った。

「それで、どうしたのですか?」

「吸血鬼は何人兄弟?」^{サーヴァンツ}

問い掛けたのはこちらのはずだが逆に質問をされ、リリイは首を傾げながらもそれに答える。

「そうですねえ……私が末っ子で七人だと思っていました、八番目が出てきましたからね。今は八人兄弟でしょうか」

「二本当に?」

間髪入れずにそう返され、リリイは戸惑った。

双子の吸血鬼は一度顔を見合わせ、また声を揃えて。

「知られざる九番目、九番目の真祖を昨日見たの」

学校内で彼の姿を見つけれられたのは、本当に幸運な偶然だった。

「真昼くん！」

「っ、鈴白さん…?!」

百合音でさえ異変に気付いているのだから、桜哉と同じクラスの真昼ならばもつと詳しい話を知っているかもしれない。

そんな期待を抱え、百合音は何故か私服姿の彼に問う。

「桜哉くんが転校したって話、聞いた??何が起こってるか知らない?」

「えっ……」

早まったことをしたと気付いたのは、真昼の表情が驚愕のそれに染まってからだだった。

「鈴白さん、桜哉と知り合いだっけ…?」

「っ、！」

返された、その率直な疑問に百合音は息を詰まらせる。取り返しのつかない類いの失敗をしたと直感的に悟った。この状況からは巻き返せないものだど彼女は知っている。

いや、考えてみればそもそも昨日の椿たちの襲撃と、冷優の存在についても話さなければならぬのだろう。色欲の主従には話すまでもなくもう双子の証言から伝わっているかもしれない。だとすれば目の前の彼にも既に連絡がいつている??それはないと思いたい。百合音が九番目の主人^{イヅ}だと知っているなら彼の反応が薄すぎる。ただ突然話し掛けられて思考が追い付いていないだけかもしれないが。だとすれば、いやそれでも今は先に桜哉のことを聞きたい。しかし、そのためにはどう切り返せばいい?

直ぐに処理限界に達する思考能力の不出来さに更に百合音は苛立ちを募らせる。

だが真昼の方は別の結論に至ったようで。

「…もしかして、主人^{イヅ}だから、記憶の干渉とか受けなかったのか?」

「えっ…？」

今度は百合音が戸惑う番だった。話が思わぬ方向へずれて行っている。

「たしか鈴白さんには、桜哉のこと、少しだけ話してたよな。俺の幼馴染って」

「ええ、」

「だから、桜哉が転校したって話を聞いて俺に知らせに来てくれたってこと…じゃない、のか？」

「……………」

どうやら真昼の目線から見れば、百合音は真昼の幼馴染だと聞いていた桜哉が転校したという噂を突然聞いて、記憶の改竄がなかったためそれに違和感を感じ、心配して真昼に声を掛けにきた、と思われているらしい。

事実とは違う。…違うのだが、そしてこれ以上嘘を重ねる気もないのだが、それでも百合音は真実の方を脇に置いておくことにした。

「…真昼くん、本当は私から色々と話さなきゃいけないことがあるんだけど、でも今は桜哉くんと何があったのか、聞かせてくれる？」

どのみち、椿に関する話は色欲組も交えて話した方が都合がいい。それにしても誠実とは言いがたい切り返したが、それよりも先に桜哉のことを聞きたいという思いが百合音の中では勝っていた。

今まで百合音は、桜哉は椿の『計画』とは関係なく、ただ学校生活を楽しまいたがためにこの高校に通っているのだと思っていた。学校でのことを語る彼の言葉は全て本心からのものに聞こえたし、何かの計画に沿った打算など微塵も感じられなかった。事実、時系列で言えば椿は随分前から動き出していたはずだが、この時まで桜哉は普通に学生生活を続けていたのだから。

それが何故、こんなにも唐突に記憶の改竄までして去っていったのか。

「実はあいつ…桜哉は、椿の^{サブ}下位吸血鬼だったんだ」

「！」

その一言で、疑問は解消された。

単純な話だ。真昼に正体を明かしてしまったから、もう学校には居られないと判断しただけのことだ。

そしてそれから、真昼の口からは昨晩起こった憂鬱組からの襲撃、御園の負傷、嫉妬の主従の介入などが語られた。勿論、桜哉の嘘についても。

「俺、桜哉のこと何も分かってやれてなかったんだ。あいつのこと、もっとちゃんと知ろうとしなきゃいけなかったのに……!」

そう、後悔を吐露する真昼の姿に、百合音は掛けるべき言葉を見失っていた。

今、百合音は城田真昼に同情を抱くことは出来ない。何故なら彼女は綿貫桜哉の立場の方がより身近であり、どう足掻いても真昼と同じ心境にはなれなかったからだ。

ただ一つ、言えることがあるならば。

「……真昼くんは、悪くないわ」

慰めではない。

だって、真昼が嘘を吐いてしまうまで、桜哉はこう思っていたはずだ。吸血鬼だとバレることなくずっと真昼と友達でいたいと。そのために自分が吐いている嘘にどうか気付かないでくれと。非日常などなく、ただ平穏な学校生活を送りたいだけだからと。

つられるようにして思考が椿を含む憂鬱組全員を欺いた時のことを引きずり出してくる。百合音は、あの状況で全員と平穏に過ごすには吸血鬼のことなど知らない一般人という『役柄』が最適だと思ったから、それに合わせて嘘を吐いた。ただその方が皆、笑っていられると思っただから。

その偽りが暴かれられないように細心の注意を払って隠していたのは桜哉であり百合音なのだから、欺かれた側が心を痛める必要などどこにもないのだ。

拳を握り締めて俯く真昼とは反対に、百合音は色褪せていく空に視線を逃がした。

ただ、純粹に後悔だけを抱えることの出来る彼のが、少しだけ羨ましく思えた。

スツ、と滑らかにドアが開く。

相変わらず照明の点けられていない部屋には、パソコンの画面だけが光源として光を放っていた。

部屋の主に声を掛けることもせず足を踏み入れた百合音は、そのままパソコンに向かっている人物の後ろまで歩みを進める。

パソコンには、中サイズに縮小されたウィンドウが幾重にも画面を覆っており、一番上に引き出されたウィンドウには学生証のようなものが表示されていた。ありふれた青い背景の証明写真には眼鏡を掛けた男子学生が映っており、写真の横には細かい文字で個人情報らしきものが掲載されている。内容までは読み取れないが、学年や生年月日あたりが書かれているのだろうと予想がついた。

何故か学生証のウィンドウはパソコン画面の右上に揃えて表示されており、風谷の背後に立つ百合音にも見える位置にあった。

行儀悪く机に肘を突いて手の甲に顎を寄せ、画面に映る写真の人物を見詰めながら、彼女――風谷が呟く。

「私と同じ年で高校に潜れるあたり、やはりかなりの童顔だよなあ……」
君もそう思わないかい?と振り返らずに同意を求められたが、百合音は応えなかった。

「……風谷、」

彼女は今、願いを叶えてもらうためだけにここに居るのだから。

「教えて、桜哉くんのこと」

真昼からは昨晚の話を聞いたのみだ。綿貫桜哉が記憶操作をして彼の幼馴染を装っていたこと、椿の下位吸血鬼^{サブクラス}であり吸血鬼らしい攻撃性を垣間見せたこと、そして「オマエに殺してほしくて嘘まで吐いたの」と言っていたこと……知り得たのはそのくらいだ。

しかし百合音にはまだ飲み込めない点がある。たとえば真昼が嘘を吐いてしまったにしても、桜哉がそこまで城田真昼との関係に執着していたのなら、わざわざ昨日真昼の前に敵として対峙する必要はな

かったのではないかと思うのだ。真祖と下位吸血鬼サブクラスの主従関係は意志的なものか強制的なものなのか、百合音は詳しくは知らない。それでも、「家族」を大切にし彼らの意思を尊重する椿であれば、桜哉が拒否すれば真昼と戦わせることはしなかっただろうと思う。だとすれば実行すると決断したのは桜哉自身である。

どうして桜哉がそこまで椿に従うのか、真昼と敵対することを選ぶのか。その行動に至る桜哉の考えが、百合音には分からない。だからこそ。

「ちゃんと、知らない」と

付け加えるように発した声は、普段の彼女のものとは比べ物にならないほど覇気の欠けたものだった。

くるりとワークスチエアが回る。

振り向いた彼女の呂色と視線を合わせて、百合音は縫すがるように、もう一步近付いた。

風谷から語られた綿貫桜哉の過去を聞き終えた後、百合音はふらふらと自室へ戻りそのままベッドへ身を投げ出した。

衝撃や動揺を通り越して、最早彼女の心は波立たず茫然としていた。

(なによ、本当に……どこまで重ねれば気が済むわけ……?)

人の心を利用して嘘を吐き、欺きながら人の輪の中にいる。今まで、そんな彼に対する感情はもう同族嫌悪だけしかないと思っていた。

けれど、確かに厭う感情はあるけれど、心から共感せざるをえないこともあると知った。

(真昼くんが嘘を吐いたから椿さんの側に立つ……なんて、ただの結果論じゃない)

桜哉の過去を知った百合音には、断言できる。

城田真昼の嘘がなかったとしてもきつと、桜哉は椿の元を離れな

かっただろう、と。

だって、裏切れるはずがない。

桜哉にとつての椿が、百合音にとつての風谷だったというのなら、離れられるわけがない。

あの嘘の世界から掬い上げてくれた、唯一無二の存在なのだから。

(……………真昼くんは悪くない。けど、桜哉くんのこと、間違ってるなんて言えない……………)

もし自分が桜哉の立場だったらと、彼女本来の共感性の高さも相まって容易に想像と同調が出来るからこそ、引き絞られるように胸が軋きしむ。

————誰も悪くないのなら、どうして悲劇が起こるのだろうか？

遠い昔にも抱いた疑問に、未だ答えは出せぬまま。

心に渦巻く過去を抱えながら、少女は目を閉じた。

25. 忘れ得ぬ（前編）

窓の外に広がる、晴天の空。

それとは裏腹に荒れ模様的心を抱えて、椿は本日幾度目かの溜め息を吐いた。

（本当に最悪だよ。やっぱりC3とあの黒い獅子は何回潰しても潰し足りないだろうなあ）

物騒なことを胸中で呟く。

普段は別の人物が陣取っていることの多い窓際に腰掛けている彼の心を荒らしているのは、勿論九番目のあの少女の存在だ。鈴白百合音と契約を結ぶ、知欲を名乗る真祖。目にするまでは考えすぎという思いもあつたが……白い猫の姿から人へ変じ、血を啜^すつて主人^{イヴ}と鎖で繋がれた様は間違いなく真祖^{サーヴァント}のそれだった。最早疑う余地はない。

美しい少女だった。

その美しさに見合うドレスを着せてガラスケースの中に座らせておけば、人形と見紛うのではと思うほどに。

見た目は百合音と同じ年くらいであるのに、纏う雰囲気は不自然なほど大人びたものだった。終始口許を緩ませることすらなかったが、その無表情さえ凜とした佇まいを際立たせる要素となつているのだから、相当なものである。

また、主人^{イヴ}である百合音との仲は温かな信頼関係には見えなかったものの、確固たる信用を感じられるものではあつた。そもそも人間である百合音が椿へ戦いを挑んできたのも、真祖からの援護に絶対の信を置いていたからなのだろう。そう長い付き合いはしていないが、彼女があれほど誰かを当てにしている姿は見たことがない。決して軽い信用ではないことが窺えた。一步間違えば互いに武器を向けそうな彼女たちが今の関係を築くまでには、きつと椿の知らない色々な事があつたのだろう。

九番目の真祖がC3から解き放たれたのは、五年前であると百合音は言っていた。

何故気付かなかつたのだろう、と椿は既に何度も己に問うた疑問を

繰り返す。

百合音によれば、今までずっと、真祖たる少女の方が椿や兄たちを避けていたらしい。

しかし、肝心の避けていた理由までは依然として分かってはいない。いや、先ずもって椿は彼女のことをほとんど何も知らないのだ。そしてそうなった原因を考えれば、自ずと不愉快なロジックが組み上がる。

(あの子は先生が殺された後、未完成のままC3に回収されたって言ってた……先生があの子の黒い獅子に殺されなければ、僕はいずれ完成したあの子と逢えていたはずなのに……！)

募るのは、これまで九番目の真祖……唯一の妹と呼べる存在と出逢う機会を消されていたのだということに対する、憎悪。

無論、椿自身が彼女の存在を見付けてあげることが出来なかったことに対する懺悔の心はある。だが元を辿れば、きちんと「先生」の手で彼女が完成させられていけば何の障害もなく椿は妹を得ることが出来ていたはずなのだ。その未来を踏みにじられていたという事実が、椿の心を黒一色に染め上げる。

ザアザアと、憂鬱な雨の音が椿の耳には響いていた。

獅子の咆哮と自分自身の叫び声。「先生」を喪ったあの日の記憶は、脳裏に焼き付いて離れることはない。

そのまま数分。

知らずの内に自分でも引くほどの不機嫌オーラを出してしまっていたことに気付いて、駄目だ駄目だと軽く首を振って椿は淀んだ気持ちちを散らした。九番目の彼女に会って以降、思考が度々前述のような憎悪のループに入ってしまった、家族まで怯えさせていることは自覚があった。現に、大抵は椿の側にいるベルキアが今は居ない。何気に空気の読める彼だから、不機嫌を撒き散らす椿を一先ずそつとしておこうと身を引いたのだろう。

このままではいけないと分かっているにもままならない心にまた溜め息を吐き出して、椿は徐に着物の袖から携帯を取り出した。

(こうなったら……)

黒い獅子やC3に対する憎悪はもう拭いようがないが、九番目の真祖に対する感情に折り合いをつけるための策は一つだけあった。正直、あまり取りたくはなかった手法だが。

意を決して椿は、電話帳からある人物の名前をタップした。

プルルル、プルルルとコール音が響く。

そして3コール目で出た人物の第一声は、常套句の「はい」でも「もしもし」でもなかった。

『やあ、意外と粘ったじゃないか。どう足掻いても私に聞くのが一番手っ取り早いと知っているくせに』

「五月蠅いよ。僕が掛けてくるのが分かってたならワンコールで出てよねー風谷巽」

そう、知らないなら知ればいい。ただそれだけのことである。

『不機嫌そうで安心したよ。あの子の存在を知ってもなお気にも留めていないようだったら、今度こそ君の皮を剥ぎに行くところだった』
「ねえ、君って実は人間じゃないとか言わないよね??その発言は明らかに人間捨ててる気がするんだけど」

『何を言っているのか少し理解しがたいね。あ、皮というのは勿論狐の方の毛皮だよ??流石に人間の状態の君の皮膚を剥ぐようなつもりはないさ。売りにくいし』

「最後の一言のせいで弁明が弁明じゃなくなってるけど」

『まあ、こうして君が私に電話してきたということはさ、あの子のことをきちんと知りたくなったからなんだろう??それならとりあえずは合格だ。さつさと本題に入ろう』

逸らしたのはそつちでしょ、と椿は思ったが口には出さない。突っ掛かる方が面倒なことに発展する可能性が高いからだ。

『先ずはそうだな、名前からいこうか。大事なものだからね』

情報屋は至極楽しそうに、勝手に話を進め始める。

『あの子の名前は冷優。 “冷たいほどに優れる” と書いて、冷優だよ』
「……………」

ふと、己を見詰めていた青い瞳を思い出す。宝石のように美しく、無機質な光を宿していた瞳を。それだけではない。容姿、仕草、作法、

どれをとつても理想や手本のように美しく体現していた彼女。一目で教養と気品の高さを知らしめる振る舞いは確かに、氷のような冷たさを感じるほどに優れたものだった。

『司る大罪は知欲。彼女は“未完成の真祖”としてC3に保管されていたが、五年前に私が解放した。その後、紆余曲折あつて同じく私に拾われた百合音と契約。現在有する下位吸血鬼サブクラスは一人』

「…そんなことは聞いてないよ」

要らない情報を押し付けられても困る、と返せば、おやそうかい、とそこで漸く風谷の口上が止まった。

『では、どんな情報をどこ所望かな?』

「…冷優は、君の元に居るんだよね?」

『ああ』

さて、どんな言葉がいいだろうか、と椿は思案する。そういうカテゴリであれば何でもいいのだが、それなりに慎重に選ぶべきではある。

音にはせず幾つかの言葉を舌の上で転がして、ともすれば慈愛の情にも聴こえる“口実”を吐き出した。

「なら質問。……あの子は今、幸せ?」

『…お前、それは分かってやっているのか?』

一段と低い声が電話越しに響く。それに「勿論」と答れば電話口から舌打ちが聞こえた。隠そうとする気配もない苛立ちがひしひしと伝わってくる。だが椿に引くつもりはない。

『相も変わらず小賢しい。懇願でもしてみせてくれるのを期待していたんだがな』

風谷が一気に不機嫌になった理由は明白だ。椿の言った質問に“偽りのない”回答を用意しようとするなら、手段は一つしかないのだから。

「君に懇願する必要はないでしょ??幸せかどうかなんて本人にしか分からないことなんだから、さ」

また舌打ちが聞こえた。

つまりは、冷優が幸せかどうかと問うことで椿は今、電話口に彼女

を出すことを要求している。ことごとくいった類いの質問に関しては本人の言葉でなければその回答は意味を持たないからだ。

無論、椿の要求を理解したからこそ風谷は隠すこともなく不快さを露にしている。流石にその程度で椿が怯むとは思っていないだろうが。

返答には数十秒掛かった。

『……分かった。曲がりなりにも仕掛けたのはこっちだからな』

苦渋の決断、という風を隠しもしない。

だが、要求を呑ませることに成功した。一つ難所を潜り抜けた感覚に椿は気付かれぬよう息を吐く。

『代わりに条件がある』

『……………』

そう切り返されるだろうとは思っていた。

しかし提示されたのは条件の内容については、椿の予測を越えていた。

『私が冷優を電話に出す代わりに、君は綿貫桜哉を連れてこい』

「！」

全く油断も隙もない、と椿は唇を噛む。

「何を話すつもり？」

『君に言う必要はないだろう』

今度は風谷の方が突っぱねた。

「僕は彼女に何を聞くかもう言ってる。君の方の用件も開示してもらわないと、公平じゃない」

『誰がいつこれがフェアな取引だと言った？』

「その発言は君の情報屋としての理念に反していると思うけど？」

『私は思わないね。君に対してフェアな提案をしてやるつもりはこれっぽっちもないよ。私の可愛い娘たちに手を出すような輩にそんな配慮はいらないだろ』

「……………」

文字通り吐き捨てるような口調だった。どうやら冷優もまた風谷にとっては何合音と同じように、「娘」扱いらしい。そういう意味で

風谷から見れば、椿はどちらにも手を伸ばそうとしている本当に目障りな存在だろう。警戒心MAXなものも仕方ないのかもしれない。

(一つ要求を吞ませた、ここが限界かな…)

交渉とは引き際も重要である。

桜哉へ話す内容によつては最悪電話を切ることも念頭に置きながら、椿は了承の言葉を告げた。

異色の面子だ、と桜哉は脳内で独り言つ。

スピーカー状態の携帯を挟んで、椿と桜哉はベッドの上に腰掛けていた。

ここは桜哉の自室だ。いつもそうすれば良いのに、こういう時ばかり椿はきちんとノックをして部屋の主の許可を取ってから入ってくる。そのため追い返せなかった次第である。

彼と椿、携帯越しに風谷と冷優。前者二人と後者二人ならまだ分かる。だが四人がセットになる共通項は浮かばない。恐らく同じ部屋に置かれても普通なら会話すら始まらないような面子だ。

『さて、では始めようか。先行は君でいいよ』

拡声された声が促す。しかし椿が発言するよりも先に、割り込むようにスピーカーから凜とした女声が響いた。

『ーーーーーごきげんよう、憂鬱のお兄様』

優しい声、ではない。

かと言つて、敵意や負の感情が込められているようにも感じない。

(これが、アイツの真祖…)

桜哉は、今正に電話の向こう側にいるだろう知欲の真祖と直接相對したことはない。だからこそ彼の頭に浮かぶのは真祖ではなくその主人たる少女の方だった。

今頃はまだ学校に居る時間帯だろう。文化祭の日には、気付かれないう程度に顔を見るつもりはあったのだが、五組の教室に辿り着く前に真昼に見付かり屋上からダイブしたりしたため結局は会っていない。

『それで、どのようなご用向きでしょうか?』

はきはきとした発音。だが百合音のような相手と関わろうとする積極性が滲む明るい声色とは対照的に、真祖の方はフレンドリーさの欠片もない平淡な声だった。

椿の応答を待っているのだろう、携帯からは沈黙のみが聞こえてくる。ちらりと隣へ視線を投げれば、眉尻を下げて途方に暮れたような顔をしている椿がいた。

「…なんか言わないんですか?」

「……………うん、言いたいことはあるんだ、沢山。でも、言葉にならなくて」

『あ、因みにさっきのふざけた“口実”をそのまま尋ねてきたら問答無用で切るからな。少なくとも君と一緒に居させるよりは幸せにしているくらいの自負はある』

「ちよつと、君は黙っててよ。僕は彼女と話したいんだから」

『ならさっさと話せよ。というか私に電話する前にそれくらい考えておけ』

『風谷、五月蠅い』

椿に対する風谷の言も辛辣だが真祖も容赦がなかった。直ぐに風谷の声がしなくなったあたり、電波の向こうで物理的な突っ込みも入っていそうだと桜哉は思う。

こほん、と儀礼的な咳払いが一つ、ノイズのように響いた。

『具体的なご用件がないのでしたら、お兄様、私の方から一つ確認したい事がございます』

「え、何?」

『お兄様のもとに百合音が居た時、あの子の血を吸ったのはお兄様で間違いございませんね?』

「……………」

絶対零度、という表現が桜哉の頭には浮かんできた。それほどまでに冷たい声色だった。

隣の椿が目に見えて冷や汗をかいている。しかしこの件に関して桜哉は椿を擁護する気が微塵もなかったので、一先ず背中を撃つこ

とにした。

「椿さんで間違いない。なんなら証人もいる」

「桜哉!？」

『成る程。では謝罪はしたのですか?』

「う、うん。謝ったし許してくれたけど…」

『あの子が許したかどうかなど関係ありません』

「えっと……でもね、怒ってないって」

『あの子が怒るわけがないでしょう』

ぴしゃりと言われて椿が肩を跳ねさせた。口調が荒いわけでも語気が強いわけでもないが、確実に相手を糾弾する言い方だった。

同時に心の中で、桜哉は真祖の台詞に同意していた。アイツならそうだろうな、と。

いつもいつも他人のために駆けずり回って、余計なことに首を突っ込んで、関わるべきではない人物にすら目を掛けて「……」たえそれで傷付けられても、笑って許してしまう。それが鈴白百合音という人間だ。「自分」と「他人」の優先度合いが、その天秤が、明らかに狂っている。椿も含めてほとんどが気付かない彼女の危うさを、桜哉は知っていた。

何故気付いたのが桜哉だけなのかは、彼自身にも分からない。だが柄にもなく『同盟』なんてものを組んだ相手だから、よく見ていたのだということは否定できないだろう。もしくは、同族だからこそ違いには敏感だったのかもしれない。

いずれにせよ、百合音が許したかどうかは関係ないと言う真祖は正しいと、桜哉は思った。椿と九番目の真祖とが対面した日の話を聞いていた限りでは主従の仲が良さそうだったとは誰も言っていなかったが、主人のことを理解はしているようだ。

「ご、ごめんなさい…」

『前科は前科です。猛省なさって下さいませ』

椿が既に若干涙目である。妹に詰なられて反論できない兄という、中々に情けない構図だ。唯一出来た妹に可愛げが全くないのは神様の悪戯か、はたまた椿の自業自得か。

『さて、お兄様の容疑、もとい罪状に関する確認も取れましたので、これにて私の用事は済みました。他にお兄様から何かご用件はございますか?』

促され、少しの沈黙を挟んで、椿がようやく口を開いた。

「ねえ……一度、もう一回、どこかで会えないかな?」

椿の提案に、桜哉は内心で驚いていた。

初対面時、椿は彼女にも等しく戦争を突き付けたと聞いていたからだ。迷いが見えるとはいえ、椿の方から直接会いたいと言うとは思っていないかった。

「やっぱり、ちゃんと会いたいよ。電話だと余計な邪魔が入るし、ね?」

探るように、窺うように、椿は誘い文句を並べる。まだ距離感が掴めていないが故の行動だろう。

「その時までには話したいことはちゃんと考えておくから。会うのはやっぱり夜中が良いよね??なるべく静かに話ができるくらいの時間帯が」

さて、妹の方はどう出るか。桜哉の考えが及ぶ限りは別段不都合なことはないはずだか。

しかし、暫くの沈黙の後で、今までとは打って変わって感情の全く読めない声色がスピーカーから返ってきた。

『…お兄様は、何か、勘違いをなさっていらつしやるのですね』
「え…?」

『いえ、その余地を残したのは私の落ち度でございます。ですのでこの場を借りて、訂正させていただきます』

嫌な予感がして、桜哉は適当に流していた視線を携帯へ落とした。続く言葉を、椿に聞かせてはならない気がした。

しかし桜哉が具体的な行動を起こす前に、余りにも簡単に真相は言葉を紡いだ。

『お兄様、私は貴方の敵です』

「……………」

その一言で、椿が凍り付いたのが分かった。

ひゅつ、と絞られた喉の奥で空気が吸い込まれる音が聞こえる。音源は無論、椿だ。

(チツ…いつそ切った方が良かったか)

咄嗟にそこまでの判断が出来なかったことを桜哉は悔やんだ。こういう時の勘ほど当たるといふのに。

椿は今の今まで、少なからずの希望を持って彼女と話していたはずだ。兄弟たちから知られることのなかった、似た境遇の存在として、協力は不可能でも明確な敵意は向けずに済むと。離れ離れであっても、兄妹として互いに想える存在だと。…それを根底から、否定された。

それだけでなくも最近、頗るすこぶ機嫌が悪く不安定だった椿だ。これはかなりの精神的に追い込まれただろうと桜哉は無意識に奥歯を噛み締める。はつきり言って情緒不安定は彼の言えたことではないが。

息を詰まらせている椿に、スピーカー越しの声は続く。

『あの日… “先生” が殺されたあの日。憂鬱のお兄様は、何処にいらつしやったのですか?? どうして、“先生” の傍にはいらつしやらなかったのですか?』

(……………?)

その台詞に、桜哉はふと違和感を覚えた。

文字に起こせば紛れもなく椿へ追い討ちをかけているような台詞になるだろうが、一つ不可解な点があった。

声が、小さかったのだ。

今までが聞き取りやすい声だっただけに、その差は分かりやすかった。スピーカーフォン状態で通話しているせいでもたまたまマイクが拾ってしまっただけで、本当は独り言のような呟きだったのではないかと、桜哉は考える。

そこから導かれる仮説は。

(今のは、椿さんに聞かせるつもりで言った言葉じゃ、ない…?)

だが、当の椿はどう受け取ったのだろうか。そのような分析が出来るような状態であるとは到底思えない。ただストレートに、椿が “先生” と呼ぶあの人間が命の危機に遭っていた時に、どうして近くに居

なかったのかと責める台詞に聞こえただろう。

違和を感じた先程の台詞とは異なり、今度はまた平淡な、しかしはつきりとした口調で、真祖が冷淡な言葉を紡ぐ。

『私には、お兄様が何をなさろうとしているのかまでは分かりませんが、しかしその目的もしくは過程において、“お兄様にしか出来ないこと”をなさるおつもりなら——私の存在が一番の障壁となるであろうと、忠告させていただきます』

「…それは、どういう意味？」

『解釈はご随意に。ただ、私がお兄様よりも後に作られた存在であるということ、ゆめゆめ努々お忘れなきよう』

私からは以上です、と言葉が切れた。

ゆつくりと、桜哉は椿の方へ顔を向ける。さらりと落ちた黒髪が、俯く彼の表情を隠していた。いつもの椿ならばここで笑い出しそうなものだが、数秒待っても狂気的な笑声が響き渡ることにはなかった。最早、笑いで誤魔化すことも出来ないほどなのかもしれない。

『だ、そうだ、椿。もういいだろう？』

「……………」

『沈黙は肯定とみなすよ。では私の方の本題に入らせてもらおう。心の準備はいいかな??綿貫桜哉君』

椿の沈黙に全く気遣う素振りなく話の先が桜哉へ向けられた。

正直、情報屋から話があると言われても桜哉の心当たりはさっぱり無い。心構えも何もあったものではないのだが。

「…何の用だよ」

『警戒は必要ない。一つ、昔話を聞いてほしいだけだからね』

『昔話?』

『そう。このままでは少し不公平かなと思ったから』

話が読めない、と桜哉は眉をひそめる。

そんな彼を宥めるなだるように穏やかな口調で、風谷巽は核心を口にした。

『君も知ってるあるある女の子のお話だよ』

——鈴白百合音という名の、ね。

26. 忘れ得ぬ（後編）

昔話を聞いてほしいだけ。

そう電話口へ言った途端、直ぐに風谷の語ろうとしている内容を悟ったらしき冷優が隣から「正気？」とでも言いたそうな目を向けてきた。そんな聡い彼女の唇に人差し指を当てて静寂を促しつつ、風谷は昔話の対象となる「少女」の名前を紡ぐ。

『……………』

電話の向こう側は沈黙している。綿貫桜哉の方は風谷の意図を考えているのだろうし、椿は先に冷優がうっかりメンタルを潰してしまったせいで放心状態が続いているのだろう。兄の心に会心の一撃を叩き込んでおきながら、手持ち無沙汰になったのか手慰みにいつもの白い本を背表紙をなぞっている当の妹は、そもそも兄がそこまで大きなダメージを受けているとは思っていない可能性が高かったりする。精神面が強い主人を持つ故か、この程度なら容易に立ち直れるレベルだと思っているに違いない。とんだ二次被害である。

まあそんなことはさておき、交換条件は交換条件なので風谷は構わず話を進めることにした。この状態でお預けでは聴衆も焦れたいことだろうから。

軽く息を吸って、吐いて。

霧雨の中に取り残された少女と出逢ったあの日を思い浮かべながら、言葉を紡ぎ出す。

「……………昔々、ある街に、一人の少女がいました。

……………少女は、母親も、学校の皆も、街の人々も、皆のことが大好きでした。

……………同じ様に、友達や先生、隣人に商店街の人たちも皆、明るく素直で優しい少女のことが好きでした」

物語を朗読するように、努めて穏やかに、風谷は語る。この話において、彼女は登場人物ではない。少女の過去の一部を知るだけの、ただの語り部だ。

「……………しかし、ただ一人、母親だけは…少女のことを愛してはいま

せんでした。いつからか家族を省みなくなつた夫によく似た少女に、行き場のない憎悪をぶつけたのです。

「……けれど、それでも少女は母親のことが大好きでした。たった一人の母親なのですから」

語り部という役に徹しながらも、最早呪いとすら思える「親子」という関係の醜悪さに風谷は内心で吐き気がしていた。きつとそれが母でさえなければ、少女の心の大事な部分を歪められることはなかっただろうに。周囲の人間がどれだけ悪意に塗れた悪人であつたとしても、親さえまともであれば少女はきつと、その心根の優しさと強さでもって真つ直ぐに育つた。彼女を拾つて現在進行形で育てている風谷がそう思うのだからこれ以上の確証はないだろう。

だが現実には悪意を持つていたのは母親で、周囲の人間は良くも悪くも「普通」だつた。程々に好意的で、程々に他人行儀。酷い扱いを受けている子供を見過ごさない程度には善意的で、自ら余所の面倒事を掘り返そうとはしない程度には無関心だつた。

「……だから少女は、傷付いた身も心も、周りの人間の目に留まらないように隠しました。自分が傷付けられていると知れば母親が責められると、賢い彼女には分かっていたからです。

「……だから少女は、嘘を吐きました。自分は何時でも元気で、笑顔で、何の憂いも無い健全な子供だと。友達に、先生に、周りの人間全てに、そう思い込ませる嘘を、たくさんたくさん吐きました」

少女の中の歯車が空回りを始めたのは、果たしていつ頃からだったのだろう。子供は純粹だ、だから狂つた歯車に自分で気付くことも直すことも出来ない。それは本来なら周囲の大人の役割であるはずだからだ。

「……そして不運なことに、少女には同年代の子供は勿論、大人の目さえ欺けるような、才能がありました。まさに天からの贈り物のような、演技の才能が。

「……だからだあれも、少女の嘘に気付く人間は居ませんでした」

そうして彼女は誰にも気付かれず、また彼女自身すらも自覚のない

まま狂っていった。

小説やドラマで有りがちかもしれないが、天賦の才能とは必ずしも当人に幸福をもたらすとは限らない。神様からの贈り物は、最悪の形で少女に恩恵をもたらした。

「――そんなある日のことでした。朝から空は不機嫌で、昼でさえ薄暗いような日でした。

――少女が学校から帰ると、家の様子が違っていました。玄関には滅多に家には居ない筈の父親の靴が、転がっていました。

――少女がリビングを覗くと、そこには赤い水溜まりに倒れる父親と、その傍らで赤い包丁を持って佇む母親の姿がありました。

――母親は少女に気付くと、狂った者特有の笑みを浮かべながら、少女にも刃を向けてこう言いました。

「――『あんたも気持ち悪いのよ。家ではにこりともしないくせに外では他人に媚売って生きて。外面ばかり良かったこの人に本当にそっくり』」

：少女が家で笑わなかったのは随分昔に母親に『あんたの笑顔なんて気持ち悪い。吐き気がするから私の前で笑わないで』と言われていたからだが、そんなことは少女にとっても母親にとってもどうでも良いことだった。

「――少女は呆然としていました。ただ目の前の光景を頭の中で処理することで、幼い少女には精一杯だったのです。

――だから目前に迫り、振り下ろされる銀の刃を見て、そこで初めて、少女は当たり前前にこう思いました」

「――死にたくない、と。
そこで物語は一度暗転する。

その間に少女と母親の二人に起こった事は、誰も知らない。
状況証拠として挙げられるとすれば、母親が父親と同じような末路を辿ったということだけ。

だからこれは風谷の推測に過ぎないが、恐らく彼女は当たり前自分の防衛本能に従って「反撃」したのだ。大人相手に子供の少女が敵うのかという疑問は確かにある。だが果たして、狂乱し理性を失くし

た大人と死を回避するためだけに思考の全てを費やした子供が相対した時、形成が逆転することがないと言い切れるだろうか。加えて、現在の彼女の戦闘能力の高さを鑑みれば、この頃にその片鱗があっても可笑しくはない。そして事実、あの状況から少女は生き長らえている。

「…………少女は霧雨の降りしきる外へ飛び出しました。

…………少女は走っていました。霧雨で煙った街並みに隠されて、誰も少女には気付きません。

…………少女は走っていました。まだ幼い小さな手には不釣り合いな赤い包丁を握り締めながら。

…………走って、走って。少女は人の気配が全くないような薄暗い路地裏で、^{ようやく}漸く足を止めました」

その時の事を、当の少女はあまり覚えていないのだと言う。否、覚えてはいるのだろうが、はつきりと思い起こすことを無意識に避けているのだろう。

風谷にすらも、この頃の胸の内を明かしてくれたのは一度きりなのだから。

「…………少女は考えました。どうしてこんな結末になってしまったのかと考えました。一体全体、誰が悪かったのだろうかと考えました。

…………けれどいくら考えても答えは出ません。何故なら、少女の目に映る世界には、悪人など一人も存在してはいなかったのですから」

…それが、ある意味ではそれこそが、彼女の内側にある最も大きな「歪み」だった。

「…………だから少女は、自分自身に罰を与えることにしました。誰も悪くないならきつと、悪かったのは自分なのだ」と結論付けたからです。

…………だから少女は、赤い刃を自分の首筋に突き立てました。左側に刺したら沢山血が出るのだと、いつか誰かが言っていたからです。

「……そして少女は冷たい地面に横たわり、世界の誰にも気付かれないまま、静かに目を閉じたのでした。めでたし、めでたし」

昔話らしくそう締め括り、風谷は携帯に落としていた視線を上げた。上げた先には冷優がいたのだが、「今の話のどこに目出度めでたい要素があつたの」かと剣呑な光を宿した青い瞳と目が合った。美人が怒ると怖いと云うが成る程確かに、秀麗な柳眉をしか擧められただけでも中々の迫力である。

『…アンタはその話をオレに聞かせて、オレにどうしろって言いたいんだよ』

ややあつて返された感想は、想定より棘のある声色だった。しかしそれくらいで丁度良いと、風谷は口角を上げる。

「別に、君に何かを求めたつもりはないな。ただ、そうだね、一つ言えば…」

含みを持たせて、舞台を高めから見物をする脚本家のように語る。

「…人は、知ってしまった事実からは逃れられない。どれだけ見ぬ振りをしようともね。だから私はただ知って欲しかっただけなんだ。知った上でどう動くかは君次第さ。ついでに言うところの話は、君に對しての『等価』だ。不公平だと言っただろう??実は彼女にも同じだけのものを渡してしまつていてね。だからこれで、平等だよ」

その気になれば読み解くことが出来るだけのヒントを残しながら、わざと回りくどい言葉を選んで風谷は語った。彼にその気があれば言っている意味は分かる筈だ。

それに、今回は本当に、ただ「聞かせる」ことだけが風谷の目的だった。今この時点で既に、綿貫桜哉をレールの上に乗せることは出来た。従つて後は見守るだけである。

「さあ椿、これで取引は終わりだ。君も私も互いの要求を満たしたからね。望む結果であれ何であれ、対価は対価。ご臍頂にとは言わないけれど、また依頼があれば連絡したまえ。それでは失礼」

どうせもう返す言葉もないだろうと、定型文に近い挨拶を最後にして。

風谷は通話終了のボタンを押した。

通話が切れられた後は、ただ静かだった。

冷優が動物姿にならないようにとカーテンの締め切られた室内は、まだ日のある時間帯とはいえ暗い。二階であるためか表の喧騒は遠く、隣家の生活音も聞こえてはこない。二人の居るこの部屋だけが、世界から隔絶されたような空気に満たされて存在していた。

暫く視線をさ迷わせていた風谷が、少し躊躇った後で静かに冷優の肩を抱き寄せた。されるがままに引き寄せられると、ふわりと香る吸血鬼の本能を擦るような甘い匂い。芳しいそれに知らずの内に目を細めた冷優に、静寂に溶けるような低められた声が囁く。

「……ごめんね。君をまた、『箱庭の世界』に連れ戻してしまったみたいだ」

労るような口調で掛けられたその言葉に。

「……嗚呼、本当に、貴女は狡い。」

そう口から零れそうになったのを、寸前で冷優は唇を引き結んで抑えた。

代わりに、ふるふると彼女の腕の中で冷優は首を横に振って彼女の言葉を否定する。

「……それしか選べなかった頃より、ずっと良いわ」

喉から出たのは随分とか細い声だった。普段の声とは似ても似つかないことを自覚する。元々、あまり意識せずともよく通る声色を保持している冷優だが、今の声では説得力がまるで無い。

それでも、本心だった。

あの日差し伸べられた手を取って良かったと、冷優は心からそう思っている。

兄妹^{けいし}たちに己の存在を知られてしまったという現状を憂慮しているでも、その思いは揺らがない。……いつそ揺らいでしまえたら楽なのだが。

抱き寄せられた格好のまま息を吸い込めば、くらりと理性を揺さぶ

られるような心地がした。人間には分からないが、この風谷巽という人間からは吸血鬼の衝動を酷く掻き立てる香りがする。薄い皮膚に隔てられた所を流れるその血は、口に含めば甘露のようだろうと容易に想像が出来る。血に飢えた吸血鬼は勿論、特定の主人^{イヅ}を持つ真祖さえ惑わすような、上質な血の匂いだ。

一般的な例を挙げれば、魔術師の血統の人間などはその家系の血の濃さにもよるが、概して吸血鬼に狙われやすい。名家と呼ばれる家系の者ほどその傾向は強い。しかし風谷本人の申告に依ればそんな上等な家に生まれた覚えはないとのことだ。そのため幼い頃は万全な庇護もなく、外出するたび吸血鬼に襲われまくっていたと聞く。

そんな彼女にとつて、C3という機関は数少ない安全が保障された場所だったはずだ。

だが風谷は五年前にその安全地帯を捨てた。言うまでもなく冷優を目覚めさせて逃げた一件だ。

彼女は、何を思つて冷優を、九番目の真祖を連れ出したのだろうか。ずっと疑問ではあつたが、ずっと訊^きけずにいたこと。

明らかに建前のような理由なら告げられた覚えがあるが、真意は隠されたまま。あの時の彼女が何を考えていたのか、推測は得意な冷優でも流石に情報が少なく、推し測ることが出来ない。

最初の謝罪を言つたきり何も言わない風谷をその腕の中から見上げ、静かに意を決して冷優は口を開いた。

「……………どうして貴女は、私を助けたの？」

契約して真祖の力を手に入れようとする訳でもなく、実験材料として我が物にする訳でもない。かと言つて解放するだけして野放しにすることはなく、親と名乗られても反感が湧かない程度にはしっかりと養われている。風谷には何のメリットもなかったはずなのに。

未だにC3の研究員を彷彿とさせる白衣を纏い続ける彼女は、冷優の問い掛けにふつと口許を緩めて。

「……………そうだね、今考えても若気の至り並みに無謀なことだったけど」
慈愛と回顧を宿した瞳で、告げた。

「君に手を伸ばせれば、あの頃の私」が救われる気がしたんだ」

通話が切られた後は、ただ重苦しかった。

目下桜哉が検討中なのは、沈黙したまま動く気配のない椿をどうするか、である。忘れ去られていた気がするがここは桜哉の私室なのだ。こうなると分かっていたなら絶対に椿を部屋には入れなかったのに、と密かに独り言つ。

先程、少女の――鈴白百合音の過去の話を聞いて、何も思わなかった訳ではない。

しかし桜哉は今、彼自身も意外に感じるほどに、落ち着いていた。元々、同族だと気付いていた関係だ。それなりに悲惨な過去を持つていても、驚きはなかった。昔話の最後の自殺未遂は少し予想外だったが、桜哉も人のことは言えない。

ただ、風谷翼が語った話には救いも何もなかった。恐らく肝心な部分彼女が敢えて語らず、鈴白百合音という名の少女を取り巻いた不幸だけを桜哉たちに教えた。何故ならば物語の最後があたかも少女の死を暗示していたが、実際には彼女は現在まで生き延びている。だからあの物語には必ずあと少しの続きがあつた筈なのだ。にも関わらず情報屋はそれを切り取った。

それが意味するのは「教えたくない」なのか、「知らせる必要がない」なのか。

どちらにせよ彼女はあの後――包丁で自殺を試みた後、風谷翼に拾われたのだろう。吸血鬼になるでもなく人間の医療技術だけでよく一命を取り止められたなど、思わなくもないが。

ただ、何となく、感想を付けるとすれば。

それならアイツもきつと、嘘は嫌いなんだろうな、と。そう思った。嘘が嫌いな大嘘吐き、と。ここまで重なると最早笑えもしないが。

「――そのとき手を伸ばしたのが、僕だったら」

不意に、隣の椿が囁くような声を出した。

反射的にそちらへ顔を向けた桜哉に気付いた様子もなく、椿は言葉

の続きを紡ぐ。

「…君は今でも、僕の傍にいてくれた…？」

それは、独り言のようだった。

いや、実際に独り言だったのだろう。あるいは心の中で思ったことを気付かず口に出してしまっただけかもしれない。椿の声はそれくらいに力がなく、誰に聞かせるつもりもなかったように聞こえた。

だから桜哉は、聞こえなかった振りをした。

代わりに先程の通話に思考を戻す。風谷巽は最後にこう言っていた。先程の昔話は桜哉に対しての等価で、彼女にも同じだけのものを既に渡している。それはつまり、彼女も桜哉の過去について知らされていくという意味だろう。一方だけが知るのは「不公平」だから、もう一方にも等しく過去を伝えた。あの回りくどい説明は、恐らくそういう意味だ。

彼女は桜哉の過去——桜哉が吸血鬼になるまでの過程を知って、どんな感想を抱いたのだろう。お人好しな彼女のことだ、桜哉とは違い感情移入し過ぎて寝込んだとか、ちよつとあり得そうでひやりとした。実際それに近い事態が発生していたという事実を桜哉が知る由もないのは、不幸中の幸いである。

ああ、でも、それにしても。

やはり聞き流したつもりでも耳に残る。先程の椿の発言。

「そのとき手を伸ばしたのが——即ち、物語の続きで百合音を助けたのが、風谷ではなく椿だったら。それはありもしない、けれどあつたかもしれない話だと桜哉は思う。

(もし椿さんがアイツを拾ってたら、か)

そうしたら「今」は、どうなっていただろうか。少しだけ、ぼんやりと天井を見上げながら桜哉はそんな未来を想像してみる。

しかし直ぐに空想の世界には亀裂が走り真つ黒になつて掻き消えた。ぱちりと現実に焦点を戻した赤い瞳には、ただ白だけの壁紙が移り込む。

それが、桜哉の答えだった。

思惑は巡る。関わる人間の数だけ複雑に、抱えた過去の重さだけ混迷に。

全ての者の胸に在るのは、只一つ。今の己を形作る、忘れられないあの日の事だけ。

幕間5 『箱庭世界の青い薔薇』

与えてくれる人がいなかったから、少女は自分で探しに行った。守ってくれる人がいなかったから、少女は自力で身を守った。そして。

誰にも手を差し伸べてもらえない子供がいたから、少女は自分の手を差し出した。

————それが、別離の一步だと知りながら。

『 箱庭世界の青い薔薇 』

1

風谷巽がその噂を耳にしたのは、偶然のことだった。

————例の検体の廃棄処分が決まったらしい。

ある日、C3内部で広まった出所不明の噂。

その詳細を調べ、彼女は「未完成の真祖」の存在を知ることとなる。

2

季節は秋。冬の訪れを間近に控えた時期だ。やや日の陰ってきた時分、現役女子高校生かつ人外の脅威から人々を守る中立機関に所属するちよつと訳アリな少女・風谷巽は、ファストフード店の二人席に着いていた。

向かい側に座っているのは同じ高校の制服を着た同級生の友人、露木修平。放課後に昇降口でばったり会った彼を近場の店に引っ張り込むのは、わりとよくある彼女の日常の一コマである。

さて、二人が視線を落としているのは、学生には逃れられない宿題という名のプリント。因みに教科は化学だ。勉強のお供として注文したホットコーヒーをちびちび啜りながら、風谷はぱったりと止まった手を誤魔化すようにシャーペンをくるくると回す。

視線こそ化学式に向けられているものの、彼女の思考は噂の『未完成的の真祖』という存在に傾注していた。近々処分される予定らしい、都市伝説めいたその存在に。

と、何やら悩んでいる様子の風谷に気が付いたのか、露木がプリントを覗き込んでくる。

「あ、その化学反応式の計算間違ってますよ。二酸化炭素の係数は2になるはずですよ」
「？」

「三問目の方は反応式の立て方が違いますね。その化合物の化学式なら教科書に載っていますよ」

さらさらと投下される指摘に従い、風谷は素直に間違った式を消しゴムで消した。やはり考え事をしていいると思考力が落ちるらしい。決して苦手科目だからという訳ではないとここに明記しておく。

風谷の集中力が切れていることを察したのか、露木が雑談を振る。

「そういえば、一人暮らしは順調ですか？」

「うん。まあ、特に問題はないかな。もう二年目だから」

曖昧な相槌を打ちながらやや視線を逸らしつつ、風谷は当たり障りのない回答を選んだ。下手な返しをするとこの学友の心配性に火を付けてしまいかねない。

元々地下組織であるC3に住み込んでいた彼女だが、中学を卒業すると同時に地上に居住を移したという過去がある。女子高生の一人暮らし、という少し危なっかしく感じるが、こと自衛に関して風谷異という少女にはそれなりの心得がある為そう心配する事柄ではない。

…去年の冬と今年の初夏に『拾い者』をしてしまったため、実は既に一人暮らしではなくなっていたりする、というのは秘密である。

「夕方以降に一人で出歩くことはなるべく控えてくださいね?!ただでさえあなたは狙われやすい体質なんですから」

「分かっているよ。危険なことはしないさ」

「あなたの危機管理能力は信用できません」

「それでも自衛能力はある方だと思っただが…」

「そうやって何かあっても自分でなんとか出来ると思ひ込んでいるから、危険に対して鈍感なんですよあなたは」

一理ある、どころではなく的を射た指摘だ。友人として、露木修平は本当に風谷巽をよく理解している。

苦い笑いと共に、風谷は話題を逸らそうとして趣味の話を持ち出した。

「ああそうだ露木、借りていた本、実はまだ読みきれてないんだ。返すのは二冊とも読み終わってからでも大丈夫かな？」

「構いませんよ。結構オススメなのでじっくり読んでみてください」
「うん、ありがとう」

読書を共通の趣味とする二人の間では本の貸し借りは珍しくもない。クラスが別とは言え同じ高校に通っているのだ、返すタイミングには事欠かない。

上手く話題を逸らすことが出来たと内心安堵していたからなのか、風谷は不用意にぼろっと他愛のない思い付きを口にした。

「…ところで露木、“未完成の真祖”って知っているかい？」

「未完成の真祖？」

聞き返した彼を見て風谷は悟る。ああ、知らないんだな、と。

所詮は都市伝説並みの知名度である。魔術師の家系で親がC3勤務だったとは言え、正規職員でもない露木がその存在を知っている筈もない。つまらない事を口にしてしまったな、と独りごちながら、風谷はつらつらと全く脈絡のない話を語ることにした。

「いや、やっぱり何でもない。気にしないでくれ。あ、そうそう未完成といえれば私たちも成人まであと三年ほどかかる未成年者なわけだが、君は将来の夢とかあるのかい？」

「“未完成といえれば”の後がものすごく強引な繋げ方ですけど。自分から話し始めてそれはどうかと思います」

「気にしない気にしない。それで、高校を卒業した後はどうするかとか考えてるのかい？」

今までの雑談と変わりないノリを意識しながら風谷は強引に答えを促す。現在C3内でそれに纏まわる噂こそ流行っているものの、本来

“未完成の真祖”の話はそこそこの機密事項である。知らないのであれば彼を巻き込むこともない。適当な話で流してしまうのが吉だ。そんな彼女の心の内を知る由もない友人は、真面目な顔で進路を語り始める。

「卒業した後は、そのままC3に就職しようと思っっています」

「希望の部署は？」

「勿論、戦闘班です。父さんの仇を討つには前線に出る必要がありますから」

「……………」

露木の言葉に、風谷はあからさまに眉間に皺を寄せた。彼が吸血鬼に父親を殺されたということは知っていたし、それ故に彼が吸血鬼を憎んでいることも理解している。が、その為だけに戦闘班に入るというのはリスクが高過ぎるのではないかと、彼女は前々から思っていた。

もう何年も前からアルバイト感覚で戦闘班の任務に潜り込んでいる経歴を持つ風谷は、前線の危険性を肌身に染みて理解している。

「君の性格なら、開発班あたりが一番向いていると思うけど」

「それはあなたも同じでは??既に戦闘班として活躍しているとは聞いてますけど」

「……………いや、私は別に戦闘班に所属してるわけじゃない。経験を積むために顔を出していたらいつの間にか助っ人扱いされるようになってしまっただけだよ」

「職員の方たちの認識は完全に戦闘班所属だと思いますよ」

「開発班にも顔は出しているよ」

「戦闘を有利に運ぶための魔術道具を見繕うために、ですよね?」
「……………」

やんわりと別部署を勧めたら話が別方向に行って、しかも何故か言い負かされた。二の句が継げずに渋い顔をする風谷を見て、思わずといった調子で露木が笑う。

「……………それで、風谷はどうするんですか??卒業後は」

一頻り^{ししこ}笑って、当然の様に露木が聞き返してきた。話の流れを考え

れば至極自然なことだが、風谷は一瞬言葉に詰まった。

「…このままなら、君と同じようにC3に所属し続けることになるだろうね」

歯切れの悪い返答に露木が首を傾げる。

「何か他にやりたいことでも？」

「うーん……」

思い浮かぶ言葉がなく、風谷も首を捻る。

化学のプリントを前にして悩む二人の高校生の図（但し化学のプリントで悩んでいるとは言っていない）が完成した。

と、茶番は置いておいて。

「…頭の中に漠然とした、理想像みたいなものはあるんだ。でも、C3に所属したところでそうなれるかどうか分からない。だから、迷っている」

「あなたにしては優柔不断ですね。一体どんな理想を思い浮かべているんですか」

「それを言葉にできたらここまで悩んでいない」

「方向性だけでも」

「そうだなあ……」

たった数年後、されど十代の少年少女にとっては遠い未来の先で、どんな姿になっていたいか。輪郭を伴わないそのビジョンが、せめて何色なのかだけでも分からなければ議論のしようがない。

だから、とりあえずは。

「……守れたら、それでいいかな」

「？」

「誰かを守る人間になりたいと、そう言ったんだよ」

「それなら寧ろC3は適切な職場では？」

確かに、一般人の守護はC3にとって重要な使命の一つだ。人外と人間なら力関係はどうしても人外の方に傾いてしまうことが多い。無差別に一般人を襲う吸血鬼の討伐などは戦闘班の任務としてよく舞い込んでくる案件だ。

それはそうなのだが。

「何か、しつくりこないんだよなあ……」

結局は、その一言に尽きた。

全く相談に乗り甲斐がない友人に呆れた様子の露木がコーヒーに手を伸ばす。…その横で、通りすがった別の客が鞆の端をテーブルにぶつけた。

ガタンと机が揺れる。

「あつ」

短く叫んだのは露木だった。

注文してからそれなりに時間が経っているとはいえホットで頼んだコーヒーが、伸ばした露木の手にぶちまけられる……ことはなかった。

友人の不幸体質に慣れた風谷が、客が通路を歩いて来ていたのが見えた時点で（より正確には客が肩下げにしている鞆が丁度テーブルに引っ掛かりそうな位置で揺れているのが見えた時から）自分のカップ共々ひよいつと持ち上げて避難させていたからだ。

一瞬の静寂を挟んで、鞆をぶつけた客が慌てて謝ってきた。それに軽い調子で大丈夫ですよと返して、風谷が一滴も零れず無事なコーヒーを掲げて見せる。客はほっとした様子で会釈しながら通り過ぎで行った。

「…すみません、助かりました」

「いいよ。君のこれのおかげで私の予測能力もかなり鍛えられたからね」

コーヒーは無事だったが、風谷のその返答を聞いた露木の「やつぱり戦闘班向きなのでは？」という一言によって先程までの議論はそっくり引っくり返されて振り出しに戻ることとなった。

再び二人の高校生が将来についてああだこうだと語り合い始める傍らで。

空が濃い藍色に染まり始めた窓の外では、黄色くなった一枚の木の葉が枝から離れてひらりと舞い、反対側の歩道へ目掛けて落ちていった。

明くる日、夕刻。

学校帰りの寄り道と同じようなノリで、風谷はC3の地下深くに足を運んでいた。

(アクセス権の取得自体は簡単だったな。既に処分が決まっているからか…?)

最近、C3の職員たちの間でまことしやかに囁かれ始めた噂。それは、C3最深部に眠っていると云われる「未完成の真祖」が、遂に処分されることになったらしいというもの。

正規の職員ではない風谷は今まで知らなかったのだが、元々この噂が流れるよりもずっと前から、「未完成の真祖」の存在は眉唾物とはいえC3内部で語り継がれていたらしい。

彼女が好奇心からC3のデータベースを漁ってみたところ、確かに「未完成の真祖」は存在し、しかも今になって廃棄が決定されたとのこと。

この動きに対して風谷は、過去に憂鬱の真祖がC3から脱走した事が今回の処分の要因の一つなのではないかと考えている。憂鬱という前例を踏まえ、災いの種は管理下にある内にさっさと潰しておくべきだと判断されたのではないかと。

(まあそれはどうでもいいか。問題は……)

考えている内に、彼女一人を乗せていたエレベーターが目的の階層に止まる。

開かれたドアを潜り、頭の中に刻み付けた地図を頼りに通路を行く。その足取りには初めての場所を歩く時特有の慎重さはあるものの、緊張や拳動の不審さは微塵もなかった。何故ならば、そもそも風谷翼がこの場所を訪れた事に、気負うほどの理由がないからだ。漠然としたその動機に名前を付けるならば、云わば「興味本位」。

この世界に一つしかないものが、もう直ぐ無くなるらしい。そんな噂を聞いたから、では無くなる前に一目見ておこうと思っただけのこと。

そこに在ったのは、白い施術用ベッドに横たえられた、人形のような少女だった。

薄い青色の手術衣から伸びる肢体は白く細い。シーツに散らばる癖の無い髪は烏の濡れ羽色。形良い唇の赤だけが、鮮やかな色味を放っている。

精巧に作られた人形に対して「まるで生きているようだ」と表現することがあるが、それはあくまで比喩だからこそ用いられるもの。目の前の少女は吸血鬼だとしても血の通った生命体であり、生きていることが当たり前だ。それなのに、風谷は少女を見て反射的にこう思った。「まるで生きているようだ」と。

自身が無意識に浮かべた比喩の、ぞつとするような矛盾。心の深層の部分で、風谷はこの少女を人形だと認識していた。

(……………)

恐る恐る、しかし見えない引力に吸い寄せられるように、風谷は手を伸ばす。作り物めいた陶器のように白い少女の頬に、触れる。

触れた指先には、確かに無機物などではない温度があった。

じんわりと感じられる温かさに、風谷は無意識に詰めていた息をそつと吐き出した。

(……………違う。人形なんかじゃない。未完成なんだとしても、この子は確かに此処に生きている)

そう知覚した瞬間、激しい感情の波が押し寄せた。

呼吸が浅くなる。どくん、どくん、と心臓の拍動が頭にまで響いてくる。そして思考を脳髓ごと掻き回すように襲ってくる、強烈な既視感。

(なん、だ……………なにが、こんなに……)

自分自身が一体何に衝撃を受け、何故ここまで動揺しているのか。それが、分からなかった。

ゆるゆると顔を上げ、白い部屋を見回す。地下であるが故に窓もない、人間の気配も温度もない部屋を。

その無機質さに段々と頭が冷え、徐々に平静となった思考で……明確に言語化できずともただ何となく、彼女は理解した。

そうだ。

此処には、誰もいないのだ。

足繁く通う人間も、様子を見に来る人間も、誰も。同じ地下施設の中で、天井や床のタイルを隔てた場所には何人も職員が歩いている筈なのに。この少女に積極的な関心のある人間は、ただの一人もいない。

その現実には。

冷えて、冷めて、波紋の一つもない水面のようになった心で。

「……君も、そうなのか」

呟いて、風谷は少女の纏う薄青の手術衣の袖に軽く触れた。

「……周囲にたくさん人間はいるのに、君を守ってくれる人は、誰もいないんだね」

風いだ感情のまま、彼女の口からはそんな言葉が溢れていった。無意識な、あるいは極めて自然体の、思考の介入で取り繕った箇所など一つもない純粹な言葉。

呂色の瞳が、何かに耐えるように閉じられる。

そして、次に開かれた時。

彼女の瞳には、剣呑とさえ感じられるほどの、強い意思を秘めた光が灯っていた。

「……それなら、話がしてみたいな、君と」

紡がれた言葉は、数秒前とは打って変わって白々しく表面的な響きを伴う。

「私は君に興味を持った。近い内に必ず会いに行くよ」

聞く者のいない空間で、風谷は滔々と少女に語り掛ける。眼前の存在が確かに生きていると認識した時から、風谷の価値観の中で彼女と少女は対等な位置に落とし込まれていた。最早彼女の目に映っているのは未完成の真祖という無機質な何かではない。

廃棄予定の遺物を見学する目的は既に過去のもの。彼女は新しい目的を手に入れた。

ただ、今は。その目的に至った「意味」に拘泥して解釈することはしない。そんなものは大抵、後から勝手に付いてくる。だから彼女は

新たに獲得した目的を達成するために先ず歩き出す。考えるより行動を。どうしても行動の意味に名前を付けたいのなら、「興味本位」
とでも銘打っておけばそれで済む。

「私は君を知りたい。だから少しだけ待っていてくれ。必ずまた、ここに来るから」

ふわりと白衣を翻して、風谷翼は踵を返す。

思えば此処が、彼女にとっての運命の分岐点ターニングポイントと言える場所だったのかもしれない。

4

幼い頃の記憶で風谷翼の頭に鮮烈に残っているのは、吸血鬼から必死に逃げていた時のものだ。

その頃、彼女には追っ手の正体も追われる理由も分かっていたはいなかった。ただ、何も分からなくても、捕まれば恐ろしい目に遭うことくらいは直感できた。

夕闇の中を何度、命辛々に逃げ回ったか。数え切れないくらい追われて、同じ数だけ彼女は逃げた。

そうして少女はある日、保護された。中立機関であるC3の手によつて。

運が良かった、と。

大人たちがその言葉を使っているのを彼女はよく耳にした。

吸血鬼に対して何の対抗手段も知識もない少女が生き残ったのだから、なるほど確かに運は味方していたのだろう。

だけどそれは裏を返せば、運という曖昧な不確定要素に少しでも嫌われたその時には、何の不思議もなく少女の命は吸血鬼に喰らわれていたということだ。

聡明な少女はそれを正しく理解した。自身にとって、外は外敵に溢れた危険な世界であるということ。不用意に踏み出せば最後、再び戻って来られるかは「運」次第でしかないのだと。怖い目に遭いたくないのなら、最低限の自由の中で身を潜めて生きるしかないのだ

と。

(.....)

地下深く、生活のために宛がわれたC3東京支部の一室で――
それでも少女は外の世界を望み続けた。

それは渴望に近いものだった。知らない場所、知らない物、知らない人、知らない景色、知らない空気。未だ見ぬそれらを目に出来なければ、触れられなければ、感じ取れなければ、少女はきつと渴ききつてしまう。

知りたい、知らなくてはならない。

尽きぬ未知への好奇心。それだけが、少女を突き動かす全てだった。

……あるいは、それだけしか、彼女には残されていなかったのかもしれないが。

5

餅は餅屋、だ。

未完成の真祖が処分されるまでの猶予はきっかり一週間。期限付きである以上、彼女は素直に、吸血鬼に関して己より知識のある者に頼ることを決めた。

ヨハネス・ミーミル・ファウストウス。

時折、臨時の研究員としてC3に呼び出されている男だ。風谷は直接彼と言葉を交わしたことはないものの、開発班に入り浸っていた時期もあつた為に人伝には知っている。

「真祖の意識に直接アクセスする方法おー？」

よくパソコンの前に設置されているタイプの回転椅子に全体重を預けて軋ませながら、シャツを裏表に着た男が間延びした口調で風谷からの要求を鸚鵡返しにした。

「そう。近い方法でもいい、何か知っていることはありませんか？」

「そんなこと知ってどーすんの？」

「“未完成の真祖”と直接会うために必要なだけです」

きつぱりと、風谷は言い放った。

口に啞えたストローをぶらぶらさせていた男がぴたりとその動きを止める。

目的を隠す必要はない……寧ろ本当のことを言った方が喰い付くだろうと思つてのことだが、予想以上に効果があつたようだ。へらへらとしていた男の表情が一瞬で切り替わつた。

「…あの真祖はまだまだ利用価値研究課題がある。それをむぎむぎ破棄しようとする上は俺以上にイカれてると思つてたけど……真つ向から歯向かうヤツがいるとは思わなかつた」

背凭もたれに預けていた体を起こし、吸血鬼専門の研究者はデスクに散乱した書類とメモ書きの海をがさがさと漁る。

「えーつと確かここら辺に……あつたあつた」

無造作に引つ張り出した数枚の資料を手に彼は立ち上がり、何処にどんな危険物が入っているのか予測もつかない棚の一つへ歩み寄つた。スーつと開けられたガラス戸の中には、不気味な色の液体を湛えた試験管がいくつか並べられている。隣の棚から空のビーカーを出し、ヨハネスは一度資料に目を落としてから迷いなく試験管の液体を混ぜ合わせ始めた。

「ぼごぼごぼ、とビーカーから液体が沸騰したような音が響く。中身の得たいの知れなさに風谷は無言で視線を逸らした。」

「シーコンなどところかな。臨床試験に出すにはまだ早い代物だけど」
「構いません。時間もないので」

試験管に注がれた謎の液体……もとい、真祖と接触するための試薬を受け取る。中身がぼごぼ言っていた割りに当の試験管は冷たかつた。

「…行つて帰つて来られたら、試薬の効果についてはレポートに纏めてメールします。二週間以上音沙汰がない場合は、まあ、察してください」

真祖内部に取り込まれたまま出て来れなくなった人間とかそれはそれで面白い研究対象になる気もするが、と他人事のように考えつつ、風谷は試験管を白衣のポケットに納めた。

これで最初の一步は確保した。白い壁とタイルで構成された保管庫の、更に深淵を覗くための一步は。

「…もう一回聞くけど、その試薬で真祖の中に入れたとして、どうすんの？」

「知りたいだけです。未完成と呼ばれる彼女の、外からでは分からない部分を」

「なんでそんなこと知りたいの？」

胡乱な瞳で研究者は言う。ただの人間になど一片の興味も持たなさそうな彼にしては稀有な問い掛けなのではないだろうか。

対して、軽い口調で。

「何かを知りたいと思うことに、理由なんて必要ですか？」

本心から、風谷巽はそう言った。

それは彼女の根元たるもの。幼い頃から唯一彼女を突き動かしてきた、ある種、異常なまでの知的好奇心。

その興味を刺激されたからこそ、風谷はこうして行動を起こしているだけだ。少なくとも現段階では、その程度の理由付けで構わないと彼女は考えている。

「知りたいことがあって、知るための方法を見付けた。であれば、試してみない方がどうかしている。違いますか？」

「…いいや?? 違うないねえ。全くもってその通りだよ。どうかしてる。君も、モチロン、俺も」

ヨハネスの視線が、恐らくこの時初めて風谷巽という人間に向けられた。

…どうやらこの研究者とは本質的な部分で気が合いそうだが、こんな風に一目見て変人だと分かるような大人にはなりたくないな、と少女は密かに独白した。

6

決行前日。

風谷はC3施設内を、ある人物を探して歩き回っていた。

(…なんでこういう時に限って見付からないんだ、あの人)

微妙に理不尽な怒りを溜め込みながら、彼女は裾の長い白衣を靡か
せて歩を進める。既に三十分ほどかけて搜索しているが、目的の人物
は見当たらない。

心当たりを大体回って全て空振った風谷は、次の搜索候補に行き詰
まって廊下の途中で足を止めた。

そこに。

「あつれーそこにいるのって巽ちゃん??ひっさしぶりー!」

と、予想外に後ろから声が掛かった。待ち人来る、である。

振り返れば、C3戦闘班の制服——彼の場合は規定のものから
少し外れているが——を着込んだ、痩身の青年の姿。第一印象だ
けならばそこそこ人当たりの良さそうな、自称「クズ」の狼谷吊戯
だ。

「…探していました。貴方の一つ、仕事を頼みたいのですが」

ややぎこちない口調で風谷はそう切り出すが、

「わあ。巽ちゃんって敬語使えたんだ」

あの狼谷吊戯が常の笑顔を硬直させてそんなことを言ったので、被
るつもりだったネコを早々に投げ捨てた。嫌味ですらない台詞を引
き出してまでキャラを変えようとは思わない。

さて、姿を見掛けただけで親しげに寄ってきた吊戯の行動から分か
るように、風谷と彼はそれなりに気心知れた仲だ。かつて風谷がC3
施設内に住み込んでいた頃、彼女の部屋はこの男の部屋の三つ隣だっ
た。脚色込みで夢のある言い方をすれば「近所のお兄ちゃん」的な
感覚で交流があったのだ。中学卒業と共に風谷がC3を出て地上で
暮らし始めてからは、めっきり会うことが減っていたが。

「にしてもホントに久しぶりだね〜!?そういえば国ちゃんが来たの巽
ちゃんが出てって直ぐだし入れ替わりで惜しかったなあ。国ちゃん
が年下の女の子にどんな対応してるのかとか見てみたかったのに」

「年下の女の子というより寧ろ同じ学校の後輩なんだが。それより仕
事の話だ。引き受けてくれるのかどうか、答えてくれ」

「あ、敬語やめたんだ。仕事は内容と金額によるかな?」

「仕事内容は簡単だよ。これを一週間後……いや、余裕をもって十日にしておこうか。十日後に、この荷物を露木修平に渡してほしい」
「？」

彼女が吊戯に渡したのは、茶色の小包だ。大きさは手のひらサイズ、厚みは文庫本二冊程度。いや、この際はつきり言おう。中身は見た目通り文庫本×2と一枚のメッセージカードである。

(…本当なら直接渡すべきだが、万が一ということがあるから、ね)

心の中で呟き、風谷は小包を受け取って不思議そうな顔をしている彼を僅かに見上げた。女子の方が成長期が早いと言うからか、吊戯が大柄ではないからか、二人の目線はそう違わない。

「自分で渡さないの？」

「ちよつとしたサプライズのようなものだから。もしかしたら中止になるかもしれないけど」

その時は回収しにまた会いに来るよ、と付け加える。これはあくまで保険だ。不要になるに越したことはないもの。

：「未完成の真相」との接触到成功したとして、その後に分自分がどんな行動に出るのか、風谷には分からない。予測できる範囲で幾つかの選択肢を想定し、そこから行動のフローチャートを組んで用意しておくにしても、どの選択肢を選ぶのかはまだ断定することが出来ない。

迷っているのではない。

ただ、今は決断の時ではないだけ。

(「……願わくば、迷いなど感じないくらいに明快で鮮烈な『理由』が得られるように……」)

二十四時間後、彼女が立っているのは地下か、地上か。

それとも誰かの悪夢の中か。

7

ゴウン、と重い響きと共にエレベーターが目的地に止まる。

人気のないその階層に降り立ち、風谷は「未完成の真相」が眠る保

管庫へと歩き出した。既に一度通っているからか、彼女の足取りには一切の迷いがない。

辿り着いた真つ白な部屋には、前回来た時と全く変わらない美しい少女の寝姿があった。

寝台に歩み寄り、少女を見下ろす。

白衣のポケットから試薬の入った試験管を取り出して、風谷は一つ息を吐いた。

引き返すというのなら、今が最後。

ここより先に進めば、知らなかつた頃には戻れない。恐らくヨハネスの試薬は九割以上の確率で風谷の望む効果を発揮してくれるだろう。試薬であろうとも、半端に研究をして、あまつさえそれを何時でも出せる段階で保管しておくなどあの研究者ならば有り得ない。

(……まあ、引き返すつもりなんて元々ないが)

一つ、大きく深呼吸をして。

ゴム製のキャップを外し、唇に寄せた試験管を一息に傾ける。

「……………!!」

味わうつもりなどなく、流れるままに飲み干したが……形容しがたい風味が舌の上に残った。一言で言えば不味い。

(いや、そもそも吸血鬼の中に入るためのトリガーなんていう得体の知れないものなんだから美味しくないのは当たり前だが……)

一口で飲みきってしまったのは幸いだった。味を認識してから飲み下すには少々ハードルが高い代物だ。喉の奥から上がってくる後味に顔を顰めながら、風谷は空になった試験管をポケットに戻した。

そのまま数秒。変化はない。

しかし。

(…何だ??なにか、視界がぶれる、ような。違う、焦点が、合わない??違う、たぶん、違う。これ、は、もつと、根本的な、部分が)

変な感じがする。じわじわと、まるで思考が何かに侵食されて、書き換えられていくような。

(試薬の効果が出てきたのか??いや、これでは頓ア謨励↓縛励。 諤昂

…縛工縛)

…今一瞬、何かが混線した気がする。

ぞぞぞつ、と。得体の知れない感覚が背筋を這い上がってきた。試作品だけに効果の保証がないことは覚悟の上だったものの、こんな訳の分からない現象に見舞われるとは聞いていない。

経験のない感覚に冷や汗が止まらない。寝台に手を掛けて寄り掛かろうとしたが、ふらりと足の力が抜けてそのまま白いタイルに膝を突いた。痛い。どうして自分はこんな場所で座り込んでいるのか、とふと疑問が浮かぶ。そもそも縄薙%縄ッ何処だ？何故鱗翫b螢√b全てが白い？遣√？隠ー縄？縄」縄溢▲縄托シ？

(あ……れ………?)

そして、気絶するように。

風谷の意識は遠退いていった。

8

ー……鳥の声が聞こえる。

見上げれば、綺麗な青い鳥が一匹、木の枝に留まって鳴いていた。

「……………」は

声を出して漸く風谷は、自分が見知らぬ場所に立っている、という事実を認識した。

一際高い木の影の中、敷き詰められた芝の上。真っ先に視界に入るのは格調高い洋風の館。そんな場所に、彼女は立ち尽くしていた。

咄嗟に風谷は自身の状況把握を始めた。手足は普通に動かすことができる。思考にも先程の混線(?)の名残りはない。視界や聴覚にも不明瞭さは感じられない。服装も、保管庫に入った時と変わりはない。

(……だけど、ここは現実じゃない。感覚がどれだけ現実的であっても、実際には存在するはずのない世界だ。復路の切符を持たずに入ってきた以上、心だけでも『帰るべき場所』を意識しておかなければ、) どうなるか、分かったものではない。

…取り敢えずは探索に支障がない状態であることを確認し、風谷は

改めてぐるりと周囲を見回した。

そこは、「箱庭」という言葉を具体化したような風景だった。

落ち着いたブラウンの壁を基調とした洋風の屋敷を、白く高い塀がぐるりと囲んでいる。上から俯瞰できたなら正に箱庭だろう。洋館の周囲は綺麗に芝が敷き詰められ、塀に沿うように煉瓦で仕切られた花壇がある。草花には手入れが行き届いており、塀のせいで全く外の様子が窺えない空間であるにも関わらず閉塞感を感じさせない。ミニチュアの世界に放り込まれたような錯覚を抱くほどだ。

もう一度、鳥の声が聞こえた。

ばさばさと羽ばたく音がして視線を動かせば、彼女の頭上を先程の青い鳥が飛び回っていた。ぐるぐると旋回し、高く鳴くと同時に館の脇を通って裏へと飛んで行く。まるで、彼女を先導するように。

「…裏に、何かあるのか…？」

どのみち立ち止まっても始まらない。風谷は青い鳥の後を追って、館の裏手へ回った。

すると聞こえてきたのは、平淡ながらも耳に心地好い透き通った声。

「……ぎげんよう、招かざるお客様」

「！」

裏庭には黒いカフェテーブルと白い二脚の椅子、そしてその椅子の一方に優雅に腰掛ける少女がいた。

華奢なチェアに座り白い表紙の本を膝の上で開いている白いワンピース姿の少女は、紛れもなく現実世界で見た、あの美しい少女だった。

…しかし、心なしか見た目が幼くなっている気がする。具体的に言うと現実世界の彼女が風谷と同世代くらいの外見だったのに対し、こちらは三、四歳下の中学生のような幼い顔立ちだ。心象世界であることが影響しているのだろうか、と風谷は内心で首を傾げた。

「どうぞお掛けになって。丁度紅茶が入ったところだから」

幼さの残る声と大人びた仕草で、少女が向かい側の席を勧めてきた。テーブルには瀟洒な金細工の施されたティーセットが一式。言

葉通り、風谷の席には既に美しい緋色の紅茶を湛えたティーカップが用意されていた。

促されるまま、一先ず風谷は席に着く。

「それで、貴女は誰?? どうして此処にいるの?? 歩いていて自然と迷い込めるような場所ではないはずだけれど」

機械のように単調な声色と、単刀直入な少女の言葉に風谷は苦笑した。確かに、夢中でウサギを追い掛けたってこんな箱庭世界には辿り着かないだろう。

「私は風谷巽。正規職員ではないが、C3の関係者だよ」

「中立機関の人間が何故今更私に接触を?」

外見の幼さにそぐわない切り返しは、現実世界で謂われる「可愛くない子供」の典型だった。過去の自分も同じような印象を周囲に与えていたのか、などと風谷は頭の片隅で考える。

そこで、はたと違和感を見付けて真顔になる。

「…君、C3と言って、分かるのかい?」

未完成ということは、彼女は現実で覚醒したことが一度もないということだ。にも関わらず、何故外の世界の知識である筈のC3という名を聞いて即座に「中立機関」というワードが出てきたのか。

風谷の疑問に、人形のような少女は臆面もなく首肯した。

「ええ。ここには、たくさん本があるから」

「まさかその本に書いてあるとでも?」

「この本ではないけれど……」

少女は記憶を手繰るように視線をさ迷わせるという人間らしい動作を見せた後。

「地上二階の書庫の、奥から数えて三つ目の書架の、上から四段目の左から数えて17冊目、管理番号20407の本の98頁目から始まる章と、地下の書庫の、中央の書架の、下から二段目の左から2冊目、管理番号00517の本の15頁目に、分かりやすく噛み砕かれた内容での記載があったわ。少し難解だけれどより専門的に中立機関に関する内容が書かれていたのは、地上書庫で52冊、地下書庫で23冊。名称や存在が載っているだけなら他にも、5000冊くらい該当書籍

があるけれど」

可憐な唇から淀みなく検索エンジンのように正確な書籍情報を提示して見せた。しかもご丁寧に関心者向けと関係者向けとに分類までしてくれている。

これには流石に風谷も呆氣にとられた。人は見た目によらないとは云うが、中学生程度の少女の口から空港のアナウンスじみた案内が出てくるなどギャップどころの話ではない。ここに学友がいれば「あなたも人のこと言えないと思いますよ」と辛辣なコメントが貰えたかもしれないが。

「…どうして、そんな」

「私が『知欲の真祖』^{サーヴァント}だから」

風谷の言葉をどう受け取ったのか、少女は簡潔にそう答えた。

ちよく、チヨク、知欲……知欲欲。

頭の中でそう変換して、風谷は他人に心の内に触れられるような、ひやりとした錯覚を覚えた。

(…知識によつて栄えた人間の業、それがこの子の冠する大罪ということ、か。そして彼女は『知欲の真祖』に相応しいように、膨大な知識をあらかじめ埋め込まれている…?)

細く息を吐き、思考を冷やしていく。

そんな空想のような設定が可能なのか否かは、今ここではどうでも良いことだ。問題なのは、それを少女が本当に受け入れているのかどうか。

もしかすると、だが。

未完成と呼ばれる彼女に欠けているのは、自身の境遇に対する受容や納得、許諾といった精神的なものなのかもしれない。

元々過去の資料において、真祖と呼ばれる吸血鬼たちに関しては不可思議な事象が幾つも見られたと云う。もしもそれが、彼等の精神状態に起因するものだったとしたら? いや、全てがそうでなくとも、精神状態という要素が一つのトリガーであるとするれば? 望まぬ知識を知らぬ間に植え付けられた少女が、そのまま知欲の真祖として覚醒することを頑なに拒んだ結果が『^{あの状態}未完成』だとするならば……?

瞬く間に頭の中で組上がっていく仮説に、そこで一度ブレーキを掛けて、風谷は前提を整理するように口に出した。

「つまり君は……理解、しているんだね。自分が何者であるのか、此処がどういう場所なのか、そういったことを、君は明確に把握している」
言いながら無意識に、あるいは直感に従って、風谷は目の前の少女を探るように目を細めた。思い付きの仮説ではあるが、投げ掛けてみるだけの価値はある。

「だとしたら、君……君には一体、何が欠けているのかな??どうして君は、そこまで完璧に自己を把握していながら、あんな状態で眠っている?」

膨大な量の知識を一方的に押し付けられて、いや、入力されて、少女は混乱を極めていたのかもしれない。今は驚くほど落ち着いて見えても、その理不尽さに必死で抵抗し続けていたのかもしれない。仮に風谷の考えが正しかったとすれば、彼女は……。

しかし、少女は風谷の問い掛けには答えなかった。
「…その前に、私の質問に答えていただけませんか。貴女はどうしてこんな場所に来たの?」

静かな湖畔のような瞳が、真っ直ぐに風谷を見返していた。今更に気付くが、少女の瞳は吸血鬼であるにも関わらず真っ青だ。それこそ未完成であるから、なのだろうか。

気を取り直して、風谷は少女の質問に答える。

「…私はただ、君に会ってみたかった。興味が湧いたんだ。C3地下に眠り続ける、『未完成の真祖』という名のお姫様にね」

風谷がそう言った瞬間、微かに少女の瞳が揺らいだように見えた。しかし揺らぎは一瞬。瞬きの間に青は元の静寂を取り戻していた。気のせいだったのだろうかと思うほどに。

「…そう。貴女が物好きにもほどがあるということだけは理解したわ」

憂うような、幼い姿には不釣り合いに大人びた表情で、溜め息と共に少女はそう呟いた。

少し逡巡して、紅茶のカップを指先に引っ掛けて持ち上げつつ、風

谷は自身の仮説に対する考察を確かなものにするために再度、別の角度から切り込むことにした。

「一つ、聞きたいことがある」

「何かしら」

「今のこの状況は、この世界は、君が望んでいるものなのかい？」

「……ここは私の世界。全てが私の望みのままなのだけれど？」

「いや、私が言いたいのは……この世界にいて、君に不満はないのかという事だよ」

やや回りくどかったか、と眉根を寄せつつ、風谷は言い直した。

少女は膝の上の本をぱたんと閉じ、手慰みにその背表紙を指先でなぞりながら……ぽつりと。

「……ひとつだけ」

そこだけ切り取れば何故か酷く拙い口調で（寧ろこちらの方が見た目に相応しい口調と言っても差し支えないが）、蒼眼の少女は呟いた。

「ここには、たくさん本があるの」

波一つない池に小石を放り込むように、少女は少し前にも言った言葉繰り返す。

「お兄様たちのこと、吸血鬼サイヴァンのこと、人為らざる種族のこと、それらと人との均衡を守る組織のこと。色んなことが書いてあった」

やはり、と。風谷は嘆息する。

一般人にはまず受け入れられない、おとぎ話のような内容の知識。しかも本数冊分なら楽しめるかもしれないが、先程彼女が口にしてきた「管理番号」とやらの桁数から推測するに、読書家であつても辟易する量。それを勝手に頭の中に書き込まれるなどと、只の少女であれば正気ではいられないだろう。

しかし、続いた言葉に。

「でも、もう全て読んでしまった。この本も、開くのはこれで5723回目」

「……っ、」

ひゅっ、と。

垣間見たその「異常性」に風谷は息を呑んだ。

少女の言葉は続く。

「ここにある本に書かれているのは、過去のことだけ。未来も、現在も、ここには無いの」

まるで、好きなお菓子がもう無いのだとむくれる子供のようは無垢に。

「それが……そのことを考えるたびに、息苦しくなる。それだけが、不満と言えば不満かしら」

その言葉の意味を、込められた感情を、正確に読み取って――風谷は数秒前までの少女に対する認識を思考から掻き消した。検討外れの数式を書いてしまった回答用紙に消しゴムを押し付けるように、乱雑に。そうでもしなければいてもたってもいられなかったのだから。

じわり、じわりと、少女へ抱くべき正しい認識が、氷解して露あらいわになっていく。

それを感じながら、溜め息を吐くように風谷は心の中で独白する。

(ああ……なるほど、私は勘違いをしていた)

彼女は、望まぬ知識を押し付けられたのではない。

多分、いや、確実に――埋め込まれた知識の全てを嬉々として取り込み、咀嚼し、飲み干す食欲さを秘めた人間だった。きっと、生まれたときから。

先程まで立てていた仮説を撤回する。この少女ほど“知欲”を冠するに相応しい者はいない。だって。

この少女は、自分と同類だ。

ただひたすらに知識を求めてやまない、好奇心の権化。満たされることのない知的好奇心を満たそうと、その思いだけで息をしている。既知に埋め尽くされた世界に閉じ籠るなど死んでいるも同然だと、奥底から心が駆り立てる。生まれつき、そういう衝動を胸の内に住まわせている者。

……突然意識世界に介入してきた風谷を、主たる少女がすんなりと許容した理由が分かった。

図書館の検索機の真似事が出来るほどに見飽きた知識で埋め尽くされた世界に居て、未知を抱えた存在が勝手にやって来たのだ。迷わず迎え入れるに決まっている。風谷が彼女でも同じ全く同じ選択をするだろうから。

一口、優雅な所作で少女が紅茶を嗜む。

やはり、よく出来た人形のようなだった。人形のように美しく、愛らしく、人の目を楽しませる為に作られたような完璧な外見^{そとみ}。

しかしその内側に秘められた渴望を、知った。

既に膨大な知識を有していながら、尚も貪欲に溢れる、形のない知欲^{ソレ}がもたらす餓えに似た感覚を、風谷は知りすぎるほどに知っている。

目の前に居るのは最早、見知らぬ少女でも、未完成の真祖でもない——己の同類。その事実には。

(……………)

ざわりと吹いた一陣の風に、芝が舞った。

9

風が吹く。

箱庭の世界は、静かに二人を閉じ込めている。

戯れに指を引っ掛けて浮かばせていた紅茶のカップをソーサーに戻し、風谷は真剣な眼差しで少女を見遣った。

「……………それなら君は、ここから出るべきだ。今すぐに」

「どうしてかしら」

「このままだと君は殺されてしまうから」

敢えて、風谷はその表現を選んだ。

C3が具体的にどうやって真祖たるこの少女を“処分”しようとしていたのかは分からない。しかし要はそういうことなのだろうか。

風谷の言葉を受け、人形のような少女はこてんと首を傾けて。

「……………鳥籠の中の鳥が、突然外の世界へ飛び出して、生きていけると思

うの？」

やや幼げな仕草とは裏腹に核心を貫く一言。

確かに、もしも彼女が現実世界で覚醒したとして——その未来は開けたものではないだろう。何しろ彼女は九番目の真祖だ。しかも現時点で処分対象とされていたくらいなのだから、C3は間違いなく即座にこの少女を捕らえようと動くだろう。八番目という前例の存在もある。少女の真祖としての戦闘能力がどの程度かは知らないが、ここは対人外の戦闘^{スペンヤリスト}班職員たちが常駐する場所だ。いや、そもそも支部とはいえ地下迷宮のようになっていてこのC3東京支部からは、地上まで出ることが一番難しいかもしれない。

対してこの箱庭は少女そのもの。世界の何処よりも安全で平穏な庭。どちらが茨の道かなど、比べるべくもない。

「さつき貴女は私のことを、”C3地下に眠るお姫様”と言ったわね??外の世界は此処よりも息がしやすいかもしれないけれど、目を覚ましても地下から出ることすら叶わずに潰^潰えるよりはまだ、此処に居る方がマシだわ」

「……………」

その時、少女のその言葉に。

やっと風谷は、初めて保管庫を訪れた時に感じた既視感の正体を理解した。

「……………」、ああ、そうか。この子は、あの頃の私と同じなんだ」

窓のない、地下の一室で。

外の世界の危険を理解しながらも、知らない世界を望み続けた子供と、同じなのだ。

そして理解した瞬間、彼女の内に蘇ったのは、泣き出したくなる程の切望と失意だった。

それらは吸血鬼から逃げ惑うしかなかった過去においても、魔術を磨いた今であつてもずっと、風谷が無意識下に沈ませて抑え込んでいた感情。寄る辺のない少女が不必要さ故に無視し続けてきた、どうしようもない「無い物ねだり」。

彼女にだって恩人はいる。友人もいる。けれど彼女のことを絶対に庇護してくれる者は誰もいなかった。彼女はあくまで、組織の制度の下で守られていただけ。C3内部の人間たちはどこまでも他人であり、一枚壁を隔てた関係に過ぎなかった。

頼れるのは自分だけ。

それが、少女にとつての現実だった。

だから風谷巽は現在まで、その現実一人で立ち向かって生きてきた。外の世界の自由を欲するならば徹底的に自分の身は自分で守らなければならぬと、強迫観念にも近い意志を抱えながら。

鳥籠の鳥は、籠の外では生きていけない。その現実に向から逆らって生き延びてきた人間、それが風谷巽という名の少女だ。

けれど、望まなかった訳ではない。

無条件に守ってくれて、無条件に与えてくれる存在が――そんな、親のような存在が居てくれればいいのにと、願わなかった訳ではないのだ。

ぎり、と。膝の上に置いていた左手を強く握り締める。その動作で、彼女は己の感傷も憧憬も、全てを封じ込めた。それらは今この場には必要のないものだから。

過去に庇護者を願った少女はもう救えない。その少女は既に、飛び方も生き方も独力で身に付けたからだ。鳥籠を飛び出しても運良く生き延び、飛び立った。

（だから私にはもう必要ない。けどもし、今それをこの子が必要としているのなら）

それは、彼女には与えられなかったけれど。

（今の私が与える側に回ることで、この子連れ出すことが叶うのなら）

箱庭の外にいる全ての外敵から少女を守り、庇い、匿ってみせる。彼女に羽根を広げることを教え、飛び方を指南し、羽根を休める場所を確保する。彼女が伸び伸びと外の世界を飛び回り、見て聞いて感じて知れるように、導いてみせる。

そして、少女に知ってほしい。この箱庭の外の世界にどれだけの未

知が溢れているのかを。一つ知る度に色を変えるこの世界が、どれほど美しいかを。

彼女が思うままにその知識欲を満たすための導きや後押しならば幾らでもしようと、風谷は何の掛け値もなくそう思った。だってそれはそのまま、過去の風谷翼が「誰か」にして欲しかったことなのだから。

ああ、でも、そうだというのなら。

（……私は、間違いなく幸運だ。差し伸べたいと思った時に、差し出せる手があるのだから）

最早一つも迷いはない。取るべき行動も、選ぶべき道も決まっていた。

静かに席を立ち、風谷は少女の隣へ回り込む。

「…そうだね。でも、生きていく力を身に付けるまで守ってくれる庇護者がいるなら、話は変わると思うよ」

これはあくまでも風谷のエゴで、我が儘だ。

だからこそ半端な遠慮などしない。

……少女が秘めている未知への渴望を引きずり出して、彼女をこの箱庭から連れ出す。

誘い文句、否、殺し文句は容易に浮かんだ。

息を吸い込み、青い瞳と対峙して口を開く。

「おいで、君の知らない世界を教えてあげる」

そう言った瞬間、初めて人形のような少女は明確に表情を変えた。

水晶のように無機質だった青い瞳が、その冷たさを忘れた。

じわりと滲んだそれは酷く人間らしく。澄んだ宝石は熱を孕み煌々と輝いてすら見えた。

恍惚とした熱を湛えたまま、少女は。

ゆつくりと、けれど確かに。

風谷翼の手を取ったのだ。

「……………白む視界が、徐々に色味を取り戻す。」

「……………?!」

何がどうなったのか、風谷自身にも理解が追いついてはいなかった。ただ、箱庭の風景は消え去り、今自分が倒れ込んでいるのは紛れもなく「保管庫」の白い床だと、知覚する。

気絶するように倒れたせいで床に打ったのだろうか、鈍痛のする頭を片手で押さえながら、風谷は身を起こした。何故か、今になって試薬の不味さが口の中にぶり返してくる。この分だとヨハネスに送る試薬のレポートの八割は不満と改善要求点の羅列になりそうである。

(…ただ、肝心の効能自体は、完璧の一言だが)

くらりとした酩酊感を覚えつつ見上げた無機質なベッドの上には、最初に見た美しい少女が半身を起こし、宝石のような青い瞳を確かに開けて、風谷翼を見下ろしていた。

その瞳を見た瞬間、未だにやや霞がかっていた彼女の思考が一気に覚醒する。

箱庭世界で抱いた感情が、再び強く湧き上がる。守らなければ、彼女を。その手を引いて、この地下迷宮から抜け出さなくては。

友人の影響か、此処に来る前に、こんな事態に備えた準備はしてあった。あとはそれらを恙^{つつが}無く実行に移し、速やかにC3を脱出するだけ。

立ち上がり、風谷は少女へ手を伸べた。

「行く。必ず君を守るから」

さあ、既知の箱庭を抜け出して。

未知の世界へ、逃げ出そう。

11

誤作動させた警報が五月蠅い。

現在絶賛逃走中の風谷翼の内心はその一言に尽きた。

保管庫から出て、手始めに風谷は事前準備としてあらかじめハッキングしていたC3の警備システムに自前の端末から介入し、逃走予定

の経路とは全く関係のない場所を指定して警報を鳴らした。同時に監視カメラの映像をランダムに映させたり色々和小細工も図っている。

当然、未完成だった筈の真祖が脱走した時のセキュリティマニュアルなんてピンポイントなものがある訳がないので、C3の対応は一步遅れるだろう。普通ならば気付かれない内にさっさと退散してしまうだろうが風谷は敢えて脱走開始時に警備システムを作動させた。どうせ煙けむに巻くのなら最初から相手の行動まで掌握してしまえばいい。一々相手の出方を窺うのが面倒、とも言うが。

何はともあれC3職員と警備に見付からずはこの地下施設から脱出できれば彼女の勝ちだ。警備に捕まらずに、ではなく見付からずに、であるところが最大のポイント。悲しい哉かな、風谷翼は所詮女子高生なので大人に見付かれればその時点で捕まったも同然、つまりゲームオーバーなのである。

警備システムにより厳戒区域に指定されたエリアから全く外れた場所をひた走る。無論、風谷の後ろからは薄青の手術衣を纏った少女が付いてきている。ここが病院であったならば、医者と患者の逃亡劇に見えなくもない。

「……………」

「……………」

二人の間に会話は無い。表面上は焦りなど見せていない風谷も雑談をするほどの余裕はないからだ。一切口を挟まずただ追従する少女の方は、寧ろそれが素のようだが。

逃亡序盤の調子は上々。端末に映し出されている正常な監視カメラの映像を頼りに、風谷は角を曲がって少し開けた空間に走り出た。

そこに、人影があった。

「……………風谷ツツツ!!」

切羽詰まったような表情で名を呼ぶ友人……………露木修平、だ。

「何をしているんですかあなたはっ!」

第一声がそれということとは、どうやら彼は完全に状況を把握している訳ではないらしい。どこかで何かしらの情報……………恐らくは、

未完成の真祖”に関する噂——を耳にして、持ち前の察しの良さで現在のC3の警戒状況と結び付けたのだろう。そもそもあの日のファストフード店で未完成の真祖というワードを彼に聞かせてしまったのは風谷だ。最後の最後に学友が目の前に立ちあがるなどというこの展開は、明らかに彼女自身が招いてしまった失敗。

それでも、自然と口角が上がったことを風谷は感じていた。

何故ならば、気付いたからだ。

露木が立っていたのは、監視カメラの僅かな死角。昔、二人でC3施設内を探検した時に、面白半分で風谷が彼に教えた位置だった。

そもそも風谷が今回逃亡経路に選んだのは出来る限り歩き馴れた、目隠ししてでも歩けるようなルートだ。そしてそれは、C3という繋がりを持つ中では唯一と呼べる露木友人と何度も通った道でもある。露木は、もしこの騒ぎの主犯が風谷ならば、必ず此処を通ると踏んで待ち伏せていたのだろう。

何年も前の些細な思い出を、彼はきちんと憶えている。共に過ごした時間が独り善がりのものではなく確かに二人の共通の記憶であるのだという証明が成されたようで、喜ばしかった。

もしくは、ただ単純に、会えて嬉しかっただけかもしれない。

どう足掻いてもこれから先、おいそれと会えなくなるだろう学友に、最後の最後で顔を合わせることが出来たという奇跡が。

だから風谷異は笑って言った。

「やあ露木、突然だがここでお別れだ!? 私は先に行くことにするよ」

「何を言ってる……っ、その、子は……!」

風谷の背後に立つ少女を見た露木が、言葉を途切れさせて固まる。鳶色の瞳が大きく見開かれていた。

愕然とする学友に対し、風谷は白衣のポケットから黒いシャーペン程の長さの棒状の魔術道具を取り出す。そしていつそ慈愛すら見て取れるような表情で学友に柔らかに笑い掛けた。

「ねえ露木、前に、卒業後はどうするかって話をしたのを覚えているかい?」

「っ、は……!」

いきなりの話題転換だ。彼が更に混乱することも分かった上で、独り言にも近しい口調で、風谷は箱庭世界で得た答えを紡いでいく。「ようやく分かったよ。私は不特定多数の一般人を守りたかったわけじゃない。誰かを守るようになりたいと言ったけれど、誰でも良かったわけじゃないんだ」

彼女は自分の力の限界を、どう足掻いても及ばない範囲というものを、明確に知っている。だから目に入る全てを救おうとは思わない。けれど。

「私は……子供を守れる大人になりたい」

無力で、非力で、暗闇の中で蹲るしかない子供を。誰かの手が必要で、でも誰にも手を差し伸べてもらえない子供を。

「だから私はこの道を行く。たとえ君とは違^{たが}えても、これが私の進むべき道だから!!」

風谷の張り上げた声に呼応するようにその手の中で、シャーペンくらいの小さな棒だったものがリレーのバトン程の大きさに変わる。

これは開発班の研究室から借りパクしてきた代物だ。戦闘任務に参加していた時に頻繁に使用していた武器であるため、使い方は彼女の身に染み込んでいる。

何度も吸血鬼相手に繰り返した動作で、彼女は学友へ向けてバトンを振るった。

「……っつっ!」

バトンの動きに応じるように虚空から放たれたのは、六本の黒い矢。

漆黒のそれらは露木の着ていた服の端を噛んで壁に刺さり、彼を縫い止めた。

寸分違^{たが}わず狙い通りに矢が打ち込まれた事だけを視認し、直ぐ様風谷は踵を返した。別ルートから脱出するために走り出す。

「待ってくださいいっ……風谷!」

背後から響く学友の叫びを、振り切つて。

こうして、17歳の少女による前代未聞の真祖脱走事件は幕を閉じた。

彼女はその後、C3の捜索を見事に振り切って逃亡を完遂した。事態が終息の兆しを見せたのは脱走から五日後。少女がC3上層部と

“九番目の真祖”に関する『協定』を結んだと云う噂が流れると共に、彼女への捜索指令は取り下げられた。

事件から十日も過ぎる頃にはC3東京支部内の混乱や情報の錯綜も収まり、一先ずの平穏が取り戻された。

少女の選んだその道が、廻り出した歯車が、物語の中枢へと重なるまで―――あと、五年。

27. 言動の裏側に

コツコツと固い靴音がよく響く。清潔感はあるが味気はない、無機質な白い廊下。

肩に掛かる程度で揃えられた樺色かばいろの髪を歩みに合わせて揺らす少女は、ぎゅつと唇を引き結びつつその廊下に行く。知られざる九番目の唯一の下位吸血鬼サブクラスである彼女――有紗は、現在怠惰と色欲の主従との会合に向かっている道中である。

ここは病院。七番目の真祖の主人イザたる有栖院御園が現在入院している場所だ。

無論、有紗一人で来ている訳ではない。隣には見舞い品の入った黒いボストンバッグを肩に提げた百合音がいる。普段は笑顔を絶やさないはずの彼女の表情もまた、どこか硬い。

今から彼女たちは色欲と怠惰の主従に会いに行く。お見舞いはあくまで建前だ。話題の主軸は間違いなく冷優の存在に関して、になるだろう。先日起こった憂鬱の吸血鬼たちによる襲撃事件。あの場には色欲の下位吸血鬼サブクラスが居合わせていたのだから、そこから冷優の存在が色欲の主従に伝わっていても何ら可笑しくはない。

(理由はあっても、百合音は冷優の存在を他の人に隠してた。味方にわざと情報を伏せてたってことだから、追及されても仕方ないよね…)

百合音から聞いた話では、色欲の主人はそれなりに頭が回るタイプらしい。頭が回る人間が口まで回るとは限らないが、少なくともそういう人種は自分が納得出来る理由を引き出せるまで深掘りしてくるものだ。考えただけで溜め息が出る。

(百合音も考え込んでるし、大丈夫じゃなさそう。ぴりぴりした空気になるの、やだなあ…)

風谷辺りなら嬉々としてその空気感を愉たのしむのだろうが、生憎と有紗はそんな凶太い神経は持ち合わせていない。初対面の人に会いに行くというだけで緊張するごく一般的な小市民である。

頼みの綱は隣を歩く百合音だが、彼女は今日家を出てからほとんど

口を開いていない。きっと彼女もまたこれからの話し合いの事について真剣に悩んでいるのだろう。

学校から一度帰宅して私服に着替えたため、今の百合音はあの目が覚めるようなオレンジ色のブレザーではない。袖口がフリルになっている水色のトップスに、下は濃い青のプリーツミニスカートだ。

彼女が普段好む動きやすき重視の服よりもずっと可愛らしいコーデなのは、それらが冷優が選んで彼女に貸した服だからである。百合音と有紗と冷優は好みの色もスタイルも見事にばらばらなのだが、体格の違いがそれほどないため偶に服の貸し借りをすることがある。

そしてこれは余談だが、自分の服装に拘こだわらない百合音は、偶たまに冷優によって強制的にコーディネートされる時がある。拘りが無いのもう仕方がないが、自分にどんな服が似合うのかくらい把握しておきなさい、とは冷優の談。それが一理あるのと、単純にオシャレをしている百合音が見られるのが嬉しいので、百合音が悲鳴と共に冷優の部屋に引きずり込まれても有紗は微笑ましく見守ることにしている。

対する有紗はというと、淡いオレンジ色のワンピースを着用している。柔らかく軽い着心地で、彼女にとってはお気に入りの一着だ。尤も、吸血鬼であるが故に日の目を見る機会は少ないが。

(百合音、元々自分のことには無頓着だし、風谷も似たような感じだからなあ……冷優がいなかったらどうなっただろう)

気が付けば当初の心配からは随分と外れたことを考えている有紗。案外一番凶太いのは彼女かもしれない。

「…有紗、あそこよ」

「あ、うん」

病院という場所に配慮してか、静かな声で百合音が一つのドアを指し示した。

事前にメールで知らされていた部屋番号を確認している百合音の隣に並んで、有紗はドアの前で立ち止まる。ちらりと彼女の携帯を覗けば約束の時刻ぴったりの時間が表示されていた。百合音は硬い表情のまま扉へ手を伸ばし、拳の背で軽くノックの音を響かせる。中から柔らかな男声の返事が聞こえ、ドアが開かれて……。

結論から言おう。ぐだぐだ考えていた有紗の懸念はほぼ全て杞憂だった。

「お久しぶりですリリイさん!? あ、これ良かったらどうぞ、お見舞いです」

開幕直後に元気な挨拶、ボストンバッグから流れるように取り出された見舞品。……流石、としか言えない。百合音の顔には扉が開かれる前までの強張りこわばりなど面影もなかった。切り替えが速すぎて周りが置いて行かれるレベルだ。とりあえず有紗は見事に置いて行かれた。

お邪魔しまーす、とあつと言う間に入ってしまった彼女の背中を追い掛けて、有紗は病室へ足を踏み入れる。広々とした個室は客人を迎えなくても狭さなど感じさせない快適な空間となっている。基本的に庶民の金銭感覚な有紗は真っ先に入院費の額が心配になった。

だが悠長な事を考えている場合ではなかった。

ベッドの上で上半身だけ起こして座っている少年が、眉間に皺を寄せた剣呑な目付きで有紗を睨み付けていたからだ。

「……貴様が、九番目の真祖か?」

「え……?」

背後でスライド式のドアが閉まる音が響く。

少年に言われたことが咄嗟に理解できず、頭が真っ白な状態で有紗は立ち竦すくんだ。

向けられているのは疑いと警戒の視線。

それを真っ向から受け止めて平然としていられるほど有紗は気丈ではない。遅れて、彼こそが入院中の色欲イザの主人で、何か誤解をされているのだと気付きはしたものの、言葉も声も出せず逃げ出したくなる。

そんな彼女をその視線から庇うように百合音が割り込んできた。

「ああ違う違う、この子は下位吸血鬼サブクグラスよ。本物はこっち」

軽い口調で言いながら百合音はボストンバッグに手をつ突っ込む。

「さっさと出てき痛っ?! 何で噛むわけ!?!」

ぱつ、と引っ込められた彼女の指先には小さく噛み付かれた傷ができていた。慌てて有紗はスカートのポケットから絆創膏を取り出す。

そうこうしている間にポストンバッグからは白猫が飛び出していった。とんつ、と軽い音だけを響かせて、白い靴の爪先が床へ降り立つ。

瞬きの間に現れた冷優の姿に、室内が静まり返った。

色欲の主従は予想こそしていただろうが実際に目にするると衝撃を受けたのか、主人の方は息を呑み、真祖の方は目を丸くしている。

有紗とは違い、そんな彼らの視線を受けてなお、白のワンピースを纏う彼女は堂々たる佇まいを崩さず口を開いた。

「初めまして、色欲のお兄様。私が九番目、知欲の真祖、^{ノイワン}知られざる九番目^{ノウズ}”。今の名を冷優と申します」

自己紹介に工夫を凝らす趣味は無いのか、それは八番目の兄と対峙した時とほとんど変わらない台詞だった。そして明かしたのは必要最低限の情報のみ。感情の乗らない機械的で平坦な口調と相まって、愛想も何もない。

それでも、行動に心は表れる。

主人の指に噛み付きながらも比較的素直に冷優が姿を現したのは十中八九、有紗の為だ。今も色欲の主従の視線を遮るように、当たり前のように百合音と肩を並べて有紗の前に立っているのだから。庇われている、と感じるには充分だ。思わずぎゅっと手を握り締める。華奢な手の中で行き場を失っていた絆創膏がくしゃりと音を立てた。

…こんな風に百合音と冷優が揃って、些細な事からさえも有紗を守るようになったのは、^{およ}凡そ一年前からだ。

一年前、彼女が^{ひづき}緋月有紗が、瀕死の状態から吸血鬼へ生まれ変わる事となった、その日から。

(……………)

病室内の全員が黙り、相手の出方を窺う重い沈黙が場を支配していた。

やがて意を決した表情で、有栖院御園が口火を切る。

「……………貴様は、椿の味方ではないんだな？」

それは、確かに必要な問い掛けではあっただろう。

けれどやはり有紗はたじろいでしまう。敵だ味方だなんてやり取りを普段の生活ですることはない。今、ここは当たり前が当たり前で

なくなった非日常の場なのだ、思い知らされる。

「そうね。憂鬱のお兄様に協力するつもりはないわ。真っ向から敵対宣言もしてしまっただし」

「？」

きつぱりと言い切った冷優に百合音が何か引つ掛かる点でもあったのか、首を傾げて言う。

「あれ、敵対宣言までしてた??味方にならないとは言ってたけど」

「あの後風谷経由でお兄様から電話が来たから、その時に」

「何それ聞いてない」

「貴女みたいに事前の忠告すら無駄にする馬鹿に報告する必要性は感じないわ」

「喧嘩売ってるなら言い値で買うけど?」

流れるように険悪なムードに突入する百合音と冷優。さつきまで息ぴったりと並んで有紗を庇っていたとは思えない。

煽る冷優も悪いが迷いなく乗る百合音も百合音である。

いきなり主従で不穏な睨み合いを始めた二人のせいで室内の空気が微妙なものになった。

そしてその直後。

スパーンツツ!!と有紗の後ろで盛大にドアが開かれた。

「ごめん遅くなった!!」

「ひゃあああ!!」

真後ろで大きな音と声が響き、有紗は驚いて目の前にいた百合音の背中に抱き着いた。よろめきつつも倒れない体幹の強さが素晴らし

い。
「おい真昼、もう少し加減して走れ…。オレがただの猫だったら振り落とされてるぞ…?」

「元はと言えばお前がさつきとゲーム中断しないからだろ!!」

肩に乗っていた黒い猫を鷲掴みにして、走り込んできた少年が病院という環境には適さない声量で叫ぶ。恐る恐る振り返り黒い猫を認識して有紗はそれが怠惰の真祖だと分かり目を丸くした。ここら辺は事前に関係者の知識を百合音から聞いていた、予習の賜物である。

「お二人とも、病院ではお静かに、ですよ?」

穏やかな声で色欲の真祖が二人を窘める。

はつとした表情で少年が辺りを見回し、色欲の真祖に謝った。どうやら常識人ではあるようだ。一方の黒猫は少年に掴まれたまま、その赤い瞳は冷優へと向けられていた。視線に気付いた冷優が軽く礼をする。

「…………この姿では初めまして、怠惰のお兄様」

「あ、真昼くん、これが私の契約してる真祖サーヴァントで九番目の冷優」

「えっ九番目!?! 椿は八番目だったよな!?! 結局真祖何人いるんだ!?!」

可哀想に大混乱な真昼くんである。八番目の椿であれだけの騒動が起きているのだ、そんな反応になるのも無理はない。有紗は心の中で静かに合掌した。

「…これからさらに十番目とか出てきたりしないよな…?」

「イレギュラーが既に二名出ているからな。二度あることは三度あると云う。可能性の否定はできない」

「元々七人いたんだし、二世代みたいな感じで新たに七人作りましたーとか、あったりして」

不穏な発言を口にする主人たちイザ。これらを俗にフラグと云う。しかし。

「ご安心くださいませ、怠惰のお兄様に色欲のお兄様。『あの人』が生み出した吸血鬼の真祖は、確かに私で打ち止めでございます」

囁くような、だがしっかりと耳に届く声で、冷優がそう言った。

「既に『あの人』がいない以上、新たに真祖が生まれる可能性は極僅かでしょう。故にその懸念は杞憂でございます」

ぱらり、と。乾いた音が後に続く。

その、あまりの違和感に有紗は目を瞬かせた。

(……………え??)

いつの間にか冷優はベッド脇の客人用の椅子に座り、膝の上で開いた白い本の頁を白い指先で捲めくっていた。まるでその空間だけ自宅であるかのような行動様式に有紗は困惑し、咄嗟に百合音の方を見た。

(……………いや百合音も何してるの?!)

冷優の言葉など完全にスルーして、百合音は真昼の肩に乗りなおした怠惰の猫を指先で撫でくり回していた。動物が好きなのは知っているが何故今構うのか。

(なんで重要そうなこと言ってる時にそういうことするの!?)

場の雰囲気がいっぺんに台無しである。

この主従、変なところでマイペースな行動に走る癖が共通している。どうしてこのシリアスな空気の中でそんなアクションが出来るのか、有紗にはきつと永遠に理解できない。したくもない。

その時だった。内心でわなわなと震えていた有紗の前に、救世主が現れたのは。

「……いや九番目の子はなんでいきなり読書始めたんだ!?!鈴白さんもクロぼつかり撫でてないで話聞こう!?!なんか重要そうなこと言ってるから!!」

明らかに場にそぐわない挙動をしている二人に的確なツツコミが入った。怠惰の主人である。

その勇姿に謎の感動を覚える有紗。ツツコミ役とはかくも有り難い存在だったのかと羨望の眼差しで彼を見る。しかし無慈悲にも軽率なギャグ展開は止まらない。

「あー…真昼ー、ポテチ食いてー。あとコーラ」

「お前もかつつ!!」

「確か、一階に売店がありましたよ。御園も一緒に行つてはどうですか??お友達と売店やコンビニなどに寄つてお菓子をかうのは、学生の醍醐味ですから」

「なっ……そ、そうなのか。よし、城田!?!売店に行くぞ!」

「いや間違つてはないけどな!?!」

転がつていく話の主題。いやそもそも主題などあったのか。

各々好き勝手な行動をとる中でツツコミ役はただ一人。カオスである。

結局、怠惰の主人の力では収まりきらず、謎の意気込みを見せる有栖院御園を筆頭にして有紗たちは病室を後にした。

病院ではお静かに、が鉄則なので特に会話はなくぞろぞろと一行は

廊下を行く。

しかしいざ売店が目前という所で、ある事に気が付いて有紗は一人、足を止めた。

(……冷優が来てない。性欲の真祖も)

怠惰の猫は、相変わらず主人の肩に乗っているのが目に入った。という事は病室にはあの二人だけが残っている事になる。

戻るべきかと有紗は逡巡する。百合音は気付いているのかいないのか、さつさと売店に足を踏み入れてしまっていた。

(うーん、冷優なら大丈夫かな。たぶんわざと残ったんだろうし)

有紗ならともかく、あの冷優が『ぼーっ』として置いて置かれていかれた“など”というのには有り得ない。残るつもりがなかったのなら、さつさと変化して怠惰の猫と同じ様に百合音の肩に乗っていただろう。今更有紗が戻る必要は、きつとない。

「……おい」

自己完結した直後に突然声を掛けられた。驚きつつ顔を上げれば、目の前には性欲の主人^{イザ}。

「貴様はたしか下位吸血鬼^{サブクラス}だと言っていたな？」

「えっと、はい……」

「なら特に気を付ける。椿たちは弱い下位吸血鬼^{サブクラス}を狙っている。貴様に戦闘力があるかは知らないが、決して油断はするな」

それだけ言って、彼は有紗を追い越して売店に入って行った。

ぼつんと一人残された状態で、有紗は。

(うん、よかった。良い人だ)

最初こそ九番目の真祖と勘違いされて警戒されてしまったが、きつと根は仲間思いの人間なのだろうと分かる。心配して忠告までしてくれるとは思っていなかったため、不意打ちのそれを嬉しく感じた。

今までは吸血鬼であるせいで限られた人間としか話せなかったが、奇しくも八番目による騒動が起きたせいでこうして他の吸血鬼や関係者の人間と関わる機会が出来たのだ。今日のことには必ず日記に書き留めておこうと、有紗は心に決めた。

帰り道のこと。

怠惰と色欲の主従との顔合わせが済み、細々した情報の交換も滞りなく終わった。売店から戻ってから、情報交換中に冷優が喋っている時は休憩時間だと言わんばかりに百合音が怠惰の黒猫を撫で続けていた事以外は特に問題もなく、思っていたよりもすなりと知欲の三人は彼等に受け入れてもらえたと言えるだろう。

怠惰組とも別れ、有紗らは三人で家路を辿っていた。

「……ねえ、どうして椿さんに敵対宣言なんかしたの？」

ふと、普段と比べるとやや暗い印象を受けるトーンで、百合音が冷優に問い掛ける。

「いくらそういうのに鈍い貴女でも分かってたでしょ?? 正面からそんなこと言ったら、椿さんが傷付くって」

「……………」

言外に、そこまで言う必要があったのかと百合音は訊いているのだろう。

……確かに公園で対峙した時、憂鬱の真祖は冷優に対してどこか、期待を含んだ眼差しを向けていた。深い事情までは有紗には分からないが、あの時、彼は決して冷優を敵視してはいなかった。寧ろ仲間を見付けたかのような表情をしていて、酷く不快だった事を有紗は覚えてる。

「味方ではない」と「敵である」は、似ているようで全く違う。前者の状態で留めようとした椿を、冷優は後者を選びわざわざ突き放したのだ。態々わざわざそうしたと言うのなら、必ず相応の理由がある。

伏せられた青の瞳の眼差しは、地面を見ているようで違うものへ注がれている。

「…………お兄様が、迷っていらっしやるようだったから」

やがてぼつりと落とされたのは、普段言葉少なな彼女の本質が滲む台詞。

「味方にはなれないのに希望だけ持たせ続けるような真似をすれば、

これから先何度もお兄様は悩むことになる。一度の傷で未来の憂いを断ち切れるなら、その方が良いと判断しただけよ」

その『理由』を聞いて、有紗は密かに相好を崩した。とても冷優らしいと感じたから。

「敵陣にいるだけの妹」に刃を向けるより、「敵である妹」に刃を向ける方が、まだしも椿の心の整理が付けやすいだろうと。冷優はそう考えたのだ。これから先、本格化していくであろう戦争の中で冷優と会う度に葛藤を強いられるよりも、ずっと楽だろう、と。だから椿の望みを切り捨てる事だと分かっていてなお、冷優は自身を敵であると突き付けた。

……それを「優しさ」と捉えるかどうかは、人によるだろう。

見方によってはとてつもなく傲慢なやり方だからだ。勝手な判断と価値基準で相手を傷付けているだけだと、糾弾されても仕方がない。

けれど、少なくとも有紗は、優しさだと思う。

(わかりにくいし、傷付けてもいるけど、相手の事を考えてした行動には変わりないもんね)

名はその者を表す、と云うが、特に冷優にはそれがぴったり当てはまると有紗は思っている。彼女の行いはその名の通り、「冷たい優しさ」なのだ。矛盾しているように聞こえても、それは彼女の本質をよく表している。相手を傷付けてでも守るというそのやり方は、決して多くの共感を得るものではないだろうが。

(……けどまあ、それが理解できないって言う人ならどちらにしろ、冷優には近付いて欲しくないから丁度良いかな?)

そのせいで憂鬱の真祖が冷優を嫌うなら、憎むなら、それでも構わない。それならそれで、完全に敵として対応できるのだから。

冷淡な考えだが有紗は百合音ほどお人好しではないのだ。理由が何であれ躊躇いなく誰かを傷付けることが出来るような輩は、大切な「家族」には関わらないで欲しいと思うのは当然である。

有紗は非力だ。だからこそ、絶対に取り零したくないものだけをもっとも最優先に考えているだけのこと。他人は二の次三の次、敵であれ

ば言わずもがなだ。であればこそ、冷優なりの優しさを受けていながらそれを理解せずに向かつて来る敵なら、容赦など要らない。

(日記に書くこと、増えちゃったな)

内心で苦笑しながら、有紗は顔を上げる。

そして、ともすれば夕闇に溶けていきそうな二人の背中を追って、駆け出した。

28. 消えない灯火

有栖院御園のお見舞いという名の、各主従との顔合わせを終えた日の、その夜。

夕飯も終えて、各自がそろそろ就寝しようかという時間帯。密かに頃合を見計らっていた百合音は、お風呂上がりで黒っぽいパジャマに着替えた姿でホットミルク片手にとある部屋を訪れていた。

有紗の私室である。

「有紗、まだ起きてる？」

扉越しに声を掛ければ、パタパタと形容するに相応しい足音と共に室内側からドアが開かれた。

「どうかしたの？ 百合音」

不思議そうな顔で迎えた彼女にすかさずホットミルクを差し出す。反射的にか華奢な両手が素直にクリーム色のマグを受け取ったのを確認してから、百合音は努めて軽い口調を意識しながら本題を口にした。

「ねえ有紗、今日大丈夫だった？」

「…今日って、病院に行ったこと？」

こてんと傾げられた首に沿って、赤茶の髪がさらりと揺れる。話がずっと察したのか、有紗はそのまま百合音を部屋に招き入れてくれた。

踏み入れたその部屋は、正に女の子らしい雰囲気のある部屋だ。勉強机こそ百合音の部屋にあるものと同じ木目調のものだが、可愛らしいインテリア雑貨と手の平サイズのぬいぐるみで飾られているし、視線を下げれば猫の顔の形をしたミニテーブルに薄ピンクのもふもふカーペット、更にベッドには抱き枕サイズのテディベアが鎮座している。机の上の小物と先日風谷に押し付けられた窓際の花くらいしか彩りのない百合音の部屋に比べると、その違いは悲しいほどに一目瞭然である。

パツと見て誰もが女子の部屋だと認識するその空間の主たる少女は、百合音が訪ねて来るまで座っていたのだろうやや斜めに回転した

状態の椅子に座り直して。

「特に何もなかったけど……そもそも百合音も一緒だったよね？」

「そういう意味じゃなくて。ほら、他の真祖と主人のペアに会うのは初めてだったでしょ??怖くなかった?」

問いかけながら、百合音はぽすんと座りなれたベッドへ腰を下ろしつつ、ハチミツ入りのミルクをふうと冷ます少女の反応をさり気なく、だが注意深く観察する。

そもそも、何故こんな質問をしにわざわざ彼女の部屋まで来たのかと言うと、勿論理由がある。

今まで風谷によって何度も理不尽な非日常に放り込まれた経験のある百合音とは違って、有紗はそういった状況に対する免疫や耐性は低い。言わば一般人的な感性の持ち主だ。にもかかわらず今日は、そんな彼女を連れ出してあののような場に立ち会わせた。その緊張と精神的負荷を考えれば、気に掛けるのは当然の事だった。

…本当ならば、冷優はともかく彼女までを、この兄弟戦争とやらに巻き込むような事はしたくなかったのだが。それでも、偶発的な状況で備えもなく巻き込まれるよりは、せめて味方には初めから仲間として紹介しておく方が安全だろうと冷優に言われ、百合音は反論できなかった。

「うーんと、別に何ともなかった、かな。色欲の主人も怠惰の主人も普通の人だったし」

「御園くんとか、苦手になったりしてない?」

「警戒されてたのは仕方ないよ。それに、後から優しい人だって分かったから大丈夫」

柔らかな笑みを浮かべてそう答えた彼女に、ほっと一息つく。どうやら、心配していたほど相性は悪くなかったらしい。

そしてふと、木目調の勉強机……より正確にはその上に広げられたノートへ視線を向けて、百合音は悲しげに表情を歪めた。

「……………日記、書いてたのね」

彼女の反応を受けて、有紗もまた困ったように眉尻を下げる。

「…うん。ほんとに、何ともなかったんだよ??でも、用事があつて外に

出た日は書いておかないと、なんとなく眠れなくって」

本当はやめた方がいいって分かっているんだけどね、と小さく有紗が呟く。

彼女には昔から、日記を付ける習慣があった。三人の内で最も早く風谷に拾われたのが有紗であるから、その習慣がいつから始まったものなのかを百合音は知らない。少なくとも百合音がこの家に来た時には既に癖づいていたからだ。毎夜、リビングでその日の出来事を日記帳に認める彼女の姿を、ずっと見ていた。

有紗がその習慣を止めたのは、言うまでもなく下位吸血鬼となった頃からである。

「……一年前、緋月有紗は通り魔に襲われた。」

百合音と冷優が見付けた時には、悍ましい程の血塗れの状態だった。微かに呼吸があったのは奇跡。しかしそれも、数分も持たないだろうと分かる死に体。

救急車など到底間に合わない。今にもこと切れそうな彼女を前にして「……百合音は、何も出来なかった。」

冷優でさえ提示出来た手段は一つだけ。有紗に血を飲ませ、下位吸血鬼にするという方法。

躊躇う事に費やせた時間は数秒だけだった。ただ、失いたくない一心で、百合音と冷優は共にその「罪科」を背負うことを決めた。

下位吸血鬼として目覚めた有紗は、通り魔の事を覚えてはいなかった。正確には襲われたという出来事に関する記憶が混濁していた。顔は見た気がする、けれど男だったか女だったかすら思い出せない、と。彼女はそう語った。

「……吸血鬼となった彼女は、しかし人間だった頃と何も変わらなかった。いつそ見た目からして明確に変わったと言える部分があれば、もつと受け入れやすかったのではないかと思う程に。明るい茶の髪も、小柄な体軀もそのまま。本来赤く染まる筈の瞳すら、元の紫紺色のままだった。」

少し、特殊なのだとして「……知欲の罪を冠する彼女は言っていた。元々異端の九番目として生み出された冷優は、下位吸血鬼を作る能

力を低く「設定」されているのだと。

だから有紗もまた、少々特殊な下位吸血鬼^{サブクラス}と成った。瞳の色も変わらず、吸血衝動も弱い。日の光には拒絶反応があるが、長時間強い日差しに晒されなければ灰塵^{ジン}へ還ることはない。

弱体化された能力では、そもそも瀕死の人間を正常に吸血鬼として生き返らせることが出来るかどうかも怪しかったのだと云う。有紗が息を吹き返した時、滅多に感情の起伏を表に出さない冷優が安堵の息を吐いたのを、百合音は初めて目にした。

後になつて、比較的冷静に状況分析をしていた冷優から聞かされたのは「『有紗を襲ったのは、恐らく吸血鬼だろう』という推測。大量出血の出処であった鋭い刃物による切傷痕の他、有紗の首筋にはくつきりとした噛み跡があったらしい。……この辺りは、全く冷静ではいられなかった百合音にとっては完全に伝聞情報でしかないのだが。」

そして、吸血鬼となつて、その変化に心が適応できず、ルーティンワークだった日記を止めてしまった「ルーティン」のなら、まだ良かった。切っ掛けは、確かに吸血鬼となつたこと。だが有紗が明確に日記をつけるのを止めたのは、実を言うとその後日の出来事に端を発する。

「……日記とは、過去を振り返る為のもの。限られた人生を忙しなく走り抜ける人間にとつては一時の回顧も大切だが、半永久的な寿命を持つ吸血鬼には必要ない。文字通りにキリがないからだ。だから日毎の出来事を際限なく綴るのは止めた方が賢明だ」と。

過去、有紗が下位吸血鬼^{サブクラス}となつて間も無い頃に、冷優が上記の内容をそのまま彼女に言い放つた事で大喧嘩になった。勿論喧嘩をしたのは、まだ吸血鬼になつた事に混乱を捨て切れない有紗に向かつて一切の配慮もない言葉を掛けた事に激怒した百合音と、事実に基づいた忠告をしたただけだと言ひ張る冷優の二人である。有紗は掴み合い寸前の言い合いをする二人の傍らで呆然としていた。普段誰よりも泣き虫な彼女は、その時だけは一粒の涙すら流さなかつた。

ともかくその一件以来、有紗は毎日日記を付けることを止めた。だからこそ夜のリビングで、無人のテーブルを見る度に「ルーティン百

合音は一人、喩えようもない物悲しさを感じていた。

悲痛な表情を浮かべて黙り込んでしまった百合音に引き摺られたのか、ホットミルクを机に置いた有紗は、日記帳の左側に置かれていたシャーペンシルを手にとって。

「……めんね、百合音。一緒に高校行こうって、約束してたのに」

黒地に白い小花が散らされた、シンプルな柄のそれを握り締めながら、絞り出すような声で彼女はそう言った。

そのシャーペンは、中学三年生に上がったばかりの頃に、二人が色違いのおそろいで買ったものだった。高校ではクラスが離れるかもしれないと思つて、互いが互いの選んだ色を贈り合った。二人とも、自分なら絶対には選ばない色を渡されて、似合わないと思つて笑っていた。

そんな、当たり前前に来ると思つていた瞬間が、もう永遠に訪れないのだと知つて——それを絶望と呼ぶはずして、何と云うのか。

一年、だ。冷優や風谷のことは知らないが、百合音はその変化を日常として受け入れるまでに一年掛かった。一緒に登校出来ない事にも、気軽に日の下を並んで歩けない事にも、この一年でやつと慣れた。慣れたくなどなかったが、いつの間にか心が順応していた。

だが有紗を襲った通り魔の犯人に対する感情だけは、依然として百合音の心に燻り続けている。

折を見て、機会を窺つて、これまでもずっと百合音は犯人の手掛かりを探し続けていた。これはもう誰にも伝えてはいない、独断だ。だからこそ風谷にも冷優にも頼る事はせず、彼女自身の広げうる限りの人脈だけを使っている。

：椿に拉致された時も、内心渡りに船だと思つたくらいだ。

通り魔は吸血鬼。ならば同じ吸血鬼の方が情報を持っている可能性は高い。それがあの時、彼女が積極的にあのホテルの吸血鬼たちとの交流を築いた理由の一つだ。

（…有紗には隠しておかないと。私が未だにそんなことやつてゐるって知つたら、また心配させちゃう）

ただでさえ心配性な彼女に知られる訳にはいかない。…いかないが、犯人探しを止める気も百合音にはなかった。どれだけ時間が掛

かったとしても必ず見つけ出すと、あの日誓ったのだから。

必ず見つけ出す。見つけ出してー、

「ー百合音？」

ふと、その声に意識を引き戻された。

「……………、ありさ」

「顔色悪いよ？大丈夫？」

いつの間にか隣へ移動してきた有紗が、心配そうに顔を覗き込んでいる。ベッドがもう一人分沈んだ感触にすら気付かなかった。心配させたくないと思った矢先にこれか、と。酷い罪悪感が湧き上がる。

それを自覚して、百合音は。

(……………これは、ダメね。完全に引つ張られてる)

どうやら今日の件に関して一番心配するべきだったのは有紗ではなかったらしい、と思い至る。

(そういえば売店に行った時、あの子とリレイさんが病室に残ってたわね。…何かあったのかしら)

あの穏やかな性質の真祖が冷優の平静を乱すような事を言うとは思えないが。一応後で顔を見に行くべきだろうか、と思索する。

一方その傍らで、百合音の様子がおかしい、と思ったのか、落ち込みまくった雰囲気を変えようとしたのか、有紗が(恐らく考え無しに)口を開いた。

「そ、そういえば気になってたんだけど!? 今日、冷優は色欲の主人に『椿の味方じゃないのか』って聞かれて『敵対宣言までしたから、椿の味方ではない』って答えたよね？」

「…そうだったかしら。それが？」

「でもさ、その後に『だから色欲や怠惰たちの味方だ』とは、言っていないよね…？」

「……………」

有紗の言わんとしている事を理解して、百合音は顔を顰めた。その反応を見て、「あ、言わなきゃ良かったかも」と焦っている彼女には悪いが、確かに明らかな選択ミスである。

つまり、だ。冷優は椿の味方であることは否定したが、御園たちの

味方であるとは言わなかった。それはつまりこの期に及んでまだ冷優は自身の身の置き場を表明していない、とも取れるのだ。

と、いうことは。

「えっと、や、やっぱり冷優ってまだ、迷ってるんじゃない、かな…？」

「ええー…、なにそれめんどくさい」

「ごめん百合音、でも現実逃避しないで」

ぐでんとベッドに身を投げ出してスプリングの跳ね返りに身を任せる。

…はつきり言つて、百合音は敵だの味方だのの話に興味が無い。だって、どうせどちらも切り捨てられないから。ならば最初から区別する意味が無い、と言う帰結である。

その価値観故に冷優の発言には大した注意を向けてはいなかったのだが、有紗は違ったのだろう。彼女は敵にも非情にはなれないタイプだが、一方で敵味方の区別自体はしっかり付けるタイプでもある。

「……全部私の所為だって、言つたくせに」

愚痴を零すように、百合音はそう呟いた。

それは正しく愚痴だった。言つても仕方がないけれど、言わずにはいられないこと。

きつとこの先、結局冷優は自らで決めて、自らで全て背負う。彼女は自分の選択に過不足なく責任を持てる性質だ。だから、鈴白百合音の助けなど最初から必要としない。

「……………」

「ねえ……冷優もだけど、百合音も、本当に今回の「戦争」に参加するの？」

躊躇いがちに、不安げに呟かれたその言葉に、百合音は徐に寝転んでいた体を起こして彼女へと向き直った。

「私は戦争がしたいんじゃないよ、椿さんを止めたいだけよ」

「それでも、戦いになるんだよね？」

「それが椿さんの選ぶ手段なら、ね」

「風谷と同じってこと？」

「きつとそれが一番効く」

「…そっか。百合音だもんね。もう、憂鬱の真祖のことは大体わかってるんだよね」

「いいえ?! 甘く見積って理解度四割いかにくらいかしら。前に一回失敗してるし」

「し、失敗?!」

そこで、「あ、言わなきゃ良かったかも」と。

先程有紗が思ったであろう事と同じことが百合音の脳内をよぎる。

一方で、珍しいことに察しの良さを発揮してしまつたらしき有紗の顔色からは血の気が引いていた。折角のホットミルクの血行促進効果が無しである。

「失敗って、……ま、まさか憂鬱の所から帰ってきた時の首の傷つ……！」

「うんあれは確かに私が距離感間違えて踏み込みすぎちゃつて反撃喰らつただけで、間違えて地雷踏んだのは私だし椿さんの反応はある意味普通だから大丈夫大丈夫」

「全く!? 何も!! 大丈夫じゃないよ!!」

がつと肩を掴まれてぐわんぐわんと前後に揺さぶられる。そう言えはこの話は、冷優と風谷は察していたようだが有紗には寝耳に水だっただろう。実は噛まれただけじゃなくて大量出血で意識不明までいってしまったとか言つたら気絶しそうな勢いである。

特に抵抗せず身を任せて揺れていると、やがて一時的な動揺が収まったのか、ピタリと前後運動が止む。

見れば、俯きがちに赤茶の髪に隠された表情の奥から、今にも泣き出しそうな声色が零れ落ちてきた。

「ねえ、百合音……無茶なこと、しないで。危ないことも……お願いだから」

「……………」

それは、懇願のようで、既に有紗と百合音の間では何度も繰り返されてきた、確認の言葉だ。

百合音にとっては、風谷に拾われる以前にも何度となく掛けられてきた心配の込められた台詞。常識的に無関心な大人たちの、形式美と

でも揶揄出来そうな程に、聞き飽きた文言。

だから笑顔で、何十回何百回と繰り返してきた定型文を、また繰り返す。

「大丈夫よ。私には武器リイドもあるし、簡単にやられたりしないから。――だから、貴女は何も心配しなくていいから…ね？」

幾度も、何人もの相手に対して発してきたその言葉。

相手の目を真っ直ぐ見て、精一杯の真摯さか、もしくは目一杯の明るさを込めて言うのがコツ。たったそれだけで、誰もが簡単に鈴百合音のことを信じてくれた。

だから。

「嫌だ。絶対心配するから。…だからちゃんと、無事で、戻ってきて」
だから、目の前の少女から即答で返ってきた否定の言葉に――百合音は心の底からの安堵の笑みを零した。

それなら、大丈夫。有紗が居てくれる限り、彼女が信じないでいてくれる限り、鈴百合音は必ず無事で戻ってくる事が出来る。

それはいつも、ほんの少し気を抜いたら戻って来れなくなりそうになる足を止めて、振り返る為の楔になってくれるもの。

あるいは、常に帰る場所を指し示す、消えることの無い灯台の明かり。

29. 交差点は遙か過去

? 珍しく、休日だった。

? 正確に言うなら、露木修平はその日珍しくも、休日を休日として過ごしていた。

? この所どころかの和風吸血鬼だの闇夜を駆ける三馬鹿だのの所為でまともに休めていなかったが、久しぶりに丸一日を自分の時間として確保出来たのだ。

? 朝は遅めに起き、気に入りのブックカフェで時間を過ごして、既に日の傾きかけた刻限。

? 普段は仕事柄、地下に籠もりきりの生活である為に縁遠かった人々の喧騒。それを肌で感じ、新鮮さを味わう。魔術師の家系の血が濃い影響で吸血鬼に襲われやすいという理由からも、人通りの多い道を選んで歩くのは昔からの癖だった。

? なので、同じような理由で同じような癖を持つ人間と鉢合わせる確率は、どうしても高くなる訳で。

「……………」

? ぱちりと、黒い瞳と目が合って、露木は足を止めた。

? 行き交う人々の流れの中で、何メートルも離れてはいたけれど、それでも確実に視線が交わったのが分かる。

? 今までも、あったのだ。似た生活区域を共有していてなおかつ同じような道を選ぶのであれば、思いがけず見掛けたり顔を合わせてしまう事は、避けようも無い。だからその度に、お互いに踵を返して通り過ぎてきた。今回も同じく、視線の先の彼女……風谷は、ぱっと目を逸らして全く別の方向へ足を向けている。

? 今までなら、露木も同様に別の道を選んでやりすごしただろう。

? しかし今は、「今まで」とは状況が違う。

? 露木は、信号を渡って向かいの歩道の路地に姿を消した彼女を追い掛けた。

? 既に七月も半ば、気温は高い。太陽は陰っている時間帯とはいえ、走れば途端に体は熱を上げた。人にぶつからないように気を付けない

がらも、横断歩道の人並みを駆け抜ける。

？路地に入れば一転、人々の喧騒は嘘のように遠のいた。幸いにも道は枝分かれしておらず、早足のまま歩を進めれば直ぐにその背中が見えた。

「……風谷っ！」

「……………」

？見慣れた白衣とは違い、黒のパンツスーツ姿の彼女。この暑さでもきつちり羽織られたジャケットの後ろ姿が、露木の声にぴたりと停止する。

？ややあつて、振り向かずに返答があった。

「個人的に情報屋と会うなんて、君の立場に関わるんじゃないのかい？」

「…今は、プライベートです。それに危ない綱渡りをしているのはあなたの方でしょう」

？口調だけは、いつものシニカルな語り口と変わらない。だが振り向こうとしない様子からは、彼女なりに動揺している事が窺えた。

？少し上がった息を整えつつ、露木はこの機会を逃さない為に本題を口にする。

「風谷、C3の傘下に入って下さい」

「!?何を言っているんだ、君はっ」

？明確に驚いた声と共に、漸く風谷はこちらへ振り向いた。感じられるのは困惑と、そして僅かな怒りの感情。

？彼女は孤高であることにプライドを持っている。組織に帰属せずたった一人で立場を維持し続けているという事実。それを崩せと言われれば反目の構えになるのは道理だった。

？露木とて、これまではずっと、彼女にはこれ以上C3に関わって欲しくはないと思ってきた。

？しかし先程も述べたが、状況が変わったのだ。

「九番目の真祖とその主人が、意志を持って他の真祖と接触したという情報が入りました。これは五年前にあなたとC3が結んだ『協定文書』の内容に反する筈です」

「……………」

「樁との『戦争中』だけでもいい。一時的にでもあなたがC3に協力する立場であると示してくれば、この程度は問題にはなりません。決して、あなたにとつて悪いようにはさせませんから」

「私は情報屋だ。常に中立中庸であることが一番の防御機構として機能している」

『協定文書』があれば、相応の見返りは必要ですが、C3があなただの身を保護すること自体は不自然ではありません。九番目の真祖を擁するあなたが今どれだけ危険な立ち位置にいるか、自分でも分かっているでしょう」

「どうか、頷いて欲しい。」

「どうあつても関わらなければならぬというのなら、せめて味方として。それが露木の願いだっただけだ。」

「……だからこそ、次に返ってきた風谷の言葉を、にわか俄には理解出来なかった。」

「……プライベートだと言ったな??なら私もオフレコとして答えよう。露木、私とC3の間に『協定文書』など存在しない」

「え……」

「人は都合の良い偽りを信じ、都合の悪い真実から目を逸らす。まして、混乱の只中なら意図的に都合の良い偽りを流布することも容易だ。デマゴグ、と言えば君なら分かるだろう??五年前に私がやったのは『九番目の真祖を逃がした人間とC3が協定を結んで和解した』という噂を流した事だけだ」

「前提が、あつさりと覆された。」

「掴んでいた頼みの綱が、ちぎれていくその音が、露木には聞こえた気がした。」

「……五年前、彼女が九番目の真祖と共にC3から脱走した時、中立機関内部は暫くの間大混乱だった。」

「そんな中で、ある時から「C3と脱走犯が協定を結んだ」という噂が流れた。そして誰からともなく誰もが口にしていた『協定文書』の存在。最重要機密として一定以上の立場の職員しか閲覧出来ない」と

言われたその内容についての憶測は様々あった。しかし取り分け多くの者が信じるに値すると頷いたのは、「九番目の真祖は風谷翼の管理下に置かれ、他の真祖との能動的な接触を禁ずる」という条文が盛り込まれている、という話だった。他の真祖との接触がない限り、C3は風谷翼を敵対者だと設定しない。それならばある程度は安心だと、多くの職員が納得したという。

？そうしてC3の職員たちは、正式に協定が結ばれたという噂にみな安堵した。

？露木もまた、安堵した人間の内の一人だった。

？少なくともその協定に反しない限り、C3が積極的に彼女を攻撃することは無い。低い水準ではあるが、友人の安全が保証されているという事だったから。

？だから、彼もまた盲信していたのだ。その協定は形として確かに存在し、風谷を守っている物なのだ。

？「……と、そこまで考えて。」

「……………あ、」

？露木は、気付いた。

？最後に風谷と通信でやり取りをした時の会話が頭を過る。彼女はこう表現していたはずだ。「あの件については既に副支部長との話し合いで決着している」と。

（「……協定を結んだ、なんて、一言も…」）

？例えば、協定が結ばれたという「噂が広がっていた」時点で、疑うべきだった。デマゴークと、先程彼女は表現したが。確かにそれこそ昔から、彼女は常々言っていた。人の噂ほど影で操りやすいものはない、と。

？けれどこの状況において、露木が気にするべきはもつと深刻な部分だった。

（「…いや、それよりも、そんな事よりも…！」）

？今、風谷はオフレコと称してはいたものの「……自ら、逃げ道を閉ざした。」

？「協定文書など存在しない」ことを知ってしまった露木が、協定文

書を理由に風谷の擁護をする事は出来ない。彼女の告白は、露木の講じていた策を根底から破綻させたのだ。

? 何より。

? そう、何より。

? 他人の思考を読み解く術に長けた彼女には、分かっていた筈だ。露木がC3の理念や利益に関係なく、ただ友人を守りたいという思いで手を伸ばしたのだという事を。

? 分かった上でその手を、明確に振り払われた。

「……どうして、ですか」

? もう、露木には問い掛ける言葉しか、残されてはいなかった。

? 風谷が積極的にC3に与しないのは、デメリットに対してメリットが少な過ぎるからだ。

? 風谷が露木の伸ばした手を拒むのは、今の今まで彼女がそういう生き方をしてきたからだ。

? 彼女の言動にはいつだってはつきりとした指針と理念があった。論理的に考えれば、理解できないことなんて一つも無かった。

? だから今、露木がどうしても分からないのは、風谷の事ではなくて……、

「……どうして俺は、あなたを助けることが出来ないんでしょうか……?」

? 相対する彼女の、黒水晶の瞳が数度瞬いた。

? まさか、そんな事を聞かれるとは思っていなかったと言うような、驚きを孕んで。

? やがて風谷の表情が、それまでのプライベートには似つかわしくないものから、険の抜けたものになった。他人から見れば極々些細な変化だったが、露木からすれば仮面一枚を外したように歴然とした違いだった。彼にとっては、こちらの方がずっと、見慣れた表情だったのだから。

? 静かで、大人びていて、けれど目の奥の感情を隠す事はしない、彼女なりの自然体のままで。風谷は露木の問い掛けに答えた。

「……『生きている世界が違う』からだよ」

？一本の、境界線を引くように。

？否、元からそこに線があつたのだと、改めて教えるように。

「君と私は、育つた環境が違い、出会つた人が違い、選んだ道が違う。そしてそもそも生まれ落ちてきた世界すら、同じと言うには違いすぎる。だから露木、無理をするな」

？たしな窘めるように、さと諭すように穏やかに。

？いつの間にか彼女は柔らかく笑つていた。『あの時』と同じ、何かを諦めたような目をして。

「君は、私と同じところに来る必要は無い。私を庇う義務も無い。生まれてきた世界が違うなんていうのは、君のせいじゃないんだから」
？皮肉でも嫌味でもまして茶化しているのでもない。激情を乗せた吐露ではなくとも、彼女は今確かに、剥き出しの心を露木へ語つていた。友人からの問い掛けに、どこまでも真摯に答えてくれようとしていた。

「誰も悪くないんだよ。過去に、君が正しいと思つたことをして、私が勝手に傷付いたことも。私が正しいと思つた道を選んで、君を傷付けてしまったことも。今、君が私を救えないことも、私が君を救えないことも。誰のせいでもないんだ」

？その回答に一切の救いが、なかったとしても。

「だから……君はどうか、そのままそちら側に居てくれ。私は、私の大事な学友を、私の生きてきた世界になんて引き込みたくない」

？それは、突き放すような乱暴さではなくて。

？反対側の道を指さして、そつと背中を押すような。振り払うことさえ出来ないような、優しさだった。

？その優しさを受け入れることも、拒むことも出来ずに、露木はただ風谷を見つめ続けるしかなかった。いつも、舌戦で負けるのは露木の方だったけれど、こんな時すら言葉は出てこなかった。

？やがて風谷は、沈黙する露木に用は済んだと判断したのか、背を向けて去つて行つた。

？夕闇がすぐそこまで迫つていることを、焼き付けるような夕陽が知らせていた。それを視界の端で知覚しながらも、露木は立ち止まつた

まま、友人の言葉に思いをめぐらせる。

「……………」

？生まれた世界が違う。そんなことは、双子や三つ子でもない限り当たり前前の事だ。

？けれど。

？祝福され温かな愛情に満たされた世界に生まれた人間と、残酷なだけの冷たい世界に落ちてきた人間では、同じ世界に生きていると言えるのだろうか。いわんや、手を取り共に同じ道を歩く、なんて。

（…それでも、俺は友人として、あなたの隣を歩いていただけなのに）

？確かに、最初に生きる世界が違うのだという現実を突き付けてしまったのは、露木の方だった。

？高校に上がる前の、ある出来事。

？露木が悪い事をした訳ではない。勿論、風谷の方も。しかし、二人が何かをした訳ではないのにあれ程までに歴然と、分け隔てられてしまった。風谷の見ていた世界と、露木の見えていた世界が、全く異なる

“当たり前”の上に成り立っていたのだと。それこそが、生きている世界が違うという事の証左だった。

？その時彼女が見せた、酷く傷付いたような――泣きそうな表情が、今でも目に焼き付いている。

？その一件以降も二人の友人関係は続いたが、まるで境界線が引かれたように、肩を並べて歩いているという感覚は薄れていった。

？…あの時、どうして境界線を超えてでも、彼女に手を伸ばせなかったのか。

？後悔するほどに彼女との距離は開いていく。まるで、今更手を伸ばしたところで手遅れなのだと言われているかのようだった。

？過去、彼女が歩んでいた『道』と確かに交わった、一つの交差点。

？それは既に、振り返ってもみても霞んでしまうくらい、遠いものになっってしまった。

？露木を置いて歩き出して、路地の角を曲がったところで、風谷は独り言のように呟いた。

「……隠してくれ、有紗」

？その瞬間、世界が切り離された。

？風谷が立つのは変わらず裏路地。けれど、空には赤い月が浮かぶ。不思議な世界”。

？種明かしをすれば、風谷のスーツの内ポケットには手のひらサイズのぬいぐるみに変化した有紗がいる。真祖の得手を引き継いでいるのか、どこぞのマジシャン風な下位吸血鬼サブクラスと似た幻術芸当が出来るのだ。

？有紗の幻術が生み出す世界は、元の現実世界と紙一重だ。同じ風景、同じ建物、同じ道。しかしあくまで幻術によって作られた世界であるが故に、有紗が許可した人物以外は入って来れない。歩けば同じ分だけ現実世界でも移動するが、基本的には有紗が幻術を解かない限り現実世界に帰ることは出来ない。

？風谷はこうしてよく外出時に有紗を連れて、帰路についた時の尾行や吸血鬼の襲来を避けていた。 ”入り口” も ”出口” も誤魔化せるので、非常に重宝している。

？誰もいない道を歩きながら、彼女は先程の友人との会話について頭の中で振り返る。

(…私の心の奥底にあるのが、あんな幼稚な考えだなんて。呆れられてしまったかな?)

？本当は言うつもりはなかった言葉まで全て明かしてしまった。彼は昔から、彼女に本心を吐き出させるのが何故か上手い。

(けどまさか、あの状況で出てくる疑問がアレだなんて)

？風谷にぶつきたい感情こころばなんて、それこそ飽きるほどあった筈なのに。

？どうして勧誘を拒むのかとか。

？何故C3と取引はするくせにこの局面で味方にはつかないのかとか。

？そもそも九番目の真祖と他の真祖との接触を未然に防ぐことは出

来なかったのかとか。

？何で五年前に何も言わずに一人で脱走計画を実行したのかとか。

？それなのに、露木の口から発せられた問いは風谷の予想していたどれにも当てはまらなかった。だから、答えを用意していなかったのだ。

？おかげで隠していた筈の本音をぼろぼろと零してしまった。

「昔は私ばかりが大人ぶっていたのに。変わるものだね、人は。ねえ有紗」

？ポケットの中の少女は何も語らない。ここは既に彼女の世界なのだから、手品よろしく飛び出してきたって可笑しくはないのだが。

？反応がないことに若干不穏な気配を感じたが、また後でも構わない話だと風谷は思考を切り替える。

（それにしても協定文書の話で、嫌なことまで思い出したな）

？五年前、風谷が九番目の真祖を連れてC3から脱走した時。C3との協定を結んだように見せ掛ける事を提案してきたのは、塔間泰士だった。

？まだ情報屋としての地位を確立してはいなかったあの頃の風谷には、一番重要なこと——冷優を救い出すということだけしか達成する力が無かった。当時の風谷には、多くを抱えながらも目標を果たせるほどの余裕など、なかった。

？だから塔間の持ち掛けてきた話に乗った。

？結果、安全地帯であったはずの中立機関を敵に回し、友人を置き去りにした。策略において何枚も上手だったあの男にさせられている事を知りながらも、それでも九番目の真祖たる少女を守りきるために。

？後悔はしていない。…だが今となってみれば、協定の件だけではなく、風谷が九番目の真祖の存在を知った”ところから、あの男によって仕組みられていたのではないのかと、風谷は考えている。

（そもそも前提から違和感があったからな。冷優あの子の廃棄予定の話が、どうして噂になってC3内部に流れていた??しかも、実際の廃棄日までは一週間も空白があった。まるであの子を助け出すための準備期

間みたいに)

？思い返してみれば不自然な点など幾らでも見付かった。彼女はそれを全て幸運で片付けるような楽観的な思考回路は持ち合わせていない。

？露木には話さなかったが、彼女が塔間泰士と話をつけた――その話し合いの内容も、第三者が聞けば明らかに不自然なものだった。？あの時の「話し合い」において、焦点を当てられていたのは九番目の真祖の処遇について、ではない。

？『風谷巽』が、塔間泰士の許容範囲以上にはC3と関わりを持たないこと。本来なら有り得ない話だが、それが塔間が最も重きを置いた交渉条件だった。

？そこから分かる事は一つ。塔間泰士の狙いは、九番目の真祖ではなかったのだということ。

？即ち、九番目の真祖を利用して「風谷巽をC3から追いやること」こそが、彼の真の目的だったのだろうと、風谷は推測している。

？そして、当時の風谷が彼にとって邪魔者と認識された理由。これについては更に憶測を重ねることになるが、恐らくは「風谷が狼谷吊戯と交流を持っていたから」ではないかと考えられる。

？風谷はとある理由から、狼谷吊戯に恩を感じている。

？昔から彼が塔間泰士にこき使われていたのは知っていたが、もしそれが一定ラインを超えたのなら――風谷は迷わず狼谷吊戯を助けようと行動しただろう。それこそ、冷優を救い出した時と同じくらいの潔さでもって。

(自分で言うのもなんだが、あの頃の私は未知数だったからな。家柄から能力を辿ることも出来ず、どこで学んだのかも分からない技術を使つて、興味の向くまま行動していたから)

？友人からはマイペースの一言で片付けられてしまっていたが、塔間泰士にとっては予測不能な危険因子だったのだろう。

？だから仕向けた。九番目の真祖をダシに、風谷巽が自らC3から出て行くように。

(私の考えが正しければ――塔間泰士は狼谷吊戯を使つて何かを

しようとしている。それも、あの人が壊れかねない「何か」を)
? 見過ごしてなどやるものか、と。燻^{くすぶ}る思いを胸に。赤い月に照ら
された、裏側の世界を風谷は行く。友人には踏み込ませたくない、
現実^{おもて}とは紙一重の世界を。
? 一寸先が暗闇であろうと、未開拓の荒地であろうとも。
? たとえ、かけがえのない学友と肩を並べた交差点が、進む程に離れ
ていってしまうとしても。

30. 綻びを抱いて

？高校一年生の、一学期が終わった。

？あつという間のようで長かった、とは百合音の談。そう感じるのは本人が吸血鬼絡みで色々巻き込まれたせいだろう。具体的に言うと誘拐事件とか。

？これから先も何が起こるか分からないが、そんな事より彼女には心待ちにしていた一大イベントがあった。地域ボランティアを募ったお祭りである。

？勿論参加するのはボランティアとして、だ。彼女の持ち場はお祭りの運営本部。制服の上からボランティアスタッフ用の法被を羽織り、傍から見れば非常に活き活きとした様子で訪れる人々の対応をこなしていく。

？体を動かしていると時間は飛ぶように過ぎる。祭りも既に本格始動し、屋台の賑わいで人が溢れ始めていた。

？それまで忙しく働いていた百合音もお祭りが軌道に乗っているのを確認し、一旦休憩がてら本部を離れた。勿論単なる休憩ではなく軽いパトロールのようなつもりで。

「……あつ、百合音！」

？遠くから聞きなれたソプラノが響く。ぱつとそちらを向けば、有紗と冷優の姿が見えた。水色の浴衣に白と桃色の帯を締めた有紗と、濃紺の浴衣に深い赤色の帯を締めた冷優。着付けと着物の選定は恐らく冷優だろう。有紗の方は片手に水風船も付けていて、すっかりお祭りを満喫している様子だった。

？駆け寄ってきた有紗は、手首に提げていた水風船を掲げて無邪気に語る。

「これね、さつきあつちの屋台で冷優が取ってくれたの！」

「良かったわね。うん、その浴衣もすごく似合ってる」

「えへへ。百合音も今度、またお祭りがあつたら一緒に浴衣着て回ろうね！」

？はしやぐ有紗に癒されて、とりあえず今は吸血鬼の戦争真っ只中な

事とか全力でどうでも良いと思う百合音であった。

?しかしそんな彼女の思いを知ってか知らずか、冷優がいつも通りの淡々とした口調で横からこんなことを言ってきた。

「風谷からの伝言よ。『花火の時間には気を付けて』、って」

「気を付けてって…?どういう意味よ」

「…:夏の夜といえは怪談でしょう??招かれざるものが紛れ込んでいても可笑しくはないと思うけど」

「招かれざる者ってそんな椿さんみたいな…:え、何アレ」

?何気なしに冷優の視線の先を追うと、道を区切る並木の、そのうち一本の木の根元あたりに銀色のアタツシユケースが放置されていた。

?風谷からの忠告、間もなく訪れる花火開始の時刻、不審なアタツシユケース…連想ゲームのようにそれらが頭の中で繋がっていき、嫌な予感に警戒しながらも百合音はアタツシユケースに近付いて耳を澄ませる。

?人混みの中ならまず聞こえなかっただろうが、その中から。

?聞き間違えでなければ、断続的な機械音が響いている、気がする。

「爆弾ね。時限式の」

?場違いにもさらっとした口調で、いつの間にか隣に立っていた冷優がそう断じた。

「爆弾?!?解除方法は!?!」

「さあ??液体窒素でも掛けてみればいいんじゃないかしら」

「そんなもの都合よく持つてるわけないでしょ!!」

「全く理不尽なことを言うわね。処理できないなら、まずは人的被害が出ないようにするのが最善ではないの?」

「人的被害…:そうよ、人がいない所なら最悪爆発しても大丈夫!」

幸い今の時間帯、人は花火が見える場所に集まっている。その逆方向へ行けば、被害は最小限に抑えられるはずだ。

即決でアタツシユケースの取っ手を掴み、百合音は川辺を目指して走り出した。

後ろからは「百合音…!?!」という有紗の悲鳴と「馬鹿ね。一度吹っ飛ばないと学ばないのかしら」と呆れたような冷優の声が聞こえ

ていたが、彼女はスルーした。

「…うん、乗っ取れそうなのはこれだけかな。全く面倒な仕掛けを組んでくれたものだ」

？一番端の屋台の陰に置かれていた銀色のアタッシュケースを開けて、中身の装置を弄っていた白衣姿の彼女は、そう呟いてケースを閉じた。

「契約上の仕事じゃないけど、まあ、これくらいはしておかないとね。あの狐に舐められるのは気に食わないし」

？即席で外付けした起爆ボタンを片手に、彼女はゆったりとした足取りでその場から離れる。

（傲慢の^{サブク}下位吸血鬼たちに流した噂のおかげで、傲慢の主従も誘導してきた。後は「見本」を見せてやれば対処するだろう。それと百合音たちも、忠告はしたから上手くやるだろうし）

？現場から十分に距離を取って、彼女は誰へともなく語り紡ぐ。

「忘れるなよ??情報戦は風谷^私巽の生業だということを。お前が誰の縄張りで戦争を仕掛けているのかということ」

？そして。

？細い指先が、カチリとボタンを押し込んだ。

？同時刻。

？ある建物の屋上からお祭り会場を見下ろしていた椿はその爆発を……予定より少し早く、見計らったように誰も通っていない僅かな間に起爆したそれを見て、ぽつりと呟いた。

「…せっかくの「先生」の葬儀の開演なのに、水をさされちゃった。あは、面白くないなあ」

？所変わって、いや地理的にはあまり変わっていないが、お祭り会場

のとある場所だ。

？狐の面を適当に頭に掛けた緑髪の少年、綿貫桜哉がゆるゆると歩を進めていた。人の密集している屋台通りは避けて、祭りを傍観している。

？今夜行われる椿の作戦には特に役割としては参加していない彼だが、久々の祭りの雰囲気誘われてふらりと足を運んだ。こんなに物騒でなければ、真昼たちと来たかっと思いなながら。

？その時、遠くから微かに聞こえた爆発の音に、桜哉は眉をひそめる。
(……??爆破の時間、早まったのか……?)

？そして時を同じくして、ダツツツ!!?つと。

？視界の端……いやわりと桜哉の真横辺りを、銀色の何かを抱えた黒髪の少女が走り抜けて行くのが見えた。

「……………は、？」

？お祭りのボランティアスタッフが着用する明るい色の法被を翻す後ろ姿が、桜哉の視線の先で遠ざかって行く。

「……………!!?」

？たつぷり遅れて、桜哉は状況を理解した。

？シヤムロツクの仕掛けた爆弾の存在に気付いた鈴白百合音あのお人好しが、群衆への被害を避ける為であろう事かその爆発物を抱えて人気のない場所へ運ぼうとしているのだ、と。

？咄嗟に見上げた先には背の高い柱時計があった。短針は“7”の間近、そして長針は今にも真上へ到達しそうになっている。

(クソツ!!?起爆までもう一分切つて……!)

？今夜行われる椿の“作戦”。

C3 関連施設の一斉爆破。

そのリミットは、きっかり午後七時。祭り好きな椿が酔狂にも花火の時間に合わせたのだ。椿もまさか——彼女がこのお祭りにボランティアとして参加しているとは思っていなかっただろう。

？先程数分早く聞こえた爆発音も気にはなったが、桜哉は目の前で目撃してしまった方に注力する事にした。

椿たちに連絡している暇はない。今すぐ彼女に追い付いてアタツ

シユケースを奪い取るしかない。

そう判断して彼は駆け出した。

?人混みが多過ぎて一瞬見失ったが、目的地には予想がつく。今の時間帯、土手の茂みで花火を遮られる川辺には人が少ない。

?一旦脇道に逸れて、桜哉は並木の一つに飛び乗った。高くなった視界からは直ぐに法被姿の彼女が見付かった。予想通り人通りの少ない川辺の方へ一直線に走っている。

?川岸に辿り着いた彼女は、走り込んだ勢いのまま身を捻り、アタツシユケースを水面へ投げ捨てた。思いきり放り投げられたそれは一度だけ石のように水を切って、次の着水でどぼんと沈んでいった。

?そこまでは、良かった。

?直後、視界に映った光景に桜哉は考えるより先に大きく木を揺らし、飛び出していた。全力疾走した直後にフルスイングしたせい、彼女がバランスを崩して川へ落ちそうになっていたのだ。

?スローモーシヨンのように傾いていく百合音の体を、桜哉は寸前で腕を掴み引き戻す。

「っ!?!」

「走れ馬鹿!!」

?桜哉の姿を見て驚いて固まっている彼女の腕を引き、川から出来るだけ離れた。

?そして屋台と川とを仕切る土手の茂みに足が掛かった頃、特大の花火の音をBGMにして、二人の背後で派手な水柱が上がった。

?夜風に白い羽織を靡かせながら、椿は予定時刻の七時を過ぎたことを携帯で確認した。

(……まさか今回の僕の作戦を逆に利用して、挑発してくるなんて。いや、あるいは存在の誇示かな?まあどっちでもいいけど。ああ面白くない。これじゃどっちが宣戦布告を受けたのか分からないじゃないか)

？赤い瞳を眇^{すが}めて会場を見遣^{みや}る中、本命の花火と合わせた爆弾は、予定より幾つか欠けた状態で祭りを盛り上げていた。あのお祭り会場に用意した爆弾は五つ。爆発は目視で三つ。会場の中枢区域に仕掛けた筈の二つは、爆発していない。最初の予定外の爆発があつて人が流れたおかげで、予定通り爆発した二つも大した被害は与えられていない様子だった。

？事情を知らない者から見れば、椿側からの奇襲が成功したように見える――それでも、内情を知っている側からすれば確実に横槍を入れられたと分かる、水面下での介入の仕方。そんなやり方が出来る人物は限られている。

(…まあ、いいや。まだまだ本祭は明かりが灯ったばかりだし、最初から全部綺麗に墮ちてしまつたらそれこそ面白くないからね。――歓迎するよ、情報屋)

？生憎と直接会つたことはないの顔は浮かばなかったが、作戦に大胆にも茶々を入れてくれた“人間”を想つて、椿の口元に歪な笑みが刻まれた。

「…さあさあ世界、あーそびーましょー？」

？戯れにそう口遊^{くちずさ}みながら、もう一度お祭り会場に視線を落として。

「！」

？見付けたその姿に、椿は歪んだ笑みを引つ込めた。

？そして少し迷つた後で彼は、涼やかな音を鳴らしてコンクリートを蹴り、屋上から姿を消した。

？パラパラと降り掛かる僅かな水飛沫をやり過^ごして、水柱によって出来た波が岸边で弾けて引いていくのを見て、桜哉は漸く掴んでいた彼女の腕を離した。

「……………桜哉、くん……………」

「……………」

？流石に呆然としている様子の百合音に、桜哉は今まで無意識の内に

溜め込んでいた感情が沸点を越えるのを感じた。

「……お前っ、爆弾抱えて走るとか何考えてんだよバカ!!」

「えっと、その……すぐ近くが川だったから、走れば何とかかなるかなと思っ」

「そう言っただけで彼女は、誤魔化すようにへらりと笑った。死ぬほど下手な作り笑いだった。

「そもそも、近くない。人気のないと言える場所まではそれなりに距離があった筈だ。いつ爆発するか分からない代物を持ち運ぶにはあまりにも遠い距離が。というかまず普通の神経をしている人間なら爆発物に近付くことすらしない。絶対にしない。」

「……ああだがそう言えば桜哉の親友もまた常人なら絶対やらない屋上からのダイブを勢いだけで実行した人間だった。こんな所ばかり共通しないで欲しいのだが、と。先程の怒りを通り越して桜哉はだんだん遠い目になる。」

「現実逃避が止まらない彼を強制的に現実に戻したのは、隣の少女の一言だった。」

「……ねえ、どうして、助けてくれたの?」

「……………」

「ひやりと、頭の芯を冷やされたような感覚があった。」

「『どうして』……どうして?」

「? そうだ、必要なかった事だ。彼女は敵で、だから助ける必要などなかったのに。それなのに助けてしまった。」

「? 自分で自分の行動が理解できない。なぜなら助ける必要が無いという以前に、桜哉は彼女が嫌いであるはずだからだ。」

「? あの時、ホテルで椿から「鈴白百合音は主人^{イヴ}だった」と聞かされた時、桜哉は確かに椿にこう言った。やっぱり嘘つきは嫌いだ、と。それは決して嘘ではなかった筈なのに。」

「? それなのに、どうして。」

「? ぐちゃぐちゃになった思考から目を逸らすように、桜哉は質問に質問で返した。」

「じゃあ、お前はなんで真昼に、オレのこと言わなかったんだよ」

?今度は彼女の方が言葉に詰まる番だった。

?桜哉が自ら真昼に正体を明かすよりも前に、彼女は真昼と接触していた。椿が彼女をホテルに連れて来ていた頃、桜哉は彼女に真昼の事を話した覚えがある。だから、普通に考えれば彼女は、桜哉が椿側の吸血鬼だと真昼に忠告するべきだったのだ。確実に、機会はあつた筈なのだから。

「お前だって気付いてただろ、オレが嘘つきだって。真昼を騙して
るって」

「……………」

「なのに、なんで」

「…………えっと、友達??だから?」

「……………」

?ああ、なるほど、と。

?きっと彼女自身も訳が分からないまま絞り出したような疑問符丸出しの回答だったが、論理だけ整えるなら正答と言えるだろう。

?そりや確かに、友達が爆発物抱えて走ってそのまま川に落ちようとしていたら反射的に手を伸ばすだろうし、友達が隠そうとしている秘密なら気付いたとしてもそれを他人に暴露しようとは思わないだろう。それは、確かに、理屈だけならとても納得のいく答えだ。

?納得できないのは、彼女と桜哉がまだ互いを「友達」だと認識していたという事実の方で。

「…………お前、オレのこと嫌いだろ」

「…………それは、桜哉くんこそ」

?互いに否定はしなかった。じとつとした視線でお互いに見詰め合って、あまりの不毛さに溜め息が出た。似たもの同士もここまで来ると気が狂いそうだった。

?桜哉も百合音も嘘つきで、だから嘘つきが嫌いだ。それは互いの認識として間違っていないだろう。それなのにまだ友達だなんだと言うというのは、あまりにも矛盾している。矛盾している、のに。

?それでも彼女を突き放せないのは、彼女が桜哉を突き放さないのは、どうしてだろう。

「……………」

「それにしても、派手にやったわね、椿さん」

「空気を無理やり変えるためなのか、百合音がぼつりとそんな事を言った。」

「気付いてたのかよ、椿さんの仕業って」

「風谷からの忠告もあつたし、何より今こんなこと仕組むの椿さんくらいじゃない？」

「……………」

「？軽い口調で当たり前のように言う彼女に桜哉は奥歯を噛んだ。」

「？知っているくせに、そこまできちんと察しているくせに。どうして彼女は今日の前にいる、椿側につく桜哉に対して何も言わないのか。」

「？真昼でさえ一時は傷付いた顔を見せたのに、彼女はあまりにも自然な事のようにその事実を受け入れて、あまつさえ前提として語っている。」

「…………お前さ、なんでそんな、平然としてるんだよ」

「え、何が？」

「敵だぞ、オレ。さっきの爆弾仕掛けた側の奴だつて分かってんのかよ。お前のごと助けたつて言つたつて、それでもオレは」

「？結局、何がどうなつたとしても。」

「オレは…………椿さんを裏切れないのに」

「？零した言葉に、彼女が黒塗りの瞳を見開いた。」

「？そして次の瞬間すつと真顔になった。」

「いや、無理でしょ。それは無理。絶対無理。断言出来る。世界がひっくり返つたとしてもそれだけは絶対に無理よ」

「？どれだけ無理と連呼するんだと思つたが、真顔のまま言い募る彼女に閉口した。誤魔化しでも演技でも嘘でもなく、本気でそう言っているのだと分かつたから。」

「？そして同時に、欠けていたピースを見付けたように、何故彼女のことを拒絶できないのか、桜哉は理解した。」

「…………裏切れないんだな、コイツも。何があつても、全部敵に回しても、誰かを傷付けることになつても…………手を伸べてくれたただ一人」

のことを、裏切れない)

?それは桜哉にとつての椿、そして百合音にとつてはあの風谷という人間のこと。過去、同じように桜哉を／百合音を救ってくれたひとのことを。

?……真昼は、今の桜哉はもう一人じゃないと言ってくれた。けれど、姉を亡くして全て信じられなくなって、最後に自分の命すら手放した桜哉にとつては——『迎えに来たよ』と差し伸べられたあの手が、唯一であり全てだったのだ。その事実だけは、今も変わらない。?彼女だつてそうだろう。愛される為に周囲全てを欺いていた彼女には、桜哉にとつての姉に値する存在すらいなかったはずだ。彼女もまた最後には、愛を求めた対象も、自分自身も自らの手で壊した。そうして自分を含めて全部捨ててしまった少女のことを、拾い上げてくれたのが風谷巽なのだ。

?認めよう。はつきり言つて、綿貫桜哉と鈴白百合音の過去には幾つもの相違点がある。嘘を吐いた理由も、直面させられた立場も違う。?けれど、大きく共通する点が二つある。

?一つは、決して自ら望んだわけではなく、嘘そうしなを吐なかなければ生きられなかったということ。

?そして、閉じ込められたその、嘘に塗れた世界から、たった一人の手が掬い上げてくれたということ。

?その二つの事実は二人の少年少女の根幹に深く深く刻み付けられている。

(だから——ああ、そうか)

?だから、それが実感を伴った事実として理解出来てしまうから、切り捨てられない。

?悔しくて悲しくてやるせなくて許せないけど、それでも、嘘それに生かされてここまで生きてきたから。それが鈴白百合音で、それが綿貫桜哉だから。

?醜い綻びを抱え込んで、嘘を重ね続けて、それらを必死に隠して取り繕つて、息をしている。そんな互いを、否定しきれないから。

?嘘つきは嫌いだ。嘘をつかれたから嫌いだ。自分と似ているから

もつと嫌いだ。だけど、似ているからどうしようもなく理解出来てしまふ。そして理解してくれると分かっているから拒めない。

「……ねえ、だからさ、桜哉くん。もうどうせだから、あの『同盟』を続けるってことにしない??私、桜哉くんが椿さんを裏切らない為なら、協力するから」

?学校の帰り道にノリで結んだそれを、百合音が控えめに持ち出してきた。彼女の方だつて冗談のようなものとして話していたに過ぎないだろうに。それでも、今更素直に友達だと言えない自分達にとつては、都合のいい呼び名だろうとは思つた。

?嘘が嫌いで、互いを嫌悪するのも変わりないけれど、自分を救つてくれたひとに対する想いに関しては、これ以上ないほどの理解者だから。嘘つきな事も手を伸べてくれたひとを裏切れない事も、隠さずとも何も言わずに受け入れてくれる相手だから。

?桜哉は椿を裏切れない、百合音は風谷を裏切れない。その前提を崩させない為なら、確かに手を組める。

「……なら、名前は考え直し必須だな」

「そう??そのままでも良いんじゃないかしら。隠れ蓑にするには丁度いいし」

「本気かよ。まあ、別に誰かに名乗るわけじゃねーからいいけど」

「え、私は聞かれたら名乗るけど。『桜哉くん』と『脱・振り回され同盟』組んでる盟友です””って」

「やめとけ。それたぶん椿さんにすら引かれるぞ」

「私も言つてから思つたわ。風谷でも引くわね」

「あの二人に引かれるとか終わりだろ」

「終わりよね。やめておくわ」

?最終的に真顔になつて言う百合音に、桜哉は思わず吹き出した。

?ああ、本当に。

?嫌になるくらい似ている。

?そうして、どこまでも偽るのが得意な少年少女は、偽りの無い笑顔で笑い合つた。

31. 解（わか）らないだけ

夜の街。祭りの喧噪の跡を色濃く見せる灯りたちを見下ろしながら、白い羽織を夜風に靡かせる彼——椿は、一際高いオフィスビルの屋上に佇んでいた。

人の手で開拓された『街』というものは、地上ほど明るく、空に近付くにつれて暗くなる。皮肉なものだ、空には目先の光など到底及ばない程の光源がいつもあるというのに。今は生憎と雲に隠されてしまっている、主役の座を奪われたその光を見上げて、椿は赤い瞳を細めた。

風が鳴る。ほんの僅かに。

次いで、とん、と軽い音。

ゆつくりと振り向いた椿の視線の先には、夜空とは対象的な白いワンプイースを纏った少女の姿。

「——やあ、来てくれたんだね。冷優」

「期待はなさらないで下さいと、申し上げたはずですが」

「それでも君は来てくれた。待っていた甲斐があったよ」

そのやり取りは、傍から見ればごくごく他愛ない挨拶に見えただろう。しかし表面上はどれほど穏やかであっても、内実として互いが互いの腹の内を探り合っている。声の調子、視線、仕草、間の取り方、その他諸々。何もかも取り払ってただ話をするには、この二人の間にある事情は複雑すぎた。そして、彼らはそれを互いに理解しているからこそ、探り合いに關しては何も言わない。暗黙の了解と呼ばれるものがそこにあった。

さて、何故九番目の真祖である彼女が椿の元へ訪れたのか。それは少しだけ時を遡る。

あのお祭り会場の外側で冷優の姿を見付けた椿は、当然のごとく彼女に声を掛けた。そして、下位吸血鬼であろう茶の髪の少女を連れられた彼女へこう言った。『後で駅前のビルの屋上へおいで。話は二人きりの方がいいでしょ?』と。彼の意図を正しく読み取った聡明な少女は、踵を返して下位吸血鬼と共に家へ帰って行った。そして律儀に

も、椿の待つこのビルの屋上へ来たのだ。

彼女が降り立ったのは普通に話をするには少しばかり遠い位置取りだったが、幸いにして騒ぎの後の静かな夜だ。先の挨拶で、邪魔されることなく声が届くことは確認できていた。

呼び出した側の椿が何かを言う前に、口火を切ったのは冷優の方だった。

「それで、どのようなご用向きでしょうか」

相変わらず固い口調。しかし形良い唇から流れるように紡がれる敬語は、使い慣れているといった風であまりにも自然体だった。時代錯誤を気にしないのなら、それこそ「深窓のご令嬢」という表現が似合うような印象を受ける。

？全てを見通しているかのような澄んだ青と視線が合って、椿はほとんど無意識に姿勢を正した。それは、ある種の緊張から来た仕草だったのかもしれない。

「君に、伝えておきたいことがあったんだ」

あれから。

公園で初めて顔を合わせて、電話での会話を経て、椿の方も多少は心境の整理を付けていた。何でしょうか、と事務的な言葉で続きを促す少女へ向けて、椿は悩んで見付けた彼なりの落しどころを口にする。

「僕は、君のことを大事な唯一の“妹”だと思ってる。たとえば兄さんたち全てが否定しても、僕だけは君の兄でいたいと思ってる。それは、君が兄さんたちの側についていたとしても、変わらない」

何故ならば、彼女は、彼女だけは初めから椿のことを兄だと呼んでくれたから。

彼女に対して家族としての感情を向けていいのかどうかすらも分からず悩んだ時もあったが、結局椿の心に残ったのはその思いだった。たとえ冷優の方が同じだけの感情を返してくれなくとも構わない。ただ、ひとりぼっちだと思っているのは寂しいから、ひとりじゃないという事だけは知っておいて欲しかったのだ。

椿の言葉を受けて、冷優は――微かに首を傾げるような仕草を

した。そして、あまり間を置かず可憐な唇が動く。

「それは……お兄様は、まだ、私をそちら側に引き入れたいとお考えだということですか？」

「……………」

その問い掛けは、どんな意味を含んでいたのだろうか。

どこか、意図がずれているような、噛み合わないような違和感があった。

一体どこで彼女の真意を掴み損ねているのかと、今までの少ない会話を頭の中で思い返しつつも、椿はそれらを表に出さずに答えた。

「君が望んでくれるなら、もちろん。家族にはできるだけそばに居てほしいからね」

本心だった。既に二度断られてはいるが、もしも彼女が望むのなら椿は受け入れるつもりでいた。

椿は存在しない筈の8番目。兄妹たちからの誰からも知られなかった、招かれざる者。

だから、確かに、否定しようもないほど嬉しかったのだ。椿のことを知っていて、椿を兄と呼んでくれた彼女の存在が。そんな「妹」が望んでくれるというのなら、是非もない。

相對する少女は、椿の言葉に何かを思案している様子だった。磨き抜かれた宝石のような青が、ふと虚空を見つめる。

そして視線が椿へと戻されて、白い肌に映える鮮やかな色味の唇が動く。

「理解できません、お兄様」

一言。

たったの一言だったが、椿の心を軋ませるには充分なものだった。

思考が空白に染まる。

「え……？」

「憂鬱のお兄様が兄で、私が妹である。先生が定めたそれを『家族』と呼称することについては理解できます。けれど、どうしてお兄様が私をそばに置くことを望むのが、分かりかねます」

まるで、教師に質問をする勤勉な学生のようにだった。

あまりにも淡々としていて、ノートにメモした内容をそのまま読み上げているような無機質さ。場違いにもそんな連想をするほどの。

さつき感じた小さなずれが、一気に膨らんでいく。それはいつそ、何かに吞まれそうになっているような不気味さだった。

「それは、妹だからだよ。大事な、兄妹だから」

「大事な？ その修飾語は適切とは思えません。今までのお兄様との会話を省みても、私がお兄様に何かしら、一定以上の価値を証明したという事実は確認できておりません。お兄様は何か他に、私に価値を見出しておられるのですか？」

「価値……それ、もしかして利用価値ってこと？ 違うよ、僕は」

「何故ですか？ 味方にと勧誘するのであれば、利用価値があることは前提です。憚ることではございません。お兄様が何故それを秘匿なさるのか、理解しかねます」

片端から椿の言葉が否定されていく。

いや違う。否定されているのは、言葉ではなく感情だ。冷優のことを大切な妹だと思っている椿の気持ちそのものを、目の前の少女は認めしてくれない。

足元が揺れているような感覚に襲われて、椿は自身が狼狽うろたえていることを知った。明らかかな失態だった。彼の様子を一瞬も見逃さず冷たい青色が「観察」しているというのに。

畳みかけるように少女が鋭利な言の葉を紡ぐ。

「価値がなければ邪魔なだけです。不要なものは切り捨てるべきです。賢さかしいお兄様ならば、それが理解できない筈がありません」

「違う……僕は君を利用したいわけじゃない。ただ、家族としてそばにいて欲しいだけなんだ」

その冷たい瞳に兄として映してもらいたくて、椿は一步距離を詰めた。

どうか伝わってほしい。最初の最初から椿のことを兄だと認めてくれていた彼女に、椿もまた、彼女を大事な妹だと思っているのだと。だからこそ一緒にいて欲しいと思うのだと。

しかし。

「そばに? ……それは、例えば、人形としてですか?」

「……」

文字通りに絶句した椿を余所よそに、少女は酷く納得したように一人頷いた。

「人形、道具、ただの物として、親しみを感じられる物をただ手元に置いておきたい。……ああ、それなら理解できます。能動的な価値がなくとも、そういった受動的な価値を見出されているのであれば、今までの合理性を欠いた発言や行動も許容範囲内で、」

「違うよ!!」

これ以上聞いていられない。それ以上言わせてはならない。その一心で椿は声を張り上げた。

伝わらない。いや、これは違う。伝わっている、でも理解してくれない。言葉は正しく伝わっているはずなのに、そこに込めた感情を彼女は受け取ってくれない。

焦りで、乾いた喉がひりつく感覚がした。上手く回らない思考回路で、どうしても自分が焦っているのかすらも分からないまま、焦燥に追い立てられるままに椿は彼女の元へと足を進めた。冷優は後退することもなく、ただ椿を見ていた。

もはや隠せもしくなつた狼狽は、彼女にも違たがわず読み取られているだろう。それでも相対する彼女は少しも顔色を変えず、透徹した瞳のまま椿を見返してくる。そこには感情の色が無かった。ガラスケースの向こう側にいて然しかるべきような、ただ作り物めいた美しい容貌。それに、先ほど彼女自身が口にした「人形」という言葉を想起して、椿は息を呑んだ。ここから先へ踏み込むのは危険だと頭の中で警鐘けいしょうが鳴る。

下書きをしてから丁寧に本線を引いていったような、美しい曲線で象られた唇が、また動く。

「……何かに利用するわけでも、愛玩用でも、観賞用でもない、と。それでは何の為に、でしょうか」

「それは……僕が、僕にとって、君は妹だから。唯一の、妹だから」

「希少価値の問題という事ででしょうか」

「違う…違うよ。そんなんじゃない」

「それでは…：…そうですね、残る『理由』の中で、考えうる中で一番可能性が高いものを挙げるのなら、私が……」

少女の言葉は、静かな屋上に突然響いた拍手の音に掻き消されて止まった。

「はい、そこまで」

聞き慣れた、別の少女の声が、場の空気を攫うように静けさの中を通り抜けていく。

瞬間的に頭が冷えて、椿はそちらを振り向いた。いつの間にか屋上の縁に立っていたのは、九番目の彼女の主人……鈴木百合音だった。

彼女は無言でつかつかと歩み寄ると、やや強引な挙動で冷優を押しつけて二人の間に割って入った。それは無論、彼女の真祖を背に底い椿と相對する形で。

見上げてくる黒檀の瞳は、椿が一度も見た事のない色を宿していた。

「すみません椿さん、この子、まだそういうのは『勉強中』なんです」
告げられた言葉は、口調だけならあっさりとした印象を抱かせるものだった。その、勉強中、という言葉の意味を理解しようと思いを回した瞬間、見計らったように百合音が続ける。

「勉強中って意味が理解できないなら、もうこの子を勧誘するのはやめて下さい。椿さんの方が先に壊れますから」

それは今までに聞いたことがないような、突き放すような冷たい物言いだった。

(…：…ああ、これは)

これは、どう見ても。

彼女は今、怒っている。恐らく椿に対しても、冷優に対しても。

初めて目にする少女の怒りに、その『感情』の温度に、知らず椿は安堵していた。冷え切った指先に温かなものが触れた時のように。

その時、不意に百合音の背後の彼女が、主人の袖を引いた。言葉な

く、何、という表情で少しだけ百合音が振り向く。つられて椿も冷優を見て、赤い瞳を見開く。

それは、よくよく見なければ分からないような、ごく些細な変化だった。僅かに「……ほんの僅かに、焦ったような、動揺しているような表情で、彼女は己の主人に向かってこう尋ねた。

「百合音……私、どこか間違えていたの？」

「むしろ間違っていない部分が無いレベルよ馬鹿。ちよつと目を離れた隙に、なに真剣な顔で他人のメンタルブレイクしようとしているのよ」

憤り半分、呆れ半分、といった調子で、百合音はそう返事をした。ある程度の冷静さを取り戻した頭で椿は思う。やはり彼女は怒っている、と。それでも庇う相手を違えないあたりが、この主従を繋ぐ信頼関係を表していた。

気を取り直したように、軽く振り返っていた顔を戻して正面から椿を見据える少女。手に武器こそないものの、毅然とした面持ちには隙も迷いもない。

「帰ってください椿さん。私、これからこの子のこと叱らないといけないので」

「……まだ、話が」

「言いましたよね『壊れますよ』って。本気で話の続きがしたいですか？」

ジリ、と低い温度の視線が椿を射抜く。百合音の方も、引き下がる気は一切ない様子だった。

これは、分が悪い。

直感的に、椿はそう判断した。まだまだ付き合いは短い、彼女の為人は分かっていない。普段あれほど人が好く大抵のことは笑顔で対応する人間が、ここまで冷徹な態度を示しているのだ。食い下がった場合、どんな手段に出るか予測がつかない。百合音はどんな手段を使っても椿を追い返す気だろう。彼女は冷優に怒っているようだが、今は同時に冷優を庇ってもいるのだ。もはや昔のことのように思える公園での邂逅が椿の脳裏を過る。彼女は誰かを背に庇っている時が一番強いタイプだろう。自身を囿にしようが相手を脅そうが、何

をしても背後の存在を守り通す。そんな少女と対峙してまで食いが下がる理由が、今の椿には無かった。

無言で一步、二歩と後退り、三步目で高く下駄を鳴らして、椿はその場を後にした。

あとに残されたのは、夜の静けさと二人の少女だけ。

32. 月夜に語る星二つ

高く響いた下駄の音が、夜の街に消える頃。

完全に椿の気配が去ったことを確認して、ようやく百合音は詰めていた息を吐き出した。ただの威嚇で引いてくれて良かったと心から安堵する。あそこまで拗れた話を続けるつもりなら、何が何でも止めるしかなかった。冷優のためにも、椿のためにも。

次いでおもむろに彼女は後ろを振り向いて、直後分かりやすく顔を顰めた。

「……貴女ねえ、こんな時だけ猫にならないでよ」

「……………」

見下ろした先の白猫は、こちらも分かりやすくそっぽを向いていて、何の返事も無い。

百合音は深くため息をついて、仕方ないわね、と言いながらそっと白い猫を抱え上げた。猫は抵抗こそしないものの、顔を見られたくないというように腕の中で勝手に丸まった。長い尻尾だけがたらんと外に垂れている。

完全に白い毛玉と化している冷優を片腕で抱え直しつつ、百合音は武器を取り出して片手でそれに跨った。彼女を乗せた大鎌はふわりと浮上しビルの屋上から飛び立つと、そのまま人通りのない路地の方へ向かって徐々に下降していく。

「まったく、ホントにびっくりしたんだから。帰ったとたんにも有紗に泣きつかれたのよ?」

緩やかな落下を調整しながら百合音は腕の中の猫にそう語りかける。が、特に返事は期待していない。

散々な騒動になったお祭り会場から、百合音はボランティアスタッフとして後始末に走り回り、未成年者だからということと他の関係者よりは早く帰された。流石に疲れてやつとの思いで帰宅した彼女を待っていたのは、浴衣姿のまま暗い玄関に蹲る有紗だった。帰って来た百合音に反応して顔を上げた時点で既に半泣きだった彼女の話の聞くと、冷優と共にお祭りから帰ろうとしたところで椿が現れたらし

い。有紗によると、冷優と椿は僅かに言葉を交わして、直ぐに冷優が踵を返したのだそうだ。よく思い出してもらった二人の会話が以下の通り。

『君と話がしたい。後で駅前のビルの屋上へおいで』

『何う理由がございません』

『話は二人きりの方がいいでしょ？』

『……期待はなさらないで下さい』

この会話を（裏の意図込みで）意識すると次のようになる。

？まず、話がしたいからビルの屋上へ来て、と持ち掛けた椿の誘いを一度冷優は断った。しかし椿が「このままだと後ろの下位吸血鬼サブクラスも巻き込むことになるよ？」と暗に脅しをかけたのだ。椿が告げた「後で」の意味は、「今は見逃してあげるから、下位吸血鬼サブクラスを置いたら僕の所へ来てね」ということ。当然有紗を巻き込むことを良しとしなかった冷優は、一旦椿の告げた通りに見逃されて有紗と共に帰宅し、有紗を置いて椿の呼び出しに応じた。

少ない言葉の裏に隠されたやり取りを見抜けなかった有紗は、帰宅後に冷優が「椿のところに行く」と言った瞬間真っ青になったという。引き留める彼女に冷優はこう言ったそうだ。「分からないの？ 貴女が邪魔だったのよ」と。冷優からすればただの端的な事実なのだろうが、あまりにも言い方が酷すぎる。あと先のやり取りを理解できていない有紗に説明するには言葉が足りてなさすぎる。おまけに真祖として『ついてくるな』と命令を発していたそうなの。有紗が半泣きで百合音に縋り付いてきたのも仕方のない事だろう。

既にこの時点で百合音からすればお説教ものなのだが、さつきまでの椿との会話はそれを遥かに上回るレベルで酷かった。百合音が聞いていたのは途中からではあるものの、秒単位で椿のメンタルが削り取られていくのが目に見えるようだった。一体何の恨みがあって、と思うほどだが、救えないことに冷優に悪意は一切無い。

？そもそも今までの事を省みても、冷優は本気で椿を敵視しているわけではないと百合音は考えている。そして、もはや周りには信じてもらえないだろうが、冷優は敵視していない相手を傷付けて平気なほど

歪んだ性格はしていない。寧ろ椿のことを気に掛けていた素振りすらあるのだから、気付かないうちに彼のメンタルに甚大なダメージを与えていたと知れたなら、それは流石に彼女も凹む。実際逃げるように猫姿になるくらいだから、随分動揺していたのだと思う。最近はどういうやらかし方は少なかったから、余計にだろう。

幸運にも人の通っていない間に路地に降り立ち、百合音は武器を消した。都会の夜は明るいのだ、空を飛んだまま帰ることは出来ない。猫姿の冷優を抱えたまま夜の街を行く。選んだのは大通り。明るい歩道を猫を抱えて歩く彼女に、すれ違う人々は一瞬視線を向けては通り過ぎていく。

そんな彼女の前に姿を現したのは、通り過ぎようとした路地からひよこつと顔を出した城田真昼だった。

「えっ」

「あれ…鈴木さん？」

互いに目を見開いて動きを止める二人。お互いに腕に猫を抱えたままというところまでシンクロしていた。

一方で明らかに違うのは服装、というかその状態だった。真昼の方は事故にでも巻き込まれてきたのかと思う感じ端々が砂埃か何かで汚れているのが見て取れる。これは絶対に他と分けて洗濯しないといけないやつだ、と空気を読まない感想が百合音の頭を過る。

「どうしたの真昼くん、何かあった？ 服とか結構酷いことになってるけど…」

「ああ、いやちよつと色々あったってどうか…うわ、話すと長いな。でも大きいケガとかしてないし、なんとか」

「それならいいけど…その、色々の中身って聞いてもいい？」

「話すのは大丈夫だけど、立ち話もなんだしき。あっちの公園で話さない？」

真昼に促され、二人は近場の公園のベンチへ移動した。大通りから逸れて住宅街に近くなった場所にあるせいか、人気はない。吸血鬼だの何だのの話をするには適していた。

彼の話聞いてほぼ初めの時点で百合音は驚かされた。真昼もあ

のお祭り会場にいたという話だったからだ。そこで別の爆弾の爆発を阻止していたらしい。そこで傲慢の主従と邂逅したということ、その直後に帰宅したところでC3に拉致され、何とか脱出して武器で空を飛んでいたが途中で墜落してあの路地に落ちたのだという。

「それは…なんというか、ハチャメチャに大変だったわね」

とても数時間後のうちに起こったとは思えないポリウムだ。しかも話を聞いている限りクロを追っていたという三人組に百合音は心当たりがある。過去に風谷の無茶ぶりであるの三人を相手取った防衛戦をやらされたような気がする。失敗したし死にかけたしはつきり言つて二度とやりたくない。…：…なお、そんな事を言いつつも彼女はその内の一人とはちやつかりメル友になっていたりする。

閑話休題。

何はともあれお疲れ様、とねぎらいの言葉を掛ける百合音。そんな彼女に、話を終えた真昼は何か言いたげな顔をして、それから下を向いてしまった。どうしたの、と問いかけると、彼はぱつと顔を上げて、何か覚悟を決めたような表情でこう言った。

「あのさ、その、見間違えだったらほんと悪いんだけどさ…：…」

鈴白さん、さつきあっちのビルの屋上で、椿といなかった？」

思いがけない質問に百合音は目を丸くした。もしかすると彼が武器の制御を失つて落下したのは、飛行中に予想外のものを目にしてしまった動揺が原因だったのかもしれないと思に至る。

どのみち彼が話し終えたらこちらの番だと思つていたし、と聞き直つて、百合音は素直に肯定で返した。

「ええ、いたわ。実は私の方も色々あつてね。さつきのは、私がないうちに冷優がまんまと椿さんにおびき出されちゃつて、迎えに行つていたの。なんとか戦いにはならず済んだから良かったけど」

なるべくありのままに答えたつもりが、実際口に出した言葉が思つた以上に内容を暈した言葉運びになつていたことに気付いて百合音は眉をひそめた。今はそう緊張すべき場面でもないのに、誤魔化す癖が出てしまっている。

何となく気まずい心地になつて、百合音は視線を逸らした。しかし

こういう時に限って適当に視線を逃がす先がない。最適だっただろう白猫（冷優）はというと、ベンチに腰を落ち着けた途端にするつと腕の中から抜け出していった。今は謎にクロと滑り台の下の空間で丸くなっている。

「そっか。ケガとかないなら、よかった」

「ありがとう」

「それでさ……前から気になってたんだけど、鈴白さんって、椿とどういう関係……？」

恐る恐るといった調子で、けれど真っ直ぐな目をして真昼は百合音へその疑問を投げ掛けてきた。

ああ、これは間違いなく彼の美点だ、と。唐突に百合音はそう思った。

先程の「椿と屋上にいなかったか」という質問もそうだ。彼はあくまで百合音を信じていて、だからこそ正面から疑問をぶつけてくる。疑っているから問い詰めているのではなく、信じたいから問い掛けているのだ。彼のその姿勢を、好ましいと百合音は思う。

「そうね、関係性で言うなら前に答えた」新作アイスと一緒に味見するような間柄”で間違いはないんだけど、真昼くんが聞きたいのはそういうことじゃないわよね」

「……………」

今までなんだかんだとはぐらかしてきた自覚は、もちろんある。深くまでは追及してこない彼らの甘さに付け込んでいた。

そろそろ本当に潮時かしら、と。月の隠れた夜空を見上げて百合音は、昔話をするように語り出した。隣で真昼がごくりとつばを飲み込む音が聞こえた気がした。

「私と椿さんが初めて会ったのは……だいたい二カ月前くらい前」

「いやわりと最近だった?! かなり前から知り合いですみたいな雰囲気出してたの!?!」

第一声がツツコミで遮られてしまった。彼のツツコミ気質には困りものである。

話を止めてしまったことに気が付いてはつとする真昼に、あえて構わず百合音は続けた。

「始めは本当に偶然だったの。椿さんもただのお散歩中だったみたいだし」

「お散歩中って……」

「それから街で見かける度に捕まえ：声かけ続けてたら、それなりに知り合いになっててね」

「今捕まえてって言い掛けた?? そもそもなんで声かけ続けようと思っただんだ…?」

「まあお互いに何も知らなかったのよ。椿さんが吸血鬼で8番目の真祖だっことも、私が9番目の真祖の主人だっことも。しばらくは右手だけ萌え袖の人としか認識してなかったし」

「いやなんて???」

「ありとあらゆるツツコミどころを逃さずツツコンでくる真昼に、これは拉致の件は言わない方が彼の精神衛生上良いかもしれないと思う百合音。そんなに重要なことでもないし、と。

「…ってことは、鈴白さんは自分から椿に関わりに行ってたってことか」

「そうね」

「理由、聞いてもいいか?」

「始めは…たぶん、悔しかったから、かしら」

「悔しかった?」

意外そうな顔をしてこちらを見る真昼に、頷き返す。

「そう。椿さんって掴みどころのない雰囲気があるでしょ? 多方面から話題振ってみただけどいまいち反応が良くなって…:思わず”絶対攻略してやる”って思っちゃって」

横でどんな顔をしたらいいのか分からず困っている様子の城田真昼には申し訳ないが、紛れもなく本音である。拉致までされたのに結局連絡先すら聞き出せなかったのを彼女は未だに根に持っていたりする。

「あとは、なんとなく、寂しそうに見えたっていうか…:。放っておけ

ない感じの雰囲気が出てたというか、ね」

思えば、本当の本当に初対面だったあの時に、例えば椿がベルキアを連れていたりしたのなら……最悪その場で戦闘に発展していた可能性はあっても、百合音がその後も自分から椿を構い倒すようになることはなかっただろう。椿が一人でふらふら彷徨さまよっていたからこそ、彼女は声を掛け続けたのだから。

「えーっと……じゃあ、鈴白さんはなんで今、俺たちの方についてくれるんだ？」

百合音の回答を受けて、これも純粋な疑問として浮かんだのだろう。先ほどもより気楽な調子で真昼がそう尋ねた。ようやく肩の力が抜けてきたかな、と思いつつ、彼女も合わせるように気軽に、けれど真面目に答えを口にした。

「椿さんを止めたいから。椿さんが誰かを傷付けるのも、誰かに傷付けられるのも嫌だから」

知った仲の誰かが間違った方向に突き進もうとしているのなら、敵対してでも止める。それが鈴白百合音のやり方だ。それは譬え、過去に何かが違っていて百合音が椿の下位吸血鬼サブククラスになっただとしても、彼女はそういうやり方を選んだだろう。同じように、自身を救ってくれた誰か”を裏切れないとしても、そこが彼女と憂鬱組——ひいては綿貫桜哉との決定的な違いだった。

「あ」

そこで彼女は思い出した。綿貫桜哉といえは。

「そうだ、私ひとつ真昼さんに謝らなくちゃいけないことがあるの」「えっ?」

「桜哉くんのこと。私、真昼くんよりも早く桜哉くんが吸血鬼で椿さんの下位吸血鬼サブククラスだっただけ知ってたのに、黙ってたから」

「ああ……」

「本当にごめんなさい。けど……桜哉くん、真昼くんのこと話してる時が一番楽しそうだったから、勝手にバラしたらきつと傷付くんだろうなって思ったから、言えなかったの」

「いや……俺も正直、あの時点で鈴白さんから言われても、信じられな

かったかもしれないから」

俯く真昼。その心情は推し量るまでもなかった。幻術で一部記憶を改竄されていたとはいえ、彼は信じたかったはずだ。綿貫桜哉が親友だという事を。いかに彼がお人好しな質たちといえども、吸血鬼を通じて知り合っただけの百合音の言葉と、自分がずつと信じていた『信じた嘘』なら、どちらを取ったかなど聞くまでもない。

だから彼女は、それを否定はせず、けれど少しだけ同盟相手に肩入れする言葉を返した。

「そうね。でもきつと、真昼くんが」信じたかった嘘は、桜哉くんにとつても”信じて欲しかった嘘”だったんでしようから。言い換えななら、嘘をついてでも真昼くんと友達になりたかったのよ。その気持ちは、嘘じゃない」

「……そう、かな」

そうだったらしいな、と。続いた言葉はほとんど吐息に近い声量だった。

自分から始めた話ではあるが、ちよつと雰囲気落ち込んでしまったな、と。話題を変えるために思案する百合音。

「そうだ真昼くん、そろそろ武器リイドの扱いには慣れてきた？ さつきも途中まではうまく飛べていたのよね？」

「え？ ああ、うん。けど結局ホウキなんだよなあ…」

微妙な顔で視線を空へ上げる真昼。もつとカツコイ感じの武器を期待しているのだろうか。

別にホウキで飛ぶのも殴るのもアリだと思っている百合音は内心首を傾げる。普通の掃除用具ならともかく武器リイドとして現出させたホウキだ、強度は保証されている。振り回すのには充分では？ と。良子は「そもそも掃除用具は掃除のための道具であって武器にするものではない」という常識をよくよく思い出すように。使えるものは何でも使えばいいと思っている少女に影響されてはいけない。

「気に入らないなら、変えてみたら？」

軽い調子で百合音は言う。

「変える？」

「うーんと、私が初めて出した武器^{リード}って、実はこの鎌の形じゃなかったのよね。合わなかったから、変形させちゃった」

「合わなかった、って…?」

「使いにくかったのよ、私には。だから使いやすいように形を変えただけ。もちろん私一人でそこまで考えて決めたわけじゃないわ」

「誰かからアドバイスをもらったとか?」

「そう。冷優がね、言ってくれたの。”攻めにしろ守りにしろ、貴女に足りない分は過不足なく私が補ってあげる。だから貴女が一番、貴女らしく振るえる武器にしなさい”って」

まあ、それで大鎌を出したら出したで『反吐が出るほど貴女らしい武器ね』と罵倒(?)されたのだが。

それでも今の百合音の戦闘スタイルが冷優の言葉あつてこそのものであることは事実だった。以前の公園での憂鬱組との一戦が良い例だろう。百合音が背中を気にせず椿に一点集中して戦えたのは、あの場に冷優がいたからに他ならない。

暗い滑り台の下で丸まっている白猫は、今もあの聡明すぎる思考回路をぐるぐる空回りさせて、先の椿とのやり取りで”何が間違っていたのか”を考え込んでいるのだろう。そんなことすらも分からないくせに、人に掛ける言葉は的確過ぎるから困る。

「だから、真昼くんにもきつと出来るわよ。今すぐには難しくても、きつと」

楽観的な台詞だった。けれど彼に対して百合音と言えるのはこれくらいだ。これはあくまで百合音と冷優の進み方であつて、真昼とクロには彼らなりの進み方がある。

そして、こうして真昼と話してみても改めて百合音は思った。彼は自分とは違う、と。

それなりに意見は揃うが、似ているとは言えない。それはどちらが間違っているとか正しいとかいう問題ではなく、ただ当たり前に異なる価値観を持った別々の人間だというだけの話。ただし共感能力の著しく高い彼女が純粹に「自分とは違う人」とだけ認識することは、それ自体が珍しい事に類する。

恐らくこれから彼が歩む道と、百合音が進む道は、交わることも多いだろうがはつきりと別の道になっていくだろう。城田真昼と鈴白百合音では、全く同じ状況に立たされたとしても、同じことを考えたとしても、選ぶ選択肢が――向き合い方が違うから。

ふと見上げた夜空には、雲が晴れて月が顔を出していた。

空に浮かぶ月は二つとない。太陽も同じ。けれど、星は同じ夜空に並ぶことが出来る。線で結んで物語を紡ぐことも出来る。

？ただ、もしすぐ隣に並んでいたとしても、違う星と繋がれば紡がれるのは全く別々の物語であるという、それだけのお話。

幕間6 『千里を覆う霧の中、その一步を』

「……あの子の事が理解できない？ へえ、良かったわね。」

「……だって、あの子の頭の中がどうなってるのかなんて、知らない方がきつと幸せなもの。」

『 千里を覆う霧の中、その一步を 』

時間帯は深夜。良い子は寝ているべき時刻。

九番目の主従たる冷優と百合音は、自宅の地下の一室にいた。一般家庭にはあまり設備されていないであろう防音加工の施された部屋。そこは部屋の中央を陣取るグランドピアノが主張するように、いわゆる『音楽室』だった。

「それで、結局なんであんなこと言ったわけ？」
「……………」

五線譜の引かれたホワイトボードの前に立ち、百合音はピアノ椅子に座る冷優へ促す。『あんなこと』と言うとそれは、数時間前に百合音が割り込んで止めた椿との会話の一件だ。

事のあらましは既に冷優から聞いていた。椿と交わした言葉についても、再現するように全て。

彼女の記憶力からして恐らく一言一句違わないのだろうそれらを聞いて、まず百合音は頭を抱えた。最初から面と向かって聞かされた椿の心境を考えると本気で頭が痛くなってくる。

「妹に歩み寄ろうとして「嫌です」と突っぱねられるのならまだしも、「そもそも何故歩み寄ってくるのですか？」と不思議そうに真っ向から疑問を返されるなど、流石に彼も想定していなかっただろうに。ひとの心は総じて想定外に弱いもの。椿の心に入ったダメージ量の計算はしたくない。」

？すつと背筋の伸びた姿勢でピアノ椅子に腰掛けている冷優は、いつもの彼女のレスポンスより二拍ほど余分に間を開けてから、つらつらと語り出した。

？曰く、椿が冷優に対し妹と認める意の発言をした上で「家族にはそばにいて欲しい」と言った意味が分からなかったと。

？曰く、分からなかったので推測から理由を挙げたが、どれも否定されてしまったと。

？曰く、合理的理由が無いにも関わらず冷優を傍に置くことを望む椿が理解できなかったと。

？言い淀むこともなく理路整然と、彼女は言つてのけた。その解釈のあまりの酷さに聞いていた百合音が更なる頭痛を覚えたのは言うまでもない。

「ていうか合理的理由って……椿さんが貴女のこと気に掛けるのがそんなに不思議なの？」

「不思議というか、謎かしら。だって、観賞用でも愛玩用あいがんようでもないと仰られていたし」

「あいがっ……………」

しれっと普段の生活では聞く機会のない単語を連ねられて思考が止まる。どうにも彼女は、自分の事を道具あるいは人形と同一視している節があるらしい。

？そこで百合音は気付いた。一瞬思考がまっさらになったことで逆に気付いてしまった。

？まさか。

「ちよつと待つてまさか貴女……あれだけ色々言われておいて、椿さんから純粹に好意を持たれてるって自覚がないの?!」

「好意?」

「いや、恋愛とかそういうのじゃなくて、こう、好感度がプラスかマイナスかみたいな話ね」

「お兄様が、私に??……………何故?」

「なぜ、つて貴女ねえ……………」

「お兄様には私を大切だと思ふ理由がないわ」

きつぱりとそう断言した冷優に、あの噛み合わなさの根源はこの部分か、と百合音は溜息を吐いた。

？察してはいたが、椿と冷優ではそもそも持っている『前提』が違う。

まず訂正すべきはそこだろう。

「あのね、冷優。椿さんにとって、家族は大切なものなの」

「……そう」

「兄妹」だって家族の繋がりの一つでしよう？ だから椿さんは貴女のことでも大切にしたいって思ってるだけよ」

そこで冷優が不自然に首を傾げた。

嫌な予感がして「今何考えたか洗いざらい吐きなさい」と促す。

「確かに私はお兄様から見れば妹という位置づけではあるけれど、それはあくまでも先生が決めた序列に過ぎないわよ？ 何より、お兄様が仰られる”家族”は主に下位吸血鬼サブクラスのことでしょう？ 私はそこに含まれる条件を満たしているとは思えないのだけれど」

「……………」

「どうかした？」

「……ねえ、貴女が椿さんのこと”お兄様”って呼んでるのって、もしかして」

「”先生”がそのように私たちを定義されたから、だけど」

冷優の返答に、とりあえず百合音は深く深く深呼吸をした。

つまり、彼女が椿を兄と呼称したのは、先生の決めた序列に則った結果というだけ。そこに椿を「兄」や「親しいもの」として認める感情は一切込められていない。

それは例えば小学生が学校教諭を、尊敬や憧れの念などなくとも全員一律に「先生」と呼称するのと同じ。そう呼ぶように決められているから、そう呼ぶように教えられるから、というだけの理由。そこに実際に先達に対する敬意を込めている子供が、どれだけいるだろうか。残念なことに冷優もまた、兄に対する親しみなど込めているつもりはなかったのだ。

？問題なのは、呼ばれた側の椿がその事を理解していなかったという点。

「……冷優、貴女にとってはともかく、椿さんにとっては貴女は序列だけの関係じゃなくて、家族としての妹なのよ」

「何故？」

「そりや貴女が先に椿さんのことを」お兄様 って呼んだからじゃない？」

「意味が分からないわ」

「たぶん嬉しかったのよ、椿さんは。リリイさんから聞いたけど、椿さんって事前に他の兄弟のところについて自分のこと知らないか聞いて回ってたらしいし。他の兄弟みんながみんな知らないって言う中で一人だけちゃんとお兄様って認めてくれたら、そりや嬉しいって思うでしょ」

百合音の説明に、考え込んで俯く冷優。

表情に出ないので分かりにくいのが、彼女は今かなり必死になって頭を回している筈だ。普段理解できないことを、理解しようと頑張っているのだから。

？恐らくあの屋上で椿と相對していた時もそうだったのだろう。結果はアレだった訳だが。

やがて、長い沈黙の後で、形良い唇が音を紡いだ。

「……つまり、憂鬱のお兄様は他の真祖に対して自身を兄弟だと認めて欲しいという願望を持っていて、そこに私がお兄様の事を『お兄様』と呼称し関係を認めたことで、疑似的にその願望が満たされた。だから私に対し好意的である……ということ？」

「いやどんだけ回りくどい言い方するのよ。…まあ、ものすごく小難しく言ったらそういうことなんじゃない？」

なにはともあれ漸くそれっぽい結論に辿り着けて、一息つく。

対する冷優は、それでもまだ自ら出した回答を上手く呑み込めていない様子だった。百合音には息をするのと同じくらい苦もなく理解出来ることであっても、彼女にとっては国語辞典を丸暗記することよりも難しいことだから。

「となると……そうね。お兄様の利益ばかりを考えて、私を引き入れたいとする理由を挙げていたのは確かに間違いだったわね」

？興味深い研究論文を読み込んでいるかのようになぶなぶと冷優は頷いていた。

一方、ここまでできて漸く百合音にも冷優のロジックが理解できてき

た。確かに「自分に好意を持つてはいない」と思い込んでいる相手から何度も勧誘を受けたら、そこには何かしら相手にとっての利益が発生するものだと思うだろう。全くすれ違いにも程がある。

「でも、まだ分からないことがあるわ」

「どっ？」

「そもそもどうしてお兄様は私にわざわざ「妹だと認めている」ことを伝えたかったの？」

えっそこに疑問持つ？ と百合音は軽く戦慄した。

「だって、兄弟だって認めて貰えたら独りじゃなくなるでしょ？」

「……??独りであることは何か問題なの？」

「独りぼっちは寂しいし、悲しいでしょ」

「そうなの？」

「そうなの」

宝石のように美しい青の瞳を正面から見据えながら、百合音は同じ言葉を異なるピッチで反復して、念を押す。

一般的にはそうなのだと、教え込む。

「……私は、仮に貴女も風谷も有紗もお兄様たちもこの世界の全ての生物が消えて独りになったと想定しても、寂しいとは感じないのだけれど」

「それは貴女の感じ方。貴女にとって独りは寂しくも悲しくもなくても、大抵の人にとっては耐え難いくらいに辛い状況なのよ」

「……………」

「想像できなくてもいいわ。ただ覚えておいて。人っていうのは社会的動物だから、他人との繋がりが無くなることは「恐ろしいこと」なの」

発した疑問の通り、本気で冷優にとっては孤独とは恐ろしいものではないのだろう。確かにここまで他人とずれた感性を持つていてなお強固に自我を保っていることを考えれば、他人との同調や共感など無くとも精神的な不都合はないのかもしれない。しかし、だからこそ教えておかなければならない。彼女以外の大多数にとっては、孤独とは自我を蝕みかねないものなのだ。

「成る程。つまりお兄様は、私が孤独だと感じないように、私のことを想って、私を妹だと思っていると伝えに来たということなのね」

納得したのか幾分満足そうに頷く冷優。

それに対して、はい大正解よく出来ましたもう寝ていいかしら？

とだいぶ精神的にやつれてきた百合音は思う。さつき冷優のロジックは理解できたと言ったが、だからと言ってこれはあまりにも酷い。泣きたい。いや泣くべきは椿である。唯一自分の事を知っていた妹が素でこんな感じとか悲しすぎる。百合音なら絶対こんな妹欲しくない。

「でも、それはそれとして、どうしてあの時のお兄様はあんなに焦っているご様子だったの？」

「……………そこも分かってなかったのね」

また頭の痛い発言が飛び出した。

全くどうして、と思う。椿の様子を観察する目は持っているくせに、その様子が焦りや動揺を示唆していることも正しく読み取れているくせに、その起因に纏わる感情だけが逆算できない。こんなにバグった思考回路を許容しろというのは常人には無理である。他者への観察眼と共感性に関しては人一倍のポテンシャルを持つ鈴白百合音ですら、実際に話させてみなければ読み解けやしないのだ。面と向かって話すのがたつた二回目の椿が、その機微を察せよう筈もない。

「あのね冷優、好意を疑われたら、誰だって悲しいわよ」

「疑う？ 私ほ、」

「分かってるわよ」私にはね。貴女は疑ったんじゃないよ、本気で理解できなかったから教えて欲しかっただけなんだって」

冷優の言葉を遮って百合音は続ける。

「でも椿さんにはそれが分からなかった。貴方たちは持つてる前提が違いすぎて、全く噛み合わない会話をしてたのよ」

「……………そして間違えていたのは、私？」

「そういうこと」

一切の容赦なく百合音はそう断じた。だって、対人コミュニケーションにおける前提がおかしいのはどう擁護しても冷優の方だから。

暫く無言で視線を虚空に彷徨さまよわせていた冷優が、ぽつりと言う。

「私は、お兄様に謝りに行くべきかしら」

「やめた方がいいと思うわよ」

「どうして？」

「だって貴女、理解はしたけどまだちゃんと〃納得は出来てない〃でしょ？」

「……………」

黙った。凶星らしい。

ここで取り繕う素振りすら見せないところが、いつそう彼女の異常性を際立たせている。けれども、その歪さを含めて冷優という人格が成り立っている訳で。

百合音はそれを、そのまま良いとは思わないけれど、少なくとも拒絶するつもりはなかった。

「ま、大丈夫よ。いつかちゃんと納得できたら、私に聞くまでもなく自分でどうするべきか決められるはずだから」

？それがいつかは誰にも分からない。それでもいい。幸か不幸か彼女は不老不死の存在なのだから、時間だけは腐るほどある。常人が何年も掛けて修得する知識を既に網羅しているのであろう少女には、同じように理解するのに何年も掛かる事柄があってもいいだろう。仮にも契約を交わした縁だ、それくらいはいつまでも付き合おうと決めていた。

？……………それにしても。

？ふと、疑問が過ぎる。

「(この子もこの子で椿さんのことを気に掛けてるような素振りがあった気がするんだけど……………〃お兄様〃呼びに親しみを込めてるつもりが無かつたってことは、無意識の行動だったってだけ??それとも何か別の理由があつて……………?)」

？そこへそんな疑問を消し飛ばす一言が投下された。

「では、次にお兄様にお会いした時には誤解を生まないように通り名の〃招かれざる8番目〃とお呼びすることにするわ」

「それはたぶん椿さんがガチ凹みするからやめてあげて」

？見た事もないのに顔面蒼白な椿が目には浮かぶ。
？……このパートナーに「感情」やら「情緒」を理解させる道程は、
まだまだ遠そうである。

33. 舞台に満ちるは

?それは深夜のこと。

?点在する街灯の光だけが白々しく照らす、暗い住宅街の道。

人気のないその通りを走り抜ける、一人分の人影があつた。履き慣らされた濃いグレーのスニーカーが、コンクリートを強く踏みしめて擦り切れていく。

?人影は、少女の形をしていた。

「(ああもうっ……しつこい!!)」

突然だが、疾走する少女こと鈴白百合音は追われていた。誰にかと言うと、どこぞの誰かの下位吸血鬼に。

そんな彼女の後ろから響く声。

「待て……八番目の主人！」

「っ、だから違うってば!!」

夜道に響くご近所迷惑な追手の咆哮に、彼女もまた全力で否定を返した。無論、信じてもらえてはいない様子なのだが。

「ご覧の通り今、非常に面倒なことに百合音は八番目……樁の主人であるとの誤解を受けて追われている。」

因みに彼女にはその誤解の発端となる出来事の心当たりがあつた。

「(アイツ、前にライラックを襲つてた奴ね)」

頭に過ぎるのは、樁に拉致されていた頃に路地で追われていたライラックを庇つた時の事。

樁の下位吸血鬼を倒そうとした時に邪魔をした人間、それも武器を持っていたとなれば、確かに普通に考えれば樁の主人だと思つたろう。そのロジックは理解できる。だがしかしこんな風に追い掛け回されるのは話が別だ。

既にそこそこの距離を走り通して流石に息が上がってきた。これ以上の鬼ごっこは不利と判断した百合音は一旦細い脇道に入り、そこから何度も角を曲がって攪乱した先で、一度身を潜めることにした。「……………」

バタバタと彼女の姿を探す吸血鬼の足音に耳をすませ、着ている黒

いパーカーのフードを下げ、顔を隠して蹲る。幸か不幸か、今の百合音の服装は夜闇に紛れるのに適した色合いだった。

荒い呼吸が漏れないように、口を塞いだ掌の間から薄く細く息をすする。走った直後で息を殺すのは中々苦しい。それでも何とか呼吸を整えつつ隠れる。

「(……迎え撃つのは簡単だけど、こんな所でドンパチ始めるわけにはいかない……!)」

お願いだから早く諦めて帰って、と彼女は切に願う。

しかしそういう時ほど不運が近寄ってくるもので。

「……カラント。と。」

近くで空き缶の転がる音がした。

恐らく、野良猫か何か。けれど静まり返った住宅街に響き渡る音としては充分過ぎた。

「(やばっ……!)」

吸血鬼が音の方へ足を向ける気配がする。辿り着かれる前に、ここから離れなくては。

靴音を立てないように百合音は駆け出した。吸血鬼に気付かれなように細心の注意を払って神経を研ぎ澄ませる。

「……!」

「っ!」

だから、急に横合いから腕を引かれた時、反射的に抵抗して投げ飛ばさなかったことを誰か誉めてほしい。

赤いラインの入った帽子を被った、明るい髪色の青年だった。掴まれた手を引かれるままに暗い住宅街を通り抜けていく。

大通りに面した道まで出て、漸くその青年は足を止めた。自然、百合音も止まる。

走ったとはいえ今度は大した距離でもなかったもので、数回深く息を吸った程度で心拍は落ち着きを取り戻した。それは彼の方も同じだったらしく、彼女が呼吸を整えたタイミングでくるりと振り向いた。

髪には三つ編みのエクステ、腕には数種のブレスレット、首元には

緩く巻いたスカーフと、装身具の多い出で立ちだ。服装自体は無地のシャツとベストにズボンというシンプルなものなのに、そういった細かな部分への気遣いがあるせいか地味には見えない。

青年は緩く口角を上げて言った。

「危なかったね。最近はあるあいうのも増えてるし、女の子がこんな時間一人で出歩いちや駄目だよ?」

艶のある、耳障りのいい声だった。世に言うイケボというやつだろうかと百合音は薄い感想を浮かべる。夜風に乗って遠くから、微かな破裂音が響いて消えていった。ふらりと一步、まだ少し酸欠な振りをして少女は、足元が覚束ないおぼつかような素振りおぼつかで青年から距離を取った。さて必要だったかはともかく、どうやら助けてくれたようなので彼女は躊躇いがちに礼を口にする。

「えっと、ありがとうございます。……それで、貴方は?」

「しがない骨董品屋だよ。……初めまして、九番目の主人さん」

そこで初めて、琥珀色の瞳と視線が合った。

?

「俺も主人イヅでね。上から二番目、嫉妬の主人だよ。よろしくね」

「初めまして。鈴白百合音です」

挨拶を返しながら思う。名乗らないのはわざとだろうか。

そちらがその気ならと彼女は先手を打った。

「それで、帽子屋のお兄さんはどうして私を助けてくれたんですか?」

「ストップ。俺、さつき骨董品屋って言ったよね?」

「だっってお兄さん骨董品屋さんっぽくないし、覚えにくくて」

「だからって何で帽子屋なの?」

「帽子屋さんっぽいからです」

「君の感性どうなってるわけ? 最近の若い子ってホント変な子が多

いよねえアベル〜!」

「え?!じゃあ帽子屋のお兄さんはお兄さんじゃなくておじさんってことですか?」

「俺はまだ二十三!!?それ以前にこんなイケメンに向かっておじさんとかどういう神経してるの!?!」

どこから取り出したのか、謎に手に持っていた人形を会話に巻き込んでくる自称イケメン。

成る程そういうタイプかと青年を生温かい目で見ながらうんうん頷く。彼女は元来察しが良く物わりの良い女の子なのである。

「そっかあ……きつと、何か辛いことがあったんですね。大丈夫ですよ！ 帽子屋のお兄さんはメンタル強そうだしいつか乗り越えられる日が来ますよ！」

「勝手に人を悲惨な過去のせいでメンタルがやられた可哀想な人扱いしないで!!」

「え、違うんですか？ 結構いい線いってると思ってたんですけど」

「何この子ぜんっぜん可愛くない……真昼くんみたいなかからかいがない……」

アベルと呼んだ人形を抱き締めながら青年は戦慄わななしていた。

そんな彼を余所に彼女は青年と、青年が手に持つ女の子の人形を見て、そしてもう一度青年の顔へ視線を動かして。

「……………」

？一先ず無言で心の扉をスパンツと閉めた。

とある少女がちよつと怪しいお兄さんに絡まれているのと同時刻。そこは暗い病室だった。

明日には退院予定の主人に付き添う七番目の真祖・リリイは、夜も深ふけた故に健やかに眠っている御園を静かに見守っていた。

御園の枕元にあるデジタル時計が表示している数字は23:28。明日が目前まで迫った真夜中だ。但し、陽の光の下に出られない吸血鬼にとつては絶好の活動時間でもあるが。

ベッドの傍に置いた客人用の椅子……よくある丸椅子ではなく背もたれと肘掛けのあるちゃんとしたタイプ……に身を預け、リリイは先日の『お見舞い』の日のことに思いを馳せていた

九番目の真祖を名乗った、あの少女。

綺麗な子だった。青い瞳は宝石のように美しく冷たくて、直視するのを躊躇うほど。それでいて些細な仕草までもが洗練されていて見る者の視線を惹き付ける。有栖院家は名家であるしその子供たちも優れた教養を身に付けるが、ずっと彼等を見守ってきたリリイでさえ目を見張るレベルだ。身に付いているというより染み付いていると言った方が、きつと正しいのだろう。

あの日、リリイはお礼を言いたかったのだ。

それは下位吸血鬼の双子から聞いた話。彼女は主人と共に、突然現れた椿たちと戦い双子を逃してくれたという。

リリイにとって下位吸血鬼は大事な家族だ。家族を危険から遠ざけ守ってくれたのならば感謝するのは当然のこと。

しかし彼女は返答第一声に、それを拒んだ。

戦ったのはあくまでも主人の意思であり、自身は感謝を述べられる筋合いはないと。

それが謙遜でも何でもなくただ「事実としてそうだから」だということは、彼女の目が雄弁に物語っていた。

そしてその時感じたのだ。リリイとあの少女の持つ価値観には、致命的なズレがあると。

その直感は一瞬だった。

軽い雑談の話題が御園のことに触れた折、彼女は唐突にそれまでの話の流れを切って、澄んだ瞳で真っ直ぐにリリイを見てこう言ったのだ。

『無知は罪です、お兄様』

『「知らなかったのだから」で済まされてしまうことほど、恐ろしいことはありません』

それまでの言葉の中でも一等はつきりとした口調だった。怒鳴られた訳でもないのに、強く叩き付けるような衝撃をリリイに与えるほどに。

こちらの思考を見透かすような青い瞳が脳裏から離れない。

何も言わずともリリイの意図を汲み取り病室に残ってくれたことから、聡明な少女であることは分かっていた。今は家を出た御園の

兄を彷彿とさせる。些細なことから他人より多くの事を知る繊細さも、知った事を吹聴せずにじつと見定める賢さも。

彼女には何が見えていたのだろうか、と。

あの日からリリイは考えている。疑念の渦に溺れている。

……本当の事を言う、あの対面の日、リリイは少し怖かったのだ。リリイは冷優の存在を知らずにいた。彼女がその事をどう思っているのかが分からなかった。あるいは椿のように、暗い感情を向けられているのではないかと。

しかしそれは杞憂に終わった。悪い意味で。

少女は全くもって……いっそ異常なほどに……リリイに對して興味関心が無かった。

決して無視などしないし一定の敬意さえ払って接してくれていることは分かったが、それだけ。プラスの感情もマイナスの感情も、一欠片も抱いていなかった。

唯一冷優が分かりやすく感情を見せたのは、先程の言葉を口にした時だけ。

あの言葉にだけは感情が……彼女自身の意志が込められていた。だからこそ強いものに感じたのだろう。

そこからは交わす言葉の一つ一つが、薄氷を踏むような感覚だった。最初に抱いていたのは全く別の不安感と緊張。何百年ぶりにできた妹のことが、リリイには分からなかった。

「……………それに何故、”あの事”を……？」

答える者はいない。

夜の闇は、猜疑を深めるばかり。

場は戻って深夜の大通り。女の子の人形を持った帽子の青年と……有栖院御国は、九番目の主人たる少女と相對していた。

大通りとはいえ住宅街の途中だ。車通りなどほぼ無く、辺りは夜の静寂に満ちている。

目の前の少女はインナーからシューズまで全て暗色で揃えたコーデイナート。唯一パーカーの紐だけが白く、妙に視線を引き付ける。滲む様な警戒を宿す黒檀の瞳がじつと御国を見返していた。

そして突然。
ふ、と。

先程の茶化した会話で緊張が解けたのか、その瞳が迷うように左右に揺れた。夜闇と調和する黒いパーカーの裾を片方の手がぎゅっと握り締めている。

窺うように少女は言った。

「……あの、さつきは、本当に助かりました。流石にちよつと、怖かったですし」

ぴんと張り詰めていた表情が、糸が緩むように柔らかく崩れる。気の抜けたような笑顔だった。

「どういたしました。ところで君、真祖は一緒じゃないのかな？」

「はい、実はそうなんです。ちよつとしたお使いだったので置いてきちゃったんですけど。まさか襲われるとは思わなくて」

「……………」

困った様な笑みを零しながらも、右手が身を庇うように左腕を掴む。

きみは、と。 “それ” を指摘しかけて御国は留まった。どのみち突き詰めていけば辿り着くことだ。

「……………さて、話を戻そうか。俺が君を助けたのはどうしてかって話だったね」

少女がこくりと頷く。その様子からして、決して鈍い質ではないのだろう。御国が姿を現したことを、偶然ではなく理由があつたことだと確信を持っている。

それならば隠す必要は無い。

「理由はね、君が、君たちが特別だから」

特別？ と首を傾げる少女へ、御国は指を三本立ててこう述べた。

「君たち九番目の主従は三つの点において、この戦争における最大のイレギュラーだ」

「……一つ、兄妹たちも知り得なかった」九番目の真祖”を有すること。

「……二つ、主人が”七人兄弟側”とも”憂鬱側”とも深く関わりを持っていること。

「……三つ、中立である筈の情報屋の庇護下にいること。

「本来はどれか一つだけでも充分。君たちは七人兄弟側、憂鬱側、そしてそれ以外の……どの陣営に対しても切り札になり得るジョーカーなんだよ」

「相対する少女がゆっくりと息を呑んだ。御国の話に圧倒されるように、息を詰めて聞いている。

「そのまま、聴衆へ訴えかける演説のように軽く腕を広げて御国は続けた。

「勿論、核となってるのは九番目の真祖だ。その脅威性はただ”存在を知らなかった”という点だけじゃない。元が”未完成の真祖”と云われていただけあって、その能力や性質に関する調査は殆ど進んでいない。限界距離の長さは？ 固有の武器は？ 幻術の能力は？ 戦闘能力の高さは？ これら全て、何もかも未知数だ」

「……………」

「何より”知らない”ことが脅威なんじゃない、”知ることが出来ない”ということが脅威だ。九番目の真祖が中立の情報屋の庇護下にいる今、彼女のことを更に研究する術は無いからね」

「だから、と。

琥珀がひたりと黒檀を捉えた。

「君たちを”獲得”することは、途轍もないアドバンテージに繋がる。その勢力だけが、伏せられた手札の裏側を見られる」

「……それ、つまり、私たちは全部の勢力から狙われるってことですか……………」

「その通り」

表情を曇らせる少女に、御国は戯けるように人形を傾ける。

「しゅるり、と少女の足元を黒い影が通り抜けたのはその時だった。きや、と短く高い声を上げて少女が飛び退く。」

「あ、おいジエジエ、驚かしたら駄目だろ」

するすると緩慢に地面を這って寄って来たのは黒い蛇。御国が手を伸べると器用に腕を伝って登り、首元へ落ち着いた。

「ゴメンね。コイツが俺の真祖、『疑わしきは罰せよ』。動物姿は蛇なんだ」

「そ、そうなんですな」

戸惑いも頭に視線を彷徨さまよわせる少女に、さっきまでの真面目な声色とは打って変わって軽い調子で御国はこう締め括った。

「ま、そういう訳で現時点で君たちは最も価値の高い手札だ。みんなが欲しがらる」

「……………」

軽さにそぐわない、脅すような「……」実際そういう一面もある「……」その言葉に、少女が僅かに身を竦すくめた。

その隙を逃さず御国はこう持ち掛けた。

「だから、もし君が平穩を望むなら、俺が匿ってあげるよ」

「……………」

予想外だったのか、少女が黒塗りの瞳を丸くする。

「こう見えて俺は色んなところに顔が利くから、君たちを匿うことは難しくないんだ。それに主人イザとしてのアドバイスもしてあげられる。自分で言うのもなんだけど、結構好条件だと思うよ」

「どうかな？」と。あくまでも提案の形で。

少女の瞳には不安の影が揺れていた。さてどう返す、と御国は少女の返答を待つ。

情報の切り取り方はどうあれ御国が語ったことは事実だ。九番目の主従に関しては、中立機関も憂鬱組も裏から糸を引いて取り込もうとする動きがあった。それら全てを水面下で情報屋が抑え込んでいるというのが実情だが。

しかし如何に情報屋が不埒な手を跳ね除けようとも、当の本人が簡単に揺れるのでは意味が無い。だから御国は確かめに来た。容易に崩れそうならば自分の元へ誘い、倒れない覚悟があるのなら今はいいと、それを見極める為に。

琥珀が見つめる先で、少女は顔を上げた。黒塗りの瞳に明確な意志の光を灯して。

「……ごめんなさい。私は、守られたいんじゃないんですよ、守りたいんです。だから匿ってもらう必要はありません。誰が来ようと私は私の力で、立ち向かいます」

強い光を宿す視線が御国の琥珀を真っ直ぐに射抜く。

数秒視線を逸らさずいた後で、御国は彼女の思いを受け止めたようにまなじり緩く瞼を下げて言った。

「……うん、分かった。誰の手を取るかは君の自由だからね」

今は引いても構わない時だ。元より、少し突けば崩れるほど脆いのでは『鍵』にはなり得ないのだから。

それでももし困ったことがあったら連絡して、と店の名刺を少女へ握らせて。

彼はその場を後にした。

帽子の青年が完全に去ったことを確認して、百合音は腰に巻いたネイビーのランニングポーチから携帯を取り出した。画面を見ず指の感覚を頼りに手慣れた仕草で電話を掛ける。

「……あ、もしもし風谷？ ええ、ちゃんと終わったわよ。今から帰り……え、コンビニ？ エナドリなら買わないわよ。いい加減に徹夜からの寝落ちはやめなさいっての」

電話の向こうで既に死にそうな声がか言っていたが百合音はそのまま通話を切った。あの保護者の生活破綻っぷりは気を付けないといけない。

さてと、と。携帯を仕舞って、少女は軽く伸びをして夜空を仰ぐ。そして心の中で呟いた。

「(気付かれたかしら？ 途中から全部演技だったの)」

幕開けは一発の銃声から。役柄のコンセプトは「臆病さを隠して気丈に振る舞う勇気のある女の子」である。

「仕方ないわよね。だってあつちが先に仕組んだんだし」
てくてくとマイペースに帰路を歩み始めながら彼女は独りごちた。
思い出すのは路地に隠れた時に転がった空き缶の音。

初めは猫かなにかだと思っていたが、多分アレは嫉妬の蛇の仕業だ。わざと音を立てて百合音を追い詰めて、主人に助けさせた。であれば必然、青年が現れた瞬間から全部仕組まれていた訳だ。

青年にとつての不運は、演技という一点においてだけは少女にも一家言あると知らなかったことである。

「まあ、あれで、簡単に他の陣営の手に落ちたりはしないけどいざとなったら強引に引き込めそうな隙はある……くらいのイメージを持ってくれたら万々歳なんだけど」

軽薄そうな外面に似合わず随分と神経質な質に見えたので、細かいところまで色々と仕込んでみたのだが、はたしてどのくらい刷り込めたのやら。これだから表情管理の上手い人間は、と。自分の事を棚上げして彼女はそんなことを思う。

その後ろ姿は、あまりに自然に夜闇へと溶け込んで消えていった。

さて今宵の舞台、観客の目にはどう映ったか。

欺瞞に満ちた舞台といえど、どうか目を逸らさぬように。

覆い隠された本性を知るには、見せ掛けでもでつち上げでも、その須らくを？み込み吟味するしかないのだから。